仮面ライダー烈火

ジャード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダー烈火

【Ｎコード】
Ｎ５２３７Ｉ

【作者名】
ジャード

【あらすじ】
どこにでもいる普通の少年、波賀悠樹（はが・ゆうき）。朱雀族の精霊・翔炎（しょうえん）の力を借りて、仮面ライダー烈火へと変身する。
世界を我が物にしようと精霊の力を狙う“元大ショッカー幹部”。
何処からともなく現れては消えていく謎の集団“原離者”。
そして、かつて全世界の破壊を目論んだ“伝説の精霊”。
狂喜と謎。裏舞台に立っていた者達が現れ、物語は動き出していく。

今までの戦いは、ただの余興に過ぎなかったのだろうか。
仮面ライダーである四人は、かつてない脅威へと立ち向かって行く。

「――さあ、開戦だ」

※現在、加筆修正中。それでも目茶苦茶遅いですスミマセン。
加筆修正済みの話は、後々活動報告にその旨を報告する予定なので、
そちらもご覧頂けると嬉しいです。

第一話：普通の日常（前書き）

どうもはじめまして。ジャードです。今回初めて小説を投稿するため、グダグダだったり、文字を間違えたりしていると思います。その時はご指摘頂けたら幸いです。
また、更新は不定期ですので、あしからず。

※編集済み

第一話：普通の日常

ジリリリリ……
ジリリリリ……
ジリリ……
バン！

「……」

朝っぱらから鳴り響く目覚まし時計。その音が、俺の睡眠タイムを見事に崩してくれた。畜生、まだ眠いのに。
目覚まし時計を乱暴に叩いて無理矢理音を止め、上半身を起こす。
ふと、叩いた衝撃で倒れた時計を見ると、午前7時を指していた。

……もうこんな時間か。早く朝メシ食ったほうがいいか。そう思った俺は、もそもそとパジャマを脱ぎ、学校の制服に着替える。
着替える途中、肩まで伸びたボサボサの髪がうっとおしく思えた。
つーか、何でこんな髪伸ばしてんのよ俺。……あぁそうか、金が無いからか。
いっその事、自分で切ろうかとハサミを取り出そうと思ったが……止めた。どうなってしまうか怖い。
取りあえず髪の事は忘れ、学校の制服……学ランへと着替えた俺は台所に行く。パンを取り出し、トースターの中に放り込む。焼き上がるまで待つとしようか。

さて、パンが焼き上がるまでの間、自己紹介でも済ましておこう。
俺の名前は波賀悠樹（はが・ゆうき）。高校一年生。以上、終わり。

……え、それだけ？　ってツッコミが飛んできそうな気がするが、ホントに何の取り柄もない、普通の高校生なのだ。……多少得意な事と言ったら、ちょっとばかり足が速い、という位だろうか。……それ、取り柄じゃね？　ってツッコミが飛んできそうな気がするが、あえてそれはスルーしておく。ホントにちょっとなんだよ、平均よりほんのちょっとだ。

さて、そんな事を説明している内に、パンが焼き上がっていた。椅子に座りつつ焼き上がったパンを取り出し、皿の上に置く。冷蔵庫からバターを取り出すと同時に、リモコンの遠隔操作でテレビの電源を付けた。

テレビの画面に、女性の姿が映る。丁度、最近話題になっている事件の内容だった。

『……四ノ上町（しのかみ）二丁目の空き地にて、男性が血を流して倒れているのを、近くの住民が発見しました。救急車が病院へ搬送しましたが、男性は既に死亡しており、また左手にはワニのような生き物に食いちぎられた痕がある事から、先月末から続いている変死事件とみて捜査を続けています。
今までの変死事件にて見つかった痕跡は、どれも人間が出来るようなものでは無く、今回のワニのような歯型の件に関しても、近隣の住民はワニを飼っていない等、不審な点が見つかっています。今までの件も含め、警察は警戒を呼び掛けています。……さて、次のニュースですが……』

「……物騒な事件だなあ……」

もふもふ、と食パンに噛り付きつつ呟く。先月から続いてるっつーこの事件も、どうにかならないものか。しかも、今回の現場は此処

から随分近いじゃねぇか。おー恐ッ。
ちなみに今は「二足歩行で長時間歩けるチワワ」なるニュースをやっていたが……興味が無いので、電源を消す。刹那、画面に映し出されていたチワワの姿が消えた。

訪れたのは、静寂。いや、外で車が通る音くらいは聞こえるが。
そのまま再び、もふもふと食パンに噛り付く。……うん、焼きすぎたか、食パンが少し焦げてやがる。……チョコソフトクリームでごまかすか。いや、もう面倒臭いや。はよ食わんと、学校に遅刻する。
そんな脳内での激しい独り言はさておき、食パンを無理矢理口の中に捩込んだ。
……あ、ヤバイ。この量はマズイ、飲み込めん。牛乳！牛乳プリーズ！

とは思いつつも、牛乳を入れてくれる人物もいない訳なので……自分の気合いで息を保ち、近くに置いてあった紙パックの牛乳を直接口の中に流し込んだ。

フー、助かった。

……そんな馬鹿らしい事をしてる暇は無いんだったよなー。時計を見ると……７：４０。うん、もう良い時間だ。そろそろ出るか。
そう思いつつ、すぐ傍にある扉を開ける。タンスや机な等が並ぶ畳部屋の奥に佇む仏壇へと向かった。
その黒い仏壇に立て掛けられている二枚の写真……そこには、にこやかに微笑んでいる男性と女性の姿が写っている。
……もう二度と出会う事が無い二人に、俺は声を掛けた。

「じゃ、今日も行ってくる」

「……寒っ！」

俺が我が家……もといアパートから出た後の一言。当たり前だ、もう冬に突入してる。寒がりな俺にとってはとてもキツイ季節だ。とっとと学校に行って、この寒さから解放されたい。そう思った俺は、既に走っていた。

……と、そんな時。

「波ァ賀ァァァッ！！」

唐突に、背後から奇声が響く。多分「奴」は獲物を捕まえる猿の如く、ジャンプをしつつ奇妙なポーズで構えていることだろう。もうお前の行動は、手に取るようにお見通しだ。

そうニヤリと笑いつつ、体を右側へと反らせた……瞬間、俺が先程まで歩いていた地点に何かの物体が不時着……もとい、落下した。

「ひでぶぁっ！？」

この世の生物が発する物とは思えない奇声を発した物体……もとい「奴」は、ゴツゴツのアスファルトで固められた地面をズザァッ、と顔面から滑る。

さも痛々しげな光景だが、俺には既に見慣れたやり取りだ。見ていても哀れみなんて感じないが……一応、声は掛けておこうか。

「……何してんの、小野川？」

小野川海斗（おのがわ・かいと）、一応……“一応”だが、小学校時代からの付き合いである。
髪の毛をツンツンに立てた頭が突如ガバッと上がる。半分涙目の顔は、怒ってるのか泣いているのか分からないが、取りあえず俺を見ている事だけは分かった。

「何してんの？　じゃねーよ！！　何でそこで避けるかなお前は！？」

「朝からテンション高いよなお前。というか、朝っぱらからケガなんて誰だってしたくないだろ普通」

「いや、既にケガしてんだよここに一名！？　それに、今のはちょっとしたスキンシップだって事、分かんなかったのか！？」

「分かりたくもなかった」

「何気に酷いなお前！？」

「お前のスキンシップとやらよりマシだ」

小野川の叫びをヒラリとかわしつつ、学校へと向かう。会話をしてる内に、小野川との距離がだんだんと開いていった。

「……え？　アレ、ちょっと波賀君？　ここにケガ人がいるんだよ？　肩ぐらい貸してもらっても良いんじゃない？　え、ちょ、無視？　……すんませんでした！　調子こいてました波賀様！　お願いだから助けてェェェッ！！」

……何故かアイツといると、やる気っつーかテンションが下がるよ

な。……まあ良いや。後ろからなんか叫び声が聞こえるけど、無視して早く学校行くとしよう。

最後に聞こえた絶叫は「車来たァァァ！」だったか。ともかく俺は、学校へと歩みを再開させたのだった。

『……また、被害者が出てしまったのか……』

人通りが多くなってきた、駅前の交差点。サラリーマンや学生達が、それぞれの行くべき場所へと向かっていく。

そんな交差点のド真ン中に、“この地球上にいる筈の無い生き物”が浮遊していた。３０ｃｍくらいの“喋る赤い鳥”。ややデフォルメされたような姿だったが、その翼からは炎が吹き出ていた。

だが、人々はそんな生き物には目もくれない。まるで気付いていないかの様だった。

『……“この世界”にいる筈なんだ、“烈火の適合者”は。仕方ないが、もう少し探すしかないか……』

そう呟いた赤い鳥は、その場を後にしていた。

誰にも見られる事なく、誰にも気付かれる事なく、ひっそりと。

午前８時ジャスト。丁度教室に入った時刻だ。ＨＲは８：３０からだが、この時間帯でも生徒は数人来ている。その数人のクラスメイトに挨拶を交わし、席に着く。
時間はまだある。けど、何をして時間をつぶそうか。
そう思ったと、ほぼ同時だったか。

「波ァ賀ァァァッ！！」

奇声と同時に扉がガラッと勢いよく開く。そこから小野川が、壁をぶち抜くんじゃないかと思う程の勢いで俺の方へとやって来た。
……何だ、無事だったんだ。
軽く溜息をつきつつ、小野川を（物凄く）欝陶しそうに睨む。だが小野川は、そんな視線にも気にせず声を荒げる。

「さっきはよくも無視した上に放置してったな！　つーかマジで死ぬかと思ったぞ俺！？」

「その辺に転がるゴミの末路のようにはならなかったのね。ご苦労さん」

「遠回しに怪我してほしかった的な事言ってるだろお前！？　……おのれこの恨み、今ここでェェッ！」

絶叫しつつ鞄を振り回す。迷惑極まりない行為だが、周囲はあまり気にしていない様子だ。そりゃまあ、いつもの事だけどさ。

ふと、奴の背後から一人の少年が現れる。彼は爽やかな笑みを浮かべつつ、小野川に言った。

「やあ小野川君、朝からうるさいねー君。そのエネルギーを別の事に有効活用しようよ」

彼は秋元涉（あきもと・わたる）。アイツも小学校からの付き合いで、学年に一人はいるような秀才である。勿論小野川とも小学校からの付き合いであるが為、よく小野川を手玉に取っては弄り倒している。絶対に敵には回したくない男……かもしれない。

「何の用だ涉!?　俺は今度こそヤツに制裁を加えにゃ気が済まんのだ！　このエネルギーを今此処で使う！」

「返り討ちに合うフラグ立てまくってるよー」

「ヤメロそういう事言うの!?　何で!?　何ッで俺って傷付けられゆく運命な訳!?」

……敵に回したく無い、という理由に関しては、涉が目茶苦茶黒い事にある。まともに口喧嘩して、勝てた奴はいない。どんな暴言でも、涉は笑顔でソレ以上の事を言ってのける。あぁ恐ろしい。

そんなやり取りを見ている内に、担任が教室に入って来た。ＨＲ始めっぞー、という気怠げな声に、生徒達は席に着いていく。小野川は未だ騒いでいたが、担任が持っていた出席簿の角によって殴られ、撃沈。涉によって引きずられて行く光景も、いつも通りだ。

また、いつも通りにまみれた一日が始まるのだろう。その時は、そう思っていた。

――そう、その時までは。

第一話：普通の日常（後書き）

……さて、仮面ライダー烈火第一話、いかがでしたでしょうか？……

……なんか、仮面ライダーって感じがあまりありませんね（汗）……

……頑張りたいと思います、ハイ。

よろしかったら感想、ご指摘など、お願いします！

第二話：突然の変身（前書き）

※編集済み

第二話：突然の変身

……さて、と。

あのクソ長い授業が終わり、小野川は再び俺に攻撃を仕掛けようとしたものの再び渉に弄られ、いつも通りのやり取りを見届けた後、俺は帰宅していた。

現在は人通りの少ない住宅街を通っている。よく不審者とかがいるらしいのだが……今は、誰もいない。音も無く静かだ。いやあ、落ち着く。

そんな時、真っ直ぐ前を見ながら歩いていたからよく見えなかったが……十字路の左側に、何か赤い影が視界に入ったんだ。

アレは……信号じゃないよな、絶対に。

……さて、此処で好奇心旺盛な波賀悠樹君はどうするか。いや別に好奇心旺盛ではないけどさ、何だか凄く気になって仕方が無いのだ。

で、そんな大袈裟な事では無いのだが……怪しい人物、それこそ先程話した不審者のように壁に背中を寄せ、ソーッと赤い影を確認した。

が。

「……あり？」

つい声に出してしまったが……赤い影なんて、何も無かったのだ。

……なーんだ、俺の見間違いかー。

アッハッハと空笑いしつつ前方を見たら。

『……お前、俺が見えるな？』

赤い何かが、俺の目の前にいた。

「……！？」

その赤い何かは……簡単に説明すると、赤い鳥。３０ｃｍ程の大きさで……どういう訳か、翼か燃えている。燃えているっつーか……炎が普通に出てるんだわ、翼から。

……うわーお、何このファンタジックな生き物。捕まえてサーカスにでも売れば……金になるかな。

とか物騒な事は考えない。むしろ、驚きの方が大きい。そうだ、この鳥は俺の脳が作り出した幻覚に違いない。

そうだよ最近疲れてるんだよなー。と、目の前の現実から逃げつつ赤い鳥を避けて歩き出した。

が。

『俺を避けてるって事は……やはり貴様、俺が見えているな？』

何で着いてくるんだよぉぉぉッ！？

何でさも当たり前のように喋ってんだよ何で俺見てんだよ何で着いてくるんだよ！？

大事だから三度目叫ぶぞ。

何で着いてくるんだよぉぉぉッ！？

……落ち着け、落ち着くんだ波賀悠樹。幻覚に怯むな、幻覚に打ち勝て！　日々の疲れに打ち勝ち、明日を掴み取れ、俺！

『……何をブツブツ呟いてんだ』

「うっひゃぁぁあぁぁぁッ！？」

……自分でも情けない悲鳴を上げてしまったが、そこは察して頼むから。いきなり非現実的な事が起こったら、誰だってビビるだろ。ていうか、何でこの鳥はいつの間に俺の眼前に浮遊している訳よ。動揺している俺は、ソレが頭に浮かぶ前に口を開いていたのだが。

「ととっ、とっ、と……鳥が、喋ってる？」

『おぉ？　やはり俺が見えるという事は……貴様が適合者か！　漸く見付けたか……。あ、ちなみに言っておくが、俺は鳥じゃない』

「……い、いや、どー見ても鳥だろ。じゃアレか？　翼から炎が出てるって事は焼鳥か？」

『や、やきとっ……！？　貴様、朱雀族の精霊である俺「翔炎（しょうえん）」に、

焼鳥は無いだろう！？』

てきごーしゃ。
すざくぞく。
せいれい。
しょーえん。

……何を言っているんだこの焼鳥は。

落ち着きつつある俺にも驚くが、この焼鳥の存在自体にも驚くよ、ホント。

「……本当に俺疲れてんだな、幻覚と会話するなんて。仕方ない、金は掛かるけど帰ったら病院行くか」

『言っておくが、俺は幻覚じゃない。……あぁ、一つ言い忘れたが、俺の事は貴様しか見えないぞ』

「そりゃもう充分幻覚の領域だよね」

軽く焼鳥の言葉を受け流し、再び家へと歩を進める。何と言うか、かなり疲れた。多少猫背だが文句は聞かんぞ。

『……さて。突然だが、お前には話さねばならない事がある』

だーかーらー。
何故にこの焼鳥は着いてくんのさ。何？　幻覚ってこんなに俺を苦しめたいのか？

『何であろうと、貴様は俺の適合者だ。話だけは聞け』

何だ？　心でも読んだかコイツは。つーか聞けるか、こんな状況で。とかガックリうなだれつつ、歩き続けたら……

『……適合者、前を見ろ』

「……あ？」

何だ前て。目の前に電柱とかでもあったか？　教えてくれたのは嬉しいんだけどさ。幻覚のくせに。

そんな焼鳥の言葉で、つい前を見たら。

絶句した。

「……は？」

何故に。

何故に怪物が、目の前に立っているのだよ。

冷静に分析すると、体全体は真っ黒い。二足歩行する、顔がワニのような怪物。

……そう、顔が“ワニ”だ。何処かで聞いたような単語だな、ワニて。

そんでもって、ワニの口からはダラダラとヨダレが垂れており、赤い目はギラリとこちらを見据えている。

「ウゥウゥウゥ……」

更には、低い呻き声にも聞こえる怪物の声。もう何と言うか、ここまで来れば俺の取るべき行動はただ一つだろう。

「……おわァァァッッ！！」

俺は、本日二度目の情けない声を上げながら、回れ右をして全力疾走した。もう後ろを見ている暇など無い。ただひたすら逃げるだけだ。

『……え？　……ちょ、待てェェッ！　俺を置いてくなァァァッッ！！』

幻覚までもが、これまた情けない声を上げつつ俺のすぐ横を定位置に怪物から逃げていく。まさか置いて行かれるのは想定外だったのだろうか、相当テンパっている。

「……グォォォッッ！！」

どういう訳か、怪物もそれに続いて俺達を追いかけてくる。完全に俺達を標的と定めたか。

……ってマズイだろ！？　殺されるだろ俺！？

「何なんだ！？　あの怪物何なんだ！？」

『ちっ、“ガルド”め！　俺とついでに、適合者まで此処で始末するつもりか！』

隣で逃げている幻覚は、先程から意味不明な単語を連発している。
何さガルドって？　適合者って、俺の事？
訳が分からない。何処のマンガだよ、この展開て。もしかして、今日一日の出来事が夢なのか！？
……夢にしろ現実にしろ、このまま逃げ続けても、結局殺されるだけだ。それだけは嫌なんだけど！

『……適合者！　ヤツと戦え！』

「幻覚が何言ってんだ！？　死んでこいと言ってるようなもんだろうが！！」

『俺が貴様に力を貸す！　それだけが、助かる唯一の方法だ！』

「……嘘じゃ無ぇよな！？」

『この状況で嘘なんて言えるか！！』

幻覚……否、翔炎と名乗った精霊は言った。信じないと死ぬのならば、ここは信じるしかないのだろう。戦うって言われても……勝てる気なんて皆無なんだが。
どーすれば良いのさ？　と聞こうとした刹那、精霊の体が赤く光り始め……赤いバックルのような物へと変化した。
二カ所何かを入れるような溝があり、何かの文字の半分……恐らく「火」の文字の左半分が刻まれた、スライドカバーが付いているソレは俺の手元に落ちて来る。

何がどうなったら、鳥がこんな形になるのだろう。そう思ったと同時に。

「……ッ！？」

何かよく分からない、大量の情報が頭に流れ込んできた。

精霊。

火属性。

朱雀の力。

仮面ライダー。

――そして、“烈火”。

何がなんだか訳の分からない、知りたくも無い情報。理解なんて出来る筈も無いが、どういう訳か自分の体は、情報を認識したかのように勝手に動いていた。

バックルを腹の辺りに押し当てると、バックルの両端から炎が出て腰に巻き付き、ベルトになる。そのベルトの左腰に現出した円形のホルダーから、一枚の小さなカード……いや、ＩＣチップのような物を出し、バックルの部分の左側にセットしていた。

『Ｓｙｓｔｅｍ　ｌｏａｄｉｎｇ……ｓｔａｎｄｂｙ』

先程の精霊とはまた別の、無機質な男の声が響くと同時に、俺は何故か叫んでいた。

「――変身！」

何故口が動いたのだろう。その言葉と同時に右手が動き、バックルのスライドカバーを右へとスライドしていた。

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

再び電子音声が響き、赤く「火」の文字が投影される。よく見ると、カバーをスライドさせた事で、カバーに隠れていた「火」の右半分の文字が露出したようだ。ソレを見届けた後、気付けば赤い球状の何かが俺を包み、俺は服の上から、また別の黒いスーツを身に纏っていた。
そして再び体が勝手に動く。俺は振り返って、襲い掛かって来る怪物の鼻っ柱を右手で殴っていた。

拳が減り込み、怪物は反対方向へと吹っ飛んで行く。気付けば、殴った右手から炎が吹き出て、最終的に全身を包み込んだ。その炎が、黒いスーツの上に赤い鎧を生成していた。

炎が消えると、そこに立っていたのは俺……波賀悠樹ではなかった。頭に浮かぶ映像には、恐らく今の俺が言葉通り「変身」したであろう姿が。黒いスーツに赤い鎧。同じく、鳥の頭を模したような赤い仮面に黄色い複眼。

何故か、自信が溢れ出す。
あの怪物が相手であっても勝てるのでは無いかという、常人では有り得ない思考が浮かんだ。

今度ばかりは、勝手に体が動いた訳ではない。
自信満々に……言葉が通じるかは不明だが、挑発的に俺は言っていた。

「――さあ、開戦だ」

この瞬間、俺の日常を構成していた“平凡”は崩れ去った。

第二話：突然の変身（後書き）

……ハイ、という訳で第二話でした。
悠樹、やっと変身しましたよ。しかも、ろくに戦闘シーンも入ってない……。大丈夫かな、俺？
ハイ、次回、やっと戦闘に入りますが、おそらく短いと思います。
あしからず。

感想、ご指摘もどうぞよろしくお願いします。

第三話：初戦闘（前書き）

編集済み

第三話：初戦闘

……何だコレ。
訳が解らない。
……俺、死ぬのか？

「ガァァァッッ！！」

訳が解らず勝手に体が動いて。俺の体がまるっきり変わっちまって。あの化け物とでも充分戦えるぜ的な格好に、あぁもう戦わなきゃいけないフラグ立ちまくってるな、とは思ったけど、この何処から沸き上がっているのかも解らない自信が、俺の戦闘意欲を向上させていた。
死にたくない。いや、死なない。いや、死ねない。

不快な鳴き声と共に大きな口を開けつつ走ってくるワニのような怪物を眺めながら、ふとそんな事を考えていた。
その口は、俺を喰らわんとしていたが……それを“上手く避け”、更には“その大きな顎にアッパーカットを入れていた”。

「グガァッ！！」

怪物は悲鳴を上げつつ怯む。その“隙をついて、俺は怪物に蹴りを入れる”。その攻撃を避けられる筈もなく、怪物は地面を転がった。

上手くダメージを与える事が出来た。そう、自分でも怖くなる程に順調に。
……何なんだ、この力は？　何なんだ、俺の冷静さは？
……ちなみに、元々俺はケンカ慣れしている訳でも無いし、運動を

している訳でも無い。それなのに、何故俺は戦い慣れているのか。
頭の中に浮かぶ、適切な対処方法。この力が意思を持ち、俺に力を貸している。そう思えた。
……よもや、あの精霊の意思でもあるのだろうか。よく解らんが。

『……成る程。ソウルチップと上手く同調しているな』

「……その声、お前か！？　というか、ソウルチップって一体……」

『今は戦闘中だ。俺との会話より……オイ、前、前！』

何だよ前て。
そう思って前を向くと……いつの間にか怪物は立ち上がっており、俺に向かってタックルを仕掛けていた。

「がはっ！？」

対処出来る筈も無く、派手にぶつかって吹っ飛ばされる。体は宙を舞い、アスファルトへと転がる。
体が物凄く痛む。だが、このスーツのおかげでダメージは軽減されたのかもしれない。もし生身で喰らっていたらと思うと、ゾッとする。
同時に、初めて受けたダメージによって、これは“命を賭けた戦闘”である事に漸く頭が理解する。

なのに、何故俺はこんなにも冷静なのだろう。自分が自分じゃないような妙な感覚だ。

「痛ェ……」

『戦闘に集中しないからだ、バカ。』

再び頭に響いた声……精霊の言葉に、若干カチンとくる。

「……安全な場所でのんびり傍観してる奴に言われたかねーよ、焼鳥ヤロー」

『アホが。ベルトになった俺はかなり無防備なんだし、外れたりすると変身が解けるんだ。大事に扱え。それと何度でも言うが、俺は焼鳥じゃ無ェッ』

「翼から火が吹き出てる時点で、焼鳥と呼ぶには妥当だと思うんだけどな？」

『んだとコラ……って、前みろ前』

はっ、馬鹿が！　そんな古典的な方法に乗る訳が無いだろうが！

「ガァァッッ！！」

「ぶはっ！？」

……あ、いや、ゴメンナサイ。やっぱ言う事聞いときゃ良かった。いつの間にか怪物は目の前に突っ立っており、隙のありすぎた俺にご丁寧にも顔面へ思い切りブン殴ってくれたのだった。

……痛いんですけどホント。仮面割れちゃいないよな？

「畜生……」

『そのままで勝てる筈が無いだろうな、特にお前だと』

「んだと！？」

『まあ聞け。初戦闘のお前だと、の話だ。こういう時は、アタックチップを使え』

何だよアタックチップて。そう思ったとほぼ同時だったか、またも俺の意思とは関係無しに体が動く。

ベルトの左側に取り付けられている円形のホルダーから、変身の時とはまた別のＩＣチップ状の物を出し、右腕の装甲部分にある溝に装填した。

『Ｈｅａｔ　Ａｒｍ』

その発声音とともに、宣言通り自分の両腕が炎に包まれる。スーツのおかげなのか、不思議と熱さは感じない。

この力だったら、いける。そう思い、俺は怪物へと駆け寄り、その炎の腕で怪物に殴り掛かった。

「おぉらっ！！」

「グガッ！？」

「っし！　……そりゃっ！」

この攻撃は中々効いてるみたいだ。喧嘩の経験はそれほどある訳でも無いが、テキトーに殴っていても問題無いようだ。鼻っ柱を叩き、怪物は随分と前方まで吹っ飛ぶ。見る限りだと、怪物は相当弱っている。

「よし……」

次で決められる。再びホルダーから、先程とはまた違うＩＣチップのような物を取り出し、右足の装甲部分にある溝に装填する。

『Ｆｉｎａｌ　ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｃｃａ』

電子音声が告げると供に、今度は右足が炎に包まれる。しかも、腕の時よりも勢いが激しい。流石に「Ｆｉｎａｌ」というだけあるかもしれない。

先程のダメージで思うように動けないであろう怪物に向かって……ではなく、何故かその場で俺はジャンプしていた。

ソレとほぼ同時に、背中から炎の翼のような物が現出する。そのまま羽ばたき、更に上空へと向かう。

そして。

「だぁりゃぁぁッ！！」

炎の翼が羽ばたく勢いで、真っ直ぐ怪物へと向かう。そのまま燃え上がる右足を突きだし、怪物へと飛び蹴りを繰り出した。

「ギャァァッッ！！！」

断末魔の叫びと共に、怪物は体に火薬でも付着していたかのように体が破裂し、爆弾のように散っていった。

その爆発の勢いに圧される事はなく、俺は何事も無かったようにその場に立ち上がる。

先程までいた筈の非現実的な怪物は、もういない。残った残骸は、くすぶり煙を上げながら散らばっているだけだった。

第三話：初戦闘（後書き）

……ハイ、どうも。ジャードです。
悠樹の初戦闘と同時に、僕も初めての戦闘シーンの投稿となりました。
……読み返してみると、なんか足りないなぁ……そんな気がします（汗）
さて、今回英語が多く出てきました。……なんか凄い不安です。間違い等を見つけた方、教えてくれると幸いです。また、面白いと思った方、感想を書いてくれると嬉しいです。
では、次の投稿で会いましょう。

第四話：状況説明（前書き）

最初に言っておきます。
今回の話はただひたすら会話、会話、会話、ですので、余り期待しないで下さい。

読んでると、多分疲れます。

※編集済み

第四話：状況説明

「……さて、お前には色々と聞きたい事があるんだよなぁ？」

『ちょ、待て。何故説明するのに俺は縛られねばならないんだ』

「お前は何者か。あの力は何なのか。そして、あの怪物は何なのか。俺にも解りやすく簡潔に説明しろ。拒否権は無しだ」

『……マジでか』

「マジだ」

さて。

現在、自宅……もといボロアパートに俺達はいる。そんでもって、俺の目の前にはビニールテープで身体中をグルグル巻きにされた焼鳥……じゃねーや、精霊がいる。にしても、なんか自分で“精霊”て言うの変な気分だ。

まあともかく、黒い異形・ガルドなる存在を倒した後、俺の体は元の人間・波賀悠樹としての体に戻った。のは良いんだよ。だけど。あんな普通だったら死ぬであろう危険な目に合わせやがった焼鳥ヤローを見て怒りが湧き、ナイスタイミングでゴミ捨て場に捨ててあった“ビニールテープ・テープ余りアリ”で焼鳥ヤローをグルグル巻きにして、引きずって帰って来た訳だ。……周囲から見れば“何か見えない物を引きずっている”という、何とも奇妙な光景だったろうが、そんな事はどうでもいいんだ、うん。終わり良ければ全て良しさ。

「で、まずはさ」

『その前に……とりあえず、このテープを解いてくれないか？』

「だが断る」

『何故ッ！？』

「当然の報いだ」

『そんな馬鹿な！？』

何でこんな目に合わなきゃならないのだと言わんばかりに目を見開いていたが、やがて観念したように息を吐き、ゆっくりと話し出した。

『信じるかはどうかは知らないが……俺は精霊界という、此処とはまた別の世界から来た』

「……は？」

『名は翔炎。朱雀族の一人で火の力を持つ。さっきｎ』

「待て待て待て、ちょーっと待て。なんだ精霊界って。何その厨二臭い名前。めっちゃ嘘臭いぞ」

『厨二臭いは酷いな……ならば逆に聞こう。お前は俺の存在をどう説明する？』

「うぐっ」

確かに……そうだよなぁ。コイツ、もはや地球上の生き物ですら無いもん。説明すら難しいし……何より、俺以外の人間には見えていないのだから、ホントに妙な生き物だコイツ。

『精霊には四つの種族が存在する。朱雀族・青龍族・白虎族・玄武族。この世界でいう四聖獣のような物だ』

「なんかツッコミ所満載だな畜生。……そもそも、精霊て何だ？」

『ざっくり説明すると、未知の脅威に対抗出来ない者に力を貸す存在、だな。精霊が適合者に力を貸す事で融合し、適合者はその名の通り“変身”する。ちなみに俺が力を貸した場合“烈火”って戦士へと変身する』

烈火、ね。火の力を使っていたから、納得かもしれない。

……無条件で火を出してたけど、アレって結構凄いんだよな？

「そういや、適合者って人間だけなのか？」

『その通りだ。しかも、適合者は数多く存在する世界の中でただ一人だ』

……数多く？

数多くて……何、どういう事だ？

『いやー、苦労したぞ。適合者を見つけるのにいくつ世界を回ったか』

「待て、どういう事だ？　お前のいた精霊界や、この世界の他にも

世界が存在するって事か？　というか、お前の言う“世界”て何だ？」

『平行世界……パラレルワールドとも呼ばれる奴だ。聞いた事くらいはあるだろう。パラレルワールドは無数に存在する。それは当たり前だ』

「当たり前なのか！？」

うわあ……なんというか、段々頭痛くなってきた。まず無いよ、スケール的に。普通だったら鼻で笑ってたよ。

……目の前の存在が、ソレを真っ向から否定してるけど。というか、いつの間にビニールテープ解きやがったんだコイツ。何優雅に宙を舞ってやがるコイツ。

『で、最後にガルドの事か。アイツらに関しては……悪いが、知らん』

「……は？」

ちょっと待て。

今、なんつった？

何で敵の名前まで付けときながら、敵の目的とかを知らんのだよ。

『奴等は、突然精霊界に現れた。奴等はいきなり現れては、俺達の仲間を殺し始めた』

……ッ！？

いきなり、殺す？　……何を考えて？　何が目的で？

そんな奴等と戦っていたのか、俺は？

この精霊も、辛い目に合って此処まで来たのか。少し、同情する。

『俺と、仲間の三体と一緒に逃げては来たが、途中ではぐれてしまった。何もしないのも癪だったから、せめて俺の適合者を見つけようと世界を廻っていた。

……ちなみに、ガルドって名前は追われている途中に決めた。俺はこの世界に一ヶ月程前に辿り着いたが、その頃から何か妙な事があったろう？』

精霊の言葉で、ふと、あるニュースを思い出す。ワニに食いちぎられたような死体が発見されたという、変死事件。

……あの事件は、恐らく先程倒した怪物が起こしたものなのだろうか。だとしても、少し納得がいかない。

「あのガルドって怪物は、お前を狙ってるんだろ？　なんで関係の無い人まで？」

『ガルドは知能を持たない。本能かどうかは知らんが、俺達が目的なのは確かだ。故に、これは推測に過ぎないが……』

何故かこのタイミングで言葉を切る精霊。そのタイミングが絶妙すぎて、続いて発せられるであろう言葉に耳を傾ける。

……正直、嫌な予感しかしないが。気になってしまうのは、俺の性かもしれない。

『……恐らくガルドは、目撃者を殺している』

「ッ！」

やっぱし予想通り、嫌ーな予感的中だ。そんな危険な怪物が、今の

今までこの町に彷徨いてたっつーのか。見た人を殺す事で、事件にはなっても特定される事は難しいか。そもそも人間技じゃないし。……正直、怖い。怪物にしろ、こんな冷めた思考をしてる俺自身も。あんな非現実的な体験をしたからか、少し脳が麻痺してるのかもしれない。

『俺のせいで、ガルドはこの世界に来てしまった。そんな俺が、こんな事を言うのは筋違いだが……お前に、頼みがある』

「……何だ？」

このロクでもない精霊の頼み事だ。きっとロクでもない頼みなのだろう。その事だけは、考えるまでもない。けど、どういう事か無意識の内に俺は笑っていた。特に楽しい事があった訳ではないけど……なんて聞かれるか、そして俺がなんて答えるか。すぐさま頭の中で考えてしまったからかもしれない。

『俺と協力して、ガルドと戦ってくれないか？』

「……もし、俺が嫌だと言ったら？」

『お前は巻き込まれただけだ。俺はこれ以上頼みはしない』

「だったら、その先お前は何をする気だ？」

『……逃げる。他にガルドを倒す方法を考えて……生き延びてみせる。俺は死ぬ訳にはいかない』

確固たる決意。その信念は、精霊の目を見ていればすぐに解る。だが、もし受け入れたら、俺は非日常を過ごす事になる。受け入れ

なかったら、今まで通り。
……バカだなコイツは。あんな話を聞かれたら、答えは一つしかないだろう。

「よし、やる」

『は？』

「……いや待て。なんだその反応」

なんだなんだ、アイツにとって、今の回答は予想外だったのかよ。
なんで言った直後にそんな呆けた声出してんだよ。

『おま、今……なんて言った？』

「……お前さあ、あんな話聞かれちゃ断れねーだろよ」

精霊の反応に苦笑いしながら答える。しかしながら、それだけ予想外だったとなると少しショックだな、うん。血も涙も無い奴じゃねーぞ俺は。

『怖く、ないのか？　常に死が付きまとうような日常に、恐怖を感じないのか？』

「……怖くないって言うと、嘘になる」

怖い。めっちゃ怖い。思い出すだけでも身体がガタガタ震える。そこは認めよう。否定する程の事でも無い。

「けど、お前の言う頼みは、俺にしか出来ない。俺だけが、お前と

協力出来る。適合者ってのは、俺だけなんだ。他にも精霊はいるんだろうけど……一人でも多い方が、心強いだろ？」

そう言って、俺は精霊……翔炎に向けて、手を差し出す。俺のセリフに驚いたような表情を浮かべていたが……やがてそれは笑みへと変わり、俺の掌に乗る。

『後で後悔するなよ、貴様？』

「貴様じゃなくて、波賀悠樹。上等だ、俺だってそれなりに覚悟持って言ってんだからな。……今引き返したら格好悪いし」

『……よろしくな、悠樹』

「よろしく、翔炎」

そう言って、お互いに笑い合う。

もう引き返せない。引き返すつもりもない。非日常の渦なんか、自ら突っ込んでやる。早死にするかもしれないけど、いや、してたまるかっての。

俺にしか出来ない事……やっと、見付けられたかもしれない。

南方荘。

四ノ上町のとある住宅街の一角にある、ごく普通のアパートだ。波賀悠樹は、そこに住んでいる。

日も落ち辺りが暗くなった中、そんな南方荘の前に一人の少女が立っていた。背は少し小柄か。暗くて解りづらいが、セミロングの青みが掛かった黒髪が風に揺れていた。

そんな彼女の横には、地球上ではまず見ない非現実的な生き物が浮遊している。空想上の生き物である竜をそのまま小さくややデフォルメしたような姿。翠色のソレは、少女の傍らでユラユラと少女の黒髪に合わせるかのように揺れていた。

少女は竜を見ながらやおら口を開く。

「此処が、そうなの？」

『ああ。どうやら翔炎も適合者を見付けたようだな』

「ふーん」

人語を発する竜との会話を終えた少女は、南方荘を見上げながら気が抜けたような返事をする。

『興味がある、と言っていた筈だがな？』

「こうして実際に見てみると、あまり実感が湧かないのだよー。実際に会った訳でもないしね」

風にたなびく黒髪を右手で押さえながら、少女はじっと南方荘の建

物を眺めていたが、やがてその瞳を閉じ、踵を返す。その様子を見て、翠色の竜は、どういう仕組みで人語を話しているか定かではないが、まるで人語を発する事が当たり前のように少女に声を掛ける。

『……もう良いのか？』

「流石に遅いから帰るのだよ。お母さんに怒られちゃうし……」

言いながら、少女は近付いてきた竜を見て笑う。

「機会があったら、また会えるでしょ？」

『……そうだな』

竜も笑みを返し、少女の後を付いて行く。少女はもう一度振り返り、南方荘をその眼に焼き付けてから、今度こそその場から去っていったのだった。

第五話：妨害者（前書き）

※編集済み

第五話：妨害者

「あぁぁあぁぁぁぁぁぁ」

『……朝っぱらからどうした、悠樹？』

どーしたもこーしたも無ェよッ！　そんな感じの清々しく無い朝。
いや確かに外は晴天だけども。
昨日の非現実的な出来事が起きてから既に一夜を明かしたのだが、どういう訳か起きたと同時に俺の身体中が悲鳴を上げ始めたのだった。要するに、身体のあっちこっちに激痛が走るのだ。
ただでさえ人並みしか運動をしないせいか、昨日の人間離れした動きで筋肉痛が起こったか。いやこの筋肉痛は凄まじいって、ヤバイ学校休みたい。
取りあえず筋肉痛だろうって事を翔炎に伝えると。

『人間の身体は不便だな』

「しまいにゃ殴るぞテメー」

しかしながら、やはり学校を休む訳にはいかないので、ズキズキと響く痛みを堪えつつ朝食を終え、いざ学校へと向かおうとした時。

『これから学校か？　よし行くぞ悠樹』

「いや何故にお前まで来るんだよ」

玄関には既に準備万端といった感じで翔炎が待ち構えていたのだった。

……いや待て、今なんつった？　行くぞって、え？　お前も来る気か？
いやいや、そんな訳無いよなきっと。

「翔炎、戸締りヨロシクー」

『何を言っている。俺も行くぞ』

「何でそーなるッ！？」

訂正。そんな訳があった。何を考えてやがる。

「お前が来ると色々と目立つだろ！？」

『精霊は適合者にしか見えない。一般人には見える筈もない』

「どや顔で言うなよ腹立つ。それでも俺が気になって仕方ないだろ！？」

『じゃあ何だ。もし俺を狙いにガルドが来たらどうする？　俺に死ねと』

……確かにそりゃそーだ。
俺は翔炎と協力する事を約束した。つまり、翔炎の無事を約束する、と同義語にもなる。どういう事か狙われてる訳だしなアイツ。家に放置だと、ガルドだったら堂々と入って来るかもな。
けど、連れて来るとなると……学校の連中にも被害が及ぶよなぁ、下手したら。そこが一番心配なんだけどな。

『他の人間が危険な目にあったら、お前が纏めて全員護れば良い。

それで良いだろ』

「難しい事を簡単に言ってのけんなよ……」

まあ実際、アイツの言う通りなんだよな。

何かあったら、皆護る。簡単そうに見えて、相当難しい事。そんな事出来るかっつの、俺は正義のヒーローじゃ無いから。むしろそんな器じゃない。

……と言い張りたかったが、残念ながら他に方法が思い付く筈も無く、なんかうやむやのまま学校へと行く事となった。

……筋肉痛痛い。

そんなこんなで、通学路。珍しく知り合いに出会う事も無く、一人……と、一匹で学校へと向かう。どうやら渉と小野川は既に学校へと向かったようだ。流石に小野川がいないと静かだ。通学路である住宅街を歩いているのは、今は俺だけらしい。だから尚更なのかもしれない。

『……恐ろしく静かだな』

「やっぱ朝だから、人も少ないんじゃね」

『そうかもしれないが……』

朝っぱらから何を心配しているのだろう、コイツ。
傍らで何かを模索しながら浮遊している翔炎を視界の隅っこに入れながら、冬の寒さに身を縮めつつ速足で学校へと向かう。その足も、筋肉痛で痛い痛い。暫くは体育の授業を休みたい程だ。

……けど、確かに静かだ。なんつーか、雪が降った時みたいな妙な静けさ、というか……。

『悠樹、走れ！』

「え？」

唐突に翔炎は叫び、３０ｃｍ程の小さな身体――鳥にしちゃあそれなりに大きいが――で俺の背中を押し出す。痛い痛い筋肉痛で痛いっつってるだろーが。
その勢いで、思わず前のめりになる。足がもつれて倒れそうになったその時。

「……ッ！？」

背中を、冷気が撫でた。
確かに冬は近付きつつあるけども、いきなり何で冷えるのか理解出来なかった。というか、そこだけ急激に冷やされた、みたいな。
振り返ると、昨日みたような非現実的な光景が広がる。先程まで俺が立っていた場所には、巨大な氷塊がそびえ立っていたのだ。

「……え？」

『成る程……氷属性のガルドか』

翔炎のよく解らない考察と共に、氷塊はバラバラと崩れ落ちる。その崩れ落ちた氷塊の中から、漆黒の怪物が現れた。
ざっくり見てみると、馬を二足で立たせたような姿。先程の氷塊の影響なのか、身体を白い冷気がまとわり付いている。よく見ると、怪物の両足に接している路面が凍り付いている。

……以前の翔炎風に言うと、ガルド・ホースといったところか。この寒い中に寒そうな格好で来やがって。余計寒くなってきた。
……なんでこんな冷静なんだ俺。流石に昨日の今日だからなのか？

『行くぞ、悠樹！』

「お、おぉ」

自分でも自覚できる程要領を得ない返事をしながら、赤いバックルへと姿を変えた翔炎を手に取り、腰に押し当てる。バックルの両端から炎が吹き出て腰に巻き付き、ベルトとなる。
左腰にある円形のホルダーから、「火」の文字が刻まれた変身に用いるＩＣチップ状のアイテム・ソウルチップを取り出すが。

「ヴォォォォ！」

「うっわ！」

怪物……ガルドは、俺の変身を待つ気なんぞ更々無いようだ。路面をテンポよく蹴り、馬の如く俺に向かって突っ込んでくる。実際馬っぽいけど。
横へ飛び退いた事で、ガルドの突進はかわせたけど、飛び退いた勢いで路面と接触する訳で。今の俺は筋肉痛で苦しんでいる。つまる

ところ。

「いってェェ……」

もの凄い激痛が身体中を走る。その痛みに悶え苦しむ暇も無く、ガルドは身体の向きを変えてまたもや突進してくる。

『悠樹、急げ！』

「わ、解ってるって！」

流石に二度目はかわせない。この隙しか、変身するチャンスは無い。でないと、死ぬ。

……やっぱ、相当非現実的だよなこの状況。けど、怖いとか言っていられない。

『Ｓｙｓｔｅｍ　ｌｏａｄｉｎｇ……ｓｔａｎｄｂｙ』

ソウルチップをバックルの左側のリーダーに装填。無機質な男の声が響くや否や、素早くスライドカバーを右へと動かす。

「変身！」

『Ｌｏａｄ　　Ｕｐ』

ガルドの突進が届く寸前に、バックルから赤く「火」の文字が投影され、弾ける。それらの破片が深紅のエネルギー球となって俺を包み込む事で、ガルドの攻撃を阻む。

俺の身体が黒いスーツに変質していくのを確認したと同時に、近くにいるガルドの鳩尾を目掛けて。

「オォ、ラッ！」

「ヴォッ！？」

エネルギー球を内側から突き破るかの如く、殴り掛かった。ガルドはその身を捩らせ、後方へと吹っ飛んでいく。

……勿論、殴った右手にも激痛が走りまくったのだが。

「痛い痛い痛い痛い」

痛みに悶える中、右掌から炎が溢れ出す。刹那、エネルギー球も炎によって燃え上がり、黒いスーツの上から赤い装甲が生成されていった。

烈火への変身が完了しても、やはり筋肉痛自体は治まる筈も無い。

畜生戦えるかな、こんなんで。

『立ち止まっている暇は無いぞ、悠樹！』

「……チッ！？」

翔炎の言葉で、痛みに耐えつつガルドの姿を捉える。ガルドはガルドで苦しんでいるようだが、既に立ち上がって馬らしく脚力を利用して、こちらへと向かって突っ込んで来た。

回し蹴りの要領で右足が俺の顔面目掛けて襲って来る。普通だったら見えてもかわせないであろう攻撃を、この姿の身体能力によって素早く後退しかわす。しかしながらガルドの攻撃が終わる筈も無く、振り回した右足を軸にして、今度は左足で回し蹴りを繰り出してくる。ちょっと待て連続か。

流石にかわしきれず、左腕で蹴りを受け止める。が、衝撃まで抑え

られる筈も無く、蹴りの受ける方向……つまり右後方へと俺は吹っ飛ばされたのだった。痛い、左腕っつーか身体中痛い。さっきより痛みは引いてきたっぽいけど、痛いものは痛い。

『悠樹、アタックチップだ！』

「解ってるって……蹴りには蹴りだ！」

立ち上がりながら迫るガルドの蹴りをかわす。今度は蹴りの攻撃範囲から充分距離を取り、左腰のホルダーから一枚のチップを取り出し、右足の装甲に設けられたリーダーへと装填した。

『Ｈｅａｔ　Ｌｅｇ』

電子音声が告げた後、両足から炎が吹き出す。その炎を纏った右足で、蹴りを繰り出そうと構えていたガルドの横っ腹を蹴り抜いた。

「せぇいッ！」

「ヴォッ！？」

横っ腹を押さえながらよろめくガルド。その隙に、今度はその馬面を目掛けて蹴り倒す。

「ヴ、ヴゥゥゥ……」

そのまま地面に押し付けて、ガルドの身体中にへばりついている氷を溶かしつつ燃やそうと考えていたけれど……どういう訳か、アタックチップ・ヒートレッグによって燃え盛っていた筈の両足の炎が、段々とその勢いを失っていったのだった。

「……え？　なんで？」

『氷を溶かす……中々良い手だが、氷は元々“水”でもある。お互いに打ち消し合うだろうが、基本的に火と氷の相性は関係無いぞ』

「なにそれ面倒臭い」

そもそも属性てなんなのだろう。火の他にも、氷とか色々あるのだろうか。というか属性によって優劣に差が付いてしまうって事かソレ。思い切り火力を高めりゃ、それほど気にはならないと思うけど……そんな事を考えている内に、ガルドは攻撃手段を変えてきた。何やらガルドの手から棒状の氷が冷気を放ちながら段々と伸びていき、さながら氷で出来た一本の剣へと変貌した。細身の刀身のソレを確かめるように振り回し、やがて剣の切っ先を俺に向けてくる。

「武器なんて作れるのかよ！？」

『問題無い。武器には武器だ、悠樹！』

「……まだ隠し玉あるのかよ」

『別に隠していた訳ではないがな』

ベルトへと変化している翔炎と妙な会話を交わしつつ、走りながら氷の剣を突き出してきたガルドに対応する。顔面目掛けて襲ってきた剣の切っ先を寸前でかわし、氷の刀身を掴む。瞬間、やはり氷の剣と言うべきか、掴んだ右手が物凄く冷たくなっていった。あまりの冷たさに右手が軽く痺れるが、気にしている暇も無い。

そのまま右手で剣を引っ張る。その行動は予想外だったのか、ガル

ドは足をもたつかせ前のめりになる。その隙だらけガルドの背中目掛けて、右足でガルドの身体を押し込むように蹴る。もといヤクザキックを繰り出す。

ついに地面へうつ伏せに倒れ込んだガルドを尻目に、左腰のホルダーから取り出した一枚のＩＣチップ状のアイテムを眺める。先程使用したアタックチップとはまた別の、赤い剣が描かれたソレ。自然と頭に流れ込んでくる情報によると「ウェポンチップ」というらしいソレを、右手の装甲のリーダーにセットした。

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｈｅａｔ　Ｓａｂｅｒ』

発声音が告げると同時に俺が握り拳を虚空に翳すと、その握り拳から噴き出すように棒状の炎が発生する。自然と無意識にその右手を払うと、まるで炎は剥がれるかのように散っていき、中から赤い刀身の長剣が現れた。

火剣・ヒートセイバー。その名の如く刀身自体に炎の力を宿しているのか、刀身の周りが熱で揺らめいているようにも見える。この剣のおかげで、さっき冷えた右手が温まっていく。

「……すげーなコレ」

俺の驚いた声に反応したか、やっとこさ立ち上がったガルドは、俺の持っている武器に驚いた様子も無く氷の剣を構え、剣を観察させてくれる暇も与えず、俺の首目掛けて横薙ぎに振るってくる。

「うっわ！？」

咄嗟にヒートセイバーの刀身で氷の剣の攻撃を止める。ガルドは剣を引き、再び俺の顔面目掛けて剣を降り下ろしてきた。辛うじてその攻撃も、ヒートセイバーのグリップと刀身を手で支える事でなん

とか防ぐ事に成功する。しかしながら、ガルドはそのまま力を込めて剣を弾き飛ばそうとしている訳で。

「いっててててて！？」

ちょ、筋肉痛！　筋肉痛がヤバい！　ヤバいを通り越してヤヴァいってコレ！　というかヤヴァいって何！？

……あまりの痛みに一瞬頭が可笑しくなったけど、直ぐ様正常に戻す。取りあえず今の体調から考えると、ガルドの剣を押し返すのはまず無理だ。となると、この状況を打破する方法は一つしか思い浮かばない。

「おぉぉおおぉ！」

「ッ！？」

気合いを入れると同時に、ヒートセイバーの刀身から炎が噴き出す。段々と勢いを増していくソレは、ガルドの持つ氷の剣を少しずつ包み溶かしていく。

氷と火は打ち消し合う？　だったら、それ以上の火力をぶつけてやれば良い。氷なんかに負けるような柔な炎じゃ無いって事、見せてやるよ！

「ッらぁあぁぁぁあ！」

「ヴォ、オォォォ！？」

気がつけばヒートセイバーを持つ手まで燃えていたけど、やはりというべきか不思議と熱さは感じない。元々炎を司るというこの姿のお陰なのかは知らないが、多分そうなのかもしれない。

そんな事をふと考えながら火力を強くしていると……ふと、ヒートセイバーによって押さえられていた氷の剣が唐突に振られた。
勿論、俺が失敗した訳ではない。どうやら氷の剣がヒートセイバーの火力に耐えられず、ヒートセイバーの刀身に触れていた部分が溶けて刀身が折れたようだ。
明らかに動揺しているガルドを尻目に、ガルドの馬面目掛けてヒートセイバーを横薙ぎに振るう。

「おぉ、らッ！」

「ヴッ！？」

正面からまともに攻撃を喰らい、顔を押さえて後退するガルド。斬り付けただけでなく“焼き付けた”訳でもあるから、ダメージは大きいのだろう。ついに生じた大きな隙を、ここで逃す訳にはいかない。

『悠樹！』

「解ってるよ！」

翔炎の張り上げた声に思わず気を引き締めながら、左腰のホルダーから一枚のチップを取り出す。それは翼を広げた鳥の絵が刻まれた、深紅のチップ。ガルドに止めを刺すべく、ソレをヒートセイバーの柄に設けられたリーダーへと装填する。

『Ｆｉｎａｌ　ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｃｃａ』

電子音声が響き渡ると同時に、ヒートセイバーの刀身から炎が溢れ

出す。その勢いは先程と比較できない程凄まじい。まるで鳥の片翼にも見える業火は、触れていない地面さえも少しずつ焼き尽くしていった。

……その炎の勢いの強さに、俺自身が思わずビビってしまう。以前はこの炎が足で燃えていた事を思い出すと、目の前の炎とは対照的に寒気が走る。

どうやらガルドも例外ではなく、その炎を見て少しずつ後ずさっている。けど、逃がす訳にはいかない。ここで倒さないと危険である事は、誰だって解る。

「……あぁぁぁあぁぁッッ！！」

気合いを入れるように叫びながら駆け出す。ガルドはガルドで何かしらの危険を感じ取っていたのか、身を護るように身体中に氷を張り付けていったが……もう手遅れだ。

「ッ！？」

ヒートセイバーをガルドの腹に突き刺す。以外にもソレは容易く身体を貫き、ガルドの背中からはヒートセイバーの切っ先が突き出ていた。何かしらの抵抗を試みたのか、ガルドは力の限りもがく。が、その最中、内から炎で焼き付けられていた為か、ついにはガルドの全身から炎が噴き出し始めた。

突き刺したままのヒートセイバーを、右に向かって薙ぎ払う。刹那、ガルドの身体から噴き出していた炎の勢いが最高潮となり、ガルドは断末魔の悲鳴さえ上げずに身体をボロボロと崩れさせ、やがて塵となって消えた。

倒したのだと判断すると、自然と身体中の力が抜けていく。同時に、必死こいて忘れていた筈の筋肉痛で苦しむ羽目になる。

「あいっつつつ……」

『上出来だ。いや、まさかここまで上手くいくとはな』

バックルを外すと同時に、鎧やスーツが炎のように変質して散っていく。元の姿に戻ってから、目の前でくすぶっているガルドだった物の熱と匂いに、思わず顔をしかめる。

『流石に多少時間は掛かったが、まさかこんなに早く慣れてしまうとはな』

「……いや、ぶっちゃけ慣れたくないんだけど」

正直、怖かった。死ぬかとも思ったし、その度に剣を握る手が震えた。けど、二度目だから開き直っているのだろうか、最初よりはあまり恐怖を感じなかったのも事実だ。

……それって、ある意味不味い事ではないかと思うけど。日常がおかしい方向へと向かいつつあるのには、どうツッコミを入れれば良いのだろうか。

冷や汗を流しながら、一体どれくらいの時間で戦っていたのだろうかとふと思い、左腕に付けていた腕時計に目を落とす。

「……え？」

そこで、思わず固まってしまった。

……確かに翔炎は「時間は掛かった」って言ってたけど、もうこんな時間……え嘘？

『……どうした、悠樹？』

「コレ見ろ翔炎」

現在時刻を確認しよう。８：４０。ちなみにＨＲの時間は８：３０。ここから走っても大体１０分程掛かってしまう。

要するに。

『遅刻、という訳か』

「言うなド畜生ぉぉぉぉ！！」

今更叫んでも仕方無い訳なのだが、理不尽なこの状況にもはや耐えられない。叫んだところで時間が戻る筈が無いの事は理解してるけど、叫ばずにはいられないというか。

筋肉痛によって身体中に走る激痛に必死に耐えながら、俺は学校に向かって全力疾走するのだった。

四ノ上高等学校。

一年二組の教室内にて。

「渉、渉」

「……小野川君、授業中くらいは静かにしてくれない？」

恐らく地理の授業中であろう時間に、少年・小野川海斗はツンツン頭を揺らしながら、隣に座る眼鏡を掛けた少年・秋元渉に向けて声を潜めながら話し掛けた。

渉は鬱陶しそうに海斗を見やりながら再び鉛筆を握る手を動かすが、その次に放たれた海斗の言葉に手の動きが、はたと止まった。

「何でまだ波賀のヤロー、学校に来てねぇんだろな」

「……そーいえばそーだね」

声を潜つつも今更ながら気が付いたのか、渉は普段悠樹が座っているであろう座席に視線を動かす。案の定、そこには誰も座っていなかった。

普通だったら「風邪で休み」だとか推理するだろうが、生憎彼等はそんな事を微塵にも考える事は無かった。

「アイツに声掛けた筈なんだけどなー……まさか、寝坊か？」

「君じゃないんだから、波賀君がそんな事する筈無いでしょ」

「どーゆー事だコラ。……まあ確かに、アイツ風邪引いた事無かったよな、滅多に」

「いつぞやの新型インフルエンザで休講になった時も、彼だけピンピンしてたしね」

……つまるところ、そういう事らしい。

波賀悠樹は滅多に風邪を引かない体質らしく、怪我でもしない限り学校を休む事は無いようだ。
幸いにも一連の会話は、授業を熱心に進めている女性教師の耳に届く事は無かった。

「あーあ、今度こそアイツに復讐してやろうかと思ったけど、残念だなー」

「そうだね。結果が解りきってる分もっと残念だね」

「んだとコノヤロォッ！？」

「小野川君」

「げっ」

思わず授業中に大きな声を上げた海斗は素早く両手で口を塞ぐが、既に遅い。壊れた人形のようにゆっくりと首を動かし、顔を黒板へと向けると、案の定女性教師は眼鏡を不気味に光らせながらこちらを見ていた。心なしかチョークを持っている手が震えている気がする。
眼だけを渉の方に動かしてみると、渉は渉で知らん顔だった。さりげなく声には出さず「バカ」と言っていた気がする。

「授業中に大きな声を出すような事があったんですか……？」

「いやあの、諏訪先生、これは、その」

女性教師・諏訪加奈子（すわ・かなこ）は生徒の間で「一番色んな意味で真面目な教師」であると有名だ。真面目過ぎる性分で、生徒

の疑問には懇切丁寧に教えるが、自分の授業を聞かない生徒がいると悲しくなるという、恐らく二組の担任・福原と一番正反対の教師だ。

……今回ばかりは悲しみより怒りの方が上回っていたようだが。

「この授業より面白い話だったら、是非とも教えてほしいんですけどね？」

「……うぇぇぃ」

諏訪の冷ややかな声色に冷や汗しか出ない海斗。周囲の生徒達は、もはやどうでも良いと考えているのか無視に徹している。

そんな彼を救う存在はいない。渉は鉛筆を弄りながらも確信していたが、今回ばかりは天は海斗に味方したのだろうか。

「……？」

唐突に黒板のすぐ横にある扉が開き。

慌てた様子で、先程彼等が話題にしていた少年・波賀悠樹が教室へと転がり込んだのだった。

「……」

現在時刻・９：１２。思いの外、かなり時間が掛かってしまった。
戦闘でかなり体力を使ってしまったが故に走るのもままならなかったというか。と、言い訳してみる。
やっと辿り着いて、勢いで教室のドアを開けてしまう。そのせいか、クラスメイト全員が俺の事をジッと見つめていた。
……どういう訳か、地理担当の諏訪先生は目茶苦茶恐ろしい表情でこちらを凝視してるんですけど。クラスメイトの視線も痛いけど、先生のは根源的な恐怖を煽るんですけど。何故に怒ってるんですか先生。俺が遅れたからですか先生。
……恐る恐る口を開く。

「……遅刻しましたすみません」

「時間的には遅刻ですけど、授業はまだ出席扱いになります。次から気を付けて下さいね」

「あ、はいどーも」

「しかし」

教室に入ろうとした俺を、諏訪先生は制止する。

「……ちょおっとタイミングが悪かったですね？　暫く廊下に立って……じゃない、待ってて下さい」

ぅえ！？　え、ちょ、そこまでする！？　俺そこまで悪い事した！？
そんな様子を見て、クラスメイトの一部が小さく笑い声を上げる。
その時の俺は、相当顔が赤かっただろう。穴があったら、リアルに頭から突っ込んでいたと思う。
……何でこうなった俺。

「はっはっは！　波賀め、ザマーミロ！」

「今の状況を理解していないようですね、小野川君？」

「え」

小野川、お前が元凶か。

あのバカを軽く睨みながら、一応扉を閉め渋々廊下に立つ。もとい待つ。いや多分待つであってる筈。全ての元凶は小野川なのだから俺は悪くない、筈。けど、妙に湧き出てくる羞恥心は何なの一体。

『……泣きたかったら、泣いても良いんだぞ？』

「何でそーなるッ！？」

傍らで静かに声を掛けてきた翔炎に対して、思わず声を張り上げながら返してしまう。

体力的にも精神的にもある意味ボロボロだったとはいえ何も考えずに出した大声は、多少ざわめいていた教室を黙らせるには充分だった。

……もう嫌だ畜生。

第六話：襲撃者（前書き）

今回は少し長いです。
あしからず。

※修正済み

第六話：襲撃者

さて。絶叫してから物凄く後悔したのだが、もう後の祭というべきか。
弁解の余地も無く、顔を真っ赤にしながら教室へと入り、授業を受ける事となった。あぁ恥ずかしい。熱が溜まって顔燃えるんじゃ無いか。

そんな事を気にする暇も無く、社会の授業が終わり、１０分間の休憩に入った。
……入ったっちゃあ入ったんだけど、ね。

「……」

『……』

回りの視線が超痛い。先程と比べ物にならないくらいに、チラチラとクラスメイトが見てくる。多分、俺が翔炎に対して言った言葉を皆が間違えて解釈しているからだろう。無理も無いけど。なんというか、微妙な沈黙が俺の周囲を支配していた。
つーか小野川に至ってはわざとらしく笑ってやがる。後でアイツ、ブン殴る。コレ決定。

『……視線がお前に集中してるぞ。人気者だな』

「誰のせいだと思ってんだコノヤロ。てか、話し掛けんなっつったろ」

翔炎は俺以外には見えていない為、不自然に見られないように小声

で返答する。畜生、翔炎の野郎ほくそ笑んでやがる。軽く翔炎を睨んだとほぼ同時に、授業の始まりを告げるチャイムが鳴った。

「オラー席着け諸君。楽しい理科の時間だー」

そんな事を言いながら入って来た教師・福原の声に反応し、小野川を除いたクラスメイト全員が授業体制に入る。例の如く、福原は出席簿の角で小野川を叩いていた。

そんなこんなで、授業は始まったのだが。

『しかし、生物というのは面白いものだな。何処の世界でも、全く共通した作りだからな。まあ、平行世界だから当たり前か』

独り言うるさいよー翔炎さん。

『嫌気呼吸に好気呼吸、成る程な。……俺が言うのもなんだが、精霊はどっちに分類されるのだろうな？』

知らねーよ。

『……というか悠樹、何故黙ってるんだ』

「うっさいわボケ」

あぁうん、もう無理堪えらんない。なんで喋るなっつった矢先にコイツはペラペラと話し掛けてくるんだよ畜生。

『暇なんだが』

「そもそも朝に来るなっつった筈だろ！？　大体授業中に見えない

相手と話してると、明らかに不審な人だろーが！」

なるだけ声を潜めて、翔炎にも聞こえる程度の音量で怒鳴る。しかし翔炎は澄ました顔。ああ腹立つ。

取り合えず今後の翔炎の発言は無視しよう、そうしよう。俺の決意はダイヤモンドより硬いぜ。え、嘘臭い？　今そんな事言った奴、後で殴るから覚えとけ。

『前に座ってる奴は、何故ハゲなんだ？』

運動部だからじゃないの！？　というか言葉発するな畜生！

あぁ見ろ、お前のせいでいつの間にか授業が進んでら。いつの間にか地学に入ってやがる。ヤバイ、今の内にノート写さんと。

「……で、この面を“不連続面”と呼ぶ。さて問題。この不連続面には一つ一つ名前が付いているのだが……」

げ、マジで？　そんな話進んでたのか。まあ良いや、そこは教科書でも見よう、うん。

「一番外側の不連続面の名称を……小野川、答えてみろ」

「……ゲ」

俺は今、小野川が嫌そうな声を洩らしたように聞こえたが、多分空耳じゃないだろう。案の定小野川を見てみると、冷や汗をダラダラと流していた。挙げ句の果てには、アイツの机の上には何も広げられていない。アイツもホント問題児だよな。

涙目で隣に座っている渉に助けを求める。渉は溜め息を吐きながら、ご丁寧にもヒントを出してやった。

「なんちゃらの不連続面」

一番難しいとこ飛ばしたな。渉らしいけど。これじゃあ小野川も解るまい。

「なんちゃらの不連続面！」

ほーらバカだ。バカの化身だ。なんであんな自信満々な表情で言ってのけるかな、つくづく思うけどアイツ頭大丈夫か？　主に色んな意味で。

「……よーし小野川。この優しい優しい先生が選択式で問題を出してやろう。ありがたく思え」

「あざーっす」

頬を引きつらせながら言う福原の凄みの効いた言葉を聞いて、流石に小野川も真面目になったか。ピシッと背筋を正して福原の言う選択式問題の出題を待つ。

「間違ったら……解ってるよな？」

「……うっす」

怖いくらいに清々しい笑顔で言う福原の言葉には、小野川だけでなくクラスメイト全員が戦慄した。あの人、本職は実は違うんじゃないだろうか。

「1．田中さん家の不連続面。

2．ドレミファソラシの不連続面。
3．モホロビッチの不連続面。
さあ、どれだ」

福原、アンタ絶対わざとだろ。易しすぎるにも程があるだろ。バカにするにも程があるだろ。小野川はそこまでバカではないだろ。

「ドレミファソラシの不連続面！」

バカだった。もう駄目だコイツ、どうにもならん。

「小野川。放課後、先生と一緒に補習という名の海へダイビングしようか」

「嫌ぁぁぁっっっ！！！」

授業中だというのに、悲痛な叫びが学校中に響き渡る。これが奴にとっての日常なのだ。え、異常？　そんな事は小野川に言ってくれ。アイツはバカなんだから。

さて、そんなこんなで三時間目、体育。全員ジャージに着替えて、チームに別れてサッカーの試合をしている。ちなみに俺・小野川・渉は運良く……いや、運悪く、というべきか。偶然同じチームになっていた。

「ヘイ、外処パス！」

「さっさとしろ眼鏡！」

「うっせ、ゲーセン行ってる奴の体力の無さナメんな！」

サッカーボールの激しい取り合い。そこから眼鏡を掛けた小柄な少年がボールを奪ってドリブルをしているが、既に息が切れている。頑張れ外処。あ、ちなみに外処と書いて「とどころ」と読む。珍しい名字だな。

そんな中、試合も無く観戦中のチームである俺達はサッカーの練習なりなんなりしているが、俺の隣にいる二人はサッカーとは全く関係の無い話をしている。

「不連続面てのは、モホロビッチの不連続面にグーテンベルグの不連続面、更にその下にレーマンの不連続面て続いてるんだ。覚えときなよ」

「ＯＫＯＫ、覚えた覚えた」

「よし、じゃあ最初から言ってみて」

「……ホモ面？」

「全然違うよ小野川君。バカを発揮するのも程々にしてよ。ちなみに答えはモホ面ね」

「あれ、結構近くね！？　案外かすってね！？」

「かすりもしてないよ」

いつまでその話をしてんだお前等。小野川なんて全然理解してないぞ、大丈夫なのかアレ。

「まあ小野川君の９９％はバカで構成されてるから仕方ないか」

「波賀助けてェェェ！　渉が酷いよォォォ！」

「至って正論じゃない？」

「波ァ賀ァァァ！」

小野川、うるせーよ。あ、後ろからサッカーボールが飛んで来てら。放物線描いて小野川の後頭部へと向かってら。誰かが蹴ったボールが偶然小野川へと向かっているのだろうか。なんてミラクル。

『悠樹、悠樹』

「……どした、翔炎？」

二人から離れながら遠くからサッカーを観戦していた翔炎へと駆け寄る。後方から小野川の悲鳴が聞こえたような気がするが、気にしない。

『マズイぞ、ガルドだ』

「え、またかよ。てか、何処に？」

『……正直、最悪だな』

翔炎が言い掛けた刹那、試合をしてないグループから耳をつんざくような悲鳴が響いた。
サッカーをしていたクラスメイトの動きも止まる。悲鳴が上がった先を見てみると、豹が二足歩行したような黒い異形がこちらへと歩いて来ていた。オプション付きで、右手にはレイピアのような物が握られている。

『……あそこだ』

「マジかよ」

校庭のあちこちから上がる悲鳴。非現実的な生き物を目の前に、クラスメイト達は一斉にあちこちへと逃げていった。

「渉、あれは一体何!?　お前の友達!?」

「……僕にあんな個性的な友達はいないよ!?　むしろ僕が聞きたいよ!?」

渉と小野川もクラスメイトに紛れて異形から離れて行く。だが、異形はそれを追おうとはしない。標的は、俺達なんだから。面倒臭い事に。

『ガルド・パンサーってところか。行くぞ悠樹』

「筋肉痛、まだ響いてるんだけどなぁ」

流石にクラスメイト達は逃げていったのか、既に校庭には俺とガルド以外には誰もいない。これならば、思い切り戦えるな。

『Ｓｙｓｔｅｍ　ｌｏａｄｉｎｇ……ｓｔａｎｄｂｙ』

「変身」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

赤い球体に包まれる。黒いスーツを身に纏い、右手から炎が吹き出る。その右手を強く地面へ叩き付ける事で炎は身体全体へと回り、やがて赤い鎧へと変わった。

烈火へと変身を完了した俺。すぐさまガルドへと殴り掛かるが、ガルドは身軽そうに俺の攻撃をかわし、レイピアを突き出してくる。

「ッ！？」

やはりかわせる筈も無かったが、本能的に一歩下がったおかげか、レイピアは俺の胸に軽く刺さっただけで済んだ。装甲がダメージを軽減してくれたものの、やっぱ痛いものは痛い。やっぱ武器持ってる敵と戦うのは難しいな、クソッ。

『悠樹！』

「解ってる……こういう時は、コレだ」

左腰のホルダーから、一枚のＩＣチップ状のアイテムを取り出す。武器を生み出す類のチップ・ウェポンチップ。ソレを右腕の装甲に装填した。

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｔｗｉｎ　Ｂｌａｄｅｓ』

何処からともなく響く発声音と共に、両手から棒状の炎が発生。それを掴むと、二つの小ぶりの剣が生成される。
学校登校中に使用した武器・ヒートセイバーとは違い、こちらはヒートセイバーより刀身が小さめの双剣・ツインブレイズ。片方だけだと期待する程の威力は望めないが、二つあるとすると、話は別。
手数で相手と戦う。
……このブレイズて、剣の複数形（Ｂｌａｄｅｓ）と炎（Ｂｌａｚｅ）の二つの意味を持っているらしい。今はどーでも良いけどさ。

双剣を構えつつ走り出す。ガルドもレイピアを振るってくるが、片方の剣で攻撃の軌道を逸らし、もう片方の剣でガルドの腹を思いきり斬り裂いた。しかしながら、ガルドは怯んだ様子も無く、傷痕も見えない。
……ちょっと待て。片方の剣だけだからっつっても、傷一つ付かないのはどういう事よ。

そんな呆然としている俺に。

「ガァァッ！」

「うがッ！？」

ガルドはレイピアで一突き。ツインブレイズで上手く防いだ筈だけど、どういう訳か“炎が散る”かのようにツインブレイズは砕け、レイピアの切っ先は俺の胸に再び襲い掛かったのだった。
たかが一突きで俺の体は後方へと吹っ飛ぶ。受け身も取れず、一瞬呼吸が出来なくなった。うわ、苦しい。というか双剣脆いな。
一瞬だけだったが、ガルドのレイピアを“電気”が纏っていたように見えた。

「何だ、コイツ？」

『マズイな……アイツは雷属性だ』

「属性、て？」

『お前に初めて会った時、俺は火の力を使うと言ったよな？』

言ったっつーか、その火の力をモロ使ってるんだけどな。

『属性は全部で火、風、氷、雷の四種類存在する。この四つの属性には強弱の関係があるのだが、火は雷に弱い。こっちは圧倒的に不利だな』

「ちょ、マジか！？　じゃあどーすんだよ！？」

『一つだけ、方法がある』

「……言ってみろ」

ジリジリとガルドが近寄ってくる。その度に、俺も一歩ずつ下がっていく。翔炎の言う方法を期待しつつ、それを実行すべく再び両手にツインブレイズを生成するのだが。

『……逃げろ！』

「やっぱそーなんの！？」

予想通りというか予想外というかなんというか。

俺は一目散に、自慢の地味な足の速さを披露しつつ逃げ出したので

あった。オイ、頼むから恥ずかしいとか言わないでくれホント。
で、例の如くガルドは俺を追い掛けてくる。そして速い。冗談じゃねーよ追ってくるなよ！

一方。

「……なあ渉」

「なんだい、小野川君？」

「……なんなんだろな、アレは」

「……さあ？」

高校校舎内にて。
階段の踊り場の窓から見渡せる校庭には、先程の異形と新たに現れた赤い異形が戦いを繰り広げているという光景が見渡せた。
それをちゃっかり傍観してる二人の少年の姿が。

「解ったぞ、渉！」

「何が？」

「アレはきっと、特撮の撮影中なんだ！　そうだそうに違いない！」

「撮影するだなんて話、一度も聞いてないけど」

「……ですよねー」

小野川と渉の他にも、多くの生徒達が騒ぎながら様子を傍観している。やれなんちゃら戦隊の撮影だとか、やれモノホンだとか、色んな会話が飛び交っている。

そんな彼等の背後から中年教師・福原が、かったるそうに姿を現した。

「オラー生徒諸君。危ないからさっさと避難しろー。今警察呼んでっから、全員体育館へ避難なー」

「先生、もし体育館に襲って来たらどうするんですか？」

「そん時はそん時だ」

「フリーダムすぎる！」

福原の発言に渋々と生徒達は移動していく。小野川と渉も、その流れに乗って行くが。

「……なあ渉」

「なんだい、小野川君？」

「悠樹、何処行ったんだろ」

「……あ」

一方。

「うぅわっ！？」

ガルドのレイピアから、電流が放たれる。それをかわすべく飛び退いたんだけど、その飛び退いた方向に自転車置き場があって、もろ自転車の中に突っ込んでしまった。痛い。地味に痛い。

「ちょ、これマジでマズイだろ！？」

『……なあ悠樹、お前ってまだ未成年だよな？』

「いきなり何だ！？」

『いや、な。この状況を打破出来るような物があるんだがな』

立ち上がりながら、再びレイピアを付き出して来たガルドの攻撃をかわす。すれ違い様にツインブレイズで斬り裂いたが、やはり効いている様子は無い。畜生、属性の相性とかこれほど関係する物なのか。

にしても、翔炎の案は凄く魅力的だけどさ……それに未成年と、何が関係あるってんだ。

『四の五の言っている暇は無い、な。悠樹、“ライドチップ”を出

せ！』

「ライドチップゥ？」

なんだソレ、てか翔炎からライドチップの説明あったっけ。とか考えている間に、俺の意志とはまた無関係に腕が動く。

ホルダーから取り出したのは、何かバイクみたいな物が描かれている一枚のチップ。

……え、バイク？

で、そのチップをバックルの上部に装填して。

『Ｒｉｄｅ　ｗｅａｐｏｎ……Ｋａｙｏｋｕ』

バックルに刻まれた“火”の文字が投影されて、段々巨大化しつつ回転し始めて。いつのまにか炎がボーボー燃えてて。

やがて勢いを失った炎が消えると、そこには赤を基調とした一台のバイクが置いてあった。

……そう、バイク。いきなりの登場に、やはり驚くしかなくて。

「……え！？　ちょ、コレ、えぇ！？」

『説明しよう。コレは対異形戦闘用バイク・火翼（かよく）だ。“仮面ライダー”だからな、勿論バイクもある』

「いやいやいや、俺無免許だけど！？」

『ちなみにオンロードバイクだ』

「聞いてねーよ！」

何言ってんだ俺に乗れってか、自転車くらいしか乗れない俺に無免許でバイク乗れってか！？　てかついにしびれ切らしてガルドこっちに来たし！　どーすんのちょっと乗れないよホント！？

と、少々、というかかなり混乱した状態で、ガルドの接近にもロクな対応をする事が出来なかったのだが。

唐突にバイク……火翼と呼ばれたソレが一人でに動き出し、こちらへと間合いを詰めて来るガルドの横っ腹へ突撃したのだった。

「ギッ！？」

やはり反応できる筈も無く、ガルドは遠くへと吹っ飛んでいく。やがてバイクは、俺の傍で動きを止めた。

「……俺いなくても問題無くね？」

『火翼は、お前が乗る事で真価を発揮する。さあ乗れ、平和の為にゃ無免許もへったくれも無い』

「いや普通にあるだろ」

『と・も・か・く・だ。このまま渋ると、お前死ぬぞ』

「……半分脅しじゃないソレ？　確かに間違っちゃいないけどさ」

……正直に言おう。怖い。いや別に翔炎が怖い訳じゃ無くて、バイクに乗るのが怖い。乗って転ぶのがきっとオチじゃないだろうか。いやきっとそうに違いない。

しかしながら、再び俺の体は勝手に動き出すのであった。畜生、何故。

バイクに跨がった瞬間、バイクのタイヤから炎が吹き出し始める。炎はタイヤを包み、接している地面を焦がしていく。

思わずハンドルを握る。勿論クラッチとかスロットルとか知らないから割合させてもらうけど、勝手に腕が動いて色々と操作していく。

“勝手に”に注目。俺に拒否権は無いのか。

そして。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

いきなりバイクが発進した。いきなりというか、発進する為の動作はしていたのだろうけど、俺はそんな事は知らないから思わずビビってしまった訳だ。つーか速いよ速すぎるよ！

「ギガッ！？」

……速すぎて解らなかったが、いつのまにか俯せに倒れていたガルドを踏んでいたようだ、あの炎のタイヤで。何故か沸いて出るこの罪悪感は何なんだ。

バイクは急ブレーキによって、甲高い金属音を立てながらいきなり止まる。思わず上体が急ブレーキの勢いで、ハンドルの中央にある速度計諸々にぶつかった。うっわ地味に痛い。

ふとガルドを見ると、ピクピクと体を震わせながらも立ち上がっていたが、膝がもう大爆笑している。属性の相性とか思わず忘れてしまう程、ある意味一方的な攻撃だった。

『悠樹、そろそろ止めだ』

「……アレ見ると、妙に気が進まないんだけど」

しかしながら、そんな事を言っている暇は無い。

バイクの……何だっけ、スロットルだっけ？　ともかくそこにある溝へ、必殺技の為のチップを装填した。

『Ｆｉｎａｌ　ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｃｃａ』

バイクから電子音声が響き渡る。同時に、今度はバイクの車体全体が燃え上がる。

「うっわ！？」

やはりこの姿のおかげか、不思議と熱さは感じられない。不思議というか、ソレを通り越して不気味に思えてしまうのは俺だけか。

再びバイクは走り出す。そして段々と宙を翔ていく。いや、比喩じゃなくて。バイクから炎の翼が作り出されてて、それで飛んでるっぽいみたい。バイクが飛ぶとか、ファンタジック。これからやる事はバイオレンスな事だけど。

「お、おぉぉぉぉ！？」

……一応冷静に解説しているつもりでも、やはり現実は超テンパっている訳で。はっきり言うと、もう心臓が破裂しそうな勢いというかなんというか。

そのままバイクは、ガルドへと直進して行き。

「……！？」

ガルドの体を、貫く。ガルドは悲鳴すら上げず、貫かれた部分はバイクの炎によって焦げてボロボロと崩れ去り、残った部位も焼かれて塵となっていった。

属性の優劣さえも引っくり返す、このバイク。正直な話、頼もしいとかそんな気持ちより、恐ろしいとしか思えなかった。

焼けたガルドの肉片の臭いが辺りを漂う中。
火翼という名の赤いバイクは炎に包まれて、最初からその場に無かったかのように消え去っていった。

第七話：転校生

「お前……何者なんだ？」

「いや……あの……。」

学校での戦いの後、気絶した俺。気付いたら……

「まさか……あの怪物の仲間！？」

「いや、そりゃねーから。」

小野川の家にいた。

近くには渉もいる。二人揃って質問攻め。

……いや、分かるよ？そりゃ、俺が意味不明な姿になってて戦ってたんだから。

……しかし、黙ってても静まる様子が無い為、話す事にした。

あの姿の説明。精霊の存在。平行世界の存在等。

「……そんな事、信じられる訳無いだろ！」

小野川の反応。……普通は誰でもそう言うだろう。しかし、

「僕は信じるよ。」

『へ？』

例外が一人。俺と小野川の声が重なった。何せ、あんな突拍子も無い説明をあっさり信じると言われると……。

「信じないって事にすると、あの姿の説明が出来ないからね。」

……うん。まあ、正論だな。

「～～～！分かったよ！信じりゃいいんだろ、信じりゃ！」

「……別に、そこまでムキにならなくても……。」

「いや、だって、皆の平和を守るヒーローって、俺がピッタリだろ！？そう思わね！？」

いや、そっちかよ。

「君がヒーローになる位だったら、世界も崩壊した方がマシじゃない？」

「お前最近酷いよ！？理科で嘘教えたり、そして、今の発言！俺なんか悪い事した！？」

「いや、なんか面白いから。」

「渉ぅぅぅっっっ！！！」

……あ、小野川半泣きしてる。ぶっちゃけ、俺も見てて楽しい。

「まあ、それはともかく、お前らにお願いがある。この事は誰にも言わないでくれ。」

「僕は別にいいけど……。」

「え～？何で正体ばらさない訳？実は僕があの赤い戦士です！って言ったら、なんか面白そうじゃん。」

「お前のアホな脳みそと一緒にするな。」

「波賀ぁぁぁっっっ！！！」

『……。』

ちなみに翔炎はずっと同じ部屋にいたが、二人には見えず、一人には忘れられて、完全に空気と化していた。

次の日

「波賀！転校生だ！」

「……は？」

いつも通りに学校に登校すると、小野川がなんか騒いでる。

「だから、転校生だって！この時期に珍しいけど、どんな奴だか気にならね？」

「はぁ……。」

転校生ってのも確かに珍しい。しかし、コイツの考えてる事は……、

「いや～どんな娘だろ？可愛いといいな～～。」

……やっぱり。てか、コイツの頭では女子が来るって確定してるし。

「いや、まだ女の子って決まった訳じゃないよ。多分男の子って事もあるんじゃないの？」

渉がすかさず突っ込む。

「何で渉はそういう事言うかな～～。」

「君が変な事ばっか考えてるだけだって。」

「何が変な事だ！？何が！？」

小野川が必死に弁解。

……今更だが、この学校は共学である。

「オラー、席着けー。遅刻扱いにすんぞ。」

その一言と共に立っていたクラスメイトは全員席に着く。

「あー、知ってる人も多いと思うが、今日は転校生が来る。」

先生のその言葉を聞き、教室が騒がしくなる。

『いや～どんな奴が来るんだろうな。』

「……いや、何でまたお前来てる訳？」

『いや、暇だから。』

「前回もそんな理由だったろが。てか、始めて俺と会った時話した条件、忘れた？」

『悪いな。俺は過去の事は忘れて未来だけ見て生きてく事にしたから。』

「じゃあお前の未来、ここで終わらせてやろうか？」

「じゃあ、入って来いー。」

その一言と共に、転校生が入って来た。その姿を見た時、皆は静まった。

入って来たのは女子。しかし、クラスメイトの女子とは違い、どこか違う空気が漂っている。まあ、黙っていれば可愛い部類に入るだろう。

「霞河　舞（かすみがわ　まい）と言います。よろしくお願いし

ます。」

『よろしくお願いします！！』

……俺以外の男子全員の声がハモった気がする。

霞河は苦笑いすると共に、こっちを見た。いや、正確には翔炎のいる位置を。

「オイ……翔炎……？」

『いや……まさかな。』

翔炎も先程のおちゃらけた雰囲気と打って変わって、緊迫した感じになった。

「翔炎が、見えてる……？」

俺は、そう思えてならなかった。

第八話：烈風（前書き）

やっとの事でサブライダー登場です。

では、どうぞ。

第八話：烈風

この一日はあの転校生に警戒しなければならなかった。
たまたま翔炎の辺りを見てた、という仮説も立てたが、授業中でもこちらの方を見ているのだ。

と言っても、こっちを見る事以外不審な動きは見せなかったが。

と、いう訳で。

転校生、霞河舞を今日一日尾行する事にした。

バカ（小野川）がなんか言ってきたが、とりあえず顔面に蹴り（しかも土足）を食らわせ、尾行を始める事にした。

……なんか後ろから、てめっ、蹴りは無いだろ蹴りはぁぁぁっっっ！って声が聞こえるが、今はそんな事知ったこっちゃ無い。

「あいつがガルドの一味って可能性はあるのか？」

『人間に化けるガルドってのは聞いた事無いが、仲間って可能性は無い事も無い。』

現在、尾行中。大袈裟にやると、回りからストーカーと間違われる可能性がある為、程々の距離を保って監視している。

『それにしても、なんか面白いな。探偵っぽくて。』

「楽観的だな、お前。下手すりゃ、変態やストーカーに間違われるかも知れないんだぜ。」

『分かってる。……どうでも良いが、今日、宿題大量に出てるな。早く帰んないとヤバイ位。』

「お前、宿題と人の命、どっちが大切だ?」

『いや、そういう意味じゃ無くて……今回、彼女がガルドに関係無かったら、唯の時間潰しだぜ。』

「……渉に任せる。」

『何でも人任せだな。宿題は自分でする物だ。という訳で、今日は頑張れ。』

「お前にしちゃ正論だが、イマイチ説得力に欠けるな。」

『んだコラ……って、オイ、悠樹。』

「ん?」

『彼女が……いない。』

「え?」

ホントにいなかった。雑談してる内に見失ったのだろう。

『調度いい。今から宿題を……！悠樹、ガルドだ！』

「お、おう！（た、助かった……。）」

俺達は、そのガルドが出たという場所に向かった。

『……まさか……』

「？どうした？」

『精霊の気配もする。』

「精霊って……確か、お前の他に、３体いたんだよな。」

『そうだ……っ！いた！ガルド！』

「よし、行くぞ翔……炎？」

……俺達は、ビビるしかなかった。

『何で……アイツが……？』

そう、ガルドは見つけた。幸い、被害者はいないようだが、被害者になりかけている人はいた。

そいつは、俺らがさっきまで尾行してた、霞河舞だからだ。

しかし、霞河は、怯える事も無く、むしろ平然としてる。

「やっぱ……仲間だったのか？」

その予想は、呆気なく外れた。

蟹のようなガルド……ガルド・キャンサーは、霞河に向かって攻撃してきたからだ。

しかし、霞河はあっさりと避ける。

と、同時に、彼女の側から翠色の小型の龍が現れた。

「いくよ、風牙（ふうが）。」

『承知した。』

風牙、と名乗るらしい龍は光り始めると、俺が変身する時に見慣れたバックルになった。違う所は、翠色という事くらいか。

「アイツ……まさか……。」

俺の嘆きも露知らず、霞河はバックルを腰の辺りに当てると、バックルの両端から風、いや、小型の竜巻のような物が出て、ベルトと化す。

そして、左側のホルダーから変身する時に使用する、ソウルチップなるものをバックルにセット。

『Ｓｙｓｔｅｍ　Ｌｏａｄｉｎｇ……Ｓｔａｎｄｂｙ』

聞き慣れた発声音が辺りに響く。

「変身。」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

発声音と共に翠色の球体が彼女を包み、黒いスーツを作り出す。

しかし、これでは終わらない。

彼女は、右手を左へ煽ぐように動かす。と、同時に、彼女の回り竜巻が発生し、身体を包む。

すると、黒いスーツの上に、翠色の鎧が形成された。

「あれは……？」

『……風の戦士、＜烈風＞。』

俺が、烈火以外の仮面ライダーを見た瞬間だった。

「……はっ！」

烈風は一気に間合いを詰め、素早い攻撃を加える。

「ギュガッッ……ギャァァ！！」

ガルドが反撃。しかし、華麗な動きでかわす。
そして、左側のホルダーから、何かのチップを取り出し、右腕の装甲にセット。

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｃｙｃｌｏｎｅ　Ｓｈｏｔ』

発声音と共に烈風の右手から風が起こる。風が止むと同時に、右手には、翠色の銃が握られていた。

「はぁっ！」

早く、そして正確に相手に撃ち込んでいく。

この烈風という戦士、烈火と完全に能力が逆だ。

近接型で、一発の威力が高い烈火に対し、遠距離型で、手数で勝負する烈風。

…何か、意味でもあるのだろうか？

「……終わりよ。」

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｐｐｕ』

発声音と共に、巨大な竜巻が、今度はガルドを包み、拘束する。
その間、エネルギーがチャージでもされているのだろうか、銃が輝

きを増している。

「はぁっ！！」

銃から放たれる砲撃。それがガルドに直撃し、ガルドは爆散した……。

「……戦い慣れてる……。」

『風牙の野郎……アイツも適合者を見つけてたとは……。』

烈風はこちらを見ていた。それからが、予想外の行動だった。

こちらに向けて発砲してきたのだ。

と言っても、威嚇するように、足元へ撃っただけだが。

それでも、アイツの行動に理解出来なかった。

「なっ……何をする！？」

「ねぇ……あなた、烈火何でしょ？じゃあ……私と戦ってよ。」

……は？何を言ってるんだ？コイツ、バトルマニア？

『風牙！どういう事だ！？説明しろ！』

『説明も何も、舞が言った事をすれば良い。私から話す事は、無い。』

翔炎も意味分かんなかっただろう。相当焦っている。

「ち……やるしかないのか……？」

『とりあえず追い詰めて、話を聞かせて貰おう。』

翔炎が嘆くと共に、バックルと化す。俺はいつもの動作で変身準備を完了する。

「変身！」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

「へぇ～、それが烈火かぁ。なんかどこと無く私に似てるね。」

「喋るんだか、戦うんだか、どちらかにしろ。」

「……何でそんな不機嫌なの？」

「お前のせいだろ！……コイツと話してると疲れるな。」

「分かったよ。……さて、始めよっか。」

その言葉と同時に、俺は後退した。案の定、俺のいた場所に銃弾が撃ち込まれていた。

「すごい瞬発力……。」

「なめるな！」

次々と撃ち込まれる銃弾。だが、俺はそれを的確にかわす。ここで、俺の足の速さが役に立った。

「すばしっこいな……なら！」

『Ｈｏｍｉｎｇ　Ｓｈｏｔ』

発声音と共に、銃弾が全てこっちに向かって来た。油断してた俺は、全弾命中される。

「ぐっ！？」

「よっし、当たった。」

銃弾が曲がるなんて……。

「セコい物持ってやがる。」

『Ｂｌａｚｅ　Ａｒｍ』

発声音と同時に、右手に最小限に絞られた炎が発生。

＜Ｈｅａｔ　Ａｒｍ＞とは違い、右手のみ炎が発生する。しかし、片手である分、威力が高い……らしい。

「はぁっ！」

「!?熱っ!!」

そして、このチップの最大の特徴は、火球を投げる、という所。殴るのではなく、投げる。

流石に投げるのは予想外だったか、大ダメージ。しかも、炎が弱点の為、よりダメージが大きい。

「ち、ちょっと!?仮にも私、女の子だよ!?手加減もしてくれないの!?」

「手加減したら、こっちの命が危ういわ!!それに、戦いに性別なんて関係無いだろうが!!」

「酷い!……こうなったら……。」

『Ｉｌｌｕｓｉｏｎ』

発声音が告げると、……びびった。

アイツの左右から風が起こり、気が付くと、……烈風が三人もいたからだ。

「嘘ぉっ!?」

「さらに……。」

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｃｙｃｌｏｎｅ　Ｄａｇｇｅｒ』

発声音と同時に、三人が持っていた武器が銃から短剣になっていた。

「「「はぁぁぁっっっ！！！」」」

三人が一気に間合いを詰める……が、一歩、俺の方が早かった。

『Ｈｅａｔ　Ａｒｍ』

投げる炎から殴る炎へと変更。そして、最初にかかって来た二人を殴り付ける。その二人は分身だったのか、ダメージを受けると、風となって消えた。

「……っ！！やばっ！！」

アイツがそんな事を言った気がするが、逃がしはしない。
俺はアイツとの距離を一気に縮めた。

「げっ……。」

「……チェックメイト、だ。」

「だ～か～ら～、私は最近烈風になったばかりで、使い方を完全にマスターする為に、あなたと戦った訳。いわゆる、練習試合。」

「凄いわかりにくいんだよ！！ガルドの手先かと思ったわ！！てか、ガルドより怖いよ！！」

「ちょ、何ソレ！？私をあんな怪物と一緒にしないでよ！！」

「いーや、一緒だね!!あー、怖い怖い。」

「何ですって!?」

……とまあ、霞河との絶賛口論中。……明らかにあっちが悪いだろ。しかも、俺らまだ変身解いてないし。……この騒ぎで人が来たら、やばいな。

「あ〜あ、折角黙ってたお詫びに、あの大量の宿題一緒にやってあげようかと思ったのにな〜。」

「何ッ!?」

「残念だったな〜。」

霞河はムカつくような仕草で言った。

「じゃーねー。」

「ちょっ……待て!」

『Ｔｅｌｅｐｏｒｔ』

発声音と共に、烈風……霞河は消えた。

「……。」

『……悲惨。』

翔炎がそう言った気がするが、俺には＜宿題が終わらない＞という事しか、頭に無かった……。

第八話：烈風（後書き）

どうも、最近寒くてエアコンガンガンにつけて温まっているジャードです。

今回は作中では語る事が無いであろう、烈火達が使うチップの説明をします。

ソウルチップ
変身の際に使用するチップ。これが無いと変身不可。

ウェポンチップ
武器を現出させるためのチップ。

アタックチップ
自信の攻撃、補助に使用するチップ。

E・C・C（エレメント・チェンジ・チップ）
自信の属性の変化に使用。エネルギー消費が激しい為、一分間のみ使用可能。

ファイナルアタックチップ
必殺技を使うのに使用。

という感じですが、どうでしょうか？
分からない事がありましたら、感想に書いて頂ければお答え可能です。
また、感想、ご指摘も受け付けております。

どうぞよろしくお願いします。

第九話：都合の良さ（前書き）

……なんか勢いで書いてしまいました。
すいません。

第九話：都合の良さ

「眠い……」

『幸せな悩みだな』

「お前はホントに一言多いよな。てか、何でまた来てる訳？」

『いや、暇だから。』

「……いい加減鳥カゴにぶち込むぞ。」

『いや、嘘。今回ばかりは嘘。ほら、昨日の事。』

「……あぁ……。」

忘れもしない、しかし、思い出したくない、昨日の出来事。もちろん、霞河が関係してる。

「……きっちりお返ししてやるぜぇ……」

『いや、そっちかよ。』

そんなこんなでホームルーム。突然先生が、俺にとって衝撃的な一言をぬかしやがった。

「あ～今日から学校閉鎖だ。」

……は？なんじゃそりゃ？という視線を俺を含め、皆が投げかける。

「いや～皆さんもご存知だと思うけど、二日前に怪物が学校に来たじゃん。」

あぁ、あの日か。あの野郎のおかげで、ある二名に正体が知られてしまった。

「その怪物が来てからはこの学校警備を強くする等、厳戒体制だったんだけど、あの怪物が最近話題になってる連続殺人事件の犯人らしくてね。危ないって事で、急遽、一週間学校閉鎖。」

……いきなりすぎて、みんな声も出ない。……ん？そう言えば。

「先生……宿題は？」

「ん？いや、みんな終わってないでしょ？だから、この一週間の宿題って事で。」

俺は固まった。

周りからは、ヒャッホー、先生最高ー、遊び放題ー等声が聞こえたが、そんな事より、俺は叫びたい事があった。

「……やっちまったじゃねぇかぁぁっっっ！！！」

この叫び声が学校中に広まったのは、もちろんの事。

そんなこんなでホームルーム終了。あの後、先生に「煩いわ。」と言われて出席簿で殴られた。結構痛いんだよね。たんこぶできたな、こりゃ。

「いや～やっぱ面白いね、悠樹くん。ていうか、あの量の宿題を一日で終わらせるなんてね。」

そう言って後ろから声をかけて来たのは、霞河舞であった。

「……なんの用？」

「一緒に帰ろうではありませんか。」

「絶対ぇ嫌だ。」

「いや、ちょ、そこ即答？可愛い女の子が帰ろうって誘ってるのに。やっぱ普通じゃないよ、君。」

「自分の事を可愛いと言っている時点で、お前の頭もどうかと思うがな。」

「何よ、それ。」

『……霞河、風牙。』

「っ！翔炎……？」

話してる時に、突然翔炎が出て来た。てか、今までどこにいた、コイツ？

『昨日に至までの事を教えてくれ。もちろん、俺達の事も話す……情報交換だ。正直、ガルドはどうなっているか、知りたい。』

「……まあ、それも兼ねて帰ろうって言ったんだけどね……。私は問題無いよ。ね、風牙？」

『あぁ、問題無い。』

「オイ、俺を話から置いてくな。」

「じゃあ、駅前の喫茶店まで行こうか。」

「聞けコラ。……って、まだ無視？」

ちなみに、学校から出るまで無視され続けた……。

～喫茶店前～

「さて、駅前の喫茶店に到着しました～。」

「一々状況報告しなくていいだろ。つーか、誰に話し掛けてるんだ？」

「そこは突っ込んじゃいけないよ、悠樹くん？」

「突っ込んじゃいけない事は分かったが、何故名前で呼ぶ？」

……ぶっちゃけ懐かしいのだが、名前で呼ばれるの。昔死んだ親以来だ。

「ん～……気分？」

「何故疑問形なんだよ。」

……駄目だ。コイツと話していると、ツッコミしかしていない気がする。

「……ぁぁっっ！」

……そんな事を考えていると、なんか背後から聞こえた。

「……ぁがぁぁぁっっっ！！」

……なんかやばい気がする。

「波ぁ賀ぁぁぁっっっ！！！」

俺は反射的に回転蹴をしていた。

「あだぱぁっ！？」

……案の定、物体Ａの顔面に直撃。
……っていうか、物体Ａって言わなくても、分かるよな……。

「……何でいるんだよ、小野川……。」

蹴られた本人は、皆さんご存知、小野川海斗君であった。

「おぉ～クリーンヒットだ。」

霞河が面白そうに言う。

「……と、＋αで、渉も一緒か。」

「あ、僕ついで扱い？」

そして苦笑いと共に現れたのは、こちらもご存知、秋元渉君だ。

「……何しに来たの、お前ら？」

「決まっているではないか！舞さんに、悪い虫がくっつかないよう、護衛をしに来たのだ！」

「そう言いながら、本当はストーカー何だけどね。」

「渉くん！？何でっちあげちゃってんの！？」

「小野川……お前……。」

「波賀！？何お前誤解してんの！？いや、まだだ！舞さんがまだ…

…。」

「小野川君ヘンターイ。」

「ガハァァァッッッ！！？？」

……それから喫茶店に入ったのは、１０分後の事。

「へえ～、舞さんも戦士の一人だったんだ。」

「戦士っていうか、仮面ライダーの方が違和感無いんだけどね。」

「……変態って言われた……。」

「……いつまで泣いてんだ、お前？」

『相当ショックだったんだろう。』

あの後、霞河から話を聞いた。
青龍族、風牙と出会ったのは俺達と同じ様に突然。その後は成り行きでガルドを倒してたとか。そして、親の出張が決まり、引越して来たらしい。

俺達の事も話し終わると、いつの間にか雑談になっていた。

「その引越して来た舞さんが同じ仮面ライダーである波賀君に会うなんて、凄い偶然だね、翔炎君。」

『仮面ライダーは、ひかれ会う存在と聞くからな。偶然とは言えないだろう。』

『……オイ、いつまで泣いているんだ?貴様、それでも男か?』

「グスッ……分かりました、風牙さん!俺、頑張るよ!」

「いや、何をだよ。てか、それ以前に……。」

……全員の視線が俺に集中。……うん、俺は今、とてつもなく突っ込みたい事がある。

「……何で小野川と渉は、精霊である二体と会話成立してる訳?」

「……いや、普通に見えてるよ?」

「渉に同じく。」

「……お前ら、この前は見えて無いんじゃなかったっけ?」

『成る程な。』

唐突に、風牙が言った。

『我々精霊と接していく内に、精霊に対して耐性、つまり、会話等

が出来るようになったみたいだな。しかも、この二人は異質だ……。』

「……何が異質なの、風牙？」

霞河が、すかさず疑問を投げかける。

『うむ、おそらく……、』

この後の一言が、衝撃的だった。

『……適合者になりつつある。』

「「「「「……え？」」」」」

俺ら四人全員が見事にハモった。……いや、だってそう解釈すると、まだなっていないものの、ここにいる全員が仮面ライダーって事になっちまう。

「……翔炎は、全世界の中で四人しか存在しないとか言ってたぞ？」

『私もそう聞かされていた。しかし、我々精霊が見えるのは、適合者か別の仮面ライダーだ。つまり……。』

俺達は次の言葉に、再び驚かされる事になる。

『その世界で初めて適合者になった者に影響して、後天的にその二人が適合者になってしまった……結果、四人の適合者が揃った。私はそう考えている。』

……こんなにも早く四人揃うとは……。

俺は、こんなにも都合よく進む事に、頭を痛めていた……。

第九話：都合の良さ（後書き）

……ハイ、早く四人仮面ライダーを揃えたいというバカらしい考えで、こんな話になってしまいました。
本当にすみません。

こんな駄作ですが、今後もお付き合いして頂ければ幸いです。

第十話：烈氷（前書き）

あっというまに三人目登場。

……流れが早過ぎる気がします。すみません。

第十話：烈氷

あの話の後、微妙な空気で解散となった。といっても、まだ四人とも一緒だが。

「……俺も遂に、仮面ライダーに……！」

そんな空気をぶち壊すような言葉を発してるのは、お分かりの通り小野川。……下手すりゃ、死ぬかもしれないってのに、呑気なヤツだな。

「僕はあんまり戦いたくないな～。……死にたくもないし。」

そう発言をするのは、渉。……確かに長い間コイツといたが、渉が殴ったり蹴ったりする所を見た事が無い。本々、喧嘩自体嫌いだからだろうか。死にたく無いのも分かる。

『それにしても、残りの精霊は残り二体か……。』

『……爪雷（そうらい）と氷甲（ひょうこう）ね……。なんか変な奴らが残っちまったなぁ……。』

「？何が変なの、翔炎？」

すかさず霞河が疑問を尋ねる。

『いや、なんつうか、性格がなぁ……。』

『うむ。私と翔炎と比べると、あの二体はちょっと、な……。』

何が言いたいのかよく分からなかったが、残りの二体はどこか変わってる、と解釈しておく。

『……！舞、ガルドだ！』

「！場所は！？」

『結構近いぜ……行くぞ、悠樹！』

「分かってる！」

そう返答した後、俺ら二人と二体はガルドの所へ向かった。

「渉！俺らも追うぞ！」

「へ？……え、ちょ、嘘？小野川君！？」

「……いたいた。」

ガルドは調度二体。亀とエビ見たいな風貌をしている。区別するためにガルド・タートルとガルド・ロブスターと呼ぶ。

「よし、いくよ！」

霞河は変身の準備をしている。俺も翔炎をバックルへと変化させ、変身の準備を完了する。

「「変身！」」

『『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』』

俺達はその身を仮面ライダーへと変えた。

一方その頃……

秋元渉視点

……どこに行ったんだろう、小野川君。いつの間にか、はぐれてるよ。

……うん、迷子だ、僕。いい年して迷子って……絶対笑われるよ。どうしよ……。

……ん？

なんか、妙な物体が……。何だろ？

……よく近付いて見てみると、水色の亀のような生物だった。回り

に冷気のような物を纏っていて、近付くともっと寒くなりそうだ。
もしかして……これが翔炎君の言っていた、氷甲っていう精霊？
……とりあえず、声をかけてみる事にした。

「あの～……氷甲さん？」

その言葉に反応したのか、その精霊らしき生物はこっちを見た。

『……』

「……」

『……』

「……」

……え？何この沈黙は？氷甲さん、もしかして無口？

『……お前が私の適合者か……？』

「へ？……あ、ハイ、多分……。」

『……』

「……」

……良く分かった。翔炎君が言いたかった事。あの二体に比べて会話に入る事が少ないから、変わってるなんて言ってたんだ。

『……退け』

氷甲さんが呟いた瞬間、背後から物凄い殺気を感じた。

「！」

僕は前に転がった。すると、僕がさっきまで立っていた場所が爆発した。

……後ろには、学校を襲ったのと似ている、黒い異形の怪物がいた。

何となく鮫を連想させる。

『……私の力を使え……。』

「え？」

僕は聞き返したが、答える事は無かった。その代わり、氷甲さんが光り始め、水色のバックルに変化した。

僕は感に任せてそれを手に取ると、頭に大量の情報が流れてきた。

敵を倒す為の。みんなを守る為の。

僕はその情報を頼りに、そのバックルを腹の辺りに当てた。すると、バックルの両端から氷が出て繋がり、ベルトになる。

何か危険を感じたのだろうか。異形が襲いかかって来た。

僕はそれを何とか避け、左側にあるホルダーからチップ状の物を取り出し、バックルにセットした。

『Ｓｙｓｔｅｍ　Ｌｏａｄｉｎｇ……Ｓｔａｎｄｂｙ』

発声音が響く。戦いたくは無いけど、やるしかない……！

「変身！」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

すると、水色の球状の物が僕を包み、黒いスーツを作る。そして、右手を突き出すと、そこから氷が発生し、僕を覆っていく。その冷気にやられているのか、敵の体が少し凍っている。僕は覆っている氷を打ち破った。

体を見てみると、新たに水色の鎧が僕を守るように包んでいる。情報によると、この姿の名は、＜烈氷＞というらしい。

「ガァァッッッ！！」

遂に怪物が雄叫びをあげて襲いかかって来た。

「うわっ！？」

今はなんとかよけているけど、正直危ない。

僕は、この状況を打破できるようなチップを探し、腕の装甲にセットした。

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｉｃｅ　Ｈａｌｂｅｒｄ』

発声音が響くと、右手辺りに棒状の氷が発生。それをつかむと、槍のような武器になった。

「おりゃっ！」

「グガッ！？」

頭に直撃。けど、余り効いていない。運動神経無いからな僕……。頑張るしかないか……！

波賀悠樹視点

「はっ！」

『グガァッ！！』

俺がヒートセイバーで攻撃、霞河はホーミングショットで迎撃。もうそろそろ倒せる頃だ。

「これで……、」

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｃｃａ』

「終わりだ！」

乱舞・炎激斬を繰り出し、ガルド二体は爆散した。

「ふう……。」

「やー、お疲れー。」

霞河が呑気に言ってくる。確かに、コイツは撃っているだけだったが。

「おーい！！」

後方から声が聞こえる。振り向くと、小野川が走っていた。

「あれ、もう終わった？」

「とっくに。」

「遅かったねー。」

「クソォ……。」

……ん？待てよ？なんか忘れてる気が……。

「小野川……渉は？」

「え？いや、後ろに……アレ？」

……これはもしや……

「小野川君……はぐれちゃった？」

「……ハイ、多分。」

「オイオイ、どうすんだよ……。」

『悠樹、またガルドだ！』

「っ！？何っ！？」

『しかも、精霊の気配がする！』

「嘘！？じゃ、その精霊が危ないんじゃ……』

「……もしかして、渉か？」

小野川のその一言に、全員黙る。そして、同時にその場所へ駆け出していた。

秋元渉視点

「たぁっ！」

「ガハァッ！」

もう何回切っただろう。相手も大分弱っている。

僕は、とどめをさす為のチップを、槍のような武器にセットした。

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｈｈｙｏ』

発生と共に、冷気が最大限になる。すると、相手が動けない程氷ついた。

「はぁぁぁっっっ！！！」

僕は駆け出して、相手を切り裂いた。すると、敵は爆散した。

「はあ、はあ……」

僕は倒れた。今頃、命懸けの戦いに恐怖していた。

「渉！」

誰かの声がする。その方向には波賀君達がいた。

それを見て安心したのか、僕は意識を手放した……。

第十一話：赤き閃光（前書き）

……ハイ、やってしまいました……。

今回は、平成ライダーとのクロスです。

第十一話：赤き閃光

あの戦いの後、気絶した渉を自分の家で介抱する事にした。しかし、渉はなかなか目が覚めない。

「一日すれば目が覚めるんじゃない？でも、調度学校閉鎖で良かったよ～～。」

霞河の一言。確かに、閉鎖期間で良かった。平常授業だったら、どうごまかせばいいか、分からないからだ。

……しかし、氷甲って精霊の無口っぷりは驚いた。だって、最低限の事しか喋らないし。小野川はめっちゃカリカリして、今も氷甲となんやかんやしてるし。

「悠樹くん、ちょっとクールダウンしてくれれば？」

「え？いや、そんな事は……。」

「まあまあ、良いから良いから。それに、付きっきりだとそっちが倒れちゃうと思うよ？」

……ごもっともな意見だ。

「……分かった。ちょっと散歩してくる。」

「いってらっしゃい～。」

『悠樹、俺も行くぞ。』

「んあ、了解。」

「……残る精霊もあと一体、か……。」

『爪雷か……アイツはむしろ、いない方が……。』

「？何かやばい事でもあるのか？」

『いや、実は……』

何か言いかけた時、突然翔炎が光り始めた。

「え……翔炎！？」

『……ヤバ。』

何がやばいのか分からないが、光りがかなり強くなったと同時に、俺は意識を手放した。

「……うーん……」

……ここは？

『目が覚めたか？』

「……あ、翔炎。……って、ここは何処だ？」

そう、俺が今立っている所はさっきまでいた場所では無い。側には＜スマートブレイン・ハイスクール＞という、聞いた事も無い学校がある。

『……誠に申し訳ないのだが……異世界に来てしまった。』

……は？

『俺が今まで適合者を探す為に世界を回っていたのは知っているだろう？』

「……あぁ。」

『実は、お前の世界に来てからその力が働かなくなった。すっかり消え失せていたと思っていたが……。』

「……つまり、自分の意思で他の世界に移動は出来ない訳だな。」

『……そういう事だ。』

「……ふざけんじゃねぇぇっっっ！！！」

『ガハァッ！！？？』

……見事にアッパーカットが直撃。

「おめっ、それじゃ、いつ帰れるか分かんねぇじゃねーかっ！！！」

『いや、ホントにすまん。俺も予想外の事だ。』

クソッ……どうすりゃいいんだ……。

そんな俺の気持ちとは裏腹に、近くの学校でそう俺と歳の変わらない二人の男女が、平和に花の写真なんか取ってる。

「……移動するか。」

『……うむ。』

俺達の気持ちは、最低だった。

あれから2時間たった。日も傾いてきた。しかし、翔炎にはなんの変化も無い。現在、公園のベンチに座っている。翔炎はどっかほっつき歩いてる。

「どうすりゃいいんだよ……。」

そう嘆いた時、いつの間にか、サラリーマン風の男が前に立っていた。

「……何ですか？」

「貴様、ファイズか？」

……ファイズ？……何じゃ、そりゃ？何かの暗号？

「……なんですか、ソレ？」

「とぼけるな、貴様からはファイズと同じ気配がする。」

……コイツ、危険だ！そう思って後ろに飛びのいた時、ドゴッ、という音と共にベンチの形状が変わっていた。

「んな……？」

「ほう……流石ファイズ……かわすとは。」

……だからファイズって何だよ！って突っ込む前に、

……男が変貌した。

どこか、蟻を思わせるような、灰色の異形に。

「……ガルドじゃ、ない……！？」

「…ガルド？違うな……。我々は、オルフェノクだ！」

普通ガルドの基本色は黒。そして、喋らない。しかし、目の前にいる異形はその真逆だ。

オルフェノク、というらしいが、言いぶりからすると、まだ多く存在するのか、組織的に存在するのか？

「フンッ！」

「うわっ！！」

正直、危険な状況。なんでこんな時に翔炎がいないのだろうか。殺させる！と思ったが。

「ガハッ！？」

……バイクがオルフェノクを轢いた。オルフェノクは派手に吹っ飛ぶ。

……怪物がバイクに轢かれるって……。

そのバイクに乗っていた……多分青年……は、後ろにあるアタッシュケースからベルトのような物を出し、腰に取り付けた。

……ん？ベルト？

そしてその青年はポケットから携帯電話を取り出し、何か入力している。

『ＳＴＡＮＤＩＮＧ　ＢＹ』

俺達が使うツールとは別の男の発声音が響くと同時に、待機音が響き渡る。

青年はその携帯電話を高々と上げ、叫んだ。

「変身！」

言い放つと同時に、その携帯電話をベルトにセットし、左へ倒した。

『ＣＯＭＰＬＥＴＥ』

またもや発声音が告げると、青年は赤い閃光に包まれ、赤く輝いたと思ったら、その姿は変わっていた。

黒いスーツ、体中に張り巡らされている赤い閃光、銀色の鎧、黄色の複眼。

……明らかに俺達の仮面ライダーとは違う。ていうか此処、仮面ライダーのいる世界なのか！？

「貴様……ファイズだと！？」

オルフェノクがうろたえている。……あれが、ファイズ？

オルフェノクの質問には答えず、ファイズは携帯電話に付いていた、チップ状の物を取り、バイクのハンドル部分にセットした。

『ＲＥＡＤＹ』

発声音が告げると同時に、ハンドルを引き抜いた。いや、……ハンドルじゃなくて、剣になっていた。某宇宙映画の、ライ○セイバーみたいな。

「はっ！」

「ガッ……グァァッ！」

ファイズは切り付けまくる。オルフェノクはかなり苦しそうだ。劣勢状況から抜け出せそうに無い。

ファイズはオルフェノクを蹴り飛ばすと、携帯電話を開き、何かのボタンを押した。

『ＥＸＣＥＥＤ　ＣＨＡＲＧＥ』

発声音が告げると同時に赤い閃光を通じて、エネルギーのような物が剣に蓄積される。

「たぁっ！」

ファイズはその場で剣を振り上げると、赤い波のような物がオルフェノクに向かって進み、最終的にオルフェノクを拘束した。

そしてファイズは一気に間を縮めると、切り付けまくった。……こう見てみると、烈火の乱舞・炎激斬に似ているな。

そんな呑気な事を考えている内に、勝負がついたようだ。

オルフェノクに赤いΦのような字が刻まれると、青い炎を出しながら灰になっていった。

ファイズは役目を終えたと言わんばかりにバイクに跨がり、走り去って行った……。

第十一話：赤き閃光（後書き）

……ハイ、今回ファイズを登場させちゃいました。

……自分が好きだという理由で（オイ）。

といっても、オリジナル（乾巧）ではありません。読んでいれば分かると思いますが、ディケイドの方で登場したファイズ（尾上タクミ）です。

……なんか、尾上君を出したくなったので。

……この後どうしよう。

また勢いで書いてしまった（待てや）。

頑張ります、ハイ。

それでは、また次回で。

第十二話：異界のライダー

『ほう……この世界の仮面ライダーに会ったと。』

「……お前がほっつき歩いてる間になコノヤロー。」

さて、異世界に来てから一日経過。異世界ってのが……なんとも、実感しにくいのだがな。

結局何も出来ずにいたが、今では「異世界に来た」という普段ではありえない出来事に、漸く気持ちが高ぶってきた頃だ。

……いやだってさ、まず無いじゃん。こんな体験。

……そんな状態の俺に横槍を入れるかの如く、翔炎は言った。

『この世界のライダーの戦い方は参考にしたか？お前の戦い方は少し直線的過ぎるからな。』

「余計なお世話だボケ。しかし、オルフェノクね……。かなり特殊な生まれ方なんだな……。」

そう。昨日ファイズなる仮面ライダーが去った後、この世界の事について調べていたのだ。どういう訳かケータイは使えたからな。……料金とか大丈夫かな？

それはともかく。

……自称「人類の進化形」を名乗る灰色の異形“オルフェノク”。

一定の条件を満たした人間が死ぬ事で再び蘇り、生まれるという。

そのオルフェノクのリーダー格……ラッキークローバーと呼ばれる

四人の集団は、スマートブレインハイスクールなる学校に潜伏していたらしいが、その学校の守護者ともいえる戦士……仮面ライダーファイズや、未確認の二人の戦士がラッキークローバーを倒したらしい。

……未確認と戦士っつーのには多少気になったが、これ以上資料が無い為、調べる事が出来ない。それ以前に、今の俺には必要の無い情報だろう。

そう頭の中で判断した刹那。

「キャァァッッッ！！！」

唐突に、人の悲鳴が響く。誰か……まさか異形に襲われたのかと、嫌でも考えてしまう。

……まさか、ガルドか？あ、間違えた。オルフェノクか？

悲鳴が響いた方へ向かって見ると……当たってほしく無い意味で思った通り、オルフェノクがその場に立っていた。

そのオルフェノクの回りには、犠牲になった人の物か、多くの灰が散らばっている。

蟷螂のようなオルフェノクは、俺の存在に気付いたのか、不気味に顔を歪めた。

「ククク……馬鹿が。自分からのこのこと近付いて来やがった……。」

……正直、頭にくる物言いだったが、俺にはまず、問い掛けたい事があった。必死に頭が、その理由を理解したいと躍起になっている

からなのか。

「……何で、だよ……？」

「……あ？」

「……何で、人を襲う？お前だって、元々は人間だった筈だ。」

……そう、俺の聞きたい事。元人間だった存在が、無関係の人を殺す。まったく理解出来ない。もしかしたら、人間とオルフェノクの共存だって出来る筈だと思うのに。

「……決まっているだろ……。」

「……？」

「俺達オルフェノクは、人類が進化した者だ。古きクズ共を殺し、新しき力を持った人類を増やし、新たな国を作り出す……。いわば、オルフェノクは神の使徒だ！そして、貴様らクズ共も、運が良ければ神の使徒となる……。」

絶句、した。

そんな。そんなくだらない理由で、人は命を落とす。

……知能を持たない、ガルドより質が悪い。

「……許せねぇ……。」

翔炎も俺の言う事が分かっていたのか。黙ってその姿をバックルへと変えていた。

……頭が真っ赤に染まる。

『Ｓｙｓｔｅｍ　Ｌｏａｄｉｎｇ……Ｓｔａｎｄｂｙ』

……この化け物を徹底的に潰そうと、腕が勝手に動く。むしろ俺は、ソレに体を預けてしまう。

「……変身！」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

俺の体が、人から離れていく。炎に包まれ、赤い鎧を纏っていく。仮面ライダー……烈火へと。

「なっ……変身だと！？だが、ファイズじゃない！？」

オルフェノクが驚愕している。その間に素早く間合いを詰め、胸に拳を叩き込む。

「グハッ！？」

オルフェノクは怯むが、その隙に同じ場所へ蹴りを繰り出した。オルフェノクはうめき声を上げながら吹っ飛ぶ。その存在自体が、どうも不快に思えてきてしまう。

……消えろよ。目障りだ。

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｈｅａｔ　ｓａｂｅｒ』

左腰のホルダーから一枚のチップを取り出し、右手の装甲に装填。

発声音が告げると同時に、右手に棒状の炎が発生。ソレを掴むと炎が消え去り、赤い剣があらわになる。
火剣……ヒートセイバーを、漸く立ち上がったオルフェノクの胸に斬り付ける。

……一回？んな訳無いだろう。
もう、どこを斬り付けただなんて、どうでも良い。ただ苦しめられれば、それで良いんだ。

「グッ……ガァッ、グホッ！？」

「あァァッッ！！！」

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｃｃａ』

気付けば、俺は絶叫していた。
気付けば、剣は業火に包まれていた。
気付けば、オルフェノクは斬り付けられていた。

「ガァ……ァ……ちく……しょ……。」

うめき声を上げながら、俺の方へと手を伸ばしていたが……その手が俺に届く前に、オルフェノクの体は蒼い炎に包まれ……段々と灰に変わり、崩れ去っていった。

倒したのだと自覚する。疲れたのか、無意識の内にヒートセイバーを落としてしまう。
地面に落ちたソレは、赤い炎に変わり……オルフェノクの体を包んでいた蒼い炎と混ざり合うように、煌々と燃えていた。

『……珍しいな、怒りに任せて戦うとは。』

「……奴らに、沢山の人が殺されているんだろ？正直……怒らない方が、おかしいと思う。」

『そう、か。』

翔炎の言葉と同時に、急に疲れが押し寄せてくる。無意識の内に、頭を下ろしてしまう。嫌でも、二色の炎が視界に入る。

蒼い炎は消え去り……赤い炎は、未だ燃え続けていたが……その炎の方向から、一台のバイクがこちらへとやって来た。

……昨日、ファイズが乗っていたのと同じソレだ。

そのバイクに乗っていた男は、俺を見ると同時に唖然とした表情となった。

まるで、自身に問い掛けるように、男……否、同年代の少年は、呟いていた。

「……仮面、ライダー？」

「お前が……ファイズか？」

互いの問いは、答える事なく消えていく。

何をする訳でもなく、俺達は互いに突っ立っていた。

烈火の世界
１８：３２

「……異世界に行っちゃったぁ！？」

『……あぁ、可能性としては有り得る。』

「そんな……！」

『それより舞……声がでかいぞ』

「……あ。」

太陽も沈み、逆に月が見え始めた時間帯。私は思わず大声を上げてしまったけれど……正直、今でも動揺を隠せない。
何が起こったか、と聞かれると……どうやら、悠樹くんと翔炎が、この世界からいなくなっちゃったそうです。
世界を移動した……と言われても、何と無くしっくりこないんだけど。

『恐らく、長い間使用していなかった他世界への干渉能力が、土壇場で発動したみたいだな。……下手すると、戻って来るかも分からない。』

「……ッ！じ、じゃあ、私達が助けに行かないと……。」

『いや、悪いが私も、自分自身での移動は思うように出来ない。…仮に出来たとして、その間……この世界はどうする？』

「あ……。」

そうだった。

秋元くんは今寝ているし、小野川くんは……対抗する事が出来ない。いや、無理にでもしそうなんだけど、彼は。

分かった事は……私しか、ガルドに対抗する事が出来ない、という事だ。

「そんな……。」

『これぱかりは仕方ない……彼等を、信じるしかない。』

……大丈夫。悠樹くんだったら、何事も無かったように、すぐ戻ってくるに違いない。

分かってるよ……そう風牙に言おうとしたけれど。

『……舞！構えろ！！』

「へ！？」

風牙の言葉に、思わず驚いたけど……それ以上に、驚くような光景が視界に広がっていた。

「……囲まれてる！？」

そう、暗闇に紛れていたのか気付かなかったけど……私達の周囲を、

異形……ガルドが囲んでいた。
正直、種類なんて分からなかったけど……確実に分かる事は、数は１０を超えている事。

……今まで、こんなに多くガルドがやって来た事は無かった。
もしかしたらガルドは……何らかの方法で「この世界には仮面ライダーが一人しかいない」事を知って、確実に倒す為に大勢でやって来たのだろうが。

……まあ、これだけは言えます。
私、多数の敵に一人で戦うのは苦手なんです。

「……やるしかない、よね？」

『Ｓｙｓｔｅｍ　Ｌｏａｄｉｎｇ……Ｓｔａｎｄｂｙ』

正直な話、最悪の場合……狭い路地に追い詰められたこの状況だと、私は殺されてしまう。だから、まずはこの状況を打破する。
どうにかして……逃げる余裕がある場所へ移動しつつガルドから距離を取って、まとめてガルドを倒したい。

……上手くいくかは、正直微妙な所だけど。ああ神様、私に力を。

「変身！」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

バックルのカバーをスライドさせる。突如、風が私を包み込むかのように吹き荒れる。段々と、私の姿は変わっていく。
……風の仮面ライダー、烈風へと。

私の変身を見届けたのか、クワガタのようなガルドがいきなり殴り掛かって来る。反射的にその一撃をかわして、上手く顔面に蹴りを入れた。

……私って背は低いけど、変身すると少し伸びるんだよね。

相手が怯む中でも、二体目三体目が次々と攻撃を仕掛けて来る。烈風の力の源とも言える風で、不器用ながらも操って素早く動く事で何とかかわす。距離を取りつつ、左腰のホルダーから二枚のチップを取り出した。

内の一枚を、右腕の装甲に装填する。

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｃｙｃｌｏｎｅ　Ｄａｇｇｅｒ』

右手につむじ風が発生する。その風を握るような手つきで触れると、風の勢いは強くなり、一瞬にして翠色の短刀……サイクロンダガーへと変わる。

さらに二枚目のチップを、バックルの上部に装填した。

『Ｉｌｌｕｓｉｏｎ』

発声音と同時に、私の左右からつむじ風が発生し……その風は、私の……烈風の姿を模っていく。

風の力で、自分と同じ意思を持つ分身を二人作り出す……まさに、イリュージョン。多分。

サイクロンダガーを持った、二人の分身は……ガルドの群れへと突っ込み、その黒い体へ斬り付けて行く。

……正直無謀だとは思うけど、二人の分身の攻撃で道を開けてながら、広い場所へと抜けようと思っている。何体かは倒せたら良いなあ、とは思うんだけど。

「ハァァァッ！！」

「グガァッ！？」

斬り付けながら、ガルドの群れから抜ける。そのまま距離を取るべく走り出す。

いきなりの行動に怯んだのか、一瞬ガルド達の動きが止まる。私が逃げた事を理解したのか、一部のガルドは追おうとするけど……その隙を突いて、分身である二人の烈風が攻撃を仕掛ける。

……あえて私の得意な武器であるサイクロンショットにしなかったのは、流れ弾が来るのが恐かった訳で。

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｃｙｃｌｏｎｅ　Ｓｈｏｔ』

このタイミングでホルダーからチップを取り出し、右腕の装甲に装填。サイクロンダガーは再びつむじ風に変わり、その姿を翠色の銃……サイクロンショットへと変える。

此処からガルドを狙い撃つ。そう思って、サイクロンショットを構えた。

けど。

「……え？」

二人の分身の体が、炎に包まれる。炎は一気に体中へと回り……そ

の姿は、風となって消滅する。
ガルドの中心には……両手に炎を纏った、鷲のようなガルドが立っていた。

……風属性は、火属性に弱い。
……何時だったか、風牙に教えられた属性の優劣を思い出す。

もう少し距離を取らなきゃ、と考える前に。

『舞！気をつけろ！』

風牙の言葉が耳に届き、頭で理解する前に。

「キャァァッ！？」

私の体は、翼を広げ急接近して来たガルドの攻撃によって、後方へと吹き飛ばされていた。

……勿論、吹き飛ばされたと分かったのは、背中へ地面の衝撃が伝わった直後。もうちょっと距離を取っておけば良かったと内心後悔する。
同時に、右手からサイクロンショットから放れていた事に気付いた。攻撃されたと同時に、思わず手放してしまったのか。辺りを見回すと……取りに行くのには難しい位置に、ソレは落ちていた。

嘲笑うかのように、ゆっくりと近付くガルドの群れ。恐怖で、私の体は動かせない。

『……舞、動け！殺されたいのか！？……おい、舞！？』

……風牙の言葉も、その時は遠くから響いたかのように聞こえた。
それだけ私は、眼前に迫って来る「死」に恐怖していたのかもしれない。

……あぁ、まだやりたい事がいっぱいあったのに……。

そんな絶望的な思考が頭を駆け巡った……刹那。

「ギャッ！？」

私の後方から、何やら唐突に銃弾が飛んできた。その攻撃は、一番前にいたガルドへと直撃。同時にガルドの群れは、警戒するように構える。

……一体、誰？
そう思いつつ、後ろを見ると……人が立っていた。
年齢は２０歳位だろうか。一般人にしては、目の前のガルドの群れを見ても……何故か、余裕そうな表情を浮かべている。
右手には、青い銃が握られている。この銃で攻撃したのだと思うけど……その大きさは、一般人はおろか警官ですら扱うのが危険そうな物だった。

青年は視線だけをこちらに向けて……へえと、驚いたような声を上げる。

「……この世界の怪人と、仮面ライダーか。面白いね……。ま、僕が興味を持つのは“お宝”しかないけど。」

…そう言って、男の人はガルドの群れを一瞥する。非現実的な光景をものともせず、青い銃を右手で器用にクルクルと回す姿を見ると

……何故か私は、どことなく安心していた。
……この人ならどうにかしてくれると、錯覚したからかもしれない。

「……しかし、士(つかさ)はまだ来ていないのか……早過ぎたかな？」

そう呟いた男の人は、どこからか一枚の……ピンク色の縁取りのカードを取り出した。……何やら、青い“バーコードのような何か”が写し出されている。
そして、持っていた青い銃の側面にある……挿入口か何かにカードを装填して、ポンプアクションの要領で銃身を前へスライドした。

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ……』

私がよく聞くのとはまた別の電子音声が響くと同時に、銃身の側面に赤くバーコードのようなマークが投影される。
その銃を、ゆっくりと上へ向け。

「……変身！」

『ＤＩ－ＥＮＤ』

掛け声と共にトリガーを引く。すると、銃から先程投影されたマークが射出されると共に、多数の青いプレートに変化する。
また、男の人の回りに何かの残像が三つが出現、男の人の体を通過したり回ったりしている。そして、その三つの残像が男の人に重なると、姿が一瞬にして黒いスーツに包まれる。
それだけでは終わらず、上方に出ていた青いプレートが男の人の仮面に突き刺さると、黒いスーツの一部が青く縁取られた。

文字通り、男の人は変身した。

……仮面ライダーへと。

『あの男……まさか、次元戦士!?』

風牙はどうやら、あの仮面ライダーの事を知っている様だけど……私がその事を聞く前に、青い仮面ライダーは私に尋ねていた。

「君、この世界に価値のお宝があるか……知っているかい？」

「……はい？」

分からない。

何を意図してそんな質問をしているのか分からなかったが、この瞬間だけは、目の前にガルドがいる事を忘れていた。

「お宝って……え？国宝、とか？」

「そんな物は何処の世界にだってあるさ。僕が求めている物は、その世界だけにしか存在しない……とてもレアなお宝さ。」

そんな事言われても……ねぇ。

お宝とか言われたって、私がそんな事知る筈も無い。それ以前に、どんな物がお宝かさえ知らないんだけど。

そんな隙だらけの私達を見て、先程のクワガタのようなガルドは、顎に電流をほとばしらせながら羽を広げ、こちらへと飛んで来た。

今の内に私を倒そうと考えたのかもしれない。

けど、私が構える前に……男の人は再びカードを取り出し、変身と

同じ要領で銃に装填した。

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＢＬＡＳＴ』

「彼女とは今僕が相手をしているんだ。邪魔しないでくれたまえ。」

電子音声と男の人のイラついたような声が聞こえた時には、銃から青いエネルギー弾が幾つも射出された。そのエネルギー弾は予測が出来ないような動き……ホーミング性能でガルドを翻弄しつつ、クワガタのガルドにダメージを与えていた。

薄い羽を貫かれバランスを崩し地面へと倒れたのもつかの間。ガルドの背中を残りのエネルギー弾が直撃し、耐えられなかったのか……ガルドは爆散した。

少ない動作で、ガルドを倒すその姿は……正直、敵に回したく無い。よっぽど戦い慣れているのかもしれない。

そんな男の人は、未だ立ち尽くす多くのガルドを見て、うんざりしたような声を上げる。

「まだいるのか……仕方ない、任せるよ。」

男の人は溜め息をつきながら、左腰のカードホルダーから二枚のカードを取り出す。そのカードは、変身の際に使ったカードと同じだったけど……絵柄は、違った。何か意味はあるのだろうか。

……それ以前に、誰にあの数のガルドを任せるのだろうか。

様々な疑問は、次の瞬間によって解消される事になる。

男の人はカードを二枚同時に銃の側面に装填して、銃身をスライドさせた。

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ……ＴＡＩＧＡ・ＫＡＩＸＡ』

電子音声と同時に赤く投影されたのは、二つのマーク。先程のバーコードとはまた違い“虎の顔のようなマーク”と“〇と×が重なっているマーク”だった。男の人はまたもやトリガーを引くと、今度はエネルギー弾が射出されるのではなく、変身する時にも出て来た残像が男の人の前で縦横無尽に動き回っている。
その残像が重なると……二人の戦士が立っていた。

一人は、虎をモチーフにしたような、動物の爪のような武器を両手に付けた銀色の戦士。ゆっくりと腰を下げ、獲物を襲うような姿勢で構える。
もう一人は、黒いスーツに黄色いラインが張り巡らされている恰好をした戦士。×字から出ているように見える黄色い剣を逆手に持ち、ゆらりと刀身を敵に向けている。

『……ッ、異界の仮面ライダーを……召喚した!?』

風牙の反応から……多分この二人も、仮面ライダーなんだと思う。
それも、別世界の。
ベルトとかも、全然違う。やはり世界が違うからか、作りとかそのものが異なっているみたい。

召喚された二人のライダーは、手持ちの武器を振りかざしがらガルドへと向かって行く。虎のライダーは月明かりで反射する銀色の爪で引き裂き、〇×ライダーは闇夜に黄色く発光する剣で一等両断。
いきなり人数が増えた事に、ガルドは反応出来ずに次々と爆散していく。

「……その様子だと“お宝”の事は知らないようだね。」

「え？……あ、そうですね。」

いきなり話戻さないで下さい、ただでさえ頭が混乱してきてるのにさ。

そんな事も露知らず、男の人……バーコードライダーは、あごに右手を添えつつ考え込んでいる。その間でも、召喚されたライダー二人は健気に戦っている。

……本当にこの人は、お宝の為にしか戦わない主義なのかもしれない。

「仕方ない……今日の所は引き上げるか。」

ぼそりと呟いた青いライダーは、またもやカードを取り出し、銃へと装填する。投影されたマークは、青いライダーが変身する時にも見たバーコードのようなマークだった。

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＣＲＯＳＳ　ＡＴＴＡＣＫ』

電子音声が告げると、今までガルドと戦っていた二人のライダーは、どういう訳か突如体が止まり……そして同時に動き始めた。

虎のライダーは、腰に取り付けていた斧を持ち、バックル……カードデッキにも見えるソレから一枚のカードを引き抜き、斧に装填。

○×ライダーは、ベルトに着いている何か……スライド型の携帯電話らしきそれを動かし、露出された一つのテンキーを押した。

『ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ』

『ＥＸＣＥＥＤ　ＣＨＡＲＧＥ』

斧からは少し高めの、携帯電話からは低めの電子音声が響き渡る。
それは私には、必殺技を発動するかのように見えた。

どこから現れたのか、虎のライダーの前方にこれまた白い虎が出現。
白い鉤爪で固定しつつ二体のガルドを引きずっていく。待ち構えていた虎のライダーは、引きずられてきたガルドに爪を突き刺し、上に掲げるとガルドは一瞬で凍りつき、絶命する。

黄色い戦士は持っていた剣にエネルギーが蓄積。更に輝きを増した剣を振りかざし、ガルドへと切り付けていく。次々と爆散していくガルドが立っていた場所には、黄色いＸの字が浮かんでいた。

好調に減っていくガルドの数。けど、二人のライダーに突如火球が襲い掛かり、思わず二人の動きが止まってしまう。
残ったのは、先程の火属性の力を持つ鷲のガルド。翼に炎を纏わせて、腰を低くして構えている。次に攻撃を仕掛ける為の体勢か。
……それにしても、炎に鳥って……悠樹くんを思い出すなぁ……。

「……新たな怪物、か。厄介な物を作り出したんだね、大ショッカーは。」

……え？
作った？ガルドを？

「……あなた、何か知ってるんですか！？」

「おっと、答える気は無いよ。大体、僕に何のメリットも無いじゃ

ないか。」

私の必死の問い掛けにも、手をヒラヒラ振ってスルーする。メリットって……欲望の塊だね、この人。見返りが欲しいみたいな言い方して……。

私が沸々と怒りを募らせる中、そんな事は知りませんと言わんばかりに無視した男の人は、ホルダーから今までとは違う黄色い縁取りのカードを取り出し、銃に装填する。

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＤＩ・Ｄ Ｉ・Ｄ Ｉ・Ｄ ＩＥＮＤ』

電子音声と同時に、今度は黄色くマークが投影される。男の人が銃をガルドに向けると同時に、緑色のカードのようなエネルギーで構成されたロックオンサイトが展開。……どういう原理かは知らないけど、二人ライダーは、そのカード型のロックオンサイトに吸い込まれていった。

これを見て危険と感じたのだろうか。鷲のガルドは翼から炎を飛ばしたけど。

「無駄だよ。」

男の人は冷めた物言いと共にトリガーを引く。同時に、ロックオンサイトを引き裂くかの如く巨大なレーザー砲がガルドへと突き進む。鷲のガルドが放った炎は無意味と化し、ガルドは成す術も無くレーザーに飲み込まれたかのように散っていった。

まさに一瞬の出来事。大勢のガルドは、一人の仮面ライダーによって一体も残さずに消えていった。

事が終わったからか、私に背を向けて何処かへと去ろうとしている。

「さて、と。次に士が廻る世界は……。」

「……あの！」

呆然としてる場合じゃない。思わず、相手を呼び止めていた。

……せめて彼が何者なのか、知りたい自分がいたからか。知らず知らず口が動いていた。

「……あなたは、一体……？」

教えても自分にはメリットが無い、とかまた言われるかと思ったけど……案外あっさり、だけど意味深な単語を残して。

「……通りすがりの仮面ライダーさ。…覚えておきたまえ。」

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＩＮＶＩＳＩＢＬＥ』

右手で作った指鉄砲を私へと向けながら、その姿は周囲の風景に溶け込んで……消えていったのだった。

第十二話：異界のライダー（後書き）

どうも今晩は、ジャードです。

……ファイズ編だというのに、悠樹の出番はいつもより少なめ。タクミなんて、ものの数秒しか出てません。

今回活躍するのは舞。そして、ディケィドから一足先に登場、ディエンドこと海東大樹。

……うまく書けてたかなぁ……？

…自分にも文才が欲しいです。

では、次回こそファイズ編は本題に入ります。……多分。

ホントに頑張ります、ハイ。

それでは、今日はこの辺で。

第十三話：真の敵

「お茶、どうぞ。」

「……あ、ども。」

現在、ある家にいる。先程、バイクに乗っていた青年だの家だ。青年の名は、尾上タクミ。俺と同じ高校生。スマートブレインハイスクールに通っているらしい。なんと、昨日遭遇したファイズ本人。

一見優しそうな風貌をしている。俺の友人で言うと、渉に近い。しかし、その目には皆を守るという正義感に満ちている。

「異世界の仮面ライダーか……。しかも、僕と同年代って、何の偶然だろう？」

「その言い方からすると、俺の他にも異世界の人に……？」

「うん。一度だけ。」

「へえ……。」

ちなみに、お互いの事は話した。俺が異世界の住人であり、別世界から来た精霊達の力を借りて、仮面ライダーとして戦っている事。タクミは、ある企業が開発したという＜ファイズギア＞を使い、ファイズとしてオルフェノクと戦っている事。

俺は、他の異世界から来た人は誰だろう、と考えながら湯飲みに手を伸ばした。

……伸ばしたんだが……。

「……熱ぅっ！？」

……熱いのだ。湯飲みが。ていうかコレ、湯飲みじゃ無いだろ。唯のクソ熱い容器だろ。湯飲みでさえこんなに熱いのだから、中身（茶）の方は相当な熱さだろう。

「タクミ……お前コレ、何かの嫌がらせ？」

「あ、ごめん。熱かった？」

そう言ってタクミは、熱そうな湯飲みを普通に持ち、更に熱そうな茶をズズズ、と、普通に飲んだ。

「……。」

……いや、唖然とするでしょ、普通見たら。

「……お前の舌と手って何で出来てるんだ？」

「……どういう事？」

「……もう良いです。」

このままだと会話が永遠に続きそうなので、一旦ここで区切った。

『……』

因みに、翔炎は部屋の隅っこで成り行きを見守っていた。

「……どこにいるんだろう、由里ちゃん。」

「…その由里ちゃんとやらは、お前の彼女？」

「ちょ……そんな訳……」

「あー、ハイハイ。分かった分かった。」

「……。」

現在、近くの公園を歩いている。何でも、由里っていうタクミの写真仲間と公園の風景を撮るのだそうだ。
正直、写真に興味が無い為、俺はどうしてればいいか、分からない。

「あ、由里ちゃん！」

「タクミ！」

一人の同年代の女子が反応した。多分、タクミが言っていた由里と

いう人なのだろう。
タクミは由里に駆け寄り、由里は早速カメラを構えていた。
「……邪魔しないべきだよな。」
『それが一番正しいと思う。』
俺達は、公園の回りをブラブラ歩く事にした。
あっという間に二時間経過。ぶっちゃけ、近くのゲームセンターで遊んでいた。そろそろ写真撮りも終わっているだろう。そう考えていた時……。
「キャァァッッッ!!!」
悲鳴が聞こえた。場所は……タクミ達がいた公園じゃねえか!
よく見ると、タクミは既にファイズに変身していたが、オルフェノクに苦戦している。
「行くぞ、翔炎!」
『分かってる!』
『Ｓｙｓｔｅｍ　Ｌｏａｄｉｎｇ……Ｓｔａｎｄｂｙ』

「変身！」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

「おりゃぁっ！」

ガッ！という鈍い音が響くと共に、オルフェノクは吹っ飛ぶ。しかし、効いている感じは無く、直ぐに立ち上がった。

「タクミ、大丈夫か？」

「僕は、平気……。だけど、アイツ、強い。もしかしたら、ラッキークローバーよりも……。」

……何だって？そりゃ無いだろ。そんな事がホントだったら、俺も今までで最強の敵と相手にしているような物だ。

……やるしかない。そう思い、俺は一枚のチップを腕の装甲にセットした。

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｈｅａｔ　Ｓａｂｅｒ』

「はっ！」

俺はヒートセイバーを構え、敵を切り裂こうと思ったが、あっさりかわされた。そして、パンチを一発くらった。

「がっ！？」

俺はかなりの勢いで遠くへ吹っ飛んで行く。…コイツ、想像以上の力の持ち主だ。コレ、勝てるのか……？

オルフェノクはゆっくり近づいている。俺はヤバイ！と思ったが、

『ＣＯＭＰＬＥＴＥ』

唐突にオルフェノクの後ろから発声音が響いた。その方向を見ていると、ファイズの体が変化していた。

胸の鎧が転回し、肩に固定される。それと同時に、ファイズの体中に張り巡らされている赤いラインが銀色に変わり、目の色も黄色から赤色に変わった。俗に言う、フォームチェンジというヤツか。

タクミは左手に付けているストップウォッチのような物のボタンを押した。

『ＳＴＡＲＴ　ＵＰ』

発声音が響くと、ファイズの姿が……消えた。

「え……？」

俺が嘆くと同時に、オルフェノクが吹っ飛んだ。すると、上に吹っ飛んだり、横に吹っ飛んだり。どうやら、高速移動をしているようだ。

『ＥＸＣＥＥＤ　ＣＨＡＲＧＥ』

またもや発声音が響くと、オルフェノクの体中に赤い円錐状の物が幾つも突き刺さり、回転して貫いていく。

『ＴＩＭＥ　ＯＵＴ』

発声音が響くと、再びファイズが目の前に映る。

……倒した！そう思っていたが、オルフェノクは立ち上がった。多少のダメージは受けているらしいが、正直生きているなんて、思わなかった。

「……何者なんだ、お前？」

「……」

……だまんまりかよ。一体コイツ、何者なんだ？

……とか考えている内に、俺達は吹っ飛ばされていた。

ヤツは一歩も動いていない。恐らく、ヤツのの力か何かだろう。

起き上がっていた時には、既にヤツの姿は消えていた。俺達は、ヤツとの圧倒的な力の差に呆然としていた……。

第十三話：真の敵（後書き）

今晩は、ジャードです。

……ハイ、オリジナルの最後の敵であったアークオルフェノクを登場させました。とりあえず、今回の最強の敵という事で。

そしてタクミ、アクセルフォームへ。僕なりの解釈で、ファイズアクセルは士達が来た時点で持っていたが、使わなかった、て事にしてるんですが……ファイズアクセル使ってたら、ラッキークローバー楽勝だろってツッコミが飛び交うと思います。名にも考えていなくて、本当にすみません。

こんな駄作ですが、今後もお付き合いして頂ければ幸いです。

今回の話は設定等に問題があった為、書き直しました。予告もなしに、申し訳ありませんでした。

第十四話：共闘

あの戦いの後、由里と別れ、タクミの家に帰宅。しかし、重苦しい空気はそのままだった。
原因は勿論、あのオルフェノクなんだけどな。

「……何なんだ、あのオルフェノク……？」

そう、あのオルフェノクの圧倒的強さ。俺なんか、手も足も出なかった。
今まで出会った異形……それこそガルドよりも強く、正直寒気だって走った。

「……こんな事を聞いた事がある。」

「……？」

突然口を開くタクミ。何を、だろうか。翔炎も黙って聞こうとする。

「少し前……あるオルフェノクを倒す前に、こう言っていたんだ。『オルフェノクの王が誕生した！貴様ら人間の世は終わりだ！』ってね。」

「じゃあ……タクミは、さっき戦ったヤツが、オルフェノクの王だと思うのか？」

「確信は持てないけど……。」

オルフェノクの、王。つまり、この世界での異形の親玉って訳だ。

……なんてこった……。勝てる訳無いだろ。俺、死ぬかも……。
そんな中、俺を安心させる為なのか、少し笑みを浮かべながらタクミが口を開いた。

「…悲観的になるのは、まだ早いかもしれない。」

「へ？」

「オルフェノクの王は、誕生した。つまり、生まれたばかりって事。」

「生まれたばかりで、あの強さって……。」

「だから、完全になる前に、早く倒さなきゃならない。その為にも、早く行動しやきゃ。」

……タクミは、正義感が本当に強い。俺なんかよりも、相当。
戦った時間は俺よりも長いのだろう。だからこそ、強大な相手にも恐れずに立ち向かおうとする。
……そんなタクミが、若干羨ましかった。

「そうだな……俺も、頑張らないと。」

そうだ。俺がこんなのでどうする。これじゃ、勝てるかもしれない戦いも、負けてしまう。こうなりゃ、とことんやってやる。元の世界に帰るまで。
……そう決心していると、唐突に翔炎が声を荒げた。

『……悠樹！！』

「……翔炎？」

『敵だ！三体、しかも、そのうち一体は……』

翔炎が言いかけた刹那、近くに爆発音が響いた。

……成る程、良く分かったよ。

「……ナイスタイミングでお出ましって事？」

『そうなるな。』

「……行こう！」

タクミの言葉にと同時に、俺達は外に出た。

外に出ると、目を反らしたくなるような光景が映っていた。

逃げ行く人達。辺りに散らばる多くの灰。そして、それを追うのは、三体の異形。前方を歩くのは、何やら強そうな二体のオルフェノク。それを挟むように歩くのは、さっき戦った、おそらく、オルフェノクの王。

「……クックッ、逃げずに出て来たか、異世界の住人と、裏切り者。」

一体のオルフェノクがそう喋った。だが、引っ掛かる単語が。

……裏切り者？誰の事だ？まさか、タクミ？

タクミを見ると、何か彼は複雑そうな表情をしている。

「貴様等ごときに王どころか、我々も倒せん！消えうせろ！」

「……。」

「タクミ……お前は王を相手してくれ。俺はあの残りを相手にする。」

「えっ……？」

「…すぐに倒して、加勢する。頼む。」

「……分かった。」

タクミは答えると同時に、ベルトを装着。俺も、翔炎をバックルに変化させ、ベルトにした。タクミはファイズギアに変身コード＜５５５＞を入力。俺は、ソウルチップをベルトにセット。

『ＳＴＡＮＤＩＮＧ　ＢＹ』

『Ｓｙｓｔｅｍ　Ｌｏａｄｉｎｇ……Ｓｔａｎｄｂｙ』

「「変身！！」」

『ＣＯＭＰＬＥＴＥ』

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

タクミは赤い閃光に包まれファイズに変身。俺はバックルに刻まれた＜炎＞の文字を見届けると同時に、赤い球体に包まれ……烈火へ

と変身していた。

タクミはオルフェノクの王へと走り出す。途中、守るように二体のオルフェノクが立ちはだかったが、悠樹が妨害、相手をしている。タクミは彼を信じて、オルフェノクの王……アークオルフェノクに立ち塞がった。

「お前が……全ての元凶か？」

「……。」

「お前は……僕が倒す！」

『ＲＥＡＤＹ』

アークオルフェノクは返事を返さないが、タクミは構わずデジカメ型の武器＜ファイズショット＞に＜ミッションメモリー＞をセット。

『ＥＸＣＥＥＤ　ＣＨＡＲＧＥ』

すかさずファイズフォンのエンターキーを押し、ファイズショットにエネルギーをチャージする。

「はぁぁぁっっっ！！！」

そのまま走り出し、ファイズショットを突き出した。

……筈だったが。

「うわっ！！」

どうでも良いと言わんばかりにかわされ、逆に腹にカウンターを入れられた。

「くっ……。」

思わず膝を着いてしまうが、タクミは諦めない。

急いで距離を取りつつファイズフォンを外し、＜１０６＞と入力した。

『ＢＵＲＳＴ　ＭＯＤＥ』

ファイズフォンを銃へと変化させ、光弾を撃ち込んだが……効いていないかのように、悠々と立っている。

「…負ける訳にはいかない……！」

タクミは呟きながら、再びアークオルフェノクへと走り出した。

……内心、自身の正体を彼に明かす事になるだろうと不安に思いながら。

悠樹視点

タクミが無事オルフェノクの王の本へと向かった姿を見送り、俺の敵を見据える。
相手は二体のオルフェノク。でかい態度を取っていたが、それほど強い相手ではない。

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｔｗｉｎ　Ｂｌａｄｅ』

「おりゃぁっ！！」

「グカァッ！？」

右腕の装甲にウェポンチップをセット。ツインブレードを召喚し一方の……蟷螂のようなオルフェノクに攻撃を加える。もう片方……キツツキのようなオルフェノクは、さっき吹っ飛ばして、もうフラフラだ。

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｃｃａ』

「うらぁぁぁっっっ！！！」

「がぁぁぁっっっ！！！」

ファイナルアタックチップをツインブレードに装填。必殺技、炎獄双魔斬を喰らった蟷螂オルフェノクは、もがきながら青い炎に包まれ、灰となって散った。

だが、まだ終わりじゃない。
慌てふためいているもう一方のキツツキオルフェノクへと標的を定める。

「なっ……コイツ、強い！」

「お前らが弱いだけだろ！古いクズとか言って多くの人達を殺しやがって……！」

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｃｃａ』

「ひっ……ひぃ！」

「消えろっ！！」

「あぁぁぁっっっ！！！」

再び必殺技を発動。動けない二体目を、そのまま撃破した。
だが、怒りは収まらない。息を荒げる俺を見て……翔炎が声を掛けた。

『悠樹……お前、少し落ち着け。』

「落ち着いてられるか。アイツらのせいで……！」

『怒りによる戦いは一番隙が生じる。冷静になれ、お前らしくない。』

「……あぁ、悪い。」

確かに、熱くなりすぎたな。冷静になれ、冷静になれ……。

「……うん、もう大丈夫だ。早くタクミの所へ行こう。」

『……あぁ。』

さて、気持ちを鎮めた所で、タクミの援護に向かおうと思ったが……

「うわぁぁぁッ！！」

ファイズ……タクミがいきなり吹っ飛んで来た。木に衝突したその衝撃はかなりの物だったのか、彼の変身が解除された。

「タクミ！」

「うっ……。」

辛うじて反応はするが、かなり苦しそうだ。そんな中、オルフェノクの王がゆっくり歩いて来る。

「くっ……。」

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｃｃａ』

相手に出来るとは思えないが、やるしかない。本日三回目の必殺技。今度は蹴り。飛翔炎烈打を繰り出した……が。

「何っ！？」

……燃え盛る足を掴まれていた。それも、片手で。

「……。」

オルフェノクの王は黙ってタクミの近くへと俺を放り投げる。これまた、さもあっさりと。

「ぐぁっ！」

「……悠樹、君……。」

やばい……全然敵わない。ていうか、必殺技も防がれるなんて……。

終わった、勝ち目は無い……そう思っていたが、タクミが突然立ち上がった。

ベルトも付けずに。

「タクミ……？」

辛そうな表情をするタクミが、物凄く不安だった。思わず俺が呟いたと同時に……タクミの姿は変わった。

ファイズでは無く、灰色の異形、

……オルフェノクに。

「……え？」

俺はただ、呆然としていた。タクミが、自分の嫌っていたオルフェノクに姿を変えたのだから。

どこか狼のような印象をした姿。ファイズの姿では出来ないような素早い動きで敵を翻弄し、確実にダメージを与えていく。オルフェノクの王も、これには対処しきれなかったようだ。

「はっ！」

タクミは、その脚力を用いオルフェノクの王を思い切り蹴飛ばした。クリーンヒットしたのか、オルフェノクの王は遠くの方へとんでいく。

その隙に、俺は思わず声を掛けていた。

「タクミ……。」

「……ごめん、今まで黙ってて。」

彼の影の上半身がタクミのソレに変わり……いつもと変わらない声で、そして辛そうな表情で話す。

「……お前が、オルフェノクだったなんて……。」

「…王を倒したら、今度は僕かな？君が、僕を倒すのかな？」

「……ん訳あるか。」

「……え？」

……予想外の返事だったのか、驚いたような声を出してタクミは固まる。

……だって、そうだろ。

「俺は確かにオルフェノクは嫌いだけど、あいつらは人を見下す。けど、お前は寧ろ、人を守っている。オルフェノクになっても、人としての心が失わない事に、安心した。」

俺が話している内に、タクミは元の人間としての姿に戻っていた。辛そうな表情は見えない。むしろ、ホッとしたような表情だ。

「……僕は、オルフェノクになっても、人として生きていきたいって思っていた。誰かの夢を守っていきたいと思っていたから。」

「……その夢を守る相手は、由里の事か？熱いねぇ。」

「……からかわないでよ。」

「ははは……。ま、何にせよ、」

苦笑いしながら、俺は近くに落ちていたファイズギアをタクミへと渡す。

「……あのオルフェノクの王を倒さなきゃ、それは実現しない訳だ。……ケリを付けようぜ。」

「……もちろん！」

そしてタクミは再びファイズギアを付け、変身コードを入力する。

『ＳＴＡＮＤＩＮＧ　ＢＹ』

「変身！」

『ＣＯＭＰＬＥＴＥ』

赤い閃光に包まれ、タクミはファイズへと変身。しかし今回は何故だか、ファイズの姿が少し違っていた。
全体が赤く染まり、赤かったラインも黒くなっている。また、右手にトランクボックスのような物も持っている。
……何故だかその姿が、頼もしく見えた。

「行くぞ！」

「うん！」

王はすぐそこまで歩いて来ていた。油断しているのかどうか、定かではないが。
タクミはトランクボックスに＜１４３＞とコードを入力した。

『ＢＬＡＤＥ　ＭＯＤＥ』

発声音と共にタクミはトランクボックスを展開。それと共に、黄色いエネルギーで構成された刀身が生成される。

「はぁっ！」

タクミはそのまま走り出し、ガンガン切り裂いていく。あの武器は強力なのか、結構効いているようだ。オルフェノクの王は怯んでいる。

しかし、敵も反撃はする。タクミはその攻撃に多少怯んでいた。

「……まずい！」

『Ｂｌａｚｅ　Ａｒｍ』

俺はアタックチップをセット。ブレイズアームの効力により、右手に凝縮された炎の塊が集まっていく。

「おりゃっ！」

「……！」

そのままタクミが攻撃した傷痕目掛けて攻撃。やっとの事で反応し、傷を押さえながらかなり苦しんでいる。その隙に、タクミは再びコードを入力。今度は、＜５２１４＞。

『ＦＡＩＺ　ＢＬＡＳＴＥＲ　ＤＩＳＣＨＡＲＧＥ』

発声音が響くと、タクミの背負っていた機械が展開、肩に背負う形になる。そこから、いくつものエネルギー弾が出て王を迎撃。ダメージは与えているが、このままでは時間を潰すだけだ。

どうすれば……そう思った時、ホルダーから一枚のチップが飛び出してきた。見た事も無い。頭に流れる情報も認識しない。

「翔炎、コレは……？」

『何処かで見た事があるような……悪い、俺にも分からん……。』

……どうしようか。ノリで使ってみるか。
何故だか分からないが勝手に右手が動き出し、ベルトに正体不明のチップをセットした。

『Ｏｖｅｒ　Ｄｒｉｖｅ　Ｓｙｓｔｅｍ……Ｒｅｃｃａ』

発声音が響くと同時に、激しい炎に包まれた。変身する時とはまた別の、赤い炎。タクミも、「うわっ？」と驚きつつ離れている。

そして、炎が消えると、俺の、烈火の姿が変わっていた。

頭に流れ込む情報によると、仮面がより鳥に近くなり、装甲も多少身軽に。また、背中から炎の翼が現出している。火の鳥の戦士、と言えば分かりやすいだろうか。

「うわぁ……。」

タクミが凄い物を見るような声を出している。俺は珍獣か！ってツッコミたいが、戦闘中なので抑える。
……獣じゃないけど、姿自体は珍しい事には否めない。

「一気に行くぞ！」

「うん！」

先程まで怯んでいたオルフェノクの王は怒り狂っているのか、拳を握りしめている。早めに決着を付けなきゃならない。
俺は背中に現出した炎の翼で空を飛ぶ。タクミは＜５２４６＞とコードを入力する。

『ＦＡＩＺ　ＢＬＡＳＴＥＲ　ＴＡＫＥ　ＯＦＦ』

電子音声が告げると、タクミも背中のユニットで飛んで来た。
空中にいる敵には成す術が無い。つまり、好機って訳だ。

「これで……」

「終わりだ！」

俺達は止めをさすべく、それぞれの必殺技の準備をした。
俺はファイナルアタックチップを足の装甲にセット。タクミは＜ＥＮＴＥＲ＞のボタンを押した。

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｃｃａ』

『ＥＸＣＥＥＤ　ＣＨＡＲＧＥ』

それぞれ違う音質の発声音が響く。と、同時に、俺こ右足は激しい炎に包まれ、タクミの右足は赤い光で輝く。
王を倒せる程の強大なエネルギーが、足に溜まっているのが実感出来る。

「「はぁぁぁっっっ！！！」」

俺達は同時に急降下。そして、同時に王に直撃。

「ーーーーー！！！」

王は声にならない悲鳴を上げ、爆発した。残っていたのは、赤いΦの文字と、灰だけだった……。

「……なんか、物凄く疲れた。」

「激しく同意するよ。」

現在、タクミん家の前で寝っ転がっている。流石に家に入る気力も無く、調度周囲に人が歩いている気配が無いので（当たり前だが）、こうして地面に寝っ転がっている訳だ。

……何にしろ、疲れた。

「どうする？家に入る？」

『いや、……もう必要無いようだ。』

「……？翔炎？」

その言葉がふと気になったので、翔炎の事を見ると

……赤く光っている。

俺がこの世界に来てしまった時と、全く同じ光。

つまり……俺はまた世界を渡るのか。それとも、自分の世界に帰れるのか。

「……なんてナイスタイミングだ……。」

「まるで、この世界でのやる事があったから来ちゃった、みたいな感じだね。」

『あぁ、そうかもしれないな。』

笑い合いながら、俺達は向かい合った。

滅多に無いであろう、異世界で出来た友人に向かって語りかける。

「まあ、短い間だったけど、お前と会えて良かったと思う。」

「僕もそう思うよ。……帰っても、元気でいてよ。」

「当たり前だ。……まあ、縁があったらまた会おうぜ。」

「……またいつか、ね。」

この会話が終わると同時に翔炎は光り、それに包まれると、俺はこの世界から消えていた。

何かに、導かれるように。

「……そうだ。お前は成長しろ。強大な驚異に立ち向かう為に。」

多少離れた場所で、青ずくめの男が立っていた事は、誰も知らない。
逃げるように男は背を向け……いつの間にか、消えていた。

第十四話：共闘（後書き）

今晩は、ジャードです。

……本っ当ぉぉぉに、すみませんでした！もう今回、やりたい放題です。

特に、前回のアクセルフォームに続き、ブラスターフォームが出た暴挙。……タクミ、使いこなせんの？しかも、ファイズフォンをファイズブラスターに付けていないで変身してるよ？

……ハイ、ツッコミ所満載です。しかしそこは、オリジナルと違う、と受け止めてくれれば幸いです（オイ待て）。

やっと帰宅する悠樹。そろそろ、四人目のライダーをだすかなぁ……。

では、今日はこの辺で失礼します。

第十五話：烈雷／烈火の帰還

「……暇だ。」

俺、小野川海斗の一言。……いや、だって今の所何も無いんだよ？涉はなかなか目覚めないし、舞さんは波賀がいなくなったとか言って探してるし……。しかも、近くにいるのは、生粋の無口野郎、氷甲。

……あぁ、俺も仮面ライダーだったらなぁ……。しかたない、気晴らしに外でもぶらぶらしてくるか？と、思った時。

「……うぅ……。」

！涉か？遂に目覚めたか！？氷甲も涉が寝ているベットに近付く。

「オイ、涉！やっと起きたか！？」

「あ……アレ？此処は……？」

「波賀ん家だ。それより、俺の事分かるか？」

「あぁ……キング・オブ・バカの小野川君だね？」

「うん、俺をバカにする元気がある位だったら大丈夫だな。」

あー、やっぱそのまま寝てりゃな……と、一瞬思った。

「舞さんと波賀君は？」

「まぁ……ちょっと訳ありでいない。あと、俺もちょっとブラブラしてくるわ。」

「車に轢かれないよう注意してね。」

「何？その小学生に対して言うような注意は？」

俺は、少し腹をたてながら外に出た。

「……あー。」

何となく声を出してみる。現在、近くの公園のベンチに着席中。

「……四体目の精霊って、どこにいるんだよ……？」

思わず嘆く。いや、だって俺と渉が適合者と分かったら、渉は直ぐに精霊に遭遇したぞ？

……そうだ！今日は精霊捜しでもするか？渉はどうせ起きたんだし、大丈夫だろ。

よし、精霊捜すぞー！と、意気込んだ時。

……前方に、黄色い虎のような生き物がいた。かなり目立つ風貌を

しているのに、回りは気にもしない。

……早速見つけたぁぁぁっっっ！！？？

いや、だって今捜そうって思ったトコだよ！？ものの数秒も経ってねぇよ！！

……と心の中で盛大なツッコミを放った後、その精霊（多分）に近付いた。

「…おーい、精霊さーん？」

すると、精霊（多分）がこっちを向いた。

『あぁ？…テメェ、俺が見えるって事は、適合者か？』

「え？あ……ハイ。多分……。」

思わずひいてしまう。……いや、だってコイツ、ホントに精霊？チンピラみたいな喋り方してんぞ。しかも、顔付き恐ぇぇっっっ！！しかし、俺は言わなきゃならん！

「えーと……そんな訳だから、俺に力貸してくれない？」

『嫌だね。』

「即答！？」

『戦いなんて、面倒くさくてやってられっか。』

何、その衝撃発言!?

『それに、他の三体はとっくに適合者見つけてんだろ?だったら、俺がいなくても平気だろ。』

「なんつー事言ってんだお前!?てか、お前がいれば助かる命も増えるんだよ!」

『知ったこっちゃ無ぇよ。とっとと帰りやがれ。』

「テメェ……ふざけんな!」

小野川海斗は襲い掛かった!

二秒で負けた。

『……お前、ホントに適合者か……?』

うっ、コイツ……。

『チッ……まあ、いい。俺は気ままにやらせてもらう。あばよ。』

「えっ……ちょ、待ちやがれぇぇっっっ!!!」

そう叫んだが、精霊……爪雷の姿は消えていた。

「あんの野郎……。」

追い付いてやる！俺は爪雷を全速力で追い掛けた……。

霞河舞視点

あー、何だったんだろう、あの人……。

『異世界から仮面ライダーが来るとは、予想外だったな。』

「本当だよねー。」

私達は、たわいもない話しをしながら、悠樹くん家に向かう。そろそろ、秋元くん起きてるかなぁ……？

そう考えていると、慌ただしい足音が聞こえた。そして、前方を見ると、黄色い虎が走っていった。

「！風牙、あれって……？」

『間違いない、爪雷だな……。』

風牙が顔をしかめて言った。すると、後から小野川くんも追い掛けるように走っている。待ちやがれぇっ！って言ってるから、多分追い掛けているんだろうな。

「……なんで鬼ごっこしてるんだろう……？」

『さあ……？』

「……追いかけちゃいますか？」

『……追い掛けるか。』

私達も、後を追う事にした。

小野川海斗視点

クソッ……中々追い付かない。てか、段々遠ざかってないか？俺もう限界に近いよ……。

「ヤッホー、小野川くん。」

突然声を掛けられた。振り向くと、舞さんが。彼女も走っている。

「舞さん！ちょっと聞いて下さいよ……。」

「うん。多分、力を貸す事を拒否されて、なんやかんやでこうなってる訳ね？」

「ハイ、途中なんか曖昧ですけど大体あってます。てか、舞さんエスパー？」

「私、昔はエスパー少女舞って呼ばれてたから。」

「マジすか！？」

「嘘。」

「……ですよね。」

すげーどうでもいい会話をした後、前方を見た。ヤツとの距離の差は、広がる訳でもなく、縮む訳でもない。

「風牙さん！なんかアイツを捕まえるような作戦ありますか！？」

『無いな。』

「即答ですか！ていうか、ホントにアイツ精霊なんですか！？」

『ぶっちゃけ、無い。ちなみに、あれでも精霊だ。』

「マジっすか！」

とても、精霊には見えねーよ。虎に転生したチンピラにしか見えねーよ。

とか何とか思っていると、突然爪雷が止まった。

「ふはははは！遂に諦めたか！」

『調子に乗るなクソガキ。前を見ろ前。』

すげー腹立つ言い方だな。そう思いつつも前を見ると……ガルドがいた。

「……マジ？」

「……！風牙、行くよ！」

『…承知した。』

『Ｓｙｓｔｅｍ　Ｌｏａｄｉｎｇ……Ｓｔａｎｄｂｙ』

「変身！」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

あ、舞さん変身した。……いいな～仮面ライダー。……てか、舞さん強くね？普通にガルドあしらってるよ？

「やあっ！」

「グギャァッ！？」

……こりゃ、もう終わったな。と思ったけど……。

「……げ。」

『……二体目か。』

なんと、ガルドがもう一体出て来たのだ。どうすれば……？

『……アイツは!?オイ、小僧、やっぱ力を貸してやる!』

「……え?何で突然?」

『今出て来た野郎は、この前俺様をコケにしやがった奴だ!アイツを倒さねぇと気が済まねぇ!』

……ようするに、仕返しね。

「よっしゃ、やってやるぜ!」

すると、爪雷の体が光り始め、黄色いバックルになった。俺も遂に、仮面ライダーに……!そう思いながら、バックルを腹の辺りに当てると、バックルの両側から電気が発生して腰に巻き付き、ベルトになる。左側にあるホルダーからチップを取り出し、ベルトにセット。

『Ｓｙｓｔｅｍ　Ｌｏａｄｉｎｇ……Ｓｔａｎｄｂｙ』

俺は、この言葉を言いたかった……！

「変っ身!」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

すると、黄色い球体が俺の体を包み、黒いスーツを作り出す。その後、俺は無意識に右手を上げた。すると、そこから電気が発生し、体中に流れると、黄色い鎧を生成した。

「……烈雷、参上っ！」

すると、舞さんを含めた全員が俺を見た。

「……小野川くんも、変身しちゃった……。」

『……こうもあっさりと四人のライダーが揃うとは……。』

舞さんと風牙さんはなんか嘆いた気がするが、そんな事はどうでも良い！

「行くぜぇぇぇっっっ！！！」

そう言って走りだした……が。

ガッ、ズザァッ！

……この効果音を聞けばお分かりだろう。

こけた。そりゃもう、盛大に。

霞河舞視点

「「「『……。』」」」

……驚く事しか出来ないよ。だって、小野川くんが突然変身して戦おうとしたら何も無いところでこけたんだから。

『お前……バカだろ。』

「またバカ言ったなコラァッ！俺だって一生懸命頑張ろうとしてるんだよ！」

『頑張るどころか、戦う前にこけて恥かいてるんだろうが！！やっぱバカだ、お前！！』

「んだコラァッ！？やってやろうかボケェッ！？」

『上等だカスがぁっ！！五秒で倒してやるわぁっ！！』

「やってみやがれぇっ！！こっちは一分で倒してやるわぁっ！！」

『お前だけハンデありすぎだろうがぁっ！！』

二人が口論していると、一体のガルドが近付いて来た。危ない！と言おうとしたけど、間に合わなかった。

「ガァァッッッ！！！」

「『うるさいわぁぁぁっっっ！！！』」

「ガハァァッッッ！！？？」

……別の意味で。というか、あの二人意気投合してない？

『男の喧嘩に水を差すたぁ、いい肝持ってんじゃねーか！！』

「まずは貴様から血祭りにあげてやるわぁっ！！覚悟は出来てるかぁっ！？」

しかも、答えも聞かず殴り掛かっている。怒りに満ちまくっていて、一発一発が相当重そうだ。そして、一枚のチップを取り出し、腕の装甲にセットした。

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｃｌａｗ』

発声音が響くと、小野川くんの両手に電気が発生、巨大な爪になる。扱い方によっては、盾にもなりそうだ。

しかし、守ることはせず、ひたすら切り裂く。

「グカァッ！？」

「へっ、とどめだ！」

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｔｕｒｙ』

再び発声音が響くと、巨大な爪に大量の電気が流れる。その電気にあてられてるのか、ガルドは上手く動けないようだ。

「おりゃぁぁぁっっっ！！！」

「ギャァァッツ！！！」

ガルドは、もがきながら爆散した。

「はっはーっ！！どんなもんだぁっ！！」

『調子に乗りやがって！！俺達は無敵じゃあっ！！』

……え、俺達？……完全に意気投合してるね、彼等。

『！舞！後ろだ！』

唐突に風牙が焦ったように言った。振り向くと、もう一体のガルドが。小野川くんの戦いに気を取られ、気付かなかった。やられる……そう思ったけど、

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｈｈｙｏ』

唐突に発声音が響き、いくつもの氷の玉が相手に直撃。ガルドは悲鳴も出さず爆散した。

氷の玉が飛んできた所を見ると、水色の戦士烈氷……秋元くんが立っていた。

「秋元くん！？もう大丈夫なの！？」

「あ、舞さん。大丈夫大丈夫。おかげさまでもう平気。所で、その横の黄色い人は誰？」

「ふっふっふ……よく聞いてくれたな。俺は……、」

「あ、何だ、小野川君か。」

「オイ、今かっこよく決まるシーンだったろ！しかも、何だってどういう意味だ！？」

「そういう意味。」

「いや、分かるかぁぁぁっっっ！！！」

「ちょ、うるさい。」

秋元くんにぼろくそ言われて縮こまる小野川くん。ここで、悠樹くんがいればなぁ……と思っていると、

……またもやガルドが現れた。しかも、今度は五体。

「嘘ぉっ！？また！？」

「今回は、よくガルドが出て来るね。」

「私の時なんか、二十体も出たよ。」

「え……？よく倒せましたね、そんな大群。」

「まあ……ちょっとね。」

少しはぐらかす。異界のライダーが倒したなんて、うまく言えないな……。と、思っていたら、

「あぁぁぁっっっ!!??」

……頭上から何か悲鳴が聞こえたと共に、一体のガルドに何かが直撃した。

「ウゴォッ!?」

ガルドも突然の事でうろたえている。私は、その落ちた物を見てみた。

赤い戦士、烈火……悠樹くんだった。

波賀悠樹視点

「痛っ……なんであんな上空から出て来ちゃう訳?」

『んな事しるか。ま、結果オーライって事で。』

「どこが結果オーライだ。咄嗟にに変身してなかったら、俺死んでたぞ。」

『いや、だか……ら……。』

「？翔炎？」

『悠樹……下……。』

何だ？と思い、下を見てみると

……ガルドが下敷きになっていた。しかも、回りには四体のガルド。

「……おぉぉっっっ！！？？」

一気に後ずさる。……何でこんなにガルドが？

「悠樹くん！」

「波賀君！」

「波賀！」

「お？あ、霞河、ちょっとぶり。渉、目、覚めたんだ。良かったな。そして黄色い人、誰だ？」

「ふっふっふ……俺は」

「あ、バカの小野川ね。」

「何でだよぉぉぉっっっ!!!何で妨害すんだよぉぉぉっっっ!!!」

「いや、楽しいから。」

「楽しくないよ!?こっちはちっとも!?」

「あのー、お二人さん?お喋りは良いですけど、先にアレをどうにかしないと。」

「「すんません。」」

霞河に言われ、前を向く俺達。

「……よっしゃ、一気にやりますか。」

そう言って、俺はファイズの世界で手に入れたパワーアップの為のチップを、ベルトにセット。

『Ｏｖｅｒ　Ｄｒｉｖｅ　Ｓｙｓｔｅｍ……Ｒｅｃｃａ』

そして俺は、烈火・飛翔形態へとフォームチェンジした。

『なっ……アレは!』

「風牙、何か知ってるの?」

『Ｏ・Ｄ(オーバー・ドライブ)チップ……使用者をフォームチェンジさせ、能力を上昇させる、特別なチップ……。一体どうやって……?』

……へー、そんなに凄いチップなんだな。なら、思いっきり使わなきゃな。

「おらぁぁっっ！！」

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｈｅａｔ　Ｓａｂｅｒ』

俺はヒートセイバーを出し、低空飛行をしながら相手を切り付ける。予想外の行動だったか、うろたえている。

「終わりにしてやるよ……！」

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｃｃａ』

発声音と同時に炎の翼が拡大。一気にスピードを上げ、敵を切り付けまくった。

炎激斬・一閃と呼ばれる技の後、五体のガルドは断末魔の叫びを上げ、同時に爆散した……。

第十五話：烈雷／烈火の帰還（後書き）

今晩は、ジャードです。

最後の四人目のライダー、烈雷登場。前半はバカ（小野川）による活躍でしたが、後半は悠樹が帰還、そしてフォームチェンジ。

……コロコロ場面が変わりますね～。あぁ、誰か僕に文才を下さい……（無理だろ）。

やっと一段落つきました。さて、この後はどうなる事やら……。

では、今日はこの辺で失礼します。

第十六話：預言者（前書き）

ハイ、遂にディケイド一行の登場です。

第十六話：預言者

とある駅前の喫茶店。
波賀悠樹も何度か行く、行きつけの喫茶店だ。少しこじんまりとしているが、学校帰りの生徒が寄ったりと、近辺では中々有名な喫茶店だ。

そこが突然、写真館へと変わった。何の前触れもなく、本当に突然に。

どういう訳か、周囲の人々は別段気付く様子も無い。何事もなかったかのように歩くばかりだ。
そんな“元”喫茶店……“光写真館”の扉から、一人の青年が現れた。２０歳前後だろうか。何となくお人よし、という印象を受ける。
外の空気を吸いつつ、うーんと“のび”をしながら呟いた。

「ここが“次の世界”か～。……うん、至って普通の世界だな。」

そう言って、直ぐに写真館へと戻る。写真館の中には、共に２０代の男女がいた。

「それにしても、此処はどんなライダーの世界なんでしょう、士君？」

「……さあな。」

丁寧語で話す女性にぶっきらぼうに答えるのは、茶髪の青年。士という名前らしい。
胸に掛けている、ピンク……否、マゼンタ色のトイカメラを構え、

窓から見える駅や人だかりに向けて、シャッターを切った。

「さあ……って、何時もは背景ロールを見れば何の世界か分かったじゃないですか！」

「分かんねぇ物は分かんねぇんだ、ナツミカン。いくらこの俺でも、知らない世界だってある。」

士はそう言って、背景ロールを一瞥する。その背景ロールには、赤い鳥、翠の龍、水色の亀、黄色い虎が画かれていた。
同時に、トイカメラから先程取った写真が出てくる。士はソレを取り出し眺めたが……一瞬にして顔をしかめ、すぐ側のテーブルへと置いた。
……どういう訳かその写真は、何が起こったかは不明だが“歪んでいた”。まるで写される事が嫌だ、とでも主張するかのように。

「……でもなぁー、九つの世界以外のライダー、ＢＬＡＣＫやＲＸ、アマゾンの事は知ってたんだろ？じゃあ、此処はシンケンジャーのような、ライダーのいない世界？」

「いや、それは無いなユウスケ。事実、この世界に来てから新しいカードが出てきた。」

ユウスケ……と名乗るらしい青年に、士は一枚のカードを見せる。ピンクの縁取りのカードだったが……それに映されている絵は、灰色に染まっていた。

「……キバーラはこの世界の事を知ってますか？」

「残念だけどぉ～、私もこの世界は知らないわぁ～。」

どこからともなく、女の声が聞こえてきたが……どういう訳か、声を発していたのは“小さい白コウモリ”だった。キバーラという名らしいが、コウモリの姿で流暢に話すその様は、物凄く現実離れしている。

「まあまあ、皆さんそれより、今ケーキが焼き上がったんだ。良かったら食べない？」

そんな中、部屋の奥から出て来たのは、人の良さそうな老人。両手で持つ大きなお皿の上には、美味しそうなカップケーキが幾つも載せられている。

「キャ～！流石栄ちゃん！」

「あ、じゃあ俺も！」

すかさず、キバーラとユウスケがケーキを手に取た。……キバーラの場合は、ケーキを凄い勢いでかじっているだけなのだが。

「ちょっと、ユウスケ！キバーラ！」

「まあまあ、夏海、そんなに焦らない。少し休んでから調べたらどうだい？」

夏海と呼ばれた女性は二人（というか一人と一匹）の行動に声を荒げたが、老人に諭され押し黙った。
その様子が面白かったのか、士はクックッと笑いながら茶化す。

「爺さんの言う通りだ。これだからナツミカンは……。」

「……士君！光家秘伝、笑いのツボ！」

馬鹿にされたのが腹立ったのか、夏海はそう言うと士の首筋に親指を押し込んだ。

すると、どうした事か。

「……アハハ、ハハハハハッ！！」

……今まで仏頂面だった士が、突然笑い出しのだった。恐らく先程の攻撃が原因なのだろうが……恨めしそうに“笑いながら”士は苦しそうに言う。

「アハハッ、ちょ、ナツミカハハハハッ、それやるなって、アハッ、何回言ったら分かるんブハッ、いい加減、ハハッ、皮、むくぞ、アハハハハッ！！」

「お仕置きです、士君。」

「お仕置きってコレ、ハハハッ、ただの八つ当たりアハハハハッ、だろうがハハハッ！」

見た目が物凄くシュールだが、周囲の面々は既に慣れ切った光景なのだろう。黙々とケーキを食べている。

夏海は士の言葉に聞く耳も持たず、そのままケーキにかじりついた。

「おーい、士。早くしないとケーキ無くなるぞー。」

ユウスケの呑気な言葉を聞いているのかいないのか、士は近くのテ

ーブルで爆笑し続ける。そのテーブルの上には、先程士が撮った写真だけでなく、ピンク色の縁取りのカードも置かれていた。

＜ＭＡＳＫＥＤ　ＲＩＤＥＲ　ＲＥＣＣＡ＞

その文字だけが、唯一の手掛かりだった。

「さっみ……。」

朝７：４０。冷たい風が吹き付ける中、マフラーを適当に巻いた俺は体を震わせながらアパートから出た。

……うっわ、風強ッ。なんで冬は寒ぃんだよ畜生。もうちょっと暖かい時期が長くても良いと思うんだがな俺は。春よさっさと来い。

……にしても、この寒さは有り得ないって。なんか夕飯は温まるような飯が食いたいなー。

……しゃぶしゃぶが良いか、鍋が良いか。

『寒い寒い煩いぞ、悠樹。これくらいはどうって事無いだろう。』

「常時翼を燃やしてる奴が言うなっての。」

とか何とか、翔炎と軽口を叩き合いつつ登校していたのだが。

……唐突に、非現実的状況が訪れた。

俺の目の前に突如立ち塞がるように現れた……灰色のカーテン？いや、オーロラ？よく分からんがそのオーロラから、人が出て来た。見た目はコートを着た、壮年の男。眼鏡とフェルト帽がどこか印象的。

……え？何、この人？手品師？……んな訳無いな。

じゃあ、何者？

「初めまして、仮面ライダー烈火。朱雀族の精霊、翔炎。」

……唐突に話し掛けて来た、怪しいオッサン。それ以前に……俺が仮面ライダーって事を、知ってる？それに、翔炎が見えているのか？動揺をなるべく見せ付けないように警戒する。緊張したような表情で、翔炎が問い掛けた。

『貴様は何者だ？』

「私は鳴滝。預言者だ。」

……預言者。それだけを聞くと、普段だったら「頭がいかれたオッサンだ」で済ましていただろうが……何せ、よく分からないオーロラから出て来たんだ。思わず、その言葉だけで警戒してしまう。

そんな中、鳴滝は続ける。

「……君達に一つ、忠告をしておこう。この世界に“悪魔”が現れた。」

「……悪魔？」

「そう。その名は――」

『“ディケイド”、だな？』

「……は？」

驚いた。というか、一瞬思考が止まった。

……何故、この男が話そうとしていた悪魔と呼ばれる存在を……翔炎が知っているのか。

さも当然と言わんばかりに翔炎は答える。

『言っただろう？俺はお前と会うまで、多くの世界を廻った。その一つ……公では「クウガの世界」と呼ばれる世界で、遠目だが見た事があるんだ。』

「理解が早くて助かるよ……。そう、悪魔の名はディケイド。“全ての世界を破壊する存在”だ。」

「……ッ！？全ての世界を、破壊！？」

「その通り……このままでは、君のいるこの世界も破壊されてしまう。」

世界を破壊する存在、ディケイド。

いきなり信じられない単語や翔炎の意外な事実が飛び出してきて、頭が混乱してきたが……あの男の真剣な眼差しから、真実なのかもしれない。信じたくは無いけど。

「……どうすれば、良い？」

「簡単な事だ。ディケイドを倒せばいい。この世界のライダー達と力を合わせてな。私にとっても、ディケイドは恨むべき存在……頼む、ディケイドを倒してくれ。」

そう言って、頭を下げる鳴滝。だけど……少し、考え込んでしまう。……この男の言っている事は、多分嘘じゃない。だけど、倒してくれと言われると……正直、自信が無い。それ以前に頭が混乱している。

……世界を破壊する存在が相手だという事に、本能的に恐怖を感じているのか。

「……少し、時間をくれ。落ち着いた上で、仲間と判断したい。」

「…まあ良いだろう。君はライダーにしては幼い方だ。よく考えておくべきだろう。」

だが、と付け足しつつ、鳴滝は言った。

「忘れるな……ディケイドは、悪魔だ。」

刹那、再び灰色のオーロラが現れ、鳴滝を体を包み……気がついた時には鳴滝の姿が消えていた。

「……。」

吹き抜ける冷たい風すらも忘れてしまう程、そのディケイドの事について考えてしまった。
何の為に世界を破壊するのか。
何の為にこの世界へ来たのか。
……ソレを知る事は、あるのか無いのか。

「……士君。何ですか、その格好？」
「制服……って事は、会社員か？」
「残念だったなユウスケ……俺はどうやら“学校の教師”を務めるそうだぜ？」

光写真館前。
青年……門矢士の格好は、先程の動きやすい服とは打って変わって、スーツとなっていた。着替えた訳ではない。外に出た途端、勝手に変わるのだ。
士は世界を移動する度に、役割を与えられる。その役割に従う事で、その世界の仮面ライダーと出会う確率が高まる……のかもしれない。

「つ、士君が教師、ですか！？……ぷぷっ……。」

「お前が教師って……絶対クラス崩壊するぞ……くくっ……。」

「……まあ何にせよ、俺はどんな服を着ても似合う男だな……。」

二人の皮肉は聞こえなかったのか、自身の格好を自画自賛する士。

白けたような雰囲気はともかく、士はどこからか一枚の紙を取り出し、そのまま読み上げる。

「……四ノ上高校一年二組、理科の臨時教諭か……良いだろう、やってやるぜ。」

「……ちょ、士君！本当に大丈夫なんですか！？」

「考え直せ士！お前が教師なんて務まる柄か！？」

「安心しろ。」

ぶっきらぼうに……それでも、言葉通りどこか安心させるようなそぶりで、士は不敵な笑みを浮かべながら言い放つ。

「……俺に苦手な事は無い！……写真を撮る事以外には。」

最後だけボソリと言ったからか。

二人には「頼りない」と、一瞬そんな思考が頭に過ぎったのだった。

「……嘘臭ェな。」

「うん、正直こればかりは小野川君と同意見だね。」

「うわー、あまりにも予想通りの返答で逆にビビった。」

午前8時15分。いつも通りに学校に到着し、渉達に今朝の出来事を話した。ちなみに三人は、俺の机を囲むような位置に立っている。

……結局、予想通りの返答が反ってきたのだが。

「ついに頭がイカれてしまったようだな波賀よ……今この時こそ、今までの恨みを晴らす時!!」

「イカれてんのはお前の頭だ。」

「おふぅッ!?」

あまりにもテンションを高くして叫ぶ小野川がウザかった為、小野川の頭を鷲掴みした後、勢いよく俺の机に叩き付けた。

ピクピクと体を痙攣させつつ沈黙する。周囲から「またやってるよ」という声が耳に届くが、あえてスルーしておこう。

そんな中、霞河の側で浮遊している物知り精霊……風牙が口を開いた。

『ディケイド……悪魔という通り名は初耳だが、“次元戦士”の事だな?』

「次元戦士って……確か風牙、この前も言ってたよね？」

「いやちょっと待て。何だよ“次元戦士”って？」

何だか大層な通り名がいくつもあるんだな、とかどうでも良い事を考えつつ風牙に聞く。そんな風牙も、詳しい情報は持っていないのか難しい表情をしている。

『平行世界を越え旅をする“バーコードの紋章を持った仮面ライダー”……それらが“次元戦士”と呼ばれている事くらいしか、残念ながら知らない。」

「え、ちょっと待って。」

風牙の言葉に渉が声を出す。肘を机に突っ伏したままの小野川の後頭部に乗せているその姿は見なかった事にしておこう、うん。

「風牙の話が事実だとすると……世界を破壊しようっていう悪魔も、仮面ライダーなの？」

……あ。

ほんの一瞬、時が止まったかのように固まる。

……確かに、渉の言う通りだ。仮面ライダーって……世界を守る存在、みたいな定義が俺の頭ん中で出来上がってたけど、ディケイドって奴は、その真逆だ。

……世界を破壊だなんて、想像もしたくない。

若干重苦しい空気の中、この前小野川の……腐れ縁？として仲間になった精霊……黄色い毛に白い傷を体中に付けた虎、爪雷が口を開いた。

『……次元戦士っつーのは知らねぇが、悪魔って噂は聞いた事がある。』

「え、マジで！？流石爪雷、俺の精霊！」

「話ややこしくなるから黙ってろ。」

「うごぼっ！？」

爪雷の言葉にぐわっと顔を上げた小野川を、再び机へと奴の顔を叩き込む。更には渉が小野川の頭を押さえ付けるのだから、小野川はさながら海に溺れたかの如く手足をジタバタさせている。そこから離れるように、霞河は半歩後ろへ下がった。
それを見計らったかのように、爪雷は続ける。

『なんでも、どこぞの九つの世界が崩壊の兆しを見せているとかで、その原因にディケイドが挙げられてるってよ。詳しい話は知らんが。』

爪雷が話し終わったと同時にチャイムが鳴る。いったん解散として、三人と三体はそれぞれ席へと戻って行った。
……訂正しよう。内一人は引きずられて行った。

「……何だか厄介な事になってるなー、空気化してた翔炎君。」

『怒るぞオイ。……しかしあの“鳴滝”といった男の話がどこまで正しいかは、まだ分からんがな。』

そりゃーまーそうだけど。

なんだか本当に面倒な事になってるなーと半分実感する。まあ殆どが非現実的な状況ばかりだからか。ソレに慣れてきた俺も俺だけど。突如として明らかになった“ディケイド”なる存在は、警戒……最悪、戦闘する事は覚悟しておいた方が良いだろう。死ぬかもしれないけどな。ヤバイ、心なしか体が震える。

その恐怖も、ガラリと開いた扉の音で吹き飛んだ。担任である福原が、いつもの妙なテンションで入って来ると思ったからか。だが、入って来たのは福原ではなかった。

「はーい皆さん、ＨＲ始めますよ～。」

入って来たのは……何と言うか、美人。ほんわか系のお姉さん。長くて黒い髪を揺らしながら、出席簿を胸に抱えつつ教卓へと向かっている。

彼女が入って来たと同時に、このクラスの雰囲気が変わった、主に男子。なんというか、桃色に輝いているというか。

そんな彼女へ。

「立川先生ーーーッ!!今日は一段とお綺麗ですねーーーッ!!」

先程の傷は一体どうしたのか、奇声を上げながら小野川はお姉さん……家庭科担当、我がクラスの副担任である立川　友香先生へと飛び込んで行った。どういう訳か俺の目では、小野川はスローモーションで中を飛んでいる。

そんなヘンタイの行動を許す筈も無く。

「ふざっけんな小野川！！」

「あべらっ！？」

とある男子生徒の蹴りが小野川の腹に直撃。方向が逸れ、小野川は教卓を飛び越え、黒板……ではなく、チョークや黒板消しを置いたりチョークのカスが貯まってたりするアレの角に顔を激突させた。

「＆¥％＋∇@≠¢★♂仝↓∠⊥∝‡¶‰　⇔∩！？」

もはや言葉になっていない悲鳴を上げつつ教壇の上でゴロゴロとのたうちまわる馬鹿。よくもまあ、あそこまで上手くクリーンヒットするものだ。

と思っていた矢先に、俺の目の前を黒い影が通り過ぎ。

「死ねコラ小野川ァ！！」

「うぐっ！？」

先程とはまた別の男子生徒が瞬間移動の如くやって来て小野川の背中を踏み。

また別の方向から黒い影が教壇へと向かって行き。

「テメー立川先生に何をしようとしたコラァ！？」

「うぐふッ！？」

また別の男子生徒が小野川の後頭部を踏み付け。

「天誅じゃァァァッ！！」

何処からか上がったその声が引き金となったか。

このクラスの大半の男子生徒が小野川へと走りだし、暴言と同時に、これでもかというくらいに踏みまくっていった。

――消えろ！消えてしまえ！！――

――オメー立川先生に何しようとした！？アレか、妄想を現実にする為か！？――

――ふざけんなァァァ！お前なんかはバクテリアとでも結婚してろォ！！――

「ギャァァァァァァァッッ！！」

小野川の悲鳴さえも掻き消される程の怒声。いわゆるフルボッコと呼ばれる状況なのだろう。まだＨＲすら始まっていないというのに、何やってんだあの連中は。

『……何だアレ。』

「立川先生大好きクラブ会員供とその他。」

『……なんのこっちゃ。』

「ま、ほら、さ。立川先生って……美人じゃん。影で先生を支持する秘密組合があるとか無いとか。組合に入ってなかろーと、男子か

らは圧倒的に支持を得てるんだけどな。本人は知らないけど。」

『よく分からん。』

「分からなくって良い。」

今、こうして翔炎と会話出来るのも、前にいる連中のおかげだろう。
怒声が凄まじすぎるからか、こちらの会話は誰にも耳に入っていない筈。
そんな中、空気を読んでいるのか読んでいないのか。
そんなむさ苦しい集団へと先生は。

「ほら皆、ケンカは良くないでしょ？」

「「「「「すいまっせんでしたーーーッッ！！」」」」」

小野川をフルボッコにしていた十人程の連中は、立川先生に向かって一斉に土下座した。
「よろしい」と言っている所を見ると、この人、奴等を服従しているのでは……！？と勘違いしてしまうが、彼女は奴等を服従してもいないし、アレが素だ。何と言うか、子供っぽいんだ、あの先生。

「小野川君、大丈夫？先生と一緒に保健室に行く？」

「……あ……ぜ、是非とも……。」

手を差し延べた先生にデレデレしつつ手を伸ばした小野川だったが。

「……ッ！？」

俺でも分かるくらいに殺気が小野川へと突き刺さる。
奴の後ろを見ると……先程土下座をしていた連中が、小野川をギロリと、憎悪のこもった眼差しで小野川を睨んでいるのだった。

――先生がゲスに手を差し出した！！――

――ざっけんなよ小野川……その手を取ったら……どうなるか――

――け、けど……羨ましいッ……！！――

――コロス。あいつぜってーコロス――

ぽつりぽつりと呟く声が嫌でも耳に入る。立川先生の耳に入ったらどうなるのやら、と思うが、当の本人はその言葉が聞こえていないのだからある意味凄い。モスキート音か何かなのかアレは？
ともあれ、この状況で手を繋ぐと自分の人生は終わると悟ったのだろう。小野川がガクガク震えつつ首をブンブンと横に振った。

「……いや、あの……や、やっぱ、いい、です。」

「あら、そう？大丈夫なの？」

「あ、アハハ……頑丈なだけが取りえですから……。」

一理あるな。再生でもしてるんじゃねぇか？
そう考えている間に連中と小野川は席に着き、漸くＨＲが始まった。

「じゃ、出欠取るねー。……ありゃ、谷口君と外處君がいないわね。またゲーセンかしら、あの二人。」

「先生、少しよろしいでしょうか？」

「あら、何かしら岩坂さん？」

出欠確認中に挙手してまで声を出したのは、このクラスの学級委員長である岩坂紫織。見るからに優等生ですと言わんばかりの彼女は、ずり下がった眼鏡を中指で上げつつ問い掛ける。

「副担任である立川先生は確か、福原先生のいらっしゃらない土曜日に此処へ来られる筈……何故、月曜日だというのに」

「此処へ来たか、ね？そういえば言わなかったかしら。福原先生、風邪でお休みなの。」

同時に「おっしゃ河豚いねぇ！！」という歓喜の声があちこちから上がる。まーあの先生、渉と引けを取らないくらいにドSだから、一部の生徒にゃ引かれてるんだよなー。ぶっちゃけ、俺もあんまし好きではない。

「じゃあ先生、今日の理科は自習！？」

「あら小野川君、元気になったのね。……いいえ、しばらく臨時の先生が来ますよ。そうそう、一時間目が理科だから、それも兼ねてＨＲで紹介しようと思ってたの。今から呼んで……。」

「もう来てるぜ。」

唐突に、聞き慣れない男の声が響いた。

気付くと、いつの間にか扉は開いており、そこから一人の男が入って来た。

……若いな。立川先生よりも年下か？何と無くオレサマ気質が漂ってる感じだけど。何故か首にピンク色のカメラをぶら下げてるけど。

そんな男……恐らく臨時教師は、つかつかと教壇に上がり、こだわりかは知らないが赤いチョークを持って黒板に何かを書き始めた。

「笑う門には福来たるの“門”、光陰矢の如しの“矢”……士農工商、じゃ駄目だな……紳士の“士”と書いて。」

最後だけことわざじゃ無かったな、というツッコミを与える暇もなく、臨時教師は字の書かれた黒板をチョークで軽く叩き。

「門矢　士だ。喜べ生徒諸君、この俺が直々に素晴らしい授業を教えるのだからな。全員その脳みそに叩き込めよ。」

教師とは思えないセリフで堂々と、男……門矢士は言い放ったのだった。

「うーん……此処のラーメン屋では、ラーメンが美味しかった事しか分からなかったなー。」

「……ユウスケ、よく朝から濃い物なんて食べられましたね。」

「何だよ、夏海ちゃんだってチャーハン食べてたじゃないか。」

「チャーハンはまだマシじゃないですか。それに朝、おじいちゃんが作ったケーキを食べたばかりなのに……。」

住宅が多く立ち並ぶ至って普通の町、四ノ上町。二丁目に存在するラーメン屋「ラーメンくつろぎ」店内から、二人の男女……小野寺ユウスケと光夏海が出て来た。

……会話から察するに、朝の8時からラーメンを食していたらしい。

「まあ、そんな事よりさ。」

「話題、無理矢理変えましたね。」

「何でこれだけ動いても、この世界の仮面ライダーや怪人の情報が掴めないんだろう?」

「……そういえば、そうですね。士君も、この世界の事は知らないって言ってましたし。」

彼等はかれこれ、一時間以上この世界で動いている。

何時もなら、士が世界の事を知っていたり、運よく怪人やライダーに出会ったり、新聞等で情報が出ているのだが……この世界では、それらしき事が未だに起こっていない。多少、怪人らしき情報は手に入ったのだが……ライダーの情報が、未だに見つからない。

「……怪人だけがいる世界、なんでしょうか?」

「まさか。あのカードがあるから、きっといる筈なんだけど……。」

言いかけた口が、突然引き締まる。

ユウスケは一歩踏み出し、夏海は逆に一歩下がる。

「ユウスケ、アレって……。」

「あぁ、間違いない……この世界の怪人だ！」

彼等の視界には、サイのような黒い怪物が映し出されていた。

サイのような異形は、視界の端に見える何処かの学校へと、ゆっくりと歩いている。

人を襲っているような形跡は無い。が、見過ごす訳にはいかない。

「夏海ちゃん！離れてて！」

「ええ。ユウスケも気をつけて！」

ユウスケの言葉で気が付いたのか。サイのような黒い異形……ガルド・ライノは、ゆっくりとこちらへと向き、腰を低く落とし足で地面を蹴っていた。

見た者は、殺す。そう言いかけるかのように、ガルド・ライノの鼻から伸びる鋭い角を振るいつつ、ユウスケへと真っ直ぐ駆け出している。

ガルド・ライノの動きを見ても、ユウスケは動じない。焦らず彼は、逆三角形を作るかのように両手を腰に当てると、ベルトが“腰から浮き出てきた”。

ベルトの左側に左腕を添え、右手は左斜め前に突き出す。その右手

を、ゆっくりと右へと動かし。

「変身！」

右手で素早く、ベルトに添えていた左腕を軽く押す。ベルト……アークルの中心に嵌め込まれている霊石アマダムが反応し、不可思議な音と共にユウスケの体は段々と変化していった。

黒いスーツに、金で縁取られた赤い鎧。クワガタのような仮面によって表情は窺い知れないが、赤い複眼は油断無くガルドへと向けられている事が分かる。

「おぉりゃッ！！」

ユウスケ……否、仮面ライダークウガは、駆け出して来たガルドの顎へ下から拳を突き出した。その勢いは凄まじく、突っ込んで来たガルドの体が、勢いで中に浮かぶ程。その無防備になった一瞬の隙を見逃す筈もなく、ガルドの腹に蹴りを入れた。

だが、ガルドは上手く体勢を立て直しつつ着地する。相当重いのか、その勢いで地面がめり込んだが……気にせずに、再びユウスケへと向かっていく。

「……ッ！？タフだな、コイツ！」

まさか倒れずに再び攻撃を仕掛けて来るとは思わなかったのか、ユウスケは驚いたが……直ぐに変身時と同じ体勢で構え。

「超変身！」

その姿を、再び変える。

赤を基調とした鎧は、紫色に縁取られた銀色の強固な鎧へと変質。
赤い複眼も、紫色へと染まっていた。

大地を司る姿……タイタンフォームだ。

ガルドの突進をたやすく受け止める。手と手が、がっしりと掴み合う。ガルドは更に力を込めるが、ユウスケも負けてはいない。
力と力の押し合い。だが、その対決にも決着が着いた。

「……うぉぉぉ！！」

タイタンフォームの力と言えるか、ユウスケの底力と言えるか。ユウスケはガルドの巨体をゆっくりと持ち上げ。

「――でゃぁぁッ！！」

思いきり、投げ飛ばした。
受け身も取れずに、ガルドは地面を転がる。予想外の攻撃に反応しきれなかったか。特に地面に強く打った鼻をさすりながら、ゆっくりと立ち上がる。
その姿を、炎を司る姿……マイティフォームへと戻したユウスケは腰を低く落とした。そのまま、ゆっくり両手を広げていく。

「……はぁぁぁ……！！」

その体勢で、ユウスケは右足へと力を溜めていくと……右足から炎が宿り、勢いよく燃えていく。
その足で地面を蹴りだし、ガルドへと走って行って。

「おぉりゃあッ！！」

ガルドの腹に、跳び蹴り……マイティフォームの必殺技である“マイティキック”を繰り出した。
吹っ飛ばされ、再び地面を転がるガルド。その腹には、古代文字のような紋章が浮かんでいた。その紋章が、ガルドの体を蝕んでいたように見えたが。

「嘘だろ!?」

ガルドにはまだ余力があるのか、力を込めると同時に紋章は消えてしまった。
ユウスケは驚いたが、見るからにガルドは満身創痍。次の一撃で決められる。そう思って構えた。

そこに、予想外の敵襲が。

「……え?」

戦闘から大分離れた場所にいた夏海でさえ、一歩下がってしまう。

ガルド・ライノの背後から……もう一体のガルドが現れたのだった。
地面を這いながら、ゆっくりとガルド・ライノの背後へと来るその姿は……例えるならば“大蛇”。長さだけだとガルド・ライノよりも大きい。ガルド特有の黒い体のせいか、より不気味に見える。
大蛇……ガルド・スネークは、大きく口を開け。

ガルド・ライノを丸呑みにした。

「うっわ……。」

蛇がサイを補食するという、現実ではありえない光景。飲み込んだ腹はかなり大きくなり、中でガルド・ライノが暴れているように見えたが……それが段々と弱々しくなり、やがて動かなくなる。そして、大きく膨れ上がった腹は……“一瞬にして元の形に戻った”。これが、どういう意味を示すか。

「今の一瞬で、消化した……!?」

それが本当だとすると、この異形はかなり危険だ。判断した直後も、ガルドの不可思議な現象は続く。

ガルド・ライノを補食したガルド・スネークは……どういう事か、その姿を変えていったのだった。

蛇特有の滑らかな皮膚が強固な物へと変わり、頭の先には角のような物さえ生えている。まるで、補食されたガルド・ライノの特徴が現れているようだった。

……これが、奴らの能力なのか。ユウスケなりに推理して、気を引き締める。何かしら強くなっているに違いないのだから。

サイの特徴を持ったガルド・スネークは、地面を素早くはいずり、尾を地面に叩き付ける事でジャンプし、ユウスケに襲い掛かった。

「ぐっ……!?」

あまりにも速く、対応出来ない。一瞬にして、体をガルドに巻き付けられてしまう。

どうにかしてあがこうにも、相手は“大蛇”。自分の腕よりも太く、そして長い。段々と強く締め付けられてしまい、体がミシミシと悲

鳴を上げていく。

「ぐ、あぁぁぁッ！！」

「ユウスケ！？」

夏海の悲痛な叫びにも、答える事が出来ない。ガルドの大きな口は、細長い舌を出しつつユウスケを喰らおうとしている。

――マズイ！！

絶体絶命。そんな時に。

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＢＬＡＳＴ』

聞き慣れた電子音声が、耳に届いた。

同時に、ガルドの体に幾つもの青い光弾が飛ぶ。その予想外の攻撃に、締め付ける力が一瞬だが和らぐ。

「今だ！！」

その隙を逃す筈も無く、ユウスケは拘束から脱出。素早くガルドから距離を取った。

同時に、再び電子音声が響く。

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ……ＩＭＰＥＲＥＲ・ＳＡＢＡＫＩ』

すると、ユウスケが見た事の無い“二人の仮面ライダー”が現れ、ガルドに攻撃を仕掛けていた。

ムエタイに似た蹴り技を繰り出す茶色い仮面ライダー“インペラー”と、ギターを剣のように振り回す黒い仮面ライダー“裁鬼”だ。上手く連携を成して攻撃を与えつつも、ガルドには効果は薄い様だ。長い尾を二人のライダーを振り払う。二人は吹っ飛ばされ地面を転がるが、めげずに再び向かっていく。

ガルドの気が反れている中、ふと、背後から足音が近付いて来る。振り返ると、バーコードを模ったような青い仮面ライダーがユウスケの下へと歩み寄って来ていた。

ユウスケは、夏海は、そのライダーを知っている。世界の“お宝”を狙う、神出鬼没の自称怪盗。

仮面ライダーディエンド……海東大樹は、いつもの軽い調子で話し掛けて来た。

「やあ、小野寺君。中々苦戦しているみたいだね。」

「海東!?まさか、俺を助けに……!?」

「心外だね。君を助けるだなんて、何のメリットも無いじゃないか。僕はただ、君達に忠告をしに来ただけだ。」

青い銃……変身ツールであるディエンドライバーを右手で器用に回しながら海東は言う。……確かに“お宝命!”の男の事だ、自分を助ける為に此処に来たとは思えなかったが……少し、不思議に思えた。

「珍しいな、お前が俺達に忠告だなんて。」

「それだけ異様な世界なのさ、此処は。今頃、何処かでふらついている士にも伝えたまえ。」

回していたディエンドライバーの銃口をビシッと地面へ向け、海東は続けた。

「早くこの世界から出て行った方が良い。士の、君達の為にも。」

「出て行くって……そんな事、出来る訳が無いだろ！俺達は、世界の崩壊を防ぐ為に」

「この世界は、本来“崩壊する筈では無かった世界”だ。」

ユウスケの言葉を塞ぐように発せられた海東の言葉に、彼は固まる。よく理解出来なかったのか、頭を捻っている。

「……あの、大樹さん。それって一体……？」

「やあナツメロン。君もいたのかい。」

「ナツミカ……夏海です！大体、さっきからいました！」

怖ず怖ずと声を掛けたつもりだったが、海東の反応に声を張り上げる夏海。流石に、妙なニックネームで呼ばれるのは嫌なのだろうか。いつの間にか定着していたが故に、空回りするだけなのだが。

「……言った通りの意味さ。此処は本来何でも無い世界だったが、君達がやって来た事で、大分おかしくなってきている。あの怪物達が来た時点で、境界線が崩れて来たというのに……。」

「怪物が、来た？海東、ソレって一体……。」

「僕は君達に全てを教えようとしている訳じゃないよ。とにかく、君達が長居すると、この世界まで崩壊に巻き込まれる事になる。早く出て行きたまえ。」

「何ですかそれ!?結局、あなたも士君が破壊者だって言いたいんですか!?」

先程茶化された時とは違い、今度は怒りの色を見せている夏海。海東の言葉は、士のせいで崩壊が進んでいる、と彼女は聞こえた。門矢士は、多くの世界で“世界の破壊者”とか“悪魔”と呼ばれていた。それが夏海には分からなかった。今までも、世界を救って来たというのに。

「士だけじゃない。本来、平行世界の住人が他の世界へ行くという事は有り得ない事だからね。事象から掛け離れた事に、この世界は極端に弱いだけだ。」

「……じゃ、待てよ!ここでもし、大ショッカーが関わっていたら……。」

「大ショッカーは、ある意味じゃ既に関わっている。……だから“彼等”が動き出したような物なんだけどね。」

「……どういう、意味ですか?それに、彼等って……。」

「ともかく。」

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＤＩ・ＤＩ・ＤＩ・ＤＩＥＮＤ』

話はこれまでと言わんばかりに、海東はディエンドライバーに黄色い縁取りのカードを装填する。カード状のロックオンサイトが展開され……先程、召喚された二人のライダーは、エネルギー体となってロックオンサイトに取り込まれていった。
突然消えた標的に戸惑うガルド。ロックオンサイトに気付き、対抗しようと構えるが、遅い。既にトリガーは引かれ、放たれたレーザー砲……ディメンションシュートが、ガルドの体を焼き尽くしていた。

「……この世界を救いたいのなら、長居は控えるべきだね。“彼等”の為にも、ね。」

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＩＮＶＩＳＩＢＬＥ』

意味深な台詞を残しつつ、何処かへと消えていった海東を見て……呆然としたようにユウスケは呟く。

「……一体、どういう事なんだ……？」

「分かりません。けど……この世界が危ない事に変わりはない、としか。」

海東の言葉の意味がよく理解出来ずに立ち尽くす二人。士なら、断片的であっても分かるかもしれないが、彼は今学校。しかも教師。

「……士君、早く戻って来れば良いんですけど……。」

「士の事だ……きっと変な事して校長に呼び出されるかもよ？」

「……否定出来ませんね。」

ただ立ち尽くす訳にもいかず。
二人は手掛かりを探す為に、この場を後にしたのだった。

第十六話：預言者（後書き）

今回は戦闘シーン無し。士達は烈火の世界にたどり着き、悠樹達も鳴滝によってディケイドの存在を知らされました。

……もしかしたら、次回はディケイドと烈火がぶつかり合ったり……。

……にしても、ファイズ編の次は休みもせずディケイド編。……何してんだ、アンタ？みたいなツッコミもあると思います。しかし、このディケイド編によって、烈火達の敵、ガルドの秘密が分かる……といいなあ（オイ待て）。

では、今日はこの辺で。感想、ご指摘等も待ってます。

第十七話：破壊者

あの後、老人……光栄次郎さんから、コーヒーを頂いた。温和な人で、とても話しやすかった。他にも孫やら居候やらいるらしいが、出掛けているらしい。

しかし、あのコーヒー……物凄くうまい。この前の喫茶店よりも、全然。やはり、作り手の思いとかもあるのだろうか？……唯一、小野川がうまいと騒がなかったら、より良かったのだが。

とまあ、そんなこんなで現在帰宅中。他の三人とは既に別れ、今は俺と翔炎だけだ。

『うーん……。』

「…さっきから何唸ってんの、翔炎？」

『いや……あのオッサン、どっかで会ったような気がするなぁ……って思ってな。』

「……他人の空似じゃないか？」

『……そうか？』

そうだろ。そう言おうとした時。

突然異形が現れた。しかも、ガルドではなく、

……オルフェノク。

「……なっ！？」

…どういう事だ！？オルフェノクって、ファイズの世界の敵だろ！？何でこの世界に！？

…と思っている時、オルフェノクは俺に襲い掛かって来た。

殺される！そう思った刹那、

…バイクがオルフェノクをはねた。

……え？デジャウ　〝？前にもあったぞ、このシーン。

とか何とか思っていると、バイクに乗っていた人が降りて来た。

年齢は二十歳程。茶髪で、仏頂面。乗っていたバイクも、ピンク…

…いや、マゼンタ色という、その青年とは奇妙な組み合わせ。

「ちっ……この世界にオルフェノクだと？やはり、大ショッカーの仕業か？」

……え？大ショッカー？しかもこの人、オルフェノクの事知ってる？

「オイ、お前。此処から早く逃げろ。」

「え？あ、ハイ。」

とりあえず、その場から少し離れる。

すると、その青年はどこからか出した白いバックルのような物を腹の辺りに当てる。すると、いつの間にかベルトになっていた。

……ベルトって事は、まさかこの人も、仮面ライダー？
そう考えてる内に青年は、左腰にあるブックホルダーのような物から一枚のカードを取り出す。そして、バックルの両ハンドルを引き、何かの挿入口が露出。そこに先程のカードを装填し、バックルを閉じた。更に、俺にとってはよく聞く言葉を青年は言った。

「変身！」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ……ＤＥＣＡＤＥ』

俺がよく聞くのとは別の発声音が響く。すると、青年の回りに幾つもの残像が現出。その青年に残像が重なると、一瞬で黒いスーツを作り出す。これで終わりでは無く、ベルトからマゼンタ色のプレートが出てきて、仮面に突き刺さる。そして、体の一部分をマゼンタ色で縁取った。

『……破壊者！』

「……え！？」

翔炎の嘆きに反応する俺。その間に、そのマゼンタ色の戦士とオルフェノクは格闘していた。マゼンタ色の戦士の方が攻めていて、オルフェノクを一気に蹴った。
オルフェノクが怯んでいる隙に、再び一枚のカードを取り出す。

「オルフェノクにはコイツか。」

マゼンタ色の戦士がそう言うと、変身と同じ動作でカードを装填した。

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ……ＦＡＩＺ』

発声音が響くと、ベルトから赤いラインが伸び、体中に張り巡らされ、赤く輝く。すると、マゼンタ色の戦士は、黒いスーツ、銀色の鎧、赤いライン。

……俺もよく知る戦士、ファイズへと変わっていた。唯一、ベルトだけは違っていたが。

「な……？」

そりゃもう、驚いた。アレ、フォームチェンジってレベルじゃ無いだろ。そんな俺の心の中の嘆きも露知らず、そのファイズもどきは、またもやカードを装填した。

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＡＵＴＯ　ＶＡＪＩＮ』

すると、青年が乗っていたマゼンタ色のバイクにΦのマークが通過。すると、そのバイクは、タクミが乗っていたバイクへと変わっていた。

……もう、突っ込むのもめんどくさいな。

しかも、そのバイクは、人型のロボットへと変形した。そして、左腕に付いているタイヤの部分から、銃弾を連射している。……何気にあのバイク凄いな！？あんな機能あるんですか！？

その銃弾でオルフェノクを怯ませている間に、三度ファイズもどきはカードを装填した。

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＦＡ・ＦＡ・ＦＡ・Ｆ

ＡＩＺ』

すると、ファイズもどきの右足にエネルギーが蓄積。跳び上がると共に右足をオルフェノクに突き出すと、円錐状のロックオンサイトが展開。

「はぁぁぁっっっ！！」

そのまま円錐状の物に突っ込み、ドリルのように突き進む。ファイズもどきがオルフェノクの後ろに出て来た時には、オルフェノクに赤いΦの文字が刻まれ、青い炎を出しながら灰になっていった。

「まさか……アイツが破壊者、ディケイド！」

俺はそう確信した。そして、翔炎を無理矢理バックルへと変化させる。

『お、オイ、悠樹！？』

抵抗する翔炎を無視し、変身の準備をする。

『Ｓｙｓｔｅｍ　Ｌｏａｄｉｎｇ……Ｓｔａｎｄｂｙ』

「変身！」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

俺は烈火へと変身した。ディケイドも、俺の存在に気付いたようだ。

「お前……この世界のライダーだったのか！？」

「ディケイド……いや、世界の破壊者……。お前にこの世界は破壊させない！」

俺はそう言って、ディケイドに襲い掛かった。

霞河舞視点

「あ～、コーヒー美味しかったね～。」

『…いや、私は味わっていないのだが。』

うん、冷静に突っ込まれた。小野川くんのような激しいツッコミが面白いんだけどな～。

『……舞、悠樹が変身した。何かと戦っている。』

「…え？ガルド？」

『いや、ガルドの気配は……っ！？舞、ガルドが来た！』

風牙の声と共に、ガルドが二体も出現。…私、複数の相手とは苦手なんだけどなぁ……。

「そこの君、逃げて！」

……ん？何だろう？そう思って振り返ると、一人の男の人が。年齢は二十歳位だろうか。回りから見れば優しそうな青年、という風に見えると思う。

すると突然、男の人は両手を逆三角形のように腰の辺りに当てる。

すると、突然ベルトが現れた。

……え？これって、もしかして……？

「変身！」

ポーズをとり、男の人の声と共に、ベルトの辺りから男の人の姿が変わっていった。

黒いスーツ、赤い鎧、金の縁取り、クワガタのような仮面、赤い複眼。

……あれも、仮面ライダーなのだろうか？私達のとは違って、金属って感じはしない。外の物を使って変身というより、内側に秘めた力を使って変身、みたいに見える。

「はぁっ！」

その仮面ライダーはガルドに殴り掛かる。ガルドは突然の知らないライダーの出現により油断したか、かなり吹っ飛んだ。もう一体のガルドも、様子を見ている。

「君、早く逃げるんだ！」

「あ、大丈夫です。アイツらは、私の専門分野なので。」

「……へ？」

「風牙！」

『分かってる。』

私は風牙をバックルにして、変身の準備を整えた。

『Ｓｙｓｔｅｍ　Ｌｏａｄｉｎｇ……Ｓｔａｎｄｂｙ』

「変身！」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

私は烈風に変身した。

「……！？君、この世界の仮面ライダー！？」

「……って事は、やっぱり別世界のライダーさんなんですね。」

「あ、あぁ……。とりあえず、先にアイツらを倒さないと！」

「分かってます！」

私達は、同時にガルドに飛び掛かった。

波賀悠樹視点

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｈｅａｔ　Ｓａｂｅｒ』

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＳＬＡＳＨ』

「はぁっ！！」

「くっ……！」

現在、俺と破壊者の切り合いが続く。破壊者の姿も元に戻っている。

「……オイ、話を聞け！」

「そう言って俺が油断した隙に攻撃する気だろ！」

「ちっ……コノヤロウ……。」

破壊者はそう言って、俺と距離をとった。

「話を聞く気が無いなら……こっちもとことんやってやる！」

破壊者はそう言うと、ブックホルダーからカードを出し、バックルに装填した。

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ……ＨＩＢＩＫＩ』

発声音と共に破壊者の体に紫色の炎が包む。破壊者はそれをはらうと、再び姿が変わっていた。
どこか、鬼のような格好だ。

「さあ……第二ラウンドだ！」

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……　ＯＮＧＥＫＩＢＯＵ　ＲＥＫＫＡ』

発声音が響くと、どこから出したのか、二つの太鼓の棒を取り出した。

「ちっ……やってやる！」

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｔｗｉｎ　Ｂｌａｄｅ』

俺も、炎の双剣を出す。その後は、切り合いと殴り合いが続く。しかし、破壊者の方が力が強いのか、思いの外ダメージが大きい。

「クソッ……。」

俺は一度距離をとったが、

「逃がすか！」

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＯＮＩＢＩ』

何やら炎が飛んできた。予想外だったので、再びダメージを受ける。

「クッ……。」

「…オイ、これで俺の話を聞く気になったか？」

「……少し聞いてみる事にする。」

「え……？」

……？何で驚いてるんだ？

「……オーイ。」

「あ、……わ、悪ぃ。今までの奴らは話を聞かずに襲い掛かって来たからな……。」

「……俺だって戦いはあんま好きじゃ無い。破壊者とか言ってるけど、もしかしたら鳴滝って奴がでっちあげてるだけかも知れないし。それに、まともに戦って勝てる自信が無い。」

「……変わってるな、お前。」

「よく言われる。」

「……まあ、いい。俺は……」

「惑わされるな、烈火！」

唐突に声がした。そこには、鳴滝が。

「鳴滝か……。しつこいな、お前も。」

「黙れディケイド！烈火、ディケイドは破壊者だ！お前の世界がこ

のまま破壊されても良いのか！？」

「話だけでも聞いてやっても、世界の崩壊は進まないだろ？それに、破壊者を倒す倒さないは俺が決める。」

「……おのれ、烈火……。ならば、私の用意したライダーが、ディケイドもろとも貴様を消してやるわ！！」

……え？俺死亡グラフ立った？

とか思っていると、鳴滝は灰色のオーロラに消えていった。そして、入れ違いでそのオーロラから、一人の戦士が現れた。

外見はロボットと言っても良いほど機械的。黒い鎧に青い複眼。胸には警察のマーク。……え、警察？

「オイ……来るぞ！」

破壊者……いや、ディケイドの声と共にまたもや戦闘が始まった。

第十八話：大ショッカー

「はぁっ！」

「グォッ！？」

「てやっ！」

「グガァッ！？」

私は、今謎のライダーと共にガルドと戦闘中。今回のガルドはさほど強くない。

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｐｐｕ』

発声音が響くと私の回りに竜巻が発生、力をためる。そして、ガルドに向かって垂直に蹴りだした。

「はぁぁぁっっっ！！！」

「ギャアアッッッ！！！」

ガルドは思いっきり吹っ飛んだけど、爆発せず、ふらふらしながらも立ち上がった。

「嘘……？」

『ふむ……おそらく、火属性だな。と言っても、すぐ終わるだろうな。』

しかし、風牙の予想は外れた。何故なら、謎のライダーと戦っていたガルドが、私と戦っていたガルドを……食べたからだ。

「……！！」

『何……？』

「うぇっ……。」

「グゥゥゥ……。」

食べた方のガルドは、パワーアップしたみたいだ。かなりのスピードで、私に殴り掛かって来た。

「ガァァァッッッ！！」

「キャッ！？」

速い……！？とても目で追えない！

「ちっ、超変身！」

その言葉と同時に、謎のライダーの色が、赤から青へと変わった。手には、青い棒も持っている。フォームチェンジかな？赤い状態の時よりも、身軽な感じもする。

「はっ！！」

「グッ……ガァッ！！」

「痛ぇっ！？」

ガルドの攻撃を受け止める事は出来たみたいだけど……高速で回り込まれ、攻撃された。

「クソッ……銃のような武器があれば……。」

「……！銃ならあります！」

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｃｙｃｌｏｎｅ　Ｓｈｏｔ』

私は、サイクロンショットを謎のライダーに手渡した。

「あ、ありがとう！これなら……超変身！」

再び、謎のライダーの姿が変わった。今度は、緑。私が手渡した武器も、ボウガンのような形状に変わった。……物質を変える力を持っているの、この人？

「……。」

謎のライダーは静かにボウガンを構える。そして、振り向き様に、ボウガンを放った。放った先には……ガルドがいた。

「グ……ガァ……ッ……？」

……この人、ガルドが後ろから来るの、分かってた？どういう事？

……そう考えている内に、ガルドは悲鳴もあげず爆散した。

波賀悠樹視点

現在、黒い戦士と交戦中。攻撃は与えているのだが、ダメージが蓄積しているようには見えない。むしろ、こっちが逆に反撃されているのだ。

「……。」

「ぐわっ！？」

突然黒い戦士が銃を取り出し、こちらに向けて連射して来た。数発当たったけど、痛い。そりゃあ、もう。

「クッ……。」

巻き添えをくらったか、ディケイドも苦しんでいる。ちなみに、元の姿に戻っている。

「チッ……相手がＧ３－Ｘに似ているなら、コイツだ！」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ……ＡＧＩＴＯ』

発声音が響くと、ディケイドの体が光り輝く。光りがおさまった時には、ディケイドの姿がまたもや変わっていた。

金色を基調とした体。その姿も、俺が今まで見たライダーの中でもどこか感じが違う。

「更に……これだ。」

『ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ……ＡＧＩＴＯ－ＦＬＡＭＥ』

発声音と同時に、基調色が金から赤へと変わった。右手には、剣が握られている。

「はぁぁぁっっっ！！」

ディケイドは黒い戦士に向かって切り掛かる。黒い戦士も黙って見ている訳にはいかず、すかさず発砲。しかし、驚いた事に、その銃弾全てを切り落とした。

「……嘘だろ！？」

「＜超越感覚の赤＞をなめるな！」

俺の嘆きに律儀に突っ込むディケイド。そして、黒い戦士を切り付けた。今回ばかりは効いているらしく、苦しんでいるっぽい。

「でゃぁっ！」

「……！？」

ディケイドは思いっきり切り落とし、黒い戦士は吹っ飛んだ。

「すげぇ……。」

「ま、こんなもんだろ。」

本当に強い。どんだけ力を持っているんだ、コイツ？
……とか思っている内に、黒い戦士が立ち上がった。
……ミサイルのような物を収納した物体を肩に担いで。

「「……え？」」

俺達二人の嘆きと共に、ミサイルが発射された。

「「おぉぉぉっっっ！！！？？？」」

俺達は走り出したが、無駄だった。流石ミサイル。普通に直撃。もう、痛いってレベルじゃ無い。

「ぐぁっ……。」

やばい……俺、死ぬかも……。

「オイ、お前……。」

そんな時に、ディケイドが話し掛けてきた。また、元の姿に戻って。

「お前じゃなくて、悠樹……波賀　悠樹な。で、何だ？」

「じゃあ、悠樹……お前、アイツを数秒だけでいい。足止めしてくれないか？」

「…アイツを倒す方法があるのか？」

「一つだけな……。」

本当にあるのかよ……？けど、今は……。

「……分かった。騙されたと思ってやってやるよ！」

『Ｏｖｅｒ　Ｄｒｉｖｅ　Ｓｙｓｔｅｍ……Ｒｅｃｃａ』

俺は烈火・飛翔形態になり、空中戦で戦う事にした。

『Ｈｅａｔ　Ａｒｍ』

ヒートアームのチップもセット。これは攻撃用ではなくて、防衛用である。

「……。」

またもや黒い戦士がミサイルを発射。俺はそれを逃げまくる。

「クッ……。」

ディケイド……まだか！？そう思っている時、発声音が響いた。

『ＫＵＧＡ、ＡＧＩＴＯ、ＲＹＵＫＩ、ＦＡＩＺ、ＢＬＡＤＥ、ＨＩＢＩＫＩ、ＫＡＢＵＴＯ、ＤＥＮ－Ｏ、ＫＩＶＡ』

……え？何その長い電子音声の羅列は？全然聞き取れなかったぞ？

『ＦＩＮＡＬ　ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ……ＤＥＣＡＤＥ』

え?ファイナル、何だって?とか思いながらディケイドの方向を見ると、ディケイドの姿が変わっていた。
目の色が緑からマゼンタに、体の色も銀色が基調となった。また、バックルは右側に取り付けられ、バックルがあった部分には、見慣れない黒い機械が取り付けられている。そして、胸には多くのカード。何か、戦士のような絵柄だ。……まさか、アレ全部仮面ライダー!?

そんな俺の心の嘆きも露知らず、ディケイドは黒い機械に二カ所タッチした。

『ＡＧＩＴＯ、ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ……ＳＨＩＮＩＮＧ』

発声音が響くと、胸のカードが全て一種類に統一される。そして、ディケイドの隣にその統一されたカードに描かれたのと同じ戦士が召喚された。……よく見てみると、先程ディケイドが変身した戦士に似ている。

「……！」

黒い戦士はディケイドの方が危険だと思ったか、ミサイルを全発ディケイドに放った。
危ない！……と思ったが、ディケイドと召喚された戦士は、まったく同じ動きでミサイルを切りまくった。……唖然とするしかない。
そしてディケイドは一枚のカードを取り出し、右腰に付けているバックルに装填。そして、軽く叩いた。……何故か、召喚された戦士もまったく同じ動きをしてる。

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……Ａ・Ａ・Ａ・ＡＧＩＴＯ』

発声音が告げると、ディケイドと召喚された戦士は同じ動きで衝撃波を飛ばした。

「ーーーーー！！！」

黒い戦士に直撃、声もあげず爆散した……。

「ふう……。」

ディケイドの隣の戦士は役目を終えた為か、消えていった。

「……あんたは……、」

一体何者なんだ？そう聞こうとしたが、聞く前に、またもや灰色のオーロラが現れた。

鳴滝か！？しかし、出て来たのは、白いスーツを来た壮年の男だった。

「アポロガイスト……！」

「ふむ、ディケイドか。此処で会うとは、奇遇だな。」

アポロガイスト、と言うらしい男は突然こちらを見た。

「ほう、実験体を精霊界に送り込んだ筈だが、生き残りがいたか。しかも、適合者と共に、仮面ライダーとして戦っているとは……。」

「……何？」

「実験体……？どういう事だ？」

「…ディケイドはまだ会っていないようだな。ここ最近、大ショッカーの新幹部が開発した実験体を使って精霊界に住む奴らを皆殺しにする事にしたのだ。精霊は人に仮面ライダーの力を与えるからな。私はその実験体の様子を見に来た。…まさか、別世界に移動しているとはな。」

……まさか、それって……。

「……ガルド、の事か？」

「ほう……ガルドと名付けたか。恐らく、貴様が言うヤツと同じであろうな。」

『テメェ……。』

突然、翔炎が言った。

『お前らが……お前らが仲間達を殺したのか！！』

翔炎の怒り。確かに、多くの仲間が殺されたのだ。怒らない方が可笑しい。そう思ったと同時に、俺はアポロガイストが所属しているであろう、大ショッカーという組織に恐怖した。

「仮面ライダーの存在自体、大ショッカーにとっては邪魔なのだ。そして我々は、全世界で最も迷惑な存在として、仮面ライダーを全

て消す！」

……自身を迷惑な存在って言う奴、初めて見たな、俺。しかし、目的がかなり恐ろしい。

「……それが目的なら、俺が阻止する！」

そう言って、ディケイドがアポロガイストに殴り掛かったが、

「……アポロチェンジ。」

アポロガイストの姿が変わった。どこか、騎士のような姿に。……あれが、本当の姿なのだろうか？

アポロガイストは持っている巨大な盾でディケイドのパンチを受け止め、逆に銃で反撃した。

「ぐあっ……。」

「ディケイド……貴様が仮面ライダーの中で最も邪魔だが、今は貴様と戦っている暇は無い。ここで失礼する。」

そう言って、アポロガイストは灰色のオーロラの中へと消えていった。

俺はただ、そのやり取りを見ている事しか出来なかった……。

第十八話：大ショッカー（後書き）

ども、試験一週間前を控えているのにも関わらず小説を投稿したバカ、ジャードです。

烈火とディケイドによるＧ４との対決。ディケイドのコンプリートフォームによってケリがつきましたが……、
…やっぱ反則ですよね、コンプリートフォーム。ライダーの最強フォームを召喚って……しかも、その必殺技で敵も一撃必殺……。
ネガの世界では、とてもびっくりしましたね。もうちょっと頑張れよ、ダークライダー……。

とまあ、自分の嘆きはほっといて。
今回アポロガイスト登場。しかも、ガルドの発生現を暴露。……
やっちまったよ、チクショーッ（叫ぶならやるなよ）！

結局、オリジナルライダーも原作に密接に関係している事となった本作。そんな駄作でもお付き合い頂ければ幸いです。

では、今日はこの辺で失礼します。

第十九話：怪盗海東再び（前書き）

皆さんにお知らせがあります。

実は、正六面体様が執筆していらっしゃる＜仮面ライダートランス＞に、僕の烈火とコラボして頂いちゃいました！現在トランスは＜小説家になろう＞に掲載されている多数のオリジナルライダーの世界を廻っているという事で、烈火はコラボ二作目だそうです。是非、そちらの方も見て頂けたらと思います。

正六面体様、コラボして頂き、本当にありがとうございます！

では、第十九話、どうぞ。

第十九話：怪盗海東再び

どうもこんにちは、秋元渉です。突然ですが、今大変な目に会ってます。

「渉、よそ見すんな！死ぬぞ！？」

「わ、分かってる！！」

「ギャォォッッッ！！！」

……やたらめったら強いガルドに遭遇しました。何故こんな事になっているのか？簡単な話、帰っている途中に遭遇しちゃいました。もう３０分程戦っています。カップラーメン１０個は作れます。つまり、苦戦してます。

『海斗、もっと素早く動け！』

「爪雷、それは結構キツイぞ！？」

『Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｖｏｌｔ』

小野川君は右手から雷を放つ！しかし、あっさりかわされる！そして、こっちに猛突進してきた！

「やばっ……！」

『Ｉｃｅ　Ｔｏｗｅｒ』

僕は右手にチップをセット。そして、地面に手を当てると先端の鋭い氷が、塔のように幾つも飛び出して来る。当たりはしなかったけど、動きが制限されて、遅くなった。

「今だ！！」

『Ｂｌｉｚｚａｒｄ　ｋｎｕｃｋｌｅ』

ブリザードナックル……氷の腕で、ガルドをおもいっきり殴った。

「はぁっ！！」

「グガァッ！？」

ガルドの体が凍りついていく。身動きもとれないようだ。

「よっしゃ！俺がとどめさしてやる！」

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｔｕｒｙ』

発声音が響くと、小野川君は空中に黄色の球を投げた。……よく見ると、電気を帯びている。

「ていやぁぁぁっっっ！！」

その球から無数の雷が。……どうでも良いけど、あの電気で発電とか出来ないかな？

「雷光衝破！！どうだーっ！！」

……らいこーしょうは？まあ、確かに何かを破壊する程の衝撃を持った雷だったな。実際、凍りついたガルドは粉々になってる。

「どうだ渉、俺の勇姿は！？」

「いや、僕も戦ったでしょ？むしろ、ガルドの動きを止めた僕の方が凄いと思うけど。」

「ふっ、これだから渉は……。やっぱり勝負はクライマックス！最初から最後までが重要なんだよ！特にシメが重要ポイントだ！」

「君の人生もクライマックスだったら良いんだけどな。」

「渉さん！？それ、遠回しに死ねっつってるよね！？」

「まさか、ここで朽ち果てればいいなー、みたいな感じだよ。」

「同じようなもんでしょぉぉぉっっっ！！？？」

うん、やっぱり小野川君のツッコミは新鮮だ。

「グガァァッッッ！！！」

……へ？

小野川君もポカンとしている。二人一緒に振り返ると……絶句した。またもやガルドが出て来たのだ。しかも、さっき倒したガルドに似ている。…親か何かかな？

「ガァァッッッ！！」

……そんな事を考えてる暇は無い。僕は何とか避けることができたけど、小野川君は直撃。

「小野川君!?」

「あ～……一瞬花畑見えた。」

「……。」

けど、小野川君は今までの経験上（殴られたり、蹴られたり、言葉攻めされたり）かなり頑丈だ。見た目も、あんまり効いてない気がする。

けど、これじゃ唯の時間潰しだ。悠樹君とかがいればなぁ……。

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ……』

……ん？なんの電子音声？

「変身！」

『ＤＩ－ＥＮＤ』

発声音と共に、銃弾が飛んできてガルドを攻撃。

誰だろうと思い、振り返ると、銃を持った青い戦士がこちらに歩いて来た。

「……あなたは？」

「……この世界のライダー、烈氷と烈雷だね？ちょっと加勢しに来たよ。」

『何だテメェ!?異世界の奴が何故此処にいる!?』

「君が精霊君か……。少し煩いから、黙ってくれないかな?」

『んだとコラァッ!?』

しかし青い戦士は爪雷の言う事を無視して、二枚のカードを取り出し、銃に装填した。

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ……ＬＥＮＧＥＬ、ＳＡＳＷＯＲＤ』

発声音と同時に青い戦士はトリガーを引く。すると、目の前に幾つかの残像が行ったり来たりしている。残像が重なると、二人の戦士が立っていた。

一人は緑色の鎧を着た戦士。胸のマークはトランプのクローバーにも見えるし、仮面は蜘蛛にも見える。杖のような武器を持っている。

もう一人は紫色の鎧を着た戦士。仮面は蠍のような形状。こちらは剣を持っている。

その二人の戦士はガルドに向かって攻撃し始めた。

「グォォォッッッ!!!」

しかし、逆にガルドがキレ始める。

「ヤバイ……!」

『Ｉｃｅ　Ｓｈｏｔ』

発声音と同時に大きめの氷の球を右手に生成。それをガルドにぶつける。

「グァッ！？」

ガルドの体だ凍り付いていく。…今気付いたけど、僕のチップって、凍らせるのばかりだな。

「グォォォ……！」

あ、ガルドが氷を破ろうとしている。こりゃ、まずいかも。

『Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｓｔｒｉｋｅ』

「おりゃぁぁっっ！！」

すかさず、小野川君が敵にパンチ。しかも、その電気によって多少痺れている。

「じゃ、後は僕が。」

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＣＲＯＳＳ　ＡＴＴＡＣＫ』

発声音と共に、召喚された二人の戦士は同時に動いた。

緑色の戦士は杖にカードを通して、紫色の戦士は剣を操作する。

『Ｂｌｉｚｚａｒｄ　Ｖｅｎｏｍ』

『ＲＩＤＥＲ　ＳＬＡＳＨ』

それぞれ別の発声音が響く。緑色の戦士は杖をガルドに突き刺す。なんと、突き刺した部分からガルドの体が凍り付く。しかも、毒をも流し込んでいるようだ。紫色の戦士は剣から衝撃波を発生。ガルドを真っ二つにした。相当な威力だろう。

「ギャァァッッッ！！！」

ガルドは断末魔の叫びを上げ、爆散した。

「通りすがりの……仮面ライダー？」

「ああ。職業は怪盗だけど。」

「……それって、結局泥棒って事じゃ無いっすか？」

「泥棒じゃない。怪盗だ。」

「…同じだって。」

「……。」

僕達は先程の戦士……海東大樹さんに話を聞いている。ガルドの急成長は、大ショッカーという組織が関係しているらしい。ちなみに、海東さんと言い争っているのは、お分かりの通り小野川君。爪雷は、何かふて腐れている。

「とにかく、士にこの二人の事を説明してあげないとな……。全く、僕はお宝を探しに来たのに……。」

海東さん、なんか愚痴ってます。けど、僕達は黙って海東さんの後を追うのでした。

霞河舞視点

「通りすがりの仮面ライダー……門矢士さん？」

「そう。俺の……親友？戦友？……まあどっちにしても、俺にとって、かけがえのない存在さ。」

この人の名前は、小野寺ユウスケさん。なんと、先程の仮面ライダー。クウガって名前らしい。ユウスケさんは今までその門矢さんと幾つもの世界を旅してきたらしく、今回はこの世界にたどり着いたらしい。そして、仮面ライダー烈火……悠樹くんを探しているとか。

『…異世界を廻る仮面ライダーか。私も聞いた事はあるのだが……本当にいるとはな。』

「……俺は喋る龍なんて初めて見るけど。」

……まあ、普通龍は喋らないけどね。それにしても……、

「通りすがりの仮面ライダー……か。なんか、同じような事を言っていた人がいたなぁ……。」

「……！それって！？」

「青い仮面ライダーになっていましたけど……。」

「…海東さんかな？またお宝探しとか？」

……どうやらビンゴ。またその海東さんに会えないかなぁ……？やっぱりお礼を言った方がいいし。……あ、ちなみに今ユウスケさんの拠点ともいえる家に向かっています。

……悠樹くん達にも、この事伝えなきゃね。

波賀悠樹視点

「……まだか？」

「もうちょっとだ。……てかお前、乗せてやってるのに、その態度は何だ？てか、少なくとも俺の方が年上なんだから、敬語ぐらい使え。」

「悪いな。一度相手に言った口調は変えられないんだ。俺の癖。」

「……こんな奴が烈火か……。」

「……何か今、凄い失礼な事言われた気がする。」

ちなみに、現在士のバイクに乗って、士の家に向かっている所。士から色々聞かなきゃな……。

「オイ……着いたぞ。」

「ああ……って、え?」

……その着いた所というのが、先程いた、光写真館であった。翔炎も声には出さないが、相当驚いている。

「……何でさ?」

しかも、先客が。一人の青年と……霞河。

「霞河!?」

「あ、悠樹くん。」

「オイ、ユウスケ……仮面ライダーを連れて来いって言ったのに、女の子なんて連れて来て……。」

「ちょ、誤解すんな士!この娘も仮面ライダー何だよ!」

「……嘘だろ。」

「いえ、ホントですけど。」

そんなやり取りを見ていると、再び人が。しかも、ある青年以外の二人は……渉と小野川だった。

「……海東!?」

「やあ、士。」

海東と呼ばれた青年は、軽く挨拶をする。

……何でこんな都合良く集まるんだろうか？一人、俺はそう考えていた。

第十九話：怪盗海東再び（後書き）

ハイ、題名の通り怪盗、海東再び登場。……決してシャレじゃ無いですよ？
そして、二人の手助けをします。……クロスアタックをしているのは、僕がただ単に歴代ライダーの必殺技を見たいだけだったりして（オイ）。

……なんか小野川の性格がモモタロスと被っちゃったなぁ……。いっその事、モモタロスを……（ニヤリ）

そして都合良く全員集合。……え？一人足りないって？それはまた、後ほど出て来る予定です。

では、今日はこの辺で。
……え？テスト一週間前なのに何で投稿したかって？
……そこは突っ込まないで下さい。

第二十話：情報と戦闘

「世界の崩壊を防ぐ為に、幾つもの世界を廻っている、ね……。実際俺も他世界に行った事があるから、否定は出来ないな。」

「良かった！じゃ、信じてくれるんだね！？」

「はしゃぐなユウスケ……。それにしても、俺達がこの世界でする事って一体……？」

「ところで士、ナツメロンはどうした？僕がこの世界に来てから、一度も見ていないが……？」

「…ナツミカンな。あいつはこの世界の仮面ライダーを探すとか言って、朝早く出て行ったが……。」

俺達は今、再び写真館へとお邪魔になっている。ちなみに翔炎は、俺と士達の話を聞いている。霞河と風牙は栄次郎さんのコーヒーをまたもや頂き、小野川と爪雷は何故か口論。渉は栄次郎さんと雑談し、氷甲は俺達の事の成り行きを黙って見ている。

「そしてこれが他世界の仮面ライダー達、か……。」

俺達で挟んでいるテーブルの上に、ディケイドを含めた十枚のカードが。……もとい、十人の仮面ライダーの姿が映されている。霞河を助けたというユウスケさんのクウガ。俺が以前行った他世界の住人、尾上タクミのファイズ。士が先程の戦いで変身したアギト、響鬼というライダー。これでさえ多いというのに、まだ六枚もあるというのは反則じゃないか？……話によると、この十枚の仮面ライ

ダーはこれ以外にも多数存在するらしく、特に、仮面ライダーが存在せず別の戦士達が怪人と戦っているという世界があると聞いた時には驚いた。

「ただいま～。」

唐突に声が響く。声からして、女性だ。

「あぁ夏海、お帰り。」

そう言って栄次郎さんは女性を迎えた。恐らく、あの人が栄次郎さんの孫の夏海さんだろう。

「おじいちゃん、どうしましょう……全然この世界の手掛かりが見つかりません。ライダーの噂さえ、全く……。って、なんか人数増えてません？」

「ようナツミカン、遅かったな。手掛かりならもう見つけた。」

士はそう言って俺を指差した。

「……ども。」

「……唯の高校生じゃないですか。」

……唯の高校生って言われた……。涉や霞河は苦笑い。気のせいか、小野川は机に突っ伏している。いや、気のせいじゃないな。

「ナツミカン、そう言うな。此処にいる四人は全員仮面ライダーだ。」

「…え！？」

「お前もまだまだ洞察力が足りないな、ナツミカン。」

……いや、洞察力が鋭くても分からないだろ。

「……光家秘伝……、」

……ん？秘伝？

「え、ちょ、ナツミカン！？俺なんか悪い事言ったか！？」

……言ったと思うけど。

「笑いのツボ！！」

そう言って夏海さんは、士の首筋に親指を押した。……いや、突き刺したという表現の方が正しいだろうか。
すると……士が突然笑い出した。

「ッハハハハ……な、ナツミカン……ハハッ、一日にそれ、ハハハ……二回もやるな……っハハハ……本当に皮剥くぞ！？ッアハハッ！」

「……夏海さん、それ俺にも教えてくれませんか？ムカつく相手がいるので。」

「あ、じゃあ私も。」

「僕もお願いします。」

「……オイ、待てや。その相手って俺じゃ無いよな？……ってお前等、本当に俺を殺す気か！？オイッ！？」

……この騒ぎは、二十分程続いた。

「……話を戻すが……。」

ようやく本調子に戻ったらしい士は本題に入った。

「この世界の敵……ガルドが大ショッカーによって生み出されたなら、親玉みたいのはいない筈だ。……俺達はこの世界で何をすればいいんだ？」

「その大ショッカーの新幹部を倒せば　良いんじゃないですか？」

渉の提案。確かにそれだったらいけると思うけど……、

「……その新幹部の情報が無い限りは無理だな。」

「あ！じゃあ……。」

『……悠樹！！』

小野川が何か言おうとしたが、翔炎が妨害。……しかし、いやに焦ってないか？よく見ると、他の精霊達も、同じような反応をしている。あの無口な氷甲でさえも。

「……どうした、翔炎？」

『ガルドだ。……しかも、百体はあっさり超えている。』

「……！」

驚くしかない。百なんて数、相手にした事なんて無い。そんな大量に、なんで……？

「……行くしかないな。」

士がそう言った。

「……そうだよ！こんな所で立ち尽くしてないで、早く人を守らないと！」

……ユウスケさんの言う通りだ。今は、多くの人を救わないと！

「……行くぞ、翔炎！！」

『おう！！』

俺の言葉と同時に、此処にいる仮面ライダー全員はガルドの元へと急いだ。

「ガァァッッ！！」

「うわぁぁぁっっっ！！」

ガルドが襲い、人は逃げ惑う。誰も対抗出来ない状況だった。

「……お宝を探す前に、一運動しても良いかもね。」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ……』

……海東さん、まだお宝探しているのか。こんな時に……。

「……よっしゃ、やってやる！！」

『へっ、全員潰してやるぜ！！』

「……こういう時にそういう事言うのも、どうかと思うけど。早く逃げている人達を救わないと。」

『……仲間の仇、打つ。』

『『Ｓｙｓｔｅｍ　Ｌｏａｄｉｎｇ……Ｓｔａｎｄｂｙ』』

……氷甲が珍しく喋ったな。それはともかく、意気込みは十分のようだ。

「風牙、頑張ろう！」

『……無茶はするなよ。』

「皆の笑顔を守る為に……戦う！」

『Ｓｙｓｔｅｍ　Ｌｏａｄｉｎｇ……Ｓｔａｎｄｂｙ』

……ユウスケさんの、笑顔を守る為に戦う……俺達にも、出来るよな？

「……悠樹、行くぞ。」

『早めにケリを付けないとな。』

「……あぁ。」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ……』

『Ｓｙｓｔｅｍ　Ｌｏａｄｉｎｇ……Ｓｔａｎｄｂｙ』

全員の変身準備は整った……。

「「「「「「変身！！」」」」」」

『ＤＥＣＡＤＥ』

『ＤＩ－ＥＮＤ』

『『『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』』』

ここに、七人のライダーが集結した。

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＳＬＡＳＨ』

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｔｗｉｎ　Ｂｌａｄｅ』

「「おりゃぁぁぁっっっ！！！」」

「グガァァッッッ！！！」

俺達二人の攻撃が直撃。一体のガルドは爆散。

「超変身！」

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｃｌａｗ』

「「でゃぁぁぁっっっ！！！」」

「グォォォッッッ！！

ユウスケさんは紫色の姿にフォームチェンジ。手に持つ剣で攻撃。
そこに小野川が爪のような武器で迎撃する。

『Ｉｃｅ　Ｔｏｗｅｒ』

「はあっ！」

渉は地面から氷を突き出させ、攻撃。倒せない敵も、凍り付く。そこに……

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＢＬＡＳＴ』

『Ｈｏｍｉｎｇ　Ｓｈｏｔ』

「「でやぁっ！！」」

「ギャァァッツッ！！！」

海東さんと霞河がホーミング性能の付いた弾丸で迎撃。
……着々と倒しつつはあるが、減る様子が見られない。

「兵隊さん、よろしく。」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ……ＲＩＯＴＲＯＯＰＥＲＳ』

海東さんは戦士を呼び出した。しかも、三人同時に。三人共同じ恰好をしている。

「グァッ！！」

一体のガルドに集中攻撃。……でも、やっぱ敵が多過ぎるなぁ……。

「オラァッ！！俺が最初から最後までクライマックスだぁ！！どきやがれ、ガルド共ッ！！」

……こんな時にあの馬鹿は何を言っているんだ？

「……クライマックスか……なら、」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ……ＤＥＮ－Ｏ』

そう嘆いて海東さんが召喚したのは、赤を基調とした、仮面が何となく桃に見える戦士。士も持っていたカードにも映されてたライダー、電王。

「…俺、参上！」

……。

……恰好悪ッッッ！！！何あのポーズ！？てか、召喚したライダーって喋るの！？

「……へっ、ようやく出番か……。いいか、お前等！！この俺様が、最初から最後までクライマックスなんだよ！」

……小野川と同じような事言ってる。馬鹿だ。あいつも馬鹿だ。

「行くぜ行くぜ行くぜぇぇぇっっっ！！！」

そして、剣を振り回しながら敵に突っ込んで行く。

「オラオラオラァッ！！」

「グギィッ！？」

……剣の扱いはデタラメだけど、強い。一応、仮面ライダーと言うだけはあるな。

「よっしゃあ！俺最強！」

「ざけんな桃仮面ヤローッ！！」

「ぷごぉっ！？」

……小野川？

「テメッ何しやがる！？」

「こっちのセリフだ！テメェ、さっきからクライマックスとか最強とか！クライマックスは俺が考えた明言なんだよ！そして最強は俺一人だ！」

「んだコラァッ!?クライマックスは俺が昔から考えてんだよ!それに、最強はこの俺に決まってるだろうが!」

「んな訳あるか!なら、勝負だ!一体でも多くガルドを倒した方が、クライマックスと最強の両方の称号を手に入れる事が出来るってのでどうだ!?」

「上等じゃねえか!やってやるぜコノヤローッ!!」

……馬鹿達による、奇跡的な共演だな。ぶっちゃけ、ガルドはアイツらに任せても良いんじゃないか?……にしても、小野川と同じ位馬鹿な奴がいるとは……。

「「行くぜぇぇぇっっっ!!!」」

「……悠樹くん……。」

「無視しろ霞河。俺達は人を助けるぞ。ガルドはあの馬鹿達に任せる。」

「ラジャッ!」

「……そういう訳にもいかんのだがな。」

「「!?」」

俺達は振り返った。そこには、異形が。

「鬼……?」

霞河がそう嘆く。そう、その異形は体が黒く、赤い模様がある。鬼のような体型をしていて、黙って見てみるとガルドと間違えそうだが、コイツの場合、喋っている。

「……モモタロスに似ている？」

士がそう嘆く。士が言う＜モモタロス＞というのは良く分からないが、どうやら顔見知りと似ているらしい。

「ふん、貴様がディケイドか……貴様の旅も、此処で終わらせてやる。」

そう異形が言い、どこからかベルトを取り出し装着。そして、ベルトの赤いボタンを押すと、ミュージックホーンが鳴り響く。しかし、そのミュージックホーンも音程が低く不気味だ。

……これ、もしかして……

「変身。」

どこからか何かのパスを取り出し、ベルトにセタッチした。

『Ｎｅｇａ－Ｆｏｒｍ』

これまた低い電子音声。その発声音と同時に敵の回りに銀色の破片が舞い、体に触れたと共にスーツが生成される。そして、どこからか鎧が現れスーツに、顔に仮面が装着された。

……その姿は電王そのもの。違う点と言えば、鎧の色が赤ではなくて、紫という所だろうか。

「……その姿は？」

「…強いて言うならば、ネガ電王という。姿が電王と同じとはいえ、強さは別格だぞ……？」

ククッ、と笑いながらネガ電王は襲いかかってきた。

「悠樹！」

「あぁ！」

俺達も対抗すべく、ネガ電王に立ち向かった……。

第二十話：情報と戦闘（後書き）

ハイ、今回やっと七人全員による戦いが始まったのですが……

電王、あんまり観てなかったんですよね（じゃ出すなよ!?）。にも関わらず、ネガ電王登場……。

ふざけるのも大概にしろ、と言いたいですね。ちなみに何故ネガ電王なのかと言うと、ネガ世界で唯一出て来なかったダークライダーだからです。同じネガの文字があるのに……。

そんな自分の嘆きはともかく、次回でディケイド編も大詰め。楽しんで頂けたらな、と思います。

それでは、また次回。

第二十一話：大乱闘

「うぉぉおっっっ！！！」

「でゃぁぁぁっっっ！！！」

……どうも、こんにちは。霞河舞です。こんな叫び声による始まりで、申し訳ありません。

……まあ堅苦しい挨拶はここまでにして、先程の気合い（という名の叫び）は小野川くんと電王というライダーによる物です。似た者同士、仲が良い訳では無く……めっちゃ敵対してます。しまいには、どっちが多くガルドを倒せるか、なんてやってます、ハイ。

取りあえずあの馬鹿二人組は怪我は無く（どっちかって言うと、あった方が良い）こちらも問題はありません。

……しかし、問題があるのはあちら。

……いや、分かりませんよね。あちらというのは、悠樹くんと士さんの事です。

なんか電王に似たライダー、ネガ電王なる者が現れ、悠樹と士さんに攻撃を仕掛けています。私も助けに行きたいのですが、「こっち来るなアホ！お前は人を助けろ！」なんて事を言われ、私は人を救出しています。

あらかた人を救出したので残ったガルドを倒そうとした時、ホルダーから一枚のチップが出てきました。

『……！これは！？』

風牙もびっくり。私も驚いています。このチップって……。

とにかく私は、ガルドと戦っている渉くん達の元へ急ぎました。

波賀悠樹視点

「ふんっ！」

「痛っ！」

現在、ネガ電王と戦闘中。しかも苦戦。強いったらありゃしない。
あの黒い戦士以上じゃないか？……俺のバトルセンスの無さに呆れるな。

「この野郎！！」

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＢＬＡＳＴ』

「うぐっ！？」

士から放たれた銃弾。全弾命中。ここで、ようやく隙ができた。

「……今だ！！」

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｈｅａｔ　Ｓａｂｅｒ』

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｃｃａ』

チップを連続装填。ネガ電王に切り掛かった……が、

「……馬鹿が！！」

ネガ電王が持っていた剣が、組み替えられて銃になり、発砲してきた。てか万能だな、あの武器。

「うわっ！！」

銃弾が当たり、怯む。勿論、必殺技失敗。起き上がろうとした時、ネガ電王が再びパスを取り出し、ベルトにセタッチした。

『Ｆｕｌｌ－Ｃｈａｒｇｅ』

低い発声音。それと共に、銃にエネルギーが蓄積されているように見える。

「危ないっ！！」

士の言葉と同時に、エネルギー弾が発射。避けられる筈も無く、俺はまともにくらった。

「うわぁっ！！」

予想以上の威力。変身が解ける。翔炎もダメージを受けているようだ。

『うぐっ……。』

「し、翔炎……。」

「……あれが精霊か。まずは一匹……！」

…まずい、翔炎が！！

「させるか！」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ……ＲＹＵＫＩ』

しかし士が前に出て、カードを装填。発声音と同時に二つの残像が現出、回転しながら士に重なる。と、同時に士の……ディケイドの姿が変わった。

赤いスーツ、銀色の鎧、龍を模した仮面、どこか騎士を連想させる姿。確か、カードには＜リュウキ＞と書かれていた。おそらく、＜龍騎＞と書くだろう。

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ』

再びカードを装填。すると、何処からか剣が飛来。士はそれを掴むと同時に銃になっていたブックホルダーを剣に変え、二刀流で攻撃した。

「はぁっ！！」

「グッ！？クソッ……。」

ネガ電王は銃で反撃を仕掛けようとしたが、士はそれを許さない。

「でやぁっ！！」

「チッ……小賢しい！！」

ネガ電王は再び武器を組み替えた。今度は斧。ネガ電王は力任せにその斧をふった。

「オラッ！！」

「っ！危ねっ！」

士は辛うじて避けたが、ネガ電王も攻撃体制に入る事が出来てしまった。

「ククッ……。」

「ち……畜生……。」

……しかし、

『Ｆｕｌｌ－Ｃｈａｒｇｅ』

先程聞いたのとは違い、聞き取りやすい発声音。と、同時にネガ電王に何かが飛んできた。

「……！クッ……！」

「チッ……外れたか。」

「はっ、ざまあ見ろ。」

「んだとコラ！？」

そう言って歩いて来たのは、小野川と電王。飛んで来たのは、おそらく電王の持っている剣の先っぽ。……よく見ると、ガルドの数も相当減っていて、今は渉、霞河、海東さんがガルドの残りを倒してっている。……ってか電王って、召喚された奴だよね？何普通に行動している訳？

「それにしても、そこの物真似野郎！何で此処にいやがる！？」

……電王の口ぶりからすると、この二人は顔見知りらしい。けど、召喚された奴って、元になった存在と記憶を共有でもしてるのか？

「……貴様は俺の事を知っているみたいだが、俺は貴様の事は知らない。」

「何ぃっ！？」

「俺は元々＜ネガの世界＞出身の＜イマジン＞……。たまたま大ショッカーに雇われて、俺は大ショッカーの一部の怪人を牛耳っている訳だ。」

……なんかよく分からない単語が出て来て、話しがよく理解出来ない。あの馬鹿二人組もちんぷんかんぷん見たいだ。しかし、士だけ理解した模様。

「……よく分かんねぇけど、テメェが敵だって事に変わりは無いみてぇだ！行くぜ行くぜ行くぜぇぇぇっっっ！！！」

電王はそう言ってネガ電王に切り掛かろうとした。が……

『Ｆｕｌｌ－Ｃｈａｒｇｅ』

いつの間にかネガ電王は持っていた武器を斧から剣へと変えて、パスをベルトにセタッチ。そして、電王を切り裂いた。

「あばぁっ！？」

……どうやったら剣に切られながらもあんな声を出せるのだろうか、と思いながら電王を見ていると、電王の姿が消えていった。

……早ぇよぉぉぉっっっ！！！あんな意気込んでたのに瞬殺かよ！格好悪ぃよオイィィィッッッ！！！

「……まずは一人。」

あ、ネガ電王狙いをこっちに定めたよ。絶体絶命……。

「……俺を忘れるなぁぁぁぁっっっ！！！」

『Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｓｔｒｉｋｅ』

……小野川が電気を帯びた拳で殴り掛かった。

『Ｆｕｌｌ－Ｃｈａｒｇｅ』

しかしネガ電王は再び必殺技。カウンターの要領で小野川を切り裂いた。

「何でだよぉぉぉっっっ！！？？」

吹っ飛びながら絶叫する小野川。……馬鹿の末路って、同じような物だな。ってかごめん小野川。俺もお前の存在忘れてた。

結局危険な状態には変わり無い……どうしようか？と思っていると、今度は銃弾がネガ電王に降り注いだ。

「ッ……！？」

振り返ると、先程ガルドと戦っていた筈の三人が。

「あ～やっとガルド倒せたよ……凄い疲れた。」

「……確かに、今回の数は多かったよ。さて、後はこの人だけかな？」

「僕はお宝を探さなきゃならないんだ……とっととケリを付けさせてもらうよ。」

おぉ……増援だ。助かった……。

「……お前らぁっ！俺の存在を忘れるなぁっ！」

あ、小野川復活。いつもはウザイ程の生命力だが、今回ばかりは心強い。

「あ、小野川君生きてたんだ。もうちょっと倒れてれば良かったのに……。」

「なんなら、私がやってあげるよ？」

「渉君っ!?舞さんっ!?今回ばかりは止めて!!まずはあっち!!ね!?」

お～小野川めっちゃ焦ってる……。

「……ガルドが全滅したか……なら。」

ネガ電王がそう言うと、でかい灰色のオーロラが。すると、そこから、

……恐竜みたいなデカイ生物が現れた。

「ガァァァッッッ!!!」

……。

「……ちょ、えぇぇぇっっっ!!??何アレ!?ガルド!?いや、認めんぞ!!断固として認めんぞ!!」

小野川がわめき立てるが、突っ込む人は誰もいない。だって、こんな大きさのガルドなんて見た事無く、呆然としているからだ。

「アレは、大ショッカーがお試しで作り出した、失敗作だ。敵も味方も関係無く、見境無く暴れる。」

「……え?じゃあ、お前も危険じゃん。」

「……じゃあな。」

ネガ電王はそう言って、灰色のオーロラに消えていった。

……逃げたよオイ!?自分だけ逃げたよ!?しかもそのオーロラからまたなんか色々な怪物が五体程現れたよ!?確実に始末するつもりだよオイ!!

「……悠樹!!」

「え、あ、ハイ。」

士に声を掛けられる。思わず敬語になった。

「雑魚は俺がやる。デカブツはお前等がやれ。後で俺も加勢する。」

「……そう言って逃げる気じゃ無いよな?」

「……。」

士は黙って怪物達に攻撃を仕掛けた。……完璧に逃げたよ、アイツ。もはや突っ込む気も起きねぇ。

「やれやれ、士は……。じゃあ、僕はあのデカブツを倒すのを手伝うよ。じゃ、先に行ってるよ。」

……海東さん、張り切ってるなー。お宝の為か?てか、この世界に凄いお宝なんてあったかな?

「……よーし、やるぞぉーっ！！」

そう言ったのは、意外にも霞河。何で……？

「ちょ、舞さん!?危険だって!女の子は……」

「煩い！小野川くんは黙っててて！」

「だ、だま……。」

小野川はボロクソ言われ、地面に＜の＞の字を書き始めた。……そんな馬鹿は良いとして、何なの、あの霞河の意気込みは？

「……よーし風牙、やってみよう!」

『……どうなっても知らんからな。』

風牙がそう言うと、霞河は一枚のチップを取り出し、バックルにセットした。

『Ｏｖｅｒ　Ｄｒｉｖｅ　Ｓｙｓｔｅｍ……Ｒｅｐｐｕ』

発声音が響くと、激しい竜巻が霞河を包む。竜巻が収まると、霞河……烈風の姿が多少変わっていた。

軽くなったような装甲、どこか龍に近くなった仮面。そして、翠色の……オーラ?そんな物で構成された翼。

「おぉっ!?舞さん、それは!?」

「ふっふっふ……これぞ烈風・嵐舞形態！風牙やったね、成功したよ！」

『……こんなにもあっさり成功するとは……。』

…嵐舞……嵐のように舞う……なんか、やばそうな形態だな。

「ガァァッッッ！！！」

……呑気に会話している場合じゃ無かった！！

「……じゃ、行きますか！」

そう言って霞河は翠色の翼で飛び、でかいガルドに攻撃を仕掛けた。

「俺らも行くぞ、渉！」

「君に言われるまでも無いね、小野川君。」

「ホント酷いよな、お前！？」

そう言って渉と小野川も後に続いた。

「……空気化してた翔炎さん、大丈夫か？」

『……第一声が物凄く失礼だな、お前。……一応さっきよりは回復した。今すぐにでも奴を倒さないとな……。』

「面倒臭いんだけどなぁ……。」

『Ｏｖｅｒ　Ｄｒｉｖｅ　Ｓｙｓｔｅｍ……Ｓｔａｎｄｂｙ』

普段とは違い、Ｏ・Ｄチップをセットする。

「変身！」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

俺は最初から烈火・飛翔形態へと変身した。

「さて、本格的に開戦といきますか……！」

俺は炎の翼でガルドの元へと飛んで行った……。

第二十一話：大乱闘（後書き）

……ハイ、今回はもうやりたい放題ですね。

一つ目、龍騎へとカメンライド。何故龍騎なのかは、勿論自分が好きなライダーの一人だからです（オイ）。の割には、そんなに目立って無い……（汗）。

二つ目、モモタロスの単独行動。もう、ディエンドなんか無視して必殺技したり……。これは、モモタロスだからこそ出来る事なのです（んな訳あるか）。

三つ目、別世界のネガタロス。……こんなのも良いんじゃないか？って事で、ネガの世界出身って事で。……読み返すと、ホントにやりたい放題ですね（苦笑）。

さて、多分次回でディケイド編もクライマックス。楽しんで頂ければ幸いです（それ以前に読む人いるのか？）。

では、今日はこれにて。

第二十二話：通りすがりの仮面ライダー

「ギャオォォォッツツ！！！」

「うわぁぁぁっっっ！！？？死ぬ死ぬ、絶対に死ぬ！！」

「さっきまで張り切ってたのにねー。いっその事、そのまま死んじゃえー。」

「渉！後で殺す！絶対に殺す！」

『同じく！氷甲テメッ、そいつの変身解きやがれ！！』

『……。』

……ハイ、どうも。波賀悠樹です。何やら死ねやら殺すやら物騒な言葉が飛び交ってますが、そこはあえて無視する方向で。

……やっぱ敬語面倒臭いんで、何時もの喋り方に戻す。現在、馬鹿でかいガルドと交戦中。そいつの体がまあ硬いこと硬いこと。中々ダメージを与えられない。海東さん自慢の射撃も、中々きまらない。ちなみにユウスケさんは前回、怪我人を救急車に運ぶ手伝いをしていた為、今から戦闘に参加している。……まあ、こちらとしても嬉しい誤算がある。

『Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｂｌａｓｔ』

「とりゃっ！」

「グォォッツ！？」

霞河……烈風が、フォームチェンジの力を手に入れた事だ。しかも、新しいチップも使用している。ちなみに先程の＜グラビティ・ブラスト＞は、当てた相手の空間内のみ重力を倍にする事ができる、という物。勿論時間制限はあるが、このチップがあると無いとでは大違いだ。

「グ、グゥゥ……。」

「……よし。」

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｉｃｅ　Ｒａｐｉｅｒ』

発声音と共に、渉はレイピアを持つ。名前の通り、冷気を纏っている。……けど、レイピアって細身の剣だよな？どう使うつもりだ？

「……はっ！」

渉はそのレイピアを突くのでは無く、振った。すると、でかいガルドの足の一部が一瞬で凍り付く。

「何ぃっ？」

「おぉっ！？」

小野川と霞河が驚く。その後、渉はその凍った部分をレイピアで突きまくった。

「はぁぁぁっっっ！！！」

「グッ、グカァッ！？」

そして、最終的に……突いていた部分が砕けた。

「ギャァァッッッ！！！」

ガルドに初めてダメージを与えた。渉、戦略家だなー。

「……やるねー。それじゃあ……、」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ……ＧＡＲＲＥＮ、ＤＲＡＫＥ』

そう言って海東さんは二人のライダーを召喚。

一人はトランプのスート、ダイヤとクワガタをモチーフにしたような、銃を構えた赤い戦士。

もう一人は、トンボのような銃を構えている水色の戦士。……何でこのタイミングで召喚したんだ？

「みんな、今の内に攻撃を！」

あっ、そうか。砕いた部分に攻撃を加えれば！海東さんもこれを考えて召喚したのか？

『Ｂｌａｚｅ　Ａｒｍ』

『Ｃｈａｒｇｅ　Ｓｈｏｔ』

『Ｉｃｅ　Ｓｈｏｔ』

霞河も考えている事が分かったのか、チップをセット。

「成る程。なら……超変身！」

ユウスケさんはそう言うと、緑色の姿に。そして、警察から借りたかは定かでは無いが持っていた銃がボウガンへと変わった。

「さて……。」

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＣＲＯＳＳ　ＡＴＴＡＣＫ』

発声音が響くと、赤い戦士は銃にカードを通し、水色の戦士は銃を操作した。

『Ｂｕｒｎｉｎｇ　Ｓｈｏｔ』

『ＲＩＤＥＲ　ＳＨＯＯＴＩＮＧ』

それぞれ別の発声音が響き、赤い戦士の銃には炎が灯り、水色の戦士の銃にはエネルギーがたまり始めたように見える。霞河の＜チャージショット＞は、まんまの意味だろう。

「……俺、遠距離の武器苦手なんだけど。」

『アホか海斗！このまま遅れをとってもいいのか！？俺達はいつでも最初から最後までクライマックスだろ！！諦めるな！！』

「……っ！そうだったな、爪雷！俺、やってやるぜ！！」

「いや、早くやってよ！？頼むから！！」

……なんの青春シーンだよ？どこぞの三流ドラマかオイ？それにしてもユウスケさん、ナイスツッコミです。

「うるせーな！！今やってやるよ！！」

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｅｌｅｃｉ　Ａｒｒｏｗ』

そう言って小野川は、右手から電気で弓を生成した。

「いけぇぇっっ！！」

そして、八人で一斉に攻撃した。……声を出したのは、小野川だけだが。

「グガァァッッッ！！！」

……この叫びは、おそらく町全体に響き渡っただろう。相当苦しんでいる。今だ！……と思ったが、ここで予想外の出来事が。

……砕かれた足が再生したのだ。

「……え？」

「嘘……？」

「……グロッ！」

上から渉、霞河、小野川の順番。そりゃ、再生したという事は……

…、

「……グォォッッ！！」

反撃するに違いない！
そう思った瞬間に、俺達は吹っ飛んでいた。

「っ！？」

「キャッ！？」

「うわっ！？」

「痛ぇっ！！」

「クッ！！」

「あぐっ！！」

全員ダメージを受ける。おそらく、衝撃波だ。一番近かった俺は、元の状態に戻ってしまった。辛うじて霞河の姿は戻っていない。ちなみに、海東さんが召喚したライダーは消えている。

「やべぇ……。」

「よう、待たせたな。」

こんな時にそういって歩いて来たのは……士。姿もディケイドに戻っている。

「士、遅いよ！？それと、さっきの奴らは？」

「あぁ。さっきの衝撃波で全員死んだ。俺はその内の一体を盾にし

て助かった。」

「……テメェだけ何楽したうえに無傷なんだよ!?」

「煩い、真っ黄色野郎。」

「ま、まっ……き……。」

……小野川、今日は色んな人に言われ放題だな。ここは俺も迎撃するか?

「……士、あのデカブツどうするつもりだい?僕もちょっと困っているんだけど。」

「安心しろ、海東。このカードがある。」

そう言って士が見せたのは……

半分上に烈火、下に翔炎のような姿をした物が映されていた。……何で、そんなカードを士が持っているんだ?

「……そのカードは、ファイナルフォームライドのカード!?」

「成る程……そのカード、いつから?」

「この世界に来た時は何も映っていなかったけど、いつの間にか映っていた。さて、使ってみるか。」

士はそのカードをバックルに装填した。

『ＦＩＮＡＬ　ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ……ＲＥ・ＲＥ・ＲＥ・ＲＥＣＡ』

「悠樹、ちょっとくすぐったいぞ。」

「……いや、俺くすぐったいの苦手なんだけど……。」

「あ、それ分かる。」

「いいから。」

ユウスケさんは俺の意見に同意したが、士はまるで無視して俺の後ろに立つ。そして、俺の背中に触れた。そこから、現実的にありえない事が起こった。

『「うおっ！？」』

何やら俺の体は変型していき、最終的に翔炎を模したような姿になった。

……何、この人体の構造を無視した変型は！？俺の首だった場所なんて、体ん中に潜り込んでるんだよ！？

「な……何じゃこりゃぁぁぁっっっ！！？？」

「……悠樹くんが、翔炎になっちゃった……。」

「……おぉー。凄い凄い。」

……上から順に小野川、霞河、渉。何故か渉だけ、楽しそうに見ている。

「……＜レッカショウエン＞って所か。さて、行くぞ。」

『……どうやってだ？』

「突っ込む。」

「もはや投げやりだなオイッ！？」

……そんなやり取りをしている間に重力効果が切れたのか、ガルドが暴れ出した。

「ガァァァッッッ！！！」

『ちっ……行くしかないぞ、悠樹！？』

「あーもうっ！こうなりゃ、駄目元でやるか！！」

そう言って俺達（？）はガルドに突っ込んだ。

……思いの外、案外効いていた。

「グゴァッ！？」

「……以外と効くんだな。」

『……もはや何でもありだな。』

そんな事をぼやきながら攻撃を加えていく。

「よし、そろそろ行くぜ！」

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＲＥ・ＲＥ・ＲＥ・ＲＥＣＣＡ』

その発声音と共に、自分の体が炎に包まれる。すると、士が自分の目の前までジャンプ。士も同じように炎に包まれる。俺は足で士を掴む。回りから見れば、炎の翼を持ったディケイドのように見えるだろう。そして士はブックホルダーを剣にして、そのまま俺と共にガルドへと突っ込んだ。

『「「はぁぁぁっっっ！！！」」』

その炎の剣で、ガルドに切り付けた。

「ガァァァッッッ！！！」

ガルドは爆散さえしなかったが、かなり苦しんでいる。そして、切られた部分から赤い球体が露出した。……気持ち悪いんだけど。なんか脈打ってるし。

「あれは……？」

『核、だな。あれほど巨大な物は見た事が無いが。』

……あれを破壊したら……！

「……最後の一仕事が残っているみたいだな。」

士がそう言うと同時に、俺の姿が烈火としての体に戻った。何故か、飛翔形態の姿で。
俺は黙ってチップを足にセットした。

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｃｃａ』

「ちょっと待ってよ！」

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｐｐｕ』

発声音と同時に霞河が駆け寄って来た。

「霞河……？」

「この姿での必殺技まだ試して無いし、今回全然目立って無い！！最後だけでも混ぜてよ！！」

「あ、じゃあ僕も。」

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｈｈｙｏ』

「お、オイ……？」

「僕もそんなに目立つシーン無かったから。それに足での必殺技、試して無いんだ。」

「よっしゃ！俺もやるぜーっ！！」

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｔｕｒｙ』

「……後ろの人は無視しようか？」

「賛成。」

「異議無し。」

「オイィィッッッ！！！お前らぁぁぁっっっ！！！」

「……個性的な奴らだな。」

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＤＥ・ＤＥ・ＤＥ・ＤＥＣＡＤＥ』

「ハハハ、確かにね。」

ユウスケさんは、蹴りの体制になる。

「……僕はお宝にしか興味は無いからね。早く済ませちゃおう。」

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＤＩ・ＤＩ・ＤＩ・ＤＩＥＮＤ』

全員が必殺技の体制に入った。こっからがもう、凄まじい。
海東さんが砲撃を放ち、残り七人で一斉に蹴りを放った。
……今日多くの被害を出したガルド達は、あっという間に消え去っていった……。

「……結局失敗だったじゃない。ディケイドも烈火も両方の始末。」
……ある写真館の傍ら。そこに、一人の男と一匹の白い蝙蝠が会話している。

「……次は＜ライダー大戦の世界＞か……。次こそ必ずディケイドの旅は終わる……。」

「……オリジナルのライダー達ね？うふふ……ディケイド達もどうなるのかしら？」

「だが、問題は大ショッカーだ……何としても、奴らだけは……！」
そう言って男は灰色のオーロラへと消えていき、白い蝙蝠は写真館の中へと入っていった……。

「……士達は、これからどうするんだ？」

「これからも、旅を続けて行く。自分の世界を探しに、な。何せ俺は、通りすがりの仮面ライダーだからな。」

「……ユウスケさんも頑張って下さい。」

「うん、ありがとう舞ちゃん。風牙さんもね。」

『……あぁ。』

「あの、夏海さん、笑いのツボって今すぐ教えてもらう事って可能ですか？」

「渉ぅぅぅっっっ！！！お前まだ企んでたか！！いや、いいです夏海さん！！コイツの言う事は一切聞かないで下さい！！」

「あ、アハハ……。」

さて、と……。

「……多分鳴滝は次の世界でも何か企んでいると思う。油断するなよ。」

「お前こそな。翔炎と一緒に、この世界でも頑張れよ。」

「当たり前だ。……また、いつか。」

『またな、破壊者。いや、……門矢士。』

「あぁ…。じゃあな。」

そう言って士は先に写真館へと入って行った。

「あ、士君！……ごめんなさい、士君って、いつもあんな感じで……。」

「あ、お構いなく。自分もあんな性格なので。」

「えー！？全然違うでしょ……。」

「いや、似たような物ですよ？」

そうかなー？と首を捻るユウスケさん。多分、士とは長い付き合いだから、多少の性格の差異も考えているんだろう。

「じゃあ、お二人も気をつけて。」

「夏海さん、また来て下さい！笑いのツボ教えて下さい！」

「あ、僕も！」

「あ、いいですよ。」

「夏海さん！そこ承諾しちゃ駄目ぇぇぇっっっ！！！」

「……彼、なんか可哀相だね。」

「……いや、何時も通りの風景ですよ？」

耳打ちするユウスケさんに、軽く答える俺。

「じゃ、みんな！元気で！精霊のみんなも！」

「この世界でも頑張って下さい！」

「「「はい！」」」

小野川以外の俺達は答える。そして二人は写真館へと入っていく。

瞬きすると同時に、写真館は元の喫茶店へと変わって……いや、戻っていた。

「……行っちゃったね、波賀君……。」

「あぁ、そうだな……。」

「……ねぇねぇ、なんか疲れたし、たまには一緒に夕飯でも食べない？」

「あ、家にしゃぶしゃぶの材料置きっぱなしだ。」

「じゃ、今日はしゃぶしゃぶパーティーって事で！」

「いいね、舞さん！じゃ、波賀君ん家に行こうか！」

「……物体Ａはどうするよ？」

「……置いて行こうか。」

「右に同じく。」

「いや、待とうよ！！ホントに酷いよな、お前ら！俺は着いて行くぞ、地の果てまで！！」

「……真のストーカー、此処に見参。」

「渉ぅぅぅっっっ！！！」

『……平和だな、風牙。』

『同感だ。』

『おっしゃー！しゃぶしゃぶだぜ！！』

『いや、お前食えないだろ。』

『うっ！！』

『……。』

俺達は騒ぎつつも、俺の家へと向かった……。

第二十二話：通りすがりの仮面ライダー（後書き）

ハイ、今回でディケイド編、終了しました、が……。

……何だか、申し訳ない気持ちでいっぱいです。

まず、一つ目。
士の名台詞「通りすがりの仮面ライダーだ！覚えておけ！」のシーンが無かった事。
ぶっちゃけ今思うと、ガルドって口きかないから士に問い掛けるなんと事は出来ないんですよね。その為、最後の方に……士の台詞に期待していた方、すみませんでしたｍ（＿＿）ｍ

二つ目、回りのキャラの空気化。
読んでいけば分かると思いますが、もう空気化してる人多いですね。その点で抗議する者約二名……。

三つ目、最後の場面。
……僕、ああいうシーン書くの初めてでして、なんかグダグダだったろうと思います。……自分の文才の無さに泣きたい（泣）↑言ってるそばから泣いている

もう一度だけ言わせて下さい。

申し訳ありませんでした（土下座）

さて、こんな雰囲気ですが、お知らせがあります。

……また次回からコラボ編始めちゃいます（待てぇぇぇっっっ！！？？）

今カッコ内と同じツッコミをした人、そう思うのも分かります。確かにファイズ編、ディケイド編と続けて来たので、通常のストーリーに戻せ！という気持ちもあると思います（人によって様々ですが）。しかし、次回は今まで以上に張り切っちゃいます。何故なら……

……次回から正六面体様の作品、＜仮面ライダートランス＞とコラボします！初めての他の作者様とのコラボですので、このコラボストーリーも楽しんで頂けたらな、と思います。
トランス側とのストーリーの違いは多少会話が異なるという点と、烈火キャラ視点によるストーリーの進行という点です。

正六面体様、烈火とのコラボをご承諾して頂き、ありがとうございます！

通常ストーリーを楽しみにしていた読者様、大変申し訳ございません。どうか次回からのトランス編、今後の烈火ともよろしくお願いします。

第二十三話：再び学校（前書き）

ハイ、今日からトランス編です。
……と言っても、トランス側のキャラ一人の上、数秒しか出ていません。ご注意を。

第二十三話：再び学校

『……続いて、ニュースです。昨日夕方、多数の怪物が出現、多くの人達を襲いました。この事件で、５０人は死亡、７０数人が重軽傷を負いました。
また、この怪物と戦い、怪我をした人達の救助を手伝った仮面の戦士達を見たと言う証言も多くの人達、または病院側からも寄せられています。警察は、この怪物達が今までの連続殺人事件の犯人と認識し、この特撮じみた事件、また、仮面の戦士達との関連性も調査する模様です。……さて、』

ピッという音と共に、女性の姿が消えた。勿論、テレビの電源を切ったからだ。

「……めっちゃ公になってやがる……。一応覚悟はしてたけど……。」

『……テレビ出演おめでとう、と言うべきか？』

「言わなくてもいいし、全然めでたくねぇ。……どうするんだよ、これから……。」

『何時も通りに生活していくしか無いだろう。……それと、俺は今までの戦いで眠い。学校では寝させてもらうぞ。』

「俺にとっちゃ嬉しい事この上ないな。出来る事なら、お前を家に置きながら学校へ行きたいのだが。」

そう言いながら玄関を開ける。冷たい風が入り込み、体が震える。
……ちなみに、今日から再び学校だ。……また疲れる羽目になるな、こりゃ。
そう思いながら通学路を歩く。しばらくすると、何か走ってくるような気配がした。……皆さんはもうお分かりだろう。

「波ぁぁぁ賀ぁぁぁっっっ！！！」

ハイ、予想通り。馬鹿小野川だ。おそらく、殴り掛かって来てるだろう。ワンパターンなんだよ、あいつは……。
そう思いながら殴り掛かってくる腕をさっと避け、おまけに蹴りをかましてやった。

「うぎぇ！？」

よく聞く言葉にならないような声を上げながら、ズザァッと派手に転んだ。……取りあえず尋ねてみる事にしよう。

「小野川……こんな朝から何やってんだ、お前？」

「おのれ…波賀！なんでいつものごとく避けんだよ！？」

「お前も学習しろ、小野川。」

うん、何時も通りの会話だ。昨日の戦いが嘘のようだ……。てか、コイツは疲れという物を知らないのか？

「やあ、悠樹くん……と、もう一人。」

そんな時、妙なタイミングで霞河登場。コイツは昨日の疲れが取れ

ているようだ。

「舞さん!?俺何か悪い事しました!?」

「存在自体だろ。後おはよ、霞河。」

「ノォォォッッッ!!!」

「うるさ〜い、小野川くんのへんた〜い。」

……煩い事と変態って何の関係性があるんだ?まあコイツは元々変態の塊だから、あえて突っ込まないでおく。

「……俺、もう立ち直れない……ぐぁぁ……。」

……なんか演技じみた言い方をした小野川は、バタッと倒れた。

「悠樹くん、そろそろ学校が始まるよ。そろそろ行こうではないか。」

「はいはい。」

そう言って倒れている小野川を無視して学校へ向かう。

……後ろからの不思議な幾つかの気配を感じながら。

「おはよう、波賀君、舞さん。」

「よう。昨日はお疲れ。」

「おはよう～。」

現在、学校の校門。此処で渉と合流した。……うん、何時ものメンバーだな。

「波ぁぁぁ賀っっっ！！！」

「……復活しやがった。」

「てか足早いね、小野川くん。」

「まあ、あれで転ぶのが日常何だけどね。」

「ひでぶぅっ！？」

……渉の言葉とほぼ同時に小野川はまたもやこけた。

「……ホントだ。」

「でしょ？」

そう言いながら歩いて行く二人。……俺も行くか。

小野川海斗視点

あの野郎供……俺を置いてった上に、無視して放置だとぉっ!?畜生……あの二人、八つ裂きだ!……え、舞さん?……舞さんは駄目でしょ。

そんなこんなで職員室の前を通ろうとした時、職員室から見かけない女の子を見た。何やら担任と会話している。

……もしかして、転校生!?

「……これはニュースだ!!」

そう言って俺は、教室へと走って行った。

波賀悠樹視点

―聞いたか？あの怪物達と仮面の戦士の噂？―

―聞いた聞いた！何でも、でかい怪物と戦ったとか！―

―俺なんかこの目で見た！しかもその内一人は、この前学校で現れた赤い戦士だったぜ！―

―本当か！？俺も見たかったー！―

「……もっぱら広まってんな。」

「そりゃーテレビで放送される位だしね。話題にもなるよ。」

「でも、これで僕達も動きにくくなった訳だ。」

……うん、渉の言う通りだ。これからは気をつけにゃならん。

……そんな事を考えていると、突然扉が開いた。全員の視線が開けた本人……小野川に集中する。

「……何してんだ、小野川？」

「いよーく聞いてくれた、波賀！！」

煩い、とはあえて言わなかった。そりゃ、いつもの事だし、何よりアイツの焦りようが気になる。

「何と！今日また転校生がやって来た！しかも、女の子だぁぁぁっっっ！！！」

―おぉぉっっっ！！！―

「……は？」

男子全員喜ぶ。女子は男子程では無いが、気になる様子。ただ、霞河と渉は、ポカンとしていた。

……だから何でこんな時期に？

……ＨＲ。本棚とロッカー、略してＨＲ。

……嘘だ。先生と生徒がなんやかんやするアレだ。……すんません、なんか久しぶりにボケたくなった。

話を戻し、そのＨＲでいつも通り先生がやってきた。

「オラー、席着けー……って何だ？珍しく全員座ってるじゃないか。特に小野川。」

「先生！そんな事より転校生紹介して下さい！」

「……第一声がそれかお前。てか、お前の情報網に心底感服するよ。てか、その能力を勉強に生かせ。」

「いや～それほどでも。」

「褒めてねーよ。……じゃあ、入って来い。」

先生の言葉と共に入って来たのは……小野川の言っていた通り、女子。……登校中に感じた不思議な気配を、アイツから感じる。

「乙（きのと）　五月羅（めいら）です。メイと呼んで下さい。よろしく。」

―よろしく！！―

……再びハモる男子の声。小野川なんて、普段の二倍は声出してんぞ。……それにしても、五月羅で＜めいら＞か……。言っちゃあ失礼だけど、手の込んだ名前だな。

「……悠樹くん……。」

「ん？」

「……やっぱ何でもないや。」

……じゃ、声掛けんなよ。

その心の嘆きと共に、一時間目が始まるのだった。

そして、一時間目終了。……え？何してたかって？

……寝てた。眠気に負けた。まあ、国語の文章を読むだけだったか

ら、問題は無いだろう。そして、休憩の合間に学校の屋上へと向かった。勿論寝る為だ。

……え、寝過ぎだって？そう言うなよ、昨日のしゃぶしゃぶパーティーかなりまで長引いたから。それに二時間目は文化祭の話し合いだし、かったるくてやりたくない。

……話して無かったな。ウチの学校は珍しく一月に文化祭がある。

……お、そんな事を説明している間に屋上の扉が目の前だ。

しかし、先客がいた。

「……何してんだ、お前等？」

その先客……小野川、渉、霞河に声をかけた。

「何って……決まってんだろ、考える事は皆同じだ。」

「……僕もまだ眠気が引いてないからね。」

「あ、私は温まりに来ただけだけど。」

……俺と同じ事考えてるとはね。しかも、何故か精霊というオプション付きときた。

「……しかし、この眠気を作った原因は皆さんお分かりですよね？」

「物体Ａ君。」

「変態小野川くん。」

「ちょ、何そのあからさまに虐める理由で付けたようなあだ名？い

や、別にそこは良いんだ。」

（（（良いんだ……。））））

「だけど、その時にはみんなノリノリだったでしょ？だから俺だけのせいでは無い。うん、その通り。」

「何一人で納得してんだお前？きっかけを作ったのはお前だろ。そんなお前は此処の屋上から頭から地面に向かって突っ込んでろ。」

「ちょ、それ遠回しに死ねって宣告してるだろ。お前最近毒舌度が上がってるぞ。渉から移った？」

「君を弄りたい気持ちは皆同じでしょ。」

「ちょ、渉！？んな訳無いだろ！てかお前等そんな事考えてたの！？もしかして、舞さんも……」

「……さて、そろそろ時間だし、教室に戻るか。」

「無視ぃぃぃっっっ！！？？てか無言のいじめって、毒舌より傷付くわ！！」

「あ、そだ悠樹くん。」

「ハイ、また無視！！」

「どした、霞河？」

取りあえず小野川は無視して、用件を尋ねる。

「やっぱ言っておくよ……今日転校して来た子……メイちゃんだっけ？気をつけた方が良いよ。」

「……どういう事だ？」

『確証は持てないが、私の事が見えているような感じだった。警戒する余地はあるだろ。』

霞河の代わりに風牙が答える。それほど警戒視しているって事か。

「……了解。」

俺が答えると、霞河と風牙は教室へと戻って行った。

「……またなんか一波乱ありそうだね。」

「昨日の今日だぞ……勘弁してくれ。」

「確かにね……。氷甲や爪雷はなんか心当たりある？」

『いや、無ぇな……。俺は特に人間に関わりもせず、この世界に来たからな。』

『……。』

「氷甲も分からないみたいだね。……そういえば、翔炎はどうしたの？」

「……アイツも寝てる。今まで戦い続きだったからな。それと、俺

達ももう寝ようぜ。そういえば、三時間目って何だっけ？」

「……社会だけど。」

「山さんか。確か今日いないから自習か？なら、昼まで寝るか。」

「……君、相当問題発言してるよね。それに便乗してる僕もどうかと思うけど。」

「……じゃ、お休み。」

そして俺は、夢の世界へとダイブした。

……余談だが、小野川は結局ショックで立ち直れず、昼まで廃人になってたとか。

第二十四話：異世界からの来訪者達（前書き）

……ハイ、今回は今まで一番長いです。しかも、前半なんてトランス側のとそのまんまです（正六面体様、すみません！）。
なので、嫌だ！という人は回れ右を、別に良いよ！という人はそのままお進み下さい。

第二十四話：異世界からの来訪者達

「……翔炎の事が見えていた、だと？」

『あぁ。だが、敵ではないみたいだ。』

現在、昼休み。結局三時間目まで爆睡して戻って来たところ、乙五月羅が翔炎と会話したらしい。その乙は今教室にいないのだが。

「……放課後に事情を聞く必要があるな。」

『あぁ……。』

俺は昼飯を食べた後、放課後までその事だけを考えていた。

そんなこんなで放課後。調度彼女は帰りの準備をしている。俺は霞河に翔炎の事を話し、一緒に乙の元へ向かう。俺は乙に声をかけた。

「乙さん……でいいんだよな？翔炎から話は聞いている。精霊が見えるってのは本当か？」

「最初はガルドの仲間か何かと思ったけど、それだったらわざわざ翔炎に話しかけたりしないよね。今暇？少し話が聞きたいんだけど……。」

「う、うん……。」

俺の言葉に続き、霞河も話す。……そりゃ、突然こんな事話された上に、知らない（おそらく）単語を使ったら戸惑うよな。まあそれより、早く話を聞かなきゃな。

しかし、唐突にデカイ声が。

「波ぁ賀ぁぁぁっっっ！！！お前はまた転校生に手を出すのかぁぁっっ！！」

……手を出すとは失礼な。そう思いながら俺は小野川にカウンターをぶち込んだ。

「ぐふっ！？」

勿論、クリーンヒット。そりゃもう、清々しい程に。

「もう、何やってるんだよ。いい加減、小野川君も学習しないと。」

そう言いながら、渉も来た。渉には説明していなかったが、翔炎が直接伝えたのだろう。……そういえば、名乗るの忘れてた。

「自己紹介がまだだったな。波賀悠樹だ。よろしく。」

「私は霞河舞よ。」

「秋元渉です。」

「俺は……、」

「知ってるよ。朝見たから。」

……朝っていうと、登校中か。やっぱあの気配の一人は、乙だったか。

「おぉぉぉぉ！見ろ、波賀！！俺の勝ちじゃぁぁっっ！！」

突然叫び出す小野川。てか、俺とお前って何か勝負してたっけ？

「小野川君、何が勝ちなの？」

幾分かまともな思考回路の渉が律儀に尋ねる。

「えーっと、確か…なんとか変態君だよね？」

……どう転んだらそんな名前になるんだ、オイ？

「え、何ソレ？」

「だって朝、舞ちゃんにはそう呼ばれてたし。」

「ああ、わかったよ小野川君。君の言ってた勝ちって言うのはこのことなんだね？違うかい？」

「違ぇぇぇっっっ！！！」

渉の毒舌ラッシュ炸裂。小野川は大ダメージを受けたのか、その場に崩れ落ちた。

取りあえず此処にいるのも何なので、喫茶店に行く事にした。

喫茶店に着くと同時に小野川が復活したのか、猛ダッシュで来た。
そして思い思いの飲み物を頼み、話を再開させた。

「えっと、さっきから見えていると思うけど、是が俺たちの精霊。
精霊ってのは、四種類存在する別世界の生き物。この焼き鳥が翔炎。
」

『誰が焼鳥だコノヤロー。』

其の瞬間、乙は浮かんでいる翔炎を引っつかんで、自分に引き寄せた。

「え、ちょ、オイ!?」

「やっぱいい、この感触……。」

『こら!俺を突くな!』

しかし、ばたつく翔炎をしっかり押さえ付け、突きまくる乙。……
コイツの感触、そんなによかったっけ?

「癖になるんだよねぇ……。」

……意外な感覚の持ち主もいたもんだ。……にしても、この状態は回りから見ると……まあ、いいや。

「あっ、気にせず続きどうぞ。」

『俺が気にするんだ……。』

「じゃあ、そうする。」

『オイィッ!?悠樹、裏切りやがったな!?』

「こっちが私の精霊、風牙だよ。」

霞河は翔炎の叫びを無視して続けた。おそらく、コイツも見てて面白いのだろう。

『……青龍族の風牙だ。』

散々悩んだ揚句、こんな自己紹介。風牙は説明は得意だけど、自分の事を話すのは苦手のようだ。

「こっちは氷甲。」

渉が氷甲を紹介するが……、

『……。』

こういう時でも、無言。

「俺の相棒、爪雷。」

『ふんっ。』

……爪雷にとっちゃ、幾分か普通の挨拶だな。周りからはそうみえないと思うけど。

『なぁ、メイといったか？』

「ん？なぁに？」

頭を撫でながら返答する乙。……翔炎、人形扱いだな、完全に。

『お前、この世界の住人じゃないだろ？異世界から来た、それで正しいか？』

「え？」

霞河が驚いたような声をあげる。霞河だけではない。俺も含め、声を出していないだけで驚いているのは同じだ。

「へえ、お利口さんなんだね。可愛い可愛い。」

乙は特に隠しもせず、さもあっさりと答える。……翔炎の頭をガシガシと撫でながら。

『イタタタタ！！こら！いい加減離せ！！地味に痛い！！』

騒ぎ立てる翔炎。普段じゃ見れない光景だな。

「そんな事より、異世界から来たのは本当なのか？もしかしてライ

ダーの世界からか？」

『オイィィッッ！！そんな事って何だ、そんな事って！？って、イタタタ！！』

「うん。トランスの世界から来たんだ。ゼロの世界経由でね。」

……想わずライダーの世界って言っちゃったけど、本当にライダーの世界出身とはな。……にしても、トランスとゼロ？士も行った事が無いライダーの世界なのか？

「其の世界について何か知ってる、氷甲？」

『……。』

渉は氷甲に尋ねる、がやはり無言。だが、気のせいか首を横に振った気がする。

「知らないみたい。」

「風牙、あなたは？」

今度は霞河が風牙に尋ねる。

『いや、私も知らないが。爪雷、お前はどうだ？』

『……知るかよ、そんな世界。』

……いやいや、そんなって言っちゃ駄目だよ、爪雷。

『……俺もだ。確かにこの世界に来るまでにいくつか世界を回ったが、そんなライダーの名前は聞いたこと無い。』

翔炎も知らない、か……。珍しいな。そんな状態で話しても説得力無いけど。

「そうかもね。比較的新しいライダーだと思うから。ゼロもそうみたいだし。で、ライダーを知ってるっていうことは、あなたもライダー、悠樹君？」

「……そうだ。ここにいる４人全員がライダーだ。こいつら精霊の力を借りて変身している。敵の名前はガルド。大ショッカーって組織に作られたらしい。乙さんはそのトランスなのか？」

「メイでいいよ。トランスは私じゃぁないんだ。本人はこの世界で仕事探ししてるよ。」

……俺は顔を引き攣らせた。いやに現実味のあるライダーだな、オイ。

……にしても、昨日まで写真館だったのにな、此処。

「……ふぅ。まったく元通りだな。つい最近まではアイツ等の写真館だったのに…。」

「確かに、あのおじいさん入れてくれたコーヒーおいしかったねー。」

霞河の言う事には、激しく同意する。今俺が飲んでいるコーヒーより、栄次郎さんのコーヒーの方が断然美味しかった。

「……ねぇ、変なこと聞くけど、ディケイドって知らない？」

「知ってるのか！？」

突然聞かれて驚いた。メイって、士達の事知ってるのか？

「うん、前に私達の世界に来たことがあって、トランス達と戦ったの。じゃあ、やっぱりこの世界にも来たんだね？」

「あ、あぁ。まあな……。」

『……そうだな』

まさか、本当に知り合いとはな……。てか翔炎、まだ撫でられてたか。

「ディエンドは？ライダーを召喚する。」

「うん、来たよ。お宝探してた。」

霞河が俺の代わりに答える。……てか、海東さんが次の世界に行くとこ、見てないな。

「あはは、あの人らしいな…。もう少し早く来れば良かった。そうしたら粋が喜んだのに…。あっ、粋……形粋（かたちすい）ってのがトランスやってるんだ。他にも永瀬友樹（ながせともき）と古池修司（こいけしゅうじ）って人がいるんだけど、彼ら

も仮面ライダーだよ。あー、ぶっちゃけ言うと、私も＜クリーツ＞っていう仮面ライダーなんだ。」

……やっぱり。翔炎が見えているからまさかとは思ったけど、本当にライダーだったとはね。

「へぇ、比率が同じだね。私達気が合うかも！」

「そうだね。」

霞河とメイ……二人とも女ライダーだからか、どこか意気投合している気がする。

「……あのさ、話の途中悪いんだけど、どうしてこの世界に来たの？ディケイド見たいに旅をしてるとか？君の世界の敵はどうなったの？」

……確かに気になるな。何か理由があって来たに違いないと思うが。

「……オイ！俺を無視するな！」

「煩い、黙れ！……ていうかいたんだ、小野川…。」

「煩いわね、黙ってて！……気づかなかったわ、小野川くん……。」

「……静かにしててくれない？少しは空気読もうよ、小野川君……。」

俺を含め三人で言った。……てか、本当に忘れてた。空気薄いなー、小野川……。

「うわっ！みんな酷っ！！だが、まだメイさんが……」

「ケー、ワイ。」

「嫌だぁぁぁっっっ！！！」

……店内だってのに大絶叫。他の客の視線が一斉に小野川に移る。

……てか、メイってノリ良いな。

そして、メイがこの世界に来た理由を話す。……話が多少長いので、少し省かせてもらう。

この世界に来たのは、鳴滝のせいらしい。……あの鳴滝だ。ベレー帽の鳴滝だ。ベレー鳴滝だ。

そのベレー鳴滝の嘘で、メイの世界の敵＜キメラ＞の根源が、先程言っていた＜ゼロの世界＞の住人……ゼロとアリアスなるライダーと言われ、倒しに行く事になったらしい。が、それが嘘じゃないかと思い、逆に手を組んだが、結局大当り。しかし、ベレー鳴滝はキレて怪人達を送り込む。それを全て倒す事に成功した。そして、例の灰色のオーロラを通ってこの世界に辿り着いたとか。

現在、メイの世界には他にライダーがいないらしく、早く戻らないと被害が拡大してしまうらしい。が、いつ灰色のオーロラが現出するか分からない為、トランス……形粋達は働いているとか。

軽い感じでメイは話しているが、一瞬表情が暗くなった。やっぱり、自分の世界が心配なのだろう。

「なるほど…。そういえば、氷甲達は世界を渡る術を持ってるよね？それを使えば乙さん達を送れるんじゃないの？」

話を聞き終えて最初に口を開いたのは、渉。……だけど、その方法って……

『……そうしてやりたいのは山々だが、実際その能力は今意図的には使えない。そのオーロラが現れるか、俺たちの能力がまた使えるのを待つしか方法は無いな。』

……やっぱ、まだ駄目だったか……。

「そっか……。」

「そういえば、夜は何処で寝てるの？」

……それが一番の疑問だよな。

「前のゼロの世界では、公園とか。この世界は今日が最初だから、これから探すところ。そろそろ粋達の仕事が終わったかな……？合流しなくちゃ。じゃ、また明日学校でね。」

……そう言って立ち上がったメイ。何か自分達が力になれないだろうか？そう思っていた刹那、

「ちょっと待ったーーっ！！俺の出番だぜ！！」

唐突に小野川が叫んだ。だから煩いって。そして復活早いって。てか考える事お見通しだって。

「じゃ、君の家には古池さんという方を、僕は永瀬さん、舞さんの家には乙さん、波賀君の家には形さんを泊めるって事で良いかな？」

「渉ぅぅうっっっ！！！」

渉が妨害した事により、小野川絶叫。だから、煩いって。

「大体君の言いそうなことはわかってるよ。どうせ、『女の子が夜外で寝るなど危険です。僕の家にどうぞ来てください！！』とか言うつもりだったんでしょ？それなら、ちょうど４人同士。一人ずつ分けた方が得策かなぁと思ってさ。二人とも、家は大丈夫？」

「私の家は、全然ＯＫ。」

「問題無い。」

……俺の家族は俺が小さい時に事故で死んじゃってるからなぁ。……え？初耳だって？いや、前に一度（第九話）言った筈だけど……。え？短い上に唐突すぎて分からなかった？……じゃあ、今言ったから良いだろ。

「やった！じゃ、今からみんなに電話するね。」

メイはそう言って携帯を取り出した。ちなみに、小野川は机に突っ伏している。

そして、メイは現在電話中。おそらく、相手は形って奴だろう。しばらく話した所でメイは携帯を離し、こちらに質問してきた。

「えっと……悠樹君たちが変身するライダーって名前何？」

「烈火。」

「烈風。」

「烈氷。」

「烈雷。」

『悠樹、ガルドだ！』

『舞、ガルドのようだ。』

『……私達の出番のようだ。』

『ぼさっとしてねぇで、さっさと行くぞ！！』

……見事、と言える程四人と四体の言葉がシンクロ。……例外として、氷甲がワンテンポ遅れてたが。

とにかく、一斉に言われたおかげでメイの頭は混乱している様子。

「えっとね、粋、名前は…ガルドだって。あれぇ？敵の名前と同じじゃん…」

オィィィッッッ！！！おもくそ聞き間違えてんぞ！！どう転んだらそうなる！？確かに聞き取りにくかったけど！！

……取りあえず、電話を切ったメイに言ってやった。

「あのさ……人の話し聞いてた？敵の名前のライダーなんているか。てか、いてたまるか。」

「あはは…、そんな事より、敵でしょ？早く行こう。今応援を呼ん

だから。」

そう言ってメイは出口へと向かった。……うまくはぐらかされたな。けど、応援か。助かるな。

「悠樹くん、行こう！」

そう言って霞河も出口へ向かう。

「渉、小野川、行くぞ！」

「あ、小野川君、会計ヨロシク。」

俺と渉も出口へと向かった。

「何でこうなるんだぁぁぁっっっ！！？？」

『海斗、ぼさっとすんな！』

「爪雷ぃっ！？お前もかぁっ！！」

……後ろからなんか聞こえたが、無視しておいた。

現場では、十数体のガルドが暴れていた。

「……最近、なんか多くないか？」

「是が俗に言う、ご都合主義ってやつなのかしら？」

「何の事だ、霞河？」

「さ、それより戦わないと。」

「波ぁ賀ぁぁぁ！渉ぅぅ！よくも俺に支払わせやがったな！！そして爪雷！お前もよくも置いてったなコラァッ！！」

『煩ぇぇぇっっっ！！！お前を待ってると相当時間掛かるんだよ！！』

……また始まった。この世で最も奇妙な口論。

「小野川君は無視して、早く変身しようか。」

「コラァッ！！主役の俺を置いていくな！！」

そう言いながらも、俺達は変身準備を終える。

『Ｓｙｓｔｅｍ　Ｌｏａｄｉｎｇ……Ｓｔａｎｄｂｙ』

メイは電話していた時とは別の白い携帯を取り出し、腰の辺りで構える。すると、白い携帯から光の筋が現出し、ベルトになる。……

…ファイズといい、携帯で変身するライダーって結構いるもんだな。

「「「「「変身！！」」」」」

『『『『『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』』』』』

『Ｓｔａｎｄａｒｄ－Ｆｏｒｍ』

変身完了。……クリーツってライダーは俺達の姿とは逆に、白いスーツを身に纏った姿をしている。

「……味方が増えるのは良い事だな。さぁて、開戦といきますか。」

『Ｈｅａｔ　Ａｒｍ』

俺はいつもの炎の腕、殴るバージョン状態にし、一体のガルドを殴り付けた。

「オラッ！！」

「グガァッ！？」

この一連の動作を契機に、戦いが始まった。

「はぁぁぁっ！！」

数体のガルドを殴り付ける……が、中には雷属性のガルドも。効く

相手と効かない相手といる。

「そんなに効かない相手もいるんだ……。ま、キメラもそんな感じだもんね。フォーム・クリエイト、Ｃ．Ａ．Ｔ」

『Ｃｒｅａｔｉｎｇ　Ｂｌａｃｋ－Ｃａｔ』

発声音が告げたと同時に、クリーツの姿が変わった。発声音が告げた通り、黒猫のような姿に。そして両手から光る爪を出し、切り付け掛かった。

「引き裂くなら、俺だって得意だ！」

『上等だ！』

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｃｌａｗ』

小野川も電気を帯びた爪を装備。一体のガルドに切り付ける。その方向に渉も駆け出して行った。

……つまり、渉＋小野川のグループと、俺＋霞河＋メイのグループに分かれた訳だ。

「行くよ！」

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｃｙｃｌｏｎｅ　Ｓｈｏｔ』

霞河は翠色の銃……サイクロンショットを装備。それで敵を撃ち抜く。

「グギャッ！？」

「やっ！！」

そこでメイが怯んだ敵を切り裂き、倒していく。……初戦なのにチームワークぴったりだな、アイツ等。

……って、俺も実況してないで、ガルドを倒さないと。

「でやぁっ！！」

「グォォッッ！！」

よし、一体ガルド撃破。

「へー、強いねー悠樹君。」

「そちらこそ、フォームチェンジが豊富のようで。」

「黒猫のライダーってのも、珍しいよね。」

「この姿、猫のＤＮＡを使ってるんだ。」

お互い軽口をたたき合いながら敵を倒していく。

『Ｉｃｅ　Ｔｏｗｅｒ』

突然、遠くに発声音が響く。そちらを見ると、渉が氷の塔で敵を閉じ込めていた。

……小野川ごと。

「……え？ちょっとアレ……大丈夫なの？」

「気にするな、何時もの事だ。」

「そうそう。それに、小野川くんなら大丈夫だよ。……色んな意味で。」

流石にアレは無いだろうとメイが心配する。……が、

「……そうだよね。」

早くも俺達の空気に馴れたのか、気にせず戦いを続行した。ちなみに、小野川は無事脱出し、渉に掴みかかっている。

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｔｕｒｙ』

そして、必殺技発動。一気にカタを付けるつもりだ。しかし……

『ｄｅｒ－Ｃｒａｓｈ　ｓｔａｒｔｉｎｇ』

聞き慣れない……いや、訂正する。クリーツに似た発声音が響く。と、同時になんかエネルギー弾が飛んできて爆発。

……付近にいた小野川も巻き添え。

エネルギー弾が飛んできた方向を見ると、三人の戦士が立っていた。

鈍い金色の重厚な装甲を纏った、先程のエネルギー弾をぶっ放したらしきライダー。

両手に銃を構えた機械的なライダー。
……三人目のライダーの姿に驚いた。士に同行していた一人、ユウスケさんのクウガと、小野川と同じ位の馬鹿、電王の姿を足して２で割り、２ルート掛けて３．２引いたような感じだ。……え？２ルートと３．２いらない？……だよね。
取りあえず、彼等に駆け寄った。
「すまん、やっぱり破壊力ありすぎだったみたいだ。ハハハ。」
……反省のカケラも無いような謝り方だな、オイ。
「テメェッ！お前がトランスかぁっ！！」
小野川が詰め寄る……が、トランス（おそらく）は飄々としている。
「だから悪かったって言ってるじゃん。ま、そんな事よりさっさとガルドだっけ？怪人倒そうぜ。えっと…お前が仮面ライダーガルド…？ユニークな名前だな、敵と同じ名前なんて。」
うわーお。めっちゃ勘違いしてやがる。
「違うわっ！！烈雷だ！！しかもガルドなんて言うライダーなんていねぇ！！」
「あれ？そうだったの？メイちゃん…しっかりしてよ。」
機械的なライダーがそう言ったが、
「あははぁ……。」

仮面の上から頭を掻いている。……反省してんのか？

「あー……戦った方がいいと思うのだが……。」

先程のクウガと電王が合体したようなライダーが喋る。……面倒臭いから、クウオウ、と呼ぶ事にする。

「そうそう。」

そのクウオウに相槌をうった霞河はチップを一枚セットした。

『Ｈｏｍｉｎｇ　ｓｈｏｔ』

そして、追尾性能を持った銃弾がガルドに全て直撃。ガルドは叫びながら爆散した。

「うわぁ、すごい射撃精度……。それじゃ、僕も行こうかな。」

同じく銃を使う機械的なライダーは銃をホルスターのような物に取り付け、側面を叩いた。

『Ｔｈｕｎｄｅｒ』

『Ｈｕｎｔｅｒ』

『『ｃｈａｒｇｅ－ｕｐ』』

発声音が告げると、両方の銃はエネルギーが蓄積されたらしく、その砲撃をガルドにぶつけた。

「はぁぁ！」

トランスは幾分か身軽な状態になる。鉄パイプを拾うと、それが棒状の武器になった。……クウガのような能力だな。

そして、その武器でガルドを攻撃する。

「……最後だ。ライダースタッブ。」

『Ｒｉｄｅｒ－Ｓｔａｂ　ｓｔａｒｔｉｎｇ』

発声音と同時に、その武器で次々とガルドを倒していくトランス。

「うわっ、声で必殺技発動できるとか、卑怯……。」

『Ｂｌａｚｅ　Ａｒｍ』

俺は炎の腕、投げるバージョンにして、その炎の球を敵にぶつけた。

「おいおい、そっちの方が卑怯じゃないか？」

……軽口を叩く余裕があるって事は、コイツも相当修羅場を駆け巡ったって事だな。

「さっさと終わらせようぜ。」

「言われなくても分かってるつっうの！！」

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｔｕｒｙ』

一番近くにいた小野川が反応。必殺技を今度こそ発動させ、ガルドを一気に倒した。俺も、残りのガルドが一体になった所だ。

「……最後だ。」

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｃｃａ』

俺は必殺技、飛翔炎烈打を繰り出しガルドを倒す。

それとほぼ同時に、回りのライダー達も次々とガルドを倒していった……。

第二十五話：少し違う日常（前書き）

……ハイ、更新が遅くなってしまいました。
待っていた方々、そしてコラボをご承諾頂いた正六面体様を含め、
深くお詫び申し上げます。

では第二十五話、どうぞ。

第二十五話：少し違う日常

あのごたごたの後、互いに自己紹介を済ませた。

あのでかい大砲を持っていたのは、トランスこと形粋。……雰囲気的に渉に近い気がしたが、気のせいだと思う。

二つの銃を巧に使って戦っていたのは、ライカルこと永瀬友樹さん。……何となく雰囲気が小野川に似ている気がした。……絶対に気のせいだ、うん。

そして、クウガと電王を合体させたようなライダー、クウオウ（本当にクウオウって名前だとは思わなかったが）こと古池修司さん。

俺が知る限り、古池さんがライダーの中で一番年長者だ。

そして、渉の案の通り、一人ずつ家に泊まらせる事にした。……しかし、自己紹介中に小野川が渉に毒舌をくらった為、小野川は撃沈。

古池さんは相当苦労しただろう。

そして、なんやかんやで俺のアパートの前にたどり着いた。……って、ヤベ。

「形、鍵渡すから先部屋に入っててくれ。」

「何かあったのか、波賀？」

「買い物忘れてた。直ぐに戻ってくる。ちなみに、部屋は２０３な。」

「分かった。」

そう言って、俺はスーパーへと向かった。

「……今日は親子丼だな。」

『随分家庭的だなー、お前。』

「黙っとけや。鳥カゴに永遠に幽閉させるぞ。もしくは晩御飯の材料にすんぞ。」

『すいません調子乗ってました許してください。』

「……。」

少し脅した位なのに、相当ひびっている。……メイの攻撃（？）が効いたのか、これは？ちなみに、お分かりの通り食材は既に購入済みだ。

そして俺達は、帰路に着いた。

なんやかんやで次の日。……え？あの後何があったって？
……普通に家に帰って、親子丼作って、形と食って、一緒にお笑い番組見て、寝て、現在に至る。
……省略しすぎというツッコミは受け付けんぞ。

「形、俺はそろそろ学校行くが、お前はどうするんだ？別に家の中にいてもいいぞ。」

「いや。今日も仕事に行く。オーロラが見えたり、精霊に変化があったら教えてくれよな。」

……確か、ライダーの力を使ってバイトだっけ？……いいのか、それって？
とかなんとか思っている内に着替えた形。一応洗濯をしたが、生乾きのせいか、顔を歪めている。

「ううん、気持ち悪ぃ…違う服買うか…。波賀、是メイに渡しておいてくれ。」

そう言って形は俺に一万円札を渡した。

「今日の学校帰りにでも新しい服買えって伝えてくれ。ただし、無駄遣いは無しだ。」

「分かったよ、じゃあな。」

そう言って俺は、一足先に家を出た。

……今日は一段と寒いな。とっとと学校に行って温まりたい、と思った矢先、

「波ぁ賀ぁぁぁっっっ！！！」

懲りない小野川の声が。……俺も黙っている訳にはいかない。

「ふんっ！！」

「おべぁっ！？」

俺は上手くカウンターキックを炸裂。小野川は意味不明な奇声をあげながら吹っ飛び、近くのごみ箱に頭から突っ込んだ。

「ここでゴミ収拾車が来れば完璧なんだがなぁー……。」

俺は一人そう呟きながら学校へと向かった。ちなみに小野川は気絶したかは定かではないが、そのまま動かなかった。

そして何事も無く、無事に学校へ到着。渉、霞河、メイは既に教室にいた。

「あ、悠樹君、おはよ。小野川君はどうしたの？」

「よ、渉。バカはごみ箱と合体している。」

「……大変だね。」

「いつもの事だ。」

今の言葉で理解したか、渉は苦笑いした。流石に長い付き合いだからだろうか？

とか何とか会話している内に予鈴が。欠席扱いは嫌なので、俺はとっとと席に着いた。

そして本鈴。担任、福原（ふくはら）が来る。担当教科は理科。あまりの毒舌っぷりに「河豚（ふぐ）」なんてあだ名を付けられている。……文字的には近いが。

「オラー、席着けー。早く席着かねぇと、元素記号全て読ましながら校庭十周させるぞ。」

それは嫌だな。てか、ちゃっかり理科の勉強させるのね。……今の俺の気持ちとクラスメイトの気持ちは見事にシンクロした事だろう。全員五秒以内に座った。

「よーし、出欠とるぞー……って、小野川がいないな。休みか？」

「ごみ箱と融合してました。」

「物凄く理解不能な報告をどうも、波賀。……取りあえず、欠席だな。」

「欠席じゃないです、先生！！」

そんな声と共に小野川が大声をあげながらやって来た。

……異臭を放ちながら。

「……何があった、小野川？波賀の報告通り、ごみ箱と融合してたか？ってか、もう少し離れてろ。臭い。」

「それが生徒に対して言う言葉ですか、先生！？ってか、俺はその波賀にやられたんですよ！？」

「先生、小野川は〈魔法カード、融合を発動！〉とかほざきながらごみ箱にダイブしてました。」

「言って無ぇぇぇっっっ！！！ってか、何で遊○王！？そして、そんなモンスターいてたまるか！！」

「よーし小野川、少し顔だけでも洗おうか。」

「え、ちょ、先生、信じて下さいよ……誰か助けてぇぇぇっっっ！！！」

そんな悲鳴をあげつつ、鼻をつまんでいた先生に頭をわしづかみにされながら廊下に出された。おそらく、洗面台にでも連れていかれるのだろう。勿論、助け出す者などいない。

数秒後、ギャァァッッッ！！！という悲鳴が聞こえたが、誰も気をとめなかった。

さて、一時間目、社会。山さんこと、山本（やまもと）による授業。オッサンだが、授業は分かりやすく、質問に来る生徒も多い。

……ちなみに、この時間帯に小野川は戻って来たが、なんか物凄い事になってる。目に生気も宿ってない。……河豚、何をした!?

二時間目、理科。河豚がやってきた。何か小野川を見るなり「うん、完璧。」と呟いていた。……だから、何をやらかした、河豚!?

……声に出したら小野川と同じ運命を辿る事になりそうなので、喉に押し止めたのだが。

三時間目、体育。熱血女教師、早川（はやかわ）が担当。

「さあ、今日も張り切って行くよ!!」

―オィーッス!!―

やはり女教師だからか、男子は張り切っている。しかし、いつもは回りの二倍以上声を出している小野川が死んだような目をしている事に、早川は怪訝そうな表情をして声をかけた。

「どうした小野川!?宿題忘れて先生に怒られたか!?」

「先生、小野川が宿題を忘れて怒られるのは毎度の事です。事実、

閉鎖中の宿題も一問も解いてませんでした。」

「じゃあ、何があった？この何時も以上の違いには……」

「俺も疑問に思ってますが、むやみに首を突っ込んだら命の危険性が伴われますので、今は授業に集中しましょう。」

「凄い大袈裟な気がするけど……まあ、いいや。」

そして、今回の種目はサッカー。ボールが集中して小野川の顔面に当たったのは、言うまでもない。

そして昼休み。一部は食堂、一部は教室で弁当。ちなみに小野川は保健室行き。流石にあの状態は無いからな。……ホントに河豚、何をしたんだろう？

霞河とメイは小野川の事なんか頭に無いように他の女子と雑談しながら食事中。渉は言葉虐めに関する本を読みながら食事中。……って、何つー本を読んでんだアイツ！？そんな本を売り出す作者や会社もよく分からん！！

そんなツッコミ所満載の昼休みだった。

四時間目は英語。大沢（おおさわ）なる教師が担当。

そんな事より、ビックリだったのがメイの英語。驚く程ペラペラで、テストも満点。凄いとしか言いようがない。

……どれくらい凄いかって？悪い、俺英語は比較的苦手で、メイが何言ってるかなんて全っ然聞き取れなかったから、そこは割合してほしい。

五時間目、国語。榊原（さかきばら）という女教師。早川とは違い気が小さく、声も小さい。

「つれづれなる……硯に……よしなし……、」

もう何言ってんだか分からない。涉は例の本を熟読しているし、霞河は宇宙と交信している（つまりボーッとしている）。メイも眠そうだ。俺にとっても子守唄になってしまい、夢の世界に行ってしまった。

六時間目、家庭科。立川（たちかわ）という、またもや女教師。優しい人柄で、男子では〈結婚したい先生Ｎｏ．１〉だとか。

霞河の得意教科で、他の生徒より遥かに進んでいる。

それを追い上げる如く高速で作業しているのが、メイ。見る限り、手慣れている。コイツも得意みたいだ。

……俺の頭の中では〈女子＝手先が器用〉という文字式が勝手に出来上がっていた。

ちなみに、小野川はこの時間帯にやっと復活した。

何はともあれ、帰りのＨＲ。河豚がやって来た。小野川を見るなり「……長続きしなかったか…。」と呟いていた気がする。

……段々恐くなってきた、あの先生。

まあ、なんやかんやで授業終了。やっと帰れる……と思った矢先、大事な事を忘れてた。

「メイ、コレ。」

そう言って俺はメイに一万円札を手渡す。

「あっ！これ粋からのお小遣？」

「違う。コレで服を買ってきてくれ、だってよ。」

「なぁんだ……まあ、いいや、悠樹君も付き合ってよ！」

「面倒臭いんだけど……。」

「よっしゃあーっ！！俺の出番だ！！」

「あっ、ゴミ川。」

「ガハッ！？」

「今更何の用？」

「グホッ！？」

「私、小野川君に手伝って貰わなくても良いんだけど……。」

「ゲハァッ！？……皆、酷くね！？」

「魔法カード、融合を発動！！小野川君とごみ箱を融合！！召喚、ゴミ川ゴミ夫！！」

「渉ぅぅっっっ！！やめろぉぉぉっっっ！！！」

「攻撃力、０。守備力、０。このモンスターを召喚したプレイヤーは破滅する。」

「プレイヤー自身にダメージかよ!?ってか、んなモンスターいねぇし、必要性も無ぇよ!!」

「……行くか。」

「おー。」

「……あの二人って、仲が良いの?」

「めっさ悪い。」

そして俺達は、洋服を買いに学校を出た。

しかし、女の買い物は長いという事を、改めて思い知らされた。メイの服を選ぶ時間なんて長いこと長いこと。そこに何故か霞河が加わり、買い物に関係無い服を見てキャアキャアはしゃいでいる。

ちなみに俺は近くの椅子に座り、その成り行きがいつまで続くか眺めていた。翔炎もつまらなさそうに回りを眺めている。渉と小野川は店内でギャーギャー騒いでおり（実際に騒いでいるのは小野川だが）、爪雷も渉に食ってかかっている。氷甲はそっちの成り行きを眺めている。風牙は何故か俺の隣に座っている。

「……風牙、あの二人を止めてくれないか?」

『不可能だ。あの状態の舞は、ガルドが来た時位でないと反応しない。』

「そちらも苦労している様子で。」

そんな会話をする俺達。そんな時、

ドガァァァァンンン！！！

……という爆発音が。

「風牙！？」

『ガルドだな。五体。一人一体ずつだったら、問題無いだろう。』

「今回ばかりは助かったな……。」

そう言って霞河達の方を見ると……

爆発音にビックリしたような顔をしており、即行で服を選び、即行で買った。

……ってか、決まってたんなら早く買えや！！

というツッコミはあえて口に出さず、俺ら五人は爆発のした方へ向かった。

「いたな。」

『いたな。』

翔炎と一言の会話を済ませ、前方を見る。

前方には、風牙の言った通り五体のガルドが。今回は楽勝だな。

「「「「「変身！！」」」」」

『『『『『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』』』』』

『Ｓｔａｎｄａｒｄ－Ｆｏｒｍ』

「おりゃっ！！」

『Ｈｅａｔ　Ａｒｍ』

炎の腕で一気に殴りつけた。相手は風属性だったので、大ダメージ。

「ウゴァッ！？」

「よしっ！」

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｃｃａ』

一気に必殺技。両手に激しい炎が纏い、その腕で殴りつけた。火炎烈翔拳なる技らしいが、ともかく、ガルドは爆散した。

「ちょ、早っ！！ずるいよ～。」

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｃｙｃｌｏｎｅ　Ｄａｇｇｅｒ』

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｐｐｕ』

霞河は一気にチップを二枚セット。霞河は短剣、サイクロンダガーを放り投げる。すると、一気にその短剣が増えた。幾つあるのかも分からない。

「風破・連刺撃！！」

必殺技の名前を叫ぶと、増えた短剣は一斉に敵をめった刺しにした。

「グガァァッッッ！！！」

ガルドはもがきながら爆散。……そっちの方がずるい気がすると思ったのは、また別の話。

「じゃ、僕も。」

『Ｉｃｅ　Ｔｏｗｅｒ』

氷の塔を発生させ、ガルドに突き刺す。ガルドはみるみる凍り付く。

……って、

「寒い！！渉、それ止めろ！！」

「直ぐ終わらせるから。」

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｈｈｙｏ』

腕の装甲にチップをセット。両手に幾つもの氷の球が発生。

「氷結連弾。なーんて。」

そんな事を言いつつ渉は氷の球を一気に投げ付け、ガルドは爆散した。

……霞河といい、連続攻撃って流行ってるのか（んな訳あるか）？

「じゃー、次は俺……」

「私行くねー。」

「メイさぁぁんん！！？？」

「フォームクリエイト、Ｓ．Ｗ．Ａ」

『Ｃｒｅａｔｉｎｇ　Ｃｕｔｔｅｒ－Ｓｗａｌｌｏｗ』

メイは小野川を無視し、フォームチェンジ。今回はツバメをモチーフにしたような姿だ。

「行くよ！」

切れ味のありそうな翼で低空飛行。その翼で的確にダメージを与えていくメイ。ガルドも反撃を試みるが、華麗にかわされる。

「これで……、」

『Ｓｗａｌｌｏｗ－Ｃｕｔ　Ｓｔａｒｔｉｎｇ』

「終わりよ！！」

切れ味の増した翼でガルドを切り裂いた。

「ギャァァッッッ！！！」

ガルドは悲鳴をあげながら爆散。

「今度こそ……！」

やっと出番が来たかのようにでしゃばる小野川。

『Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｓｔｒｉｋｅ』

電気を纏った拳で小野川はガルドに突っ込む。そして、殴る。

殴る殴る殴る殴る。

……単調過ぎんだけど。

「終わりじゃあっ！！」

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｔｕｒｙ』

今度は何故か足にセット。

「行くぜぇぇぇっっっ！！！」

そう言うと共にジャンプ。このまま蹴りを繰り出す事だろう。

「小野川パァァンチ！！……って、間違えた！！」

しかも、技名自分で付けて格好悪く、その上パンチとキックを間違えてやがる。

そんな俺が知る限り、最も最悪な必殺技をガルドはモロに食らい、爆散した。

……この時だけ、少しガルドに同情した。

「小野川君……必殺技の名前、どうかと思うけど……。」

「ていうか、普通パンチとキックって間違えないよね？余程の馬鹿でない限り。」

「小野川君……今日から僕に半径２ｍ以内に近付かないで。」

上から順にメイ、霞河、渉。今回は俺も参加したい気分に駆られる。

「な、何だよ！お前等だってあるだろ！？先生をお母さんと呼び間違えたり！！」

「小野川君……君ってそんな間違いもするんだね。やっぱ延ばそう。半径５ｍ以内には近付かない事。」

「渉……貴様……ガハッ」

そして小野川は変身を解き、その場で倒れた。今回ばかりは爪雷も呆れてる。

「……帰りましょうか。」

「賛成。」

「ＯＫ。」

「異議無し。」

霞河、メイ、渉の順番に返事。ともかく、ドタバタな一日を終えようとしていた……。

第二十五話：少し違う日常（後書き）

今回はトランス側がアルバイトをしている時間帯時の烈火達の様子の話しです。

色んな先生方が登場しますが、担任福原、相当黒いです。
ちなみに、国語科、榊原先生が読んでいたのは、兼好法師の随筆、徒然草です。……物凄くとうでも良いんですけど。

さて、次回からは更新をそっちのけにしないよう、頑張りたいと思います。これからも仮面ライダー烈火をよろしくお願いします。

では、今日はこの辺で。感想、ご指摘等も待ってます。

第二十六話：一時の休み

はてさて、次の日。今日は休日。……決して天皇誕生日では無いので。多分そちらには無い休日だと思う。

……と、裏話はここまでにしておいて。

現在、俺達四人＋異世界から来た四人で遊びに来た。……遊びにっつっても、今日の主な目的は、形達男グループの服の購入と、形達に何か食べ物でもおごって貰おうと言う物だったのだが。

「じゃ、私と舞ちゃんの二人で男の子の服選ぶから、みんなはどこか行ってて。」

メイはそう言い、霞河と何処かへ行ってしまった。やる事の無い俺達は、ひたすら歩く。

「……何するんだ？っていうか、男6人とかひどいな……。」

これは本心からの言葉。というか、このグループの組み合わせが奇妙すぎる。どう転んでも、この組み合わせは二度と見ないだろう。

「ゲーセン行こうぜ！」

「勝手に行ってろ。」

「冷たっ！！」

このやり取り、僅か二秒。この短い間でも、小野川には相当ダメージ。ていうか形、やっぱりお前Sか？

「僕が行くよ。ほかに行きたい人は？」

友樹さんの言葉で、古池さん以外は全員手を挙げた。

「では、私は昼食を食べる場所でも探そう。」

古池さんはそう言って、どこかへ行った。……うん、流石年長者。やっぱり、古池さんが一番真面目だ。

「だけどさ、何でさっき行かないような発言をしていた奴が行くんだよ。渉もゲーセンに行くような奴だったのか？」

……その疑問は最もだ。俺は気分で便乗したけど、冷たくあしらってた形や、普段ゲーセンなんて行かない渉が何故手を挙げたのか？

「「君（お前）を弄りたいからに決まっているから。」」

「何故ハモるぅっ！？」

……今渉と形が一人の黒い人間に見えた。……計画を練っていたのか、本当にシンクロしたのかは定かでは無いが、俺的には後者ではない事を願う。

そんなこんなで、ゲーセン。皆で思い思いのゲームをしている。
俺はレーシングゲームをプレイ中。

「よっと。」

上手くハンドルを切る事に成功し、ダントツ一位。どうでも良いが、俺は昔からレーシングゲームが得意だ。更にどうでも良いが、かつて行ったファイズの世界でも、ひたすらレーシングゲームをしていた。

ランキング一位になり、上機嫌な俺は他のゲームを見て回った。

渉はＵＦＯキャッチャーをしている。アイツは元々手先が器用で、技術の授業はダントツ一位（成績も良いのだが）。そのせいか、幾つもの賞品をゲットしている。

「楽勝！」

形は格闘技ゲーム。敵相手に簡単に攻撃をかわし、後ろに回りこんでキックを決める。この一連の動作は、恐らくトランスの時に使うものだと思われる。

「ま、こんなものかな……。」

友樹さんは、何と二人プレイ用のゲーム機で銃を両手に持って遊んでいた。ライカルの時には、二つの銃を使いこなしていた事から、シューティングゲームはお手の物なのだろう。

「これを！波賀だと思って！！波ぁ賀ぁぁぁっっっ！！！」

小野川はパンチングゲーム。最高得点をたたき出した。

……って、

「よっしゃあっ！！」

「コノヤロォォォッッッ！！！」

「がふぁっ！？」

コイツ……パンチの的を人に見立てて殴りまくってやがった……。

ちなみに、蹴り飛ばした。

「誰がパンチングゲームの的だコラァッ！？」

「小野川君、君はそう言う事でしか…。いや、これ以上はやめて置くよ。」

そう言って来たのは、渉。手には、大量の景品を抱えている。

「渉君っ！？それって凄く気になる上に傷つく言い方なんだけどぉ！？」

「お前は一生知らなくて良いわぁぁぁっっっ！！！」

「ごはぁぁぁっっっ！！？？」

……そんな騒がしい中、時は過ぎていった。

霞河舞視点

ふー、やっと男供の服を買う事が出来たよ……。まあ、メイちゃんと一緒だったから良いかな？

「さ、そろそろ昼食の時間だし、急ごうか。」

「じゃあ、今粋に電話するね。」

そう言って携帯を取り出すメイちゃん。しかし……、

『舞、ガルドだ。数はそんなに多くない。』

風牙によってガルドが出現した事が判明。メイちゃんは携帯をしまった。

「食事前の軽い運動と行きますか！」

「そうだね。」

メイちゃんの言う事に同意して、私達はガルドの出たという場所に向かった。

現場に到着。流石に街の中ということもあってか、多くの人が逃げ惑っていた。私達は一旦建物の影に隠れる。

「……数は三体。二人なら楽ね、行くよ。」

「「変身。」」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

『Ｃｒｅａｔｉｎｇ　Ｂｌａｃｋ－Ｃａｔ』

私達はガルドの下へと走り、先制攻撃を加える。

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｃｙｃｌｏｎｅ　Ｓｈｏｔ』

私は何時もの銃を出し、メイちゃんは光る爪で構える。

このくらいなら……

「オーバードライブシステムを使うまでもないね……。」

『Ｈｏｍｉｎｇ　Ｓｈｏｔ』

私は追尾弾を発射。勿論、全弾命中。ガルドが怯んでいる隙にメイちゃんが切り裂く。うん、良いタイミング。

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｃｙｃｌｏｎｅ　Ｄａｇｇｅｒ』

武器を短剣に変更。メイちゃんと供に切り掛かる。

「「はぁぁぁっっっ！！！」」

「グガァッ！？」

集中攻撃されたガルドは爆散。私達は一度距離を取る。

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｃｙｃｌｏｎｅ　Ｓｈｏｔ』

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｐｐｕ』

二人で必殺技を発動。一体は竜巻で拘束され、風の砲撃をまともに食らい、爆散。もう一体はメイちゃんの爪で連続で切り裂かれ爆散した。

「さ、お昼ご飯に行こうではないか。」

「うん。」

私達は変身を解き、悠樹くん達の下へ向かった。

此処はある組織の基地の一部。そこで、怪しげな研究が行われていた。

「また実験体の研究か……。」

「おや、アポロガイスト様ではありませんか。」

アポロガイスト、と呼ばれた男に答える、研究員のような格好をした男。

「ええ、この実験体達を作るのが私の生き甲斐でしてね。以前の失敗作がまた二体も出来上がってしまいましたが。ディケイドのいない精霊供には、調度良いでしょう。今度こそ、精霊供を根絶やしに出来ますよ。」

クク、と不気味に笑う研究員のような男。

「……しかし、今あの世界には、厄介な奴らがいる。」

「……？」

「トランス達だ。」

「なっ！？」

トランス……彼らの存在は大ショッカーにとって、予想外の存在のようだ。

「鳴滝の仕業だ……。ディケイドだけを嫌う奴が、何故トランス達

に目を付けたかは定かではないがな……。」

「ならば早めに手を打たなければなりませんね……。」

そう言って、研究員らしき男は、巨大なガルドが入ったのとは別のカプセルに触れた。そのカプセルには、謎の物体。……恐らく、ガルドだろう。

「私の最高傑作の完成も、もう少し掛かると思いますからね……。」

「……我々にとって仮面ライダーは、邪魔な存在だ。時間が掛かるようだったら、こちらが手を降すぞ。そして、私もあの世界に向かわなければ……。」

「＜ライダー対戦＞の世界……ですか。」

「うむ。私の命も、後僅かだ。こうなれば、＜キバの世界＞のクィーンに力を貸してもらう。」

「お気をつけて……。」

アポロガイストは、部屋から出て行った。

「……もう少し時間が掛かるが、これで私も……！」

波賀悠樹視点

現在、レストランの中。テーブル席に着き、談笑していた。

「……にしてもさ、君達の世界にもディケイド……士さん達が来たんでしょ？誰か笑いのツボのやり方を知らない？」

涉の何気ない一言。……そりゃあ、あの秘技は凄いからな。夏海さん、誰から教わったんだ……？はっ！まさかあの優しそうな栄次郎さんからか！？

「私なら出来るよ。」

……今、メイが凄い事言った気がする。

「……何て言った？」

「いや、私も出来るよ。」

「本当に！？じゃ、私にも教えてよ！！」

霞河が興奮しながら詰め寄る。……本当に興奮しすぎだ。

「ちょ、舞ちゃん、近い……。えーと、だったら誰かに……、」

メイはちらっと形、友樹さんに目配せをしたが、彼等は首を横にブンブン振った。……そりゃ、嫌だよな。年長者だからか、古池さんにはやる気が無いらしい。

「じゃあやっぱ……」

「一人しかいないよね……。」

そう言って霞河とメイは小野川を見た。無論、俺達も。

「え、いや……皆さん、何でこっちを……？」

「小野川君、少し我慢してね……？」

「いや、メイさん、怖いです。その笑顔、本当に怖いです。……ってか渉！？何押さえ付けてんだよ！？」

「いや……逃げないようにする為。」

「止めろぉぉぉっっっ！！？？」

……皆さん、分かってるよね？此処店内だよ？皆さん相当注目されちゃってますけど？

「光家秘伝、笑いのツボ！！」

そして、炸裂。

「ぶっ……ははははは！！テメッこの、ははは っ何を、ははっしやが、ぶふっ、ははははは！！」

わーお。回りから凄い奇怪な物を見るかのような目で見られてる。

「よーし、私も……！」

「ちょっ、舞さん!?ぶっ、ははは！！」

「光家秘伝、笑いのツボ！！」

霞河の笑いのツボが炸裂！！

「う、…ぐすっ……ひくっ……な、何で……うぅ……」

……でも無かったようだ。

「えぇっ!?ちょ、小野川くん……え?泣いちゃった!?」

霞河は回りを気にしつつ、オロオロしている。笑わせんじゃなくて、泣かせてどうするよ、オイ。

「……ていやっ。」

再びメイの笑いのツボが炸裂。

「……ぶ、ははは！！お前等、ぶくく、俺で遊ぶなぁ！！ぶくっ、ははははは！！」

……泣いたり笑ったり、忙しいやっちゃな。

「……俺じゃなくて良かった。」

「粋、それは僕も同じだよ。」

「……私はこの会話に参加すべきなのか？」

……形と友樹さんの意見には激しく同意する。古池さん、参加したら色々と大変な目にあいますよ。

「とりゃっ。」

「うっ、ぐすっ……舞さん……うぅっ、止めて下さ……」

「うりゃっ。」

「ぶはははは！！メイさっくく、ははは！止めて、頼むか、くくっ、ぶはははは！！」

「はたっ。」

「ぶはははっ……って渉ぅぅっっ！！オメッ、指を突き刺してるだけだろうがぁぁぁっっっ！！！」

「はっ、せいやっ、とぉっ。」

「痛い、痛い、痛い！！地味に痛いから！！」

「形さん、左側お願いします。僕は右側をやるんで。」

「心得た。」

「心得んなぁぁっっ！！形っ、テメェェェッッッ！！！」

「ふんっ。」

「痛い！？」

……楽しんでいる所、申し訳無いんだけど……、

もう食事来てるよ。

「……。」

「あ、すみません。直ぐに黙らせるんで。」

「は、はぁ……。」

『……何だかな。』

『……うむ。』

翔炎と風牙が嘆いた。

「「「すみませんでした。」」」

「「……チッ……。」」

メイ、霞河、小野川は謝り、形、渉は舌打ち。……ってかこの二人、元は一人の人間だったんじゃないか？いやマジで。

まあ食事が来てる訳ですので、皆さん黙々と食べるのですが。

「うん、うまい。」

「まずかったら、売り物にならないだろ？」

ナイスツッコミ。お前、ツッコミ派でもあったのね。

……自分で言っておいて何だけど、ツッコミ派って何だ？

「食うぜ！！」

最後の最後で運ばれて来たステーキ。それを食そうとする小野川。しかし、小野川は天からも見放されているようだ。

……突然爆発音が響いた。人々の悲鳴が聞こえる。

「嘘だろ？」

形が嘆いた。通りに面した壁は無残に破壊され、通りが丸見えになっていた。そして、ガルドが多数と、恐竜のように大きな怪物が二体いた。

……って、あの時のでかいガルドが二体も？

「あの大きいのもガルドなのか？」

「そ。」

しかし皆さん、こんな時でも食べる食べる。友樹さんだって、料理を食べながら質問している。……実際、俺も同じようなものなのだが。

「俺の昼飯を邪魔しやがって！！こんなの、昼飯前だ！」

小野川が怒り出す。……確かに時間的に合ってる発言だけど、それは朝飯前に言おうね？

ちなみに他のお客、従業員の方々は早々にお逃げなられた模様である。

「爪雷、行くぜ！！」

『おっしゃあ！！』

「変身！！」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

小野川は烈雷に変身。

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｃｒａｗ』

何時もの武器、サンダークローを装備した。

「俺一人で行ってやるぜ！！」

「あ、そうなんだ。じゃ、頑張って。僕らはゆっくり食事を楽しむから。」

小野川の宣言に渉は冷めたように返事をして、直ぐに食事を再開した。

「え？いや、そこは、『何言ってるんだ！俺達だって戦う！』とか言うシーンじゃないの？」

誰も言わねぇよ、特にお前に対してはな。そんなうろたえている小野川にガルドが攻撃。小野川は吹っ飛ぶ。

「渉ぅっ！！後で絶対に引き裂くからなぁぁぁっっっ！！！」

ヤケになった小野川は、明らかに不利な状況にも関わらず、ガルドの下へ攻撃しに行った。

「……いいの？いくらなんでも、無理じゃない？」

少々心配そうな顔をするメイ。……無理に決まってるだろ。てか、普通食べながら心配しても全然意味無いと俺は思うぞ。

「いいのいいの。……前にもあの大きなガルドが現れたの。あっ、その時にディケイド……士さん達がいたんだけど……。」

「ガァァッッ！！」

「ぶほっ！？」

そのでかいガルドに蹴られ、吹っ飛ばされた小野川。

「その時に大騒ぎになって、ガルド以外にも私たちまで警察の捜査対象になっちゃったの。」

「コノヤローッ！！」

「ギャァァッツ！！」

「ぶべらっ！？」

でかいガルドに爪を突き立てるが、もう一体に吹っ飛ばされた小野川。

「大変だな……。」

形が嘆く。……その言い方だと、まるで自分達は捜査対象になってない、みたいな物言いだな。

「てめぇら！さっさときやがれ！」

「はいはい。」

返事をしたのは、友樹さん。どこからか銃のような物を取り出し、援護……と言えるか分からないような光弾を放った。

「ちょ、痛い痛い！！アレ、痛くない！？あ、やっぱ痛い！！」

「あっ、それって変身ツールか何か？へぇ、武器にもなるんだ。面白い。」

苦しむ小野川を無視し、友樹さんの使った変身ツール（おそらく）に興味を示す霞河。

「翔炎、お前も武器になれよ。」

『何で俺が！？』

反論する翔炎。しかし、足をむんずと掴まれ、再びメイに捕獲される。

「武器にならなくてもいいよ♪このままで十分！」

そう言って、メイは再びつつきだす。……ホントに変わった感覚の持ち主だな。

『だから止めろって！！お前は俺をおもちゃか何かに見てるだろ！！』

「そんな事…、無いよ。」

いや、あるだろ。

「ごちそうさまっと。さぁて、ちょっと行ってくる。渉、お前も来てくれ。」

席を立ち、レジにお勘定のシートと一万円札を置く形。律儀だな、オイ。

「どこ行くのよ？」

すかさずメイが尋ねる。

「恐竜には恐竜ってな。バイク取ってくる。ついでに友樹のも。」

……何かをやらかすらしい。何で渉を指名したかは謎だが。

……ま、それはともかく。

腹ごしらえも終了した事だし、開戦と行くか……！

第二十七話：別れ（前書き）

ハイ、遂にトランス編もクライマックスです！

……トランス側と対して会話が変わらないんですが（泣）

正六面体様、申し訳ありませんと土下座すると共に、この駄文とコラボして頂いた事に改めてお礼申し上げます。

では第二十七話、どうぞ。

第二十七話：別れ

さて、前回までのあらすじ……
なんやかんやでガルドが発生、戦う事になった。
……それもう、あらすじじゃ無ぇよってツッコミは無視するぞ。もう、敵は目の前だし。

『Ｓｙｓｔｅｍ　Ｌｏａｄｉｎｇ……Ｓｔａｎｄｂｙ』

「変身！」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

いつも通りの変身動作も完了し、烈火へと変身した。

「風牙。」

『分かっている。』

『Ｓｙｓｔｅｍ　Ｌｏａｄｉｎｇ……Ｓｔａｎｄｂｙ』

「私も行く！」

「「変身！！」」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

『Ｃｒｅａｔｉｎｇ　Ｂｌａｃｋ－Ｃａｔ』

女ライダーが二人並び、同時に変身。

「古池さん、行きましょうか。」

「ああ。」

友樹さんと古池さんも並び、変身動作をする。

「「変身!!」」

『Ｒｉｇｈｃａｌ　Ｓｈｏｏｔ－ｕｐ』

『Ｓｗｏｒｄ－Ｍｉｇｈｔｙ』

二人はライカル、クウオウに変身した。

一方、小野川は……

「もう、だめ……。」

すっげぇ程フラフラ。そりゃあ、戦い過ぎたからな。

『馬鹿野郎っ！ガルドの前で何へなってるんだ!!』

いや爪雷、怒鳴るのも良いけどさ……後ろにガルドがいるよ？

……こうなったら、小野川がガルドに吹っ飛ばされた所でガルドに攻撃するか……。

「小野川君、危ない!!」

「へ？」

あぁぁぁっっっ！！？？クソッ、古池さんのせいで気付きやがった。けど、もう遅いなこりゃ……。

「ガァァッッッ！！！」

「うわぁぁぁっっっ！！？？」

『Ｂｌａｚｅ　Ａｒｍ』

あー、やっぱタイミング合わなかったなー……。結局小野川は助かって、ガルドは吹っ飛ぶ。

「……まぁ、いっか。」

そう嘆いて、ブレイズアームでガルドに火球を投げ付ける。
俺の言葉の真意に気付いたのか小野川は唸っているが、そこは気にしない方向で行く。
そこで、後方から声が。

「小野川くん、肩借りるよ！！」

『Ｈｏｍｉｎｇ　Ｓｈｏｔ』

「うぎゃ！？」

妙な悲鳴と共に上方から追尾弾がガルドに命中、ガルドはもがきながら爆散する。

……おそらくさっきの状況は、霞河が小野川の肩を利用してジャンプし、攻撃した、というところだろう。
……追尾性能を持つ攻撃なのにも関わらず、わざわざ小野川を利用してまでジャンプしたのは、霞河のストレス発散で間違い無いな。

「休んでいなさい。」

『Ｒｏｄ－Ｄｒａｇｏｎ』

発声音が響くと、クウオウの姿が赤から青へ。フォームチェンジだな。ってか古池さん、別に小野川に優しくしなくても良いですよ？

……という言葉を言いたい所だが、そんな事も言ってられない。何故なら、でかいガルドと交戦中だからだ。ついでに、友樹さんもいる。

「このっ！！」

「はあっ！！」

と言っても、流石に硬い。二人掛かりにも関わらず、中々ダメージを与えられない。

「こうなったら……。」

『Ｓｐｅｅｄ－Ｆｏｒｍ』

発声音が響くと、ライカルの姿が青へと変化。フォームの名前からすると、かなりのスピードなのだろうか？
案の定その通りで、友樹さんは素早く動きながら銃を乱射。しかし、

期待する程のダメージは無かった。

「いまいち僕の銃って威力に欠けるんだよねぇ…。コンバットも無いし。」

「……コンバットって？」

ライカルの力を強化させる為の物なのか？

「……見れば分かる。今は是かな……？」

『Ｇｒａｖｉｔｙ－Ｆｏｒｍ』

ライカルの色が赤へと変わる。今度は重力でも操るのだろうか？

『Ｇｒａｖｉｔｙ－ｄｏｗｎ　ｚｅｒｏ　ｐｏｉｎｔ　ｏｎｅ』

……ゴメン、長くて全然分からなかった。けど……、

「はぁぁっっ！！」

友樹さんはありえない程の高さまでジャンプ。おそらく、重力をある程度低くする物だと思う。

『Ｇｒａｖｉｔｙ－ｕｐ　Ｔｅｎ』

上空から発声音が響く。そして友樹さんは再び銃を乱射。今度はガルドが苦しみ始める。様子からすると、霞河のグラビティーショットと同じような効果なのだろう。

「よし！」

しかし、気が緩んでいた友樹さんにガルドは蹴りを喰らわせる。

「がっ！？」

そんなにダメージは無いように見えても、友樹さんは遠くの方へ吹っ飛んだ。

「クソッ！！」

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｔｗｉｎ　Ｂｌａｄｅ』

手数を増やす為に双剣を振るっているが、やはりダメージは少ない。久しぶりにＥ・Ｃ・Ｃを使いたい所だが、でかいガルドには属性が無いらしい。

このままだと、時間を無駄に費やしていくだけだな……。

隣では三人に増えた霞河が、短剣を振るって通常のガルドと戦っている。

「まったく、秋元くん達はまだなの？」

短剣を振るいながら文句を言う霞河。……いや、俺も同じ気持ちだけどさ……。

「うむ……数が多いと面倒だな。卑怯だが、あれを使うか……。」

古池さんは嘆き、突然変身を解除。そして、見た事の無い銀色のベルトを付けた。

「再び、変身。」

古池さんがそう言いながら出したのは……、

「……え？ファイズフォン？」

そう、ファイズの世界の仮面ライダーの変身者……タクミが使っていたツール、ファイズフォン。何故古池さんが……？

しかし古池さんが押したボタンは＜５５５＞ではなく、＜８９１０＞。そして、銀色のベルトにスライドさせながらセットした。

『ＣＯＭＰＬＥＴＥ』

聞いた事のある発声音。ラインが流れる所までは同じなのだが、突然何処からか機械で出来たような昆虫達が飛来し、体中に配置された。

「ライダーフリーズ。」

『ＲＩＤＥＲ　ＦＲＥＥＺＥ』

変身の時とは別の発声音が響く。すると、古池さんの姿が変わった。

『ＦＲＥＥＺＥ　ＯＶＥＲ』

しかし、直ぐに再び発声音が。古池の姿が戻る。

……と同時に、回りにいたガルド達が一斉に爆発した。

「……あれ？少なくなった？」

霞河も戸惑っている。……一体古池さんは何をしたんだ？一瞬で広範囲型の攻撃を放ったか、またはファイズや先程のライカルの高速形態よりも速く動いたか……定かでは無い。
しかしそれほどのリスクがあったのか、古池さんは苦しんでいる。

「……最後、是だけは……。」

『ＲＩＤＥＲ　ＣＨＡＲＧＥ』

古池さんは三本の剣を投げ付け、銃を放つ。

「波賀君！下がっていろ！」

流石にあの技はやばい……！そう直感で感じた俺は、古池さんの言う事に瞬時に従った。
そして古池さんは、今までの攻撃でこじ開けた、でかい巨大ガルドの硬い皮膚の裂け目にパンチを繰り出す。そこから、まっすぐ体の下までを一気に裂いた。
すると、引き裂かれた部分が僅かながらも赤い球体……核が見え始める。

「うわっ、キモーイ！何あれぇ……？」

何故か水の入ったバケツを持ちながら言ったメイ。……ってオイ、いつの間に何処に行ってた？

「あ、あれは核っていって、あれを狙えばあの大きいガルドを倒せるよ。」

律儀に答える霞河。

「……後は頼む……。」

疲労が大きいのか、古池さんは変身を解除。空気の薄い小野川の隣に座り込んだ。……ってか小野川、お前も戦えや。

「……あれが先かな？」

持っていたバケツを置き、光る爪を出すメイ。

「誰かこっちの手伝いを！！」

遠くで友樹さんが叫んでいる……が、大丈夫そうなので任せておいた。びっくりした事に、今の俺の気持ちと皆の気持ちはシンクロしているらしく、誰も友樹さんの下に行かなかった。しかし、突然……、

「伏せろぉっ！！」

形の声が響いた。

『Ｒｉｖｉａ－Ｋｉｌｌ　ｖｅｒｓｉｏｎ　Ｒｅｈｈｙｏ』

そして発声音……ってか、今の発声音、語尾に＜烈氷＞って付かなかった？

という心の嘆きも露知らず、唐突にバイクが突っ込んで来て、核に直撃した。

「うぉっ！？」

辛うじて避ける事に成功。でかいガルドは爆散し、消えた。そして、突っ込んで来たバイクが目に入る。乗っているのは、緑色のトランスだ。

通常のバイクよりもでかく、鈍い金色に白と黒の装甲をまとわせ、そして更に水色の突貫用武装が施されている。……って、あの突貫用武装って、いつだったか渉が使っていたアイスレイピアに似ているな。

「何そのバイク！？」

メイが驚いたように声をあげる。……って事は、メイも見るのが初めてのようだ。

しかし形は無言でバイクを降りる。そして、その馬鹿みたいに大きなバイクは二つに分かれた。いや、バイク二台にライダー一人に。

……って、え？

「……渉！？」

そう、その突貫用武装となっていたライダーは、紛れも無く烈氷……渉だったのだ。

「えぇ？ど、どういう事！？」

勿論霞河もうろたえる。……是非とも答えが聞きたいものだ。

「混ぜた。」

……いや、一言だけ？てか、端的過ぎて、余計分から無ぇよ。

「……何があった、渉？」

「あ、実は……。」

秋元渉視点＋回想シーン

「秋元、しっかり捕まってろ！運転は俺に任せろ！」

「あ、ハイ……。」

バイクに跨る形さん。何故か緑色のフォーム。そして、併走するように走る別のバイク。それには僕が乗っている。どうやら形さんの緑色のフォームは、念力を使う事が可能らしく、僕の乗ったバイクを動かしている見たいだ。……いや、だってまだ僕高校生だよ？無免許だよ？

そんなこんなでレストランがあった場所が見えてくる。どうやら知らないライダーによって核が露出した所見たいだ。

「形さん、あの赤い球体を壊せば、大きいガルドは倒せます！！で

も、早くしないと再生能力で復活します！！」

「……そうか。だったら……、」

形さんはそう言ってバイクから下り、僕に近付いて来た。

「混ぜるか……。」

「……え？」

……いや、何と何を？

「俺流！ファイナルフォームライド！！」

……え？ファイナルフォームライドって……士さんの使ってたアレ！？

「いや！？それって、あれですよね！？ちょ、くすぐったいのは嫌だから！！」

しかし形さんは無視し、バイクごと僕を合体させた。そして、一人（僕）と一台は形さんの乗っていたバイクに装着された。……っていうか、バイクに人がくっついている時点で、それもうバイクじゃ無いよね？

「まさか僕がなるとは……。」

「武器が喋るな、行くぜ！！」

武器にしたの形さんでしょ！？という声を出す前に、でかいガルド

に突っ込んで行った……。

波賀悠樹視点

「……まあ、何と言うか……大変だったな。」

「……うん、まあね……。」

「さぁて、友樹の方も行くか……。」

形、お前全然反省して無いだろ。……って、誰も突っ込まないよなぁ……。

「……僕は、小さいほうに行くよ……。」

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｉｃｅ　Ｒａｐｉｅｒ』

渉はアイスレイピアを装備し、以前のように凍らせて突く、という戦法をとった。

「じゃ、私は大きなガルドに行こうかな。」

霞河はそう言いながら俺の隣に立つ。一枚のチップを持ちながら。

「分かってるよね？」

「勿論。」

でかいガルドといったら、これに決まってるだろ……。

そして俺達は同時にチップを装填した。

『Ｏｖｅｒ　Ｄｒｉｖｅ　Ｓｙｓｔｅｍ……Ｒｅｃｃａ』

『Ｏｖｅｒ　Ｄｒｉｖｅ　Ｓｙｓｔｅｍ……Ｒｅｐｐｕ』

俺は飛翔形態、霞河は嵐舞形態になった。

「へぇ、フォームチェンジか……。」

「これぞ、私の嵐舞形態！行こうではないか、悠樹くん。」

「あぁ、待った。空中戦なら俺も行かせてもらう。」

『Ｅｖｏｌｕｔｉｏｎ　Ｐｈｏｅｎｉｘ－Ｆｏｒｍ』

すると、形……トランスの姿が、発声音が告げたように不死鳥のような姿に変化する。

「あれ？なんか悠樹君とかぶるね。鳥だし、赤だし……。」

いや、どうでも良いからな。早くガルドを倒さないと……、

「止めた……。」

……何故か基のフォームに戻った。

「オィィッッ!?敵の前でそんな事言ってられないでしょ！」

しかし形は俺の言葉をスルー。先程渉と一緒に戦っているメイの方を見ている。

「メイ、選手交代。お前がでかいガルドをやれ。」

いや、選手交代ってね……。

「分かったわよ。フォームクリエイト、S．W．A」

『Ｃｒｅａｔｉｎｇ　Ｃｕｔｔｅｒ－Ｓｗａｌｌｏｗ』

メイは昨日使ったツバメのようなフォームになる。

「じゃ、行こうか。」

「……あぁ。」

取りあえず三人で飛び上がった。

『Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｂｌａｓｔ』

「とりゃっ！！」

霞河のグラビティ・ブラストがガルドに直撃。

……何故か友樹さんにも。

「僕も！？」

「あっ、やばっ。」

しかし、もう遅い。今まで必死に巨大ガルドの背中にしがみつき攻撃をしていた彼は、とうとう地面に墜落した……。

小野川海斗視点

……どうせ全員俺の事記憶から抹消してるんだろ？隣にいる古池さんだって、気のせいか表情が淋しげだよ？

……どうせ俺なんて……、

「オイ！今まであまり目だって無かった小野川、こっち来い！！」

突然形に呼ばれた。……って、

「あまり目だってなかったは余計だ！！」

お前さっきから失礼な事言い過ぎだ！！

「そろそろいいか？戦力を増やして、一気にケリをつける。」

……って事は！

「よっしゃぁ！主人公様の出番だぜ！」

「おお！仮面ライダーガルド君の出番だね？」

「渉っ、テメェェェッッッ！！！」

『オイ、早く変身しろ！』

「分かってらぁ！！変っ身！！」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

烈雷に変身！よっしゃあ、やってやるぜ！俺はやっぱり、最初から最後までクライマックスだ！！

「主人公のお出ましだー！！」

『行くぜ海斗ー！！』

「まぁ、なんだ、ちょっと待てよ。」

しかし、突然形に肩を掴まれる。……なんか背筋に寒気が……。

「秋元、お前は先に行ってろ！おい、友樹！お前はフォートレス使

え！俺はこいつ使う！」

……って、

「俺ぇぇぇっっっ！！？？」

『何でだぁぁぁっっっ！！？？』

「武器になる奴が喋るな。俺流！ファイナルフォームライド！！」

「お前はディケイドかぁぁっっ！？」

ってか何よ、武器になる奴がって！？

……ってオイ！？俺の体何か段々やばい位に変化してるよ！？って

この形、サンダークロー！？

「何でこうなるんだぁぁっっ！？」

結局形の左手に俺は装着。武器の気持ちって、こんなんなのかな…

…？って何俺感傷に浸ってるの！？

「おぉ、小野寺君、一気に見栄えしたねぇ。」

「してねぇよ！！」

「本当だ、いいぞ、小野川！！」

「良く無ぇわ！！調子乗んな波賀！！」

「いっその事、一生そのままでいたら？」

「舞さんんんっっっ！！！」

何で皆寄ってたかって、そんな事言うんだ！？

「まただ……。」

「いや、呆れないでメイさん！！ってか、虐めの輪に加わらないで！！！」

「さ、私ももう一度クウオウで……。」

「フォートレス、フォートレス……。」

「アンタ等に至っては無視か、オイ！？」

……もう嫌だ……。

波賀悠樹視点

いやー、やっぱ小野川を虐めるのはある意味面白いな。あの二人も空気読んでくれているし。

「変身。」

『Ａｍａｚｉｎｇ－Ｗｉｎｇ』

「フォートレスっと。」

『Ｏｖｅｒ　Ｈａｕｌ　Ｍｏｄｅ　ｒｅｌｅａｓｅ－ｇｏ』

『Ｆｏｒｔｒｅｓｓ－Ｆｏｒｍ……ｒｅｌｅａｓｅ－ｇｏ』

古池さんはクウオウへ。しかし先程とは姿が違う。友樹さんもバイクと合体なんてした。……うん、そういうフォームもアリなんだな。

「いいか！？俺と友樹があのガルドの核を出す！お前らは何とかしろ！！」

了解、と心の中で返事をしておく。

『Ｈｙｐｅｒ　Ｃｈａｒｇｅ－ｕｐ』

「はぁっ！！」

……友樹さんの体の至る所から砲撃が。……怖ぇ……。とか思っている内に、でかいガルドは体制を崩す。

『Ａｓｓｕｌｔ－Ｓｌａｓｈ　ｖｅｒｓｉｏｎ　Ｒｅｔｕｒｙ』

「雷光衝破っ！！」

「それ俺の必殺技だから！！しかも使い方が違ぇぇぇっっっ！！！」

……まあ、何とか形は攻撃。お、核が見え始めてきたな……。

『Ｓｗａｌｌｏｗ－Ｃｕｔ　Ｓｔａｒｔｉｎｇ』

「行くわよ！！」

メイも空中から攻撃。傷口を広げる。

『Ｉｃｅ　Ｔｏｗｅｒ』

「これで動けないね。」

渉は氷の塔で攻撃。ガルドを突き刺し、動けなくした。

「私も微力ながら、手伝わせてもらおう。」

『Ｆｕｌｌ－Ｃｈａｒｇｅ』

古池さんも必殺技を発動。二つの武器をブーメランのように投げ付け、ダメージを与える。

「私もやる！！」

「僕もやらせてもらうよ。」

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｐｐｕ』

『Ｔｈｕｎｄｅｒ　ｍｏｄｅ　ｒｅｌｅａｓｅ－ｇｏ』

二人の銃戦士も迎撃する。動けないガルドはもがき苦しむしかなく、

皮膚を再生させようとする。

「波賀、最後行け！！」

「……あぁ！！」

形に言われ、俺も必殺技の準備に入る。

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｃｃａ』

俺は炎の翼で飛び上がる。……勿論、飛翔炎烈打だ。

しかし、何故か形も来た。小野川はおそらく、足のカッターになっているのだろう。まあ、二人でやれば倒せるかな。

「「でやぁぁぁっっっ！！！」」

「嫌だぁぁぁっっっ！！！」

……途中ガルドじゃない悲鳴が入ったが、とにかく、ガルドを倒す事に成功した。

改めて回りを見ると、元人気のあったレストランであった瓦礫の山。
……どうしよう？

「変身解除。」

『Ｔｒａｎｓ－ｏｕｔ』

しかし、今更嘆いても仕方が無い。俺達は変身を解除した。
……唯一人、霞河だけは基の烈風としての姿に戻っただけだったが。

「……？霞河、どうかしたのか？」

「ん？あぁ、ちょっとね。」

……何故言葉を濁す？

「いやぁ、やっぱり俺が一番強い！！」

「武器としてはね。」

「右に同じく。」

激しく同意。

「んだとコラ！？」

「まぁ、兎に角倒したんだ。いいではないか。」

古池さんの言葉でその場は落ち着く。

「腹減ったぁ、俺のステーキ！！」

……ん？確か、お前のステーキって……、

「……何コレ？」

黒い炭の塊になってる筈だけど……あ。

「……俺のブレイズアームがさ、調度当たったみたい。」

「波ぁ賀ぁぁぁっっっ！！！」

「俺としてはミディアムのつもりだったんだがな。」

「いや、どこがだよ！？」

「煩ぇな……って、翔炎！？」

翔炎が……光っている？

『どうかしたか？……って、おおお！！』

翔炎も気が付いたらしい。

「コレって……？」

「あの時と同じ……。」

この光によって、俺はファイズの世界に渡ったんだよな……。

「じゃあ、俺達は帰れるのか……？」

形が質問する。……けど、確か翔炎はトランスの世界を知らない筈だよな？

『いや、俺はお前らの世界を知らない。そして今の俺には行き先を決められない。』

……やっぱりな……。

「えー、翔炎ケチしないでよ。また撫でてあげるから。」

『誰がケチだ!?それにもう撫でるな、痛ぇんだよ!!』

「どうせなら、そのままお持ち帰りテイクアウトしても良いぞ。」

『悠樹ぃぃぃっっっ!!??』

「……ま、とにかく、」

俺は言葉を区切り、形の方へ向いた。

「此処でお別れって事だな。」

「楽しかったぜ。今度、トランスの世界にも来い。歓迎する。」

「縁があったらな。」

回りも別れの挨拶を済ませていった。……渉の場合、アレは別れの挨拶と言うのかは謎だが。

「君たちも早く逃げた方がいい。」

古池さんが唐突に言った。……って、え？

「逃げるって……？」

耳を澄ますと、パトカーのサイレンが聞こえた。……騒ぎを聞きつけて来たのだろうな、こりゃ。

「やっぱりか…。じゃ、みんなお元気で！」

『Ｔｅｌｅｐｏｒｔ』

霞河は滅多に使わないチップ……テレポートを使用し、どこかへ消えていった。……って

「霞河ぁぁっっ！！その為か、変身解かなかったのは！！」

……しかし、叫んだってどうにもならない。俺は形達の方を向いた。

『あばよ。』

翔炎のその言葉と共に光が最大限になり、目をくらます。再び目を開けた時には、既に彼等は消えていた。

「……もとの世界に戻っていれば良いけどな……。」

『……その可能性は限りなく低いな。』

「……じゃあ、なんで転送した訳？」

『……アイツ等は多分次の世界に行く事で、新たな出会いが見つかると思うんだよな……。』

「いや、トランスの世界、今大変だからな。」

「悠樹君、早く逃げた方が良いよー。」

前方から渉の声が。……ってアイツ等、もう逃げてやがる！

「行くぞ、翔炎！！」

『俺は見えてないからな……。』

「ふざけんな、行くぞ！！」

結局俺は最後の最後まで、別の意味での戦闘を繰り広げていた……。

第二十七話：別れ（後書き）

ハイ、長かったコラボの連続ですが、次回は通常の烈火編に戻ります。

……けど、ガルドって大ショッカーが開発したんだよなぁ……。
もしかしたら、また近い内に平成ライダーとコラボする可能性がありますが、どうか見捨てないで下さい（土下座）。

さーて、一息ついた事だし、もう一つの小説の方も進めないとなー……。

では、今日はこの辺で。

最後にもう一度。
正六面体様、ありがとうございました！

第二十八話：黒いＧ（前書き）

ハイ、Ｇと見てガルドと読んだ方、これはガルドではありません。
ヒントは、皆さんの家庭で一度は出ていると思う「奴」です。
……ここまで言えば分かるかな（笑）

さて、ここで注意点が。

1、霞河が暴走します。
2、風牙が悲惨な目にあってます。
3、今回の話にはガルドなんて一切出ません。

という、1、2が読者様の反応が怖い今回の話。

広い心の持ち主の方達は、先へどうぞ。

第二十八話：黒いG

皆さんこんにちは、霞河舞です。今日はどうやら私視点からみたいです。

……裏話はここまでにして、時間を確認。現在朝の7：30。そろそろ学校に向かわなきゃいけない時間だね。一人暮しは不便だなー。

……あ、言い忘れてたけど、私にはちゃんと家族はいます。家系は父、母、私。

父は有名な会社の重鎮らしくて（実は私も良く分からない）、しょっちゅう出張に出ています。

母は至って普通の主婦。だけどこの町に引越して来てから、福引きで世界一周旅行なる物が当たったらしく、一ヶ月間いません。

つまり現在は私以外誰もいません。

……って、そんな訳でもないな。風牙がいますからね。

『……ま、……舞……』

……お？風牙、様子がおかしいぞ？

「どしたの、風牙？」

『あ……あや……』

……何やら怯えている様子。……って、まさか！？

「彼奴っ（あやつ）！？」

波賀悠樹視点

「……。」

ーなぁ、聞いたか？近くの人気レストラン、倒壊したらしいぞー

ーあー知ってる知ってる。あそこ俺常連だったのにー

ー何でも、またあの赤い戦士が関わってるとか！ー

ーあ、私見たよ！恐竜みたいな怪物と戦ってた仮面の戦士達！ー

ー最近なんか仮面の戦士と怪物ってよく出るよなー

ー何でも、そろそろ本格的に警察が捜査に乗り出すって！ー

「……マジかよ……。」

『もう話題になってるな。』

……今回はテレビを見ないで学校に来たけど……やっぱ話題になってたんだなぁ……。

「……赤い戦士……ねぇ……。」

『何ほうけてんだ？……それと、電話来てるぞ。』

あ、確かに。相手は……霞河？何があった？そういや、まだ学校に来てないな……。

「もしも……」

『悠樹くんんんっっっ！！！』

……う、煩い。右の耳がめっちゃ痛いぞ。

「落ち着け……何があった？」

『彼奴が……彼奴がっ！！』

「いや、知らねーよ、彼奴って言われても。」

……てか霞河、かつて無い程のテンパりようだな。

『Gが……黒いGが！！』

「黒いGィ？」

Gって……ガルドの事か？いや……ガルドは元々黒いけど……って！？

「霞河、風牙は！？」

『風牙は黒いGに……って、キャアッ！！』

そして、プツっと通話が切れた。

「……翔炎コレ、ガルド……で良いのか？」

『いや……舞はガルドに絶叫する程の男……じゃねーや、女じゃ無いだろ。』

……はっ！もしかして……！？

以下、俺の妄想←

凶悪ガルド出現

←

風牙は捕われた、又は殺された

←

霞河の命の危険！！

妄想終了

「……。」

『……。』

「……行くぞ翔炎！！」

『……おうよ悠樹！！』

霞河を助け出す為に……早く！！

「アレ、悠樹君？何処行くの？」

「急いでるから話し掛けんな！！」

話し掛けてくる渉を払いのけ……、

「波ぁ賀ぁぁぁっっっ！！！積年の恨み、今ここ……」

「邪魔だボケがぁぁぁっっっ！！！」

「あべぁっ！？」

道を塞ぐ馬鹿を蹴り飛ばした。

……ホントに何があった、霞河……！？

さて、霞河ん家に到着。……なんか、しんとしてますが。
そっとドアを開ける……が、ガルドが侵入した形跡も無いし、荒らされた様子も無い。

「おーい、霞河ー？」

声をかけてみるが、反応無し。そっと中へ侵入。

「端から見れば泥棒だぞ、お前？」

「黙らっしゃい。」

見回すがなーんも違和感無し。この際、二階に上がって見る。上がったと同時に、前方には“マイ”と書かれたプレートのドアが。
……此処か？

「……霞河ー、いる……」

「キャァァッッッ！！！」

バキィッ！！

「がふぁっ！？」

……今の状況、誰かお分かりだろうか？

……なんか木刀持った霞河が俺を木刀で殴り付けてきやがったのだ。

「……ごめんなさい。」

「……いや、まあ、それは良いとして……。」

未だに頭がガンガンする。……が、早く本題に入りたい。

「……ガルドはどうした？風牙は無事なのか？お前も怪我は無いのか？」

「……え、ガルド？」

「……ハイ？」

え？ガルドじゃないの？

「私を襲ったのは……恐ろしい悪魔……。」

「いや、回りくどい言い方は止めろや。」

「名前なんて恐ろしくて言えないよ！！あの黒くて、てかてかしてて、もぞもぞと動き、大量に生息してる黒いＧ！！」

「……それってさ、アレだよね？ゴキ……」

「言わないでって言ってるでしょぉぉぉっっっ！！！」

ドゴォッ！！

「ぎゃはぁぁっっ！？」

ハイ、またもや殴られました。しかも、普通じゃない効果音で。

「……分かった、ゴメン。もう言わないから。その右手に持つ物体で殴るの止めて。」

「あ、うん……ゴメン。」

……コイツ、相当ゴキ、が付く昆虫が嫌いだな。

「……ていうか今冬だぞ？よく出るな。」

「そういう事言わないでよ……風牙だって太刀打ち出来ないんだし。」

『ハイ？風牙、精霊だろ。あんな昆虫一発だろ。』

「いや、それがさ……。」

霞河の視線の先には、ベッド。その上に寝てるのは、

……なんか泡みたいのを吹いている風牙さん。

『風牙ぁぁぁっっっ！！？？』

これには翔炎も絶叫。てか風牙、昆虫ごときにやられたか。

「……精霊も形無しだな。」

「と、いう訳で悠樹くん。私が外に出られるように黒いＧの駆除を……」

「断る。」

「即答！？」

「あのさあ……俺、授業サボってまで此処に来てんだよ？たかがゴキ……じゃねーや、黒いＧなんかに、かまってられるか。」

「私の活躍で何度かピンチから脱した事、あったよね？そのお詫びとして……」

「あったっけか？そんな事？」

「あっ、た、よ、ね？」

「ハイ、ありましたね。分かったから、それで殴ろうとするの止めて。」

……今、霞が引き攣った笑顔で木刀を振りかざそうとしてた。勿論、標的は俺。今のシーン、マンガだったら「ゴゴゴゴゴ……」何で効果音があっても可笑しく無い気がする。

「よし、では健闘を祈る！」

「お前は行かないんかい。てか、何処の部隊の隊長のセリフ？そして、ちゃっかり敬礼するな。」

「あ、そうか。仮面ライダーになれば……。」

「お前は家を壊す気か！？」

「あ、風牙気絶してるんだ。」

「ホントにやる気だったのかお前！？」

「あ、じゃあ悠樹くんがライダーになってよ。この家燃やし尽くしても良いから。」

「良くねぇだろ！？ドラえ○んがネズミを見た時のような発想は止めろ！！ソレはソレで怖いから！！」

そんなやり取りが五分程続き……

「よ……よよっ、よし……や、ややや、やっ……やるぞぶっ、ごほっごほっ！！」

「めっちゃ怖がってる上に最終的に噎せたよコイツ。」

『……なぁ悠樹。俺も参加せにゃならんのか？』

「断ってみろ。それはそれは地獄を見る事になるぞ？」

そんなグダグダなやり取りをしてる俺等。ゴキ……じゃなくて、黒いGをこんなに怖がってる奴が黒いGの駆除なんて大丈夫なのか？それ以前に、体調不良で倒れないかコイツ？

「だ……大丈夫。……女にはやらなきゃならない事だって……！」

うん、意味的には合ってるけどね。

現在装備

波賀悠樹
武器ー木刀、スリッパ、風牙

霞河舞
武器ーゴキジェット（黒いG専用殺虫剤）、携帯用黒いGホイホイ

翔炎

武器ー自身

「……オイ、何今のステータス？ドラクエ？ていうか霞河の武器の中に風牙いたぞ？」

『俺に至っては、武器が何で自分自身なんだよ？嫌がらせ以外の何物でもないよ？』

「利用できる物は何でも利用するのよ。」

「ホントに風牙わしづかみしてるよ！？本気で武器にする気だよコイツ！？」

『風牙ぁぁぁっっっ！！早く起きないと死ぬぞ、色んな意味で！！』

……駄目だコイツ。黒いG関係になると性格がワルになるよ。

「さっ……さ、ささささて、黒い……ジ、Gが出現した場所……っへ、へと到着っ……し、しまし……ごほっ！！」

「落ち着け。てか寝てろ。ゴキ……」

「その単語言わないでって言ったでしょぉぉぉっっっ！！！」

「痛いいいっっっ！！！」

またもや殴られた。しかも風牙で。

『風牙ぁぁっっ！！死ぬなぁぁぁっっっ！！！』

……話が全然進まねぇ。そう思ったと同時に、

……奴は現れた。

霞河は気付いていない。奴は冷蔵庫の横の隙間に潜んでいる。

「……オイ、いたぞ。」

「え、何処に！？」

「いや、だから風牙で構えるの止めろ。何か痛々しい。」

『……風牙ー、起きろー。死ぬぞ、マジで。』

そんなやり取り中の俺達。頼むから、このタイミングで出て来るなよ……。

しかし、神は残酷だ。

黒いGがやってきた。

……それも、三匹。

「「『……。』」」

しばし沈黙が。そして……

「嫌ぁぁぁっっっ！！！」

「『風牙ぁぁぁっっっ！！！』」

霞河は風牙の尻尾を持ちながら振り回し、黒いGに殴り掛かった。
しかし流石は黒いG。器用に避け、こっちに向かってくる。

「……チャンス！！」

今こそ喰らえ、ゴキジェーット……

「キャァァッッッ！！！」

「あべぁっ！？」

しかし失敗。暴走している霞河の持つ武器（風牙）が俺の顔面にぶち当たった。

『嫌だ、戦線離脱してぇ！！』

「その意見に物凄く同意するぞ、翔炎！！」

『……うっ……。』

あ、風牙起きた。

『此処は……？って、えぇぇぇっっっ！！？？』

「嫌よぉぉっっ！！！」

『舞！？私で何を……って、ギャァァッッッ！！？？』

あ、黒いGの存在に気付いた。

『……。』

そして再び気絶。

「精霊って、呆気ないんだな……。」

『アイツがあんなにも苦手だったとは……ゴキ』

「それを言わないでよぉぉっっっ！！！」

『ぶほっ！？』

「……え？」

今の状況

霞河が風牙を使って翔炎を吹っ飛ばす

←

翔炎はこっちに飛んで来る

「がふっ！！」

そして直撃

←

そして俺のすぐ近くには黒いＧ

←

それに向かって倒れてる俺

←

絶望的

……。

「ギャァァッツツ！！！」

「……波賀君、なんか悲惨な目にあった気がする。」

「奇遇だな渉、俺もだ。てか、学校来てない時点で悲惨だと思うんだが。」

そんなやり取りが同時刻に繰り広げられてたとか。

第二十八話：黒いG（後書き）

皆さん、メリークリスマス！！（遅ぇよ）

と、いう訳でクリスマスもあっという間に過ぎ、あと数日で新年を迎えますねー。いやー、長いような短いような一年だった……。

……え？現実逃避するなって？……すみません、謝罪します。

……霞河、暴走しすぎましたね。風牙も武器になっちゃいました。霞河、風牙にひそかに評価をして頂いている方々、大変申し訳ありませんでした。

さて、今回の話、黒いGが出ましたね（年末になんつー話を……）。いわゆる「奴」です。僕も「黒いG」と呼んでます。そしてラストの悠樹の運命。……多分お分かりですね。皆さん（勿論僕も）が辿りたくもない末路を彼は突っ込みました。黒いGって、冬にも出るんですよねぇ……。やはり家が暖かいからか。皆さんは黒いGに遭遇したら、悠樹と同じ末路を辿らないよう冷静に対処してください（笑）。

あ、最後にもう一つ。

六話、八話、九話、十話をちょびっと読みやすくしてみました。……といっても、皆さんにはどう感じるか分からないのですが（汗）。何故この四つだけかは……唯の気分です（待てや）。

皆さんからどう感じたかを教えて頂ければ幸いです。また、自分の

気分で少しずつ変えていくと思いますので、よろしくお願いします。

……そこは活動報告にでも書いていこうかな……？

それでは、今日はこの辺で。よいお年を。

裏一話：初・烈風（前書き）

この話は元々烈火の外伝として執筆していた「揺らめく炎の裏側（削除済み）」にて掲載していた物です。
削除前の小説の時の内容をそのまま転載していますが、ご了承下さい。

また、ご存知でない読者様に申し上げますと……この話は、霞河さん初変身の回です。
読まなくても大丈夫ですが……良ければ暇つぶし程度に、どうぞ。

裏一話：初・烈風

日本のどこかの町……その町のとある学校……恐らく高校だろう……から、授業が終わったのか、沢山の生徒が出て来る。授業という辛いものから開放された為か、彼等の表情は一段と輝いている。

……その中で一人の少女が、浮かない顔をしていた。

身長は１６０ｃｍ程。少し青みを帯びたセミロングの髪。大半の人が「可愛い」というであろう容姿。だが、その表情はどこと無く暗い。時たま「はぁ……」とため息をついている。何か悩みを抱えているのか？そんな印象だった。

そんな時……

「まーいーっ！！」

少女……まいと言うのだろう……を呼び止めようと走っているもう一人の少女が。こちらは茶髪でポニーテールという容姿だ。

「……梓！！」

その少女の表情も少し明るくなり、呼んだ相手である少女……梓（あずさ）に駆け寄る。

「もー舞、先に何処行ってたの！？一緒に帰ろって誘ったのにー！！」

「あ……ご、ゴメン。」

梓の言葉に苦笑いする舞。……だが、再び表情を暗くしてしまう。
それに気付いたのか、梓は……

「……そういえば、明日だっけ……転校。」

「……うん……。」

少女……霞河舞（かすみがわまい）は、明日遠くの町へ転校する。お別れ会等は済ませたようだが……それでも吹っ切れていないようだ。

「そりゃ、確かに辛いけど……いつまでもクヨクヨしてらんないでしょ！！手紙だって送るしさ！！ホラ、元気出して！！」

「……うん！ありがとう、梓。……でも、手紙よりメールの方が効率良い気がするけど……。」

「う、うるさい！揚げ足取るな！！」

あはは、と笑い合う二人。明るい空間が彼女達を包む。

いつも通りのやり取り、でも明日からは……。

舞は一人、そんな事を考えていた。

「ただいまー。」

帰宅した舞。帰宅先の家は、やはり引越しという為か、全ての荷物が片付けられている。

「おかえり、舞。ちゃんと皆に挨拶は済ませて来た？」

「……うん。」

出迎えてくれたのは、彼女の母。何処にでもいるような、普通の主婦だ。母もこの町を離れるのが淋しいのか、その表情は暗い。

「お父さん……はいないよね、やっぱり。」

「仕事で先に引越し先まで行ったわよ。でも……私達が着く頃には、もう仕事でいないかしら。」

母のその言葉に、またもや「はぁ…」とため息をつく舞。

彼女の父は、かなり有名な会社に属している。中でも彼女の父は重鎮として呼ばれる事が多いらしく、日本のあっちこっちに飛び回り、外国に行くのも珍しくはない。

「ため息なんてつかないの！！……あの人だって淋しいのよ？あなたに会えなくて……。」

「うん……まぁ、分かってるけど……。」

そう舞が言葉を濁すと同時に、二人は気付く。

……未だに自分達は、玄関で突っ立っているのだと。

「っと……なんでこんな所で話してたのかしら……さ、早く上がりなさい。」

「あー……ゴメン、やっぱその辺散歩してくるね。」

舞は担いでいた鞄を置き、扉へと向かう。母親と話したく無い訳では無い。単純に、思い出深いこの町を最後に見て回りたいのだろう。その意図に気付いたのか、母も頷き……

「夕方には帰ってきなさいよ。」

「分かってまーす。」

人通りの少ない裏道。そこは昼だというのに薄暗く、此処を通る人も少ない。
そんな道に……

「ギィィィッッ！！」

真っ黒い皮膚で覆われた、一体の怪物が。特撮ではない、ちゃんとした生き物である。
だが、この星……少なくとも、この日本には怪物など存在しない。

確認されたとしたら、大騒ぎになるだろう。

その怪物が追うのは……一体の、翠の龍。

龍と言っても、大きさは全長１Ｍ程。風を纏いながら、その怪物から逃げる。が、捕まるのも時間の問題かもしれない。

『チッ……ガルドめ、まだ追うか！！しつこい……この世界から出たい所だが、どうやらこの近くに適合者がいるようだな……さて、どうするか……？』

「懐かしいなー、この小学校。」

舞が見る先には、放課後の小学校。懐かしの体育着と赤白帽を被った少年少女達がドッジボールをしている。既に放課後の時間を過ぎている事から、恐らくクラブ活動だろう。

片や、隅っこでゲームやらカードやらで遊んでいる少年達の姿も見られる。

「……引っ越しても、何時かは帰ってこられるよね？」

その疑問は、誰に投げかけたのだろうか？

今この場にいない梓か、母か、父か？それとも……自分自身か？

自分でも分からない事を言ってもね、と思った舞。気付いた時には

空き地に足を運んでいた。

「此処……よく鬼ごっことかしたっけ。小学生の頃とかに。」

思わず笑みを浮かべる舞。だが……どこか悲しくもあった。

同じ日本とはいえ……かなり遠くの地へと引っ越してしまう。本当に戻ってこれるのか？

……いや、止めよう。戻ってこれるんじゃない。戻るんだ。父の事だから戻るのは難しいと思うけど……きっと何時か。

……いやいやいや、何引っ越しごときで、こんなに深刻になっているんだ？考えすぎだ。夏休みとかに直ぐに戻ってこれるじゃないか。そうだ、出来たら新しい友達と一緒に戻ってきたいなぁ……。

唐突に暗い雰囲気から一変し、明るくなると同時に色々な妄想を引き立てる舞。先程のシリアスな描写は何処へ行ったのか……？そう思ってしまう程である。

……そんな時、

「あ、いたいた。」

一人の少女……梓が駆け寄った。

「アレ？梓……なんで此処に？」

「舞のおばさんに聞いたら、散歩してるって言っててね。舞が行きそうな場所を探してったら……此処にいたって訳。」

「おぉ～中々考えましたな～軍曹。」

「お褒めに預かり、光栄であります、殿下。」

そんなやり取りをして……思わず笑いが零れる二人。もう二人には別れの悲しみは無いようだ。

また会える……そう信じているから。

「じゃ、そろそろ帰ろうではないか。」

「よーし、舞のお別れパーティーでもやろっか！」

「……それ、学校でもやったって。」

呆れ顔で答える舞。そんな二人は家へと向かうが……

「ギィィィ……。」

背後から、かなり不愉快な呻き声が。その声を聞き、ピタッと立ち止まってしまう二人。

……と同時に、二人の直ぐ横に、何かが飛んできた。

その「何か」は翠色。……だが、舞にしかソレは見えていなかったようだ。梓は何がなんだが分からない、という表情をしている。

飛んできた物も気になるが、二人はゆっくりと振り返ると……

「ギィィ……ギギッ。」

黒い……熊を連想させる怪物が立っていた。その巨体と鋭い爪は、見る者を圧倒させる。炎の力を宿しているのか、異形の周りの地面は赤く発熱している。また、所々に返り血があり、余計に不気味さが増す。事実、二人は悲鳴すら上げられない。

「な……何よコレ……？」

辛うじて声を絞り出したのは梓。だが、頭がかなり混乱しているであろう舞は対象的に、ガクガクと震えてしまっている。

二人は金縛りがあったかのように動けない。しかし、黒い異形は舞を見据え……その鋭い爪を振り上げた。

殺される！！

舞はそう思い、ギュッと目をつむったが……

「舞、危ない！！」

その声と同時に、何かが切り裂かれる音、悲鳴。

舞はゆっくりと目を開けた。……信じたくないという一心で。

「う……あぁ……。」

だが……現実は残酷だ。舞の目の前には……致命傷を負っている梓が倒れていた。

「い……いや……。」

叫ぶ事すら出来ない。
何故梓は自分を庇った？自分がぼーっとしていなければ、梓は傷付かなかった？嫌だ、信じたくない。
そんな思いが溢れ、膝を付く舞。倒れている梓はまだ息があるものの、出血が多い。このままだと、時間の問題だ。
そんな危険な状況なのに対し、梓は……

「……ま、舞……け、怪我、無い……？大丈、夫……？」

ひたすら、舞の事を心配していた。舞に心配させないように、笑ってさえいる。
だが……舞は混乱から立ち直れなかった。自分のせいで、梓が……。
舞は自分を責め続けていた。

「ギィッ！！」

しかし、異形は何も感じないとばかりに、また鋭い爪を振り上げる。

「ま、舞……！！」

声を必死に搾り出して警告する梓。その言葉に我を取り戻した舞だが、既に遅い。

……もう、駄目か……。

そう諦めたと同時に、

『……それでもお前は、私の適合者か？』

唐突に強風が吹き、異形は吹っ飛ぶ。

舞は前を見ると……前方に、またもやありえない生物が浮遊していた。

「翠色の、龍……？」

この龍は、自分を守った？もしかして、先程吹っ飛ばされていた「何か」？疑問に思うと同時に、龍は口を開いた。

『お前……そこの女を救いたいのだろう？』

「……え？」

『だったら、私の力を貸してやる。早く奴を倒すんだ。』

「あ、あなたは一体……？」

『話は後だ。でないと……手遅れになる。』

刹那、龍は光り輝き……翠色のバックルへと変わる。そのバックルは舞の手元へと落ちる。

「……うわっ！？」

瞬間、膨大な情報が彼女に流れ込む。……が、全てを理解したのか、

そのバックルを腰部へ当てる。すると、バックルの両端から風……いや、小型の竜巻と言うべきか……が腰に巻き付き、ベルトと変す。ベルトと変したと同時に右腰のホルダーから一枚のチップを取り出し、バックルの左側にセットする。

『Ｓｙｓｔｅｍ　Ｌｏａｄｉｎｇ……Ｓｔａｎｄｂｙ』

ソウルチップ……その名の通り魂の込められたチップをバックルが読み込み、電子音声が響く。そして、彼女は言い放った。

「変身！！」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

同時にバックルのカバーを右へスライドさせると、「風」の文字がバックルに投影され、その文字が弾け飛ぶと翠色の球体が彼女を包みこんだ。すると段々と彼女を黒いスーツが覆っていく。球体は消えるが、彼女は右手を扇ぐように左へ動かす。すると、今度は竜巻が彼女を包み込む。そして、体中に翠色の鎧が形成されていった。

黒いスーツ、翠色の鎧、赤い複眼、龍を模した仮面。

風を司る戦士……その名は、「烈風」。

その一連の動作を、梓は揺らぐ意識の中で見つめていた。色々言いたかったのだろうが、梓は、

「舞……。」

と呟き、意識を手放した。

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｃｙｃｌｏｎｅ　Ｓｈｏｔ』

再び烈風はホルダーからチップを取り出し、右腕の装甲にセット。すると、右手に風が起こり……同時に、翠色の銃が握られた。それを彼女は……

「あぁぁぁぁぁっっっ！！！」

がむしゃらに連射。梓という親友を傷つけられた事に激昂しているのだろう、普段の霞河舞という少女の面影がない。

「ギッ、ガッ、ガァッ！？」

しかし、異形には一発の威力が相当な物なのだろう。かなり苦しんでいる。

……だが、

「ギガァッ！！」

「きゃあぁっ！！」

炎を纏った爪をまともに食らい、大ダメージを受ける烈風。それからは、相手の攻撃をかわす事しか出来ない。かなり劣勢だ。

『このままじゃ不利だな……黄色いチップを使え。』

頭に響く龍の声。だが、舞はそんな事を気にも留めず、直ぐさまホルダーから黄色いチップを取り出し、バックルの上部にセットした。

『Ｅｌｅｍｅｎｔ　Ｃｈａｎｇｅ……Ｔｈｕｎｄｅｒ』

電子音声が響くと、今度は黄色い球体が彼女を包む。すると、翠色の鎧がみるみると黄色へと変化していく。バックルだけは翠色のままだったのだが。

……今の姿は雷の力を宿しているのか、所々に稲妻が走っている。

「でやっ！！」

「ギィッ！？」

今度は黄色に変化した銃を構える。その銃口から放たれる光弾は異形にはかなり効くらしく、一発一発でよろめいている。

これを好機と思ったか、ひたすら光弾を連射。遂に異形は膝を付く。

と、同時に、再び翠色の球体が彼女を包み、鎧を再び翠色へと変える。

烈風はまたもやホルダーからチップを取り出し、右手にもつ銃へとセット。

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｐｐｕ』

発声音が響くと、竜巻が異形を包み、拘束する。その間に、烈風の持つ銃は輝きを増し、エネルギーをチャージ。

「行けぇっ！！」

その銃から放たれる砲撃は異形に直撃し、異形は爆散していった……。

次の日……午前8時。舞はとある病院の一室で会話をしていた。相手は……梓。

「いや～一事はどうなるかと思ったけどね～。」

「全くだよ……本当に殺されてもおかしくない状況だったし……。」

あれから舞は、梓を担いで近くの病院へと移動した。案の定梓は重傷で、直ぐに手術が始められた。舞は一睡もせず、ひたすら彼女の無事を祈った。

手術は無事に成功。重傷と言えど、ベットに横たわりながらの会話には問題無いらしく、現在に至る。

彼女の近くには翠色の龍が浮遊しているが、どうやら梓には見えないようだ。

安心すべきなのかどうか……そう考えていた舞だが、唐突に梓が尋

ねた。

「……そういえば、アレは何なの？」

「……へ？」

「ホラ、あの緑……というか、なんというか……あの、龍っぽい姿？」

その言葉にピクリと反応する舞。龍をちらりと見るが……龍は、好きにしろ、と言わんばかりの視線を投げ返す。

そして、舞は話した。突然龍のような生物の力を借りて「変身」した事、戦い方は分かったけど、詳しくは自分も分からないという事を。

「……よく分からないけど、舞は＜人を守る力＞を手に入れた訳だよね。」

「……人を……守る……。」

その言葉に、彼女は決心した。

「……私……沢山の人を守りたい……。」

「……え！？」

その言葉に驚いたかのように、梓は舞を見据える。

「あの怪物……まだ沢山いるみたい。あの怪物に対抗出来るのは、

今の所私だけでしょ？」

「だけど……舞が死んじゃったら……！！」

そう、舞は高校一年生だ。まだ若いというのに怪物と戦うというのは無茶ではないか、と梓は思ったが……。

「大丈夫。私、悪運強いし……。」

「そういう問題じゃ……！！」

「大切な人が死んで悲しむ人を、私は見たく無い。」

……その言葉に、梓は思わず黙り込む。

「少なくとも、この力を使えば、悲しむ人も少なくなる……。自己満足って言われるかもしれないけど……それでも、私は守りたい。」

舞の瞳は真っすぐ梓を見ている。……決意は固いようだ。

「……信じてるから。舞がまた、この町に帰ってくる事を。」

「大丈夫だって！毎日メールするから。」

「いやいや、三時間毎に！」

「いや、それ凄く厳しいから！」

そんなやり取りをしている間に、彼女達は笑顔を浮かべていた。

お互いの友情を再確認しあったかのように……。

『本当に良かったのか？あんな事を言って。』

「……どういう事？」

あの後、舞は梓と別れ、空港へと向かっている。既に母が待っている為、急がねばならないが……。

『自己満足と言われても構わないという、お前のその信念は何なんだ？いや、他に理由があるのか？』

それに対して少し考え込む舞。それに構わず、龍は続ける。

『私はお前に悪い事をしたと思っている。』

「え？」

『お前が適合者とはいえ、危険な目に合わせてしまった。お前さえ良ければ、私はすぐお前から離れるのだが……。』

その言葉を聞き、しばらく考えた舞は答えを返した。

「……人を守る先に、何かがあるっていうか……私はソレを知りたいのかな……？あくまでも比喩だけど。ただ、何もしないよりは得る物は大きいと思う。後、これは何と無くだけど……。」

『？』

「なんだか……既に＜悲しんでいる人＞がいるって感じがして……その人の支えになりたいって言うか……会いたいっていうか……それに、私がいなかったら＜風牙＞が殺されちゃうよ？」

『……まぁ、確かにそうだが……。』

人を守りたい……その気持ちは間違いではないようだが、他にも気になる事に、龍……風牙はふと考えた。

『仮面ライダーは引かれ合う存在というのは……本当のようだな……。』

「え？何？」

『……いや。それより、急がなくていいのか？』

「え？……うわっ、ヤッバ！もうこんな時間か！！ただでさえ家に帰んなかったから、絶対お母さんカンカンだよ！！」

そう叫びながら駆け出す舞。それを苦笑いしながら追う風牙。

この瞬間、風牙は決めた。

お前が人を守るというのなら、私はお前の力になろう。お前が歩む先の答えを……私も知りたい。

爪雷はともかく……氷甲、翔炎はそうしただろうと思うから。

数日後、とある町。

人気の無い住宅街に、二人の人が対峙していた。

……いや、片方は人が「変身」した姿なのだが。

「なっ……何をする!?」

「ねぇ……あなた、＜烈火＞でしょ？じゃあ……私と戦ってよ。」

びっくりしている方は、普通の少年。１７０ｃｍという中々の長身に、切るのが面倒臭いと言わんばかりに束ねられた長髪。彼の側には……赤い、鳥のような生物が。

もう片方は烈風……霞河舞。その手には銃が握られ、油断なく彼を……正確には彼の足元を狙っている。

『風牙！どういう事だ!?説明しろ！』

『説明も何も、舞が言った事をすれば良い。私から話す事は、無い。』

方や精霊……翔炎が、彼女に力を貸している風牙に問い掛けるが、

全く意味が分からないらしい。かなり混乱している。

「ちっ……やるしかないのか……？」

『取りあえず追い詰めて、話を聞かせて貰おう。』

少年……波賀悠樹と翔炎は、意を決したように烈風を見据える。そして、翔炎が光り輝く……すると、赤いバックルへと変化した。悠樹はそのバックルを腰部に当てると、バックルの両端から炎が出て、腰を纏わり付き、ベルトと変す。そして、烈風と同じ動作でチップを取り出し、バックルにセットした。

『Ｓｙｓｔｅｍ　Ｌｏａｄｉｎｇ……Ｓｔａｎｄｂｙ』

「変身！」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

カバーをスライドさせると「火」の文字がバックルに投影され、弾け飛び、赤い球体が彼を包み、黒いスーツを作り出す。そして、右手で地面を殴り……そこから炎が彼の身を纏い、赤い鎧を生成した。

炎を司る、精霊の力を借りたもう一人の戦士……その名は、烈火。

霞河舞は知らない。
今対峙している少年と、今はまだ見ぬ二人の少年が、掛け替えの無い存在になる事に。
自分を含めた四人は、異世界をも巻き込む戦いに導かれる事に。

彼等は知らない。
精霊に選ばれ、戦う事が、変える事の出来ない運命だという事を……。

第二十九話：新年と共に訪れる災厄（前書き）

皆さん、明けましておめでとうございます。ジャードです。
そしてこちらの作品も新年を迎えました、が。

……再び「アレ」が……。「アレ」は次回から何ですが。
取りあえず、続きは後書きで。

あ、それと今回は今年（厳密に言うと去年）のディケイドの映画のネタバレ要素がちょびっと含まれています。ご注意下さい。

では第二十九話、どうぞ！

第二十九話：新年と共に訪れる災厄

どーもー、新年明けましておめでとうございますー。波賀悠樹です。
さて、そんなこんなで２０１０年を迎えた訳ですが……

『……寂しいな。』

「……うん。」

狭い家には俺と翔炎の一人と一匹のみ。しかもお節料理も無く、お雑煮のみ。
両親がいた頃は普通に食ってたけど、二人が他界してからは家計の節約の為、お節料理を買わなくなった。

……こんな虚しい正月を迎えてる高校生って、もしかして俺だけ！？
とか思いながら郵便受けに向かう俺。たまーにだが、年賀状が来るからな。お、数枚来てる。

一枚目……近所のおばさんから、だな。小さい頃にお世話になってるからなー。これは返さないと。

二枚目……渉だ。「小野川君弄りプロジェクト」なる内容が書いてある。
……いや、普通の送れよ！！確かに気になるけど！！

三枚目……霞河。「この前はゴメンねー。じゃ、今年もヨロシク！」とある。

……以前のトラウマを思い出させるような内容を書きなぐりやがって。あれは大変だった。黒いGの（ピー〔なんかグロい単語〕）や、（ピー〔なんか以下略〕）が衣服に……。もうアレは使い物にならない。近々捨てないとなー。

四枚目……ゲ、小野川だ。「今年こそテメェを倒す！！」とある。

「……どこの敵役のセリフだよ。」

そう嘆きながら、その年賀状を真っ二つに破いた。

『……悠樹、たとえ相手が小野川でも、年賀状を破るのはどうかと思うが……？』

「知らないのか？俺の辞書には〔小野川に容赦せず〕という言葉がある。」

『ただ単にムカつくだけだろ。』

「そういう解釈も出来るな。」

そんな会話をしながら紙っぺら（年賀状）をごみ箱に捨て、チラシを眺める。……って、何ッ！？

「……牛、豚、両方の肉が今日限り安売りだとをををっっっ！！？？」

『……オイ、悠樹？』

「しかも特別セットでキムチも安売り……！！キムチ鍋にできるではないかぁぁぁっっっ！！！！」

『……オーイ？』

「見逃せん……！翔炎、留守番ヨロシク！！」

『聞けよコラァァッッ！！』

なんか翔炎が言ってた気がするが、そんな事を気にする訳にもいかず、俺はスーパーへ直行した。

「……手にしたぞ……幾多の戦利品を……！」

あの後スーパーではおばちゃん達と俺による争奪戦が繰り広げられた。ふっふっふ……大量ゲット！しかもこれで店員さんに「もっと値引きしてくれ」と粘った結果、通常よりかなり安く買えた！

……新年から何やってんだお前？というツッコミは一切受け付けんぞ。

……と、俺ん家に到着だ。

「戦利品Ｇｅｔだぁぁっっ！！」

「おぉ！！何をＧｅｔした！？」

「見よ、この大量の豚と牛！！さらにキムチ！！キムチ鍋……いや、焼肉にも出来るぞ！！今夜は新年パーティーだ！！」

「おぉ！！かなりＧｅｔしてるではないか！！」

「そうだろう！！はっはっは！！」

「はっはっはっは！！」

「はっはっは……ん？」

「……どうした、波賀？」

……おかしいな？家には俺以外に人は……って、

「……何でお前がいるんだぁぁぁっっっ！！！」

「ぴぎゃあっ！？」

……目の前にいたのは、何と小野川。怒りのあまり、かなりの威力で蹴ってやった。

「な……何をする波賀よ！？」

「そのセリフ、そのまま返すわ害虫！！隙あらば泥棒までしでかすか！！」

「いや……俺以外にも……。」

そういう小野川の視線の先には、

……ちゃっかりお雑煮を頂いちゃっている、渉と霞河の姿が。

「……何でだよぉぉぉっっっ！！！」

新年早々、絶叫する羽目となった。

「……まあ、一種のスキンシップみたいな物だよ。波賀君がどれほど驚くかってね。」

「そんなに怒んないでよ……。って、このお雑煮美味しいね！おかわり良い？」

「……もう好きにしてくれ。」

折角作ったお雑煮が、二人に食われてる……無念。ちなみに小野川は、

「爪雷……アイツの性格って、どうにかなんない？」

『海斗……自分の事も考えてみやがれ。』

……なんか爪雷と人生相談みたいな会話中。

「はー……もう新年かー。」

「僕等の高校一年生ライフも後数ヶ月なんだなー。」

「人の作った物食いながら、何しみじみとしてんだお前等？」

……これも、正月の風景と言っても良いのだろうか？

「……って波賀！！俺の年賀状、何で破かれてるうえに捨ててあるの！？」

「おぉ、いい所に目をつけたなゴミ川。」

「止めてそのネタ!!結構へこむから!!」

「リアルに凹(へこ)ませてもいい、ゴミ川君?」

「言ってる事が異様に怖いよ渉!?アレか!?この前の陰口がいけなかったのか!?」

「何だよこの前の陰口って?お前そんな事してたのか?」

「駄目に決まってるでしょ。……もしかして、私達の事も……?」

「ちょ、舞さん怖いです!!滅相もない!!俺がそんな事……」

ドガァァァン!!!

という爆音でゴミ川の言葉が中断された。

……正月からガルド出現って……。

「……!皆、行くぞ!!」

「「「行ってらっしゃーい。」」」

「……って、うぉい!?何で!?何で皆行かないの!?」

「「「面倒臭いから。」」」

「……。」

『オラ、何ボサッとしてんだ海斗!?行くぞ!!』

「……畜生ぉぉぉっっっ!!!」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

ゴミ川は叫びながら烈雷に変身。外に出て行った。

「ふー……やっと和めるよ。」

「だよねー……あ、悠樹君おかわり。」

「いつまで食う気だお前?」

そんなたわいのない会話をしながらも、外からは爆音が。

「コノヤローッ!!」

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｔｕｒｙ』

必殺技を繰り出したらしく、外からは落雷でもあったかのような音が。

しかし……

「ぐあっ！！」

……尋常じゃない程の小野川の悲鳴が。

「「「……。」」」

俺達は顔を見合わせ、一斉に外へ出た。
外には、驚愕する程の光景が広がっていた。

近所の家が殆ど半壊、全壊。壊れていない住宅は、もしかしたらこのアパートだけなのかもしれない。住民は皆逃げ惑っている。

中心には、二つの影が。

一人は体をボロボロにしながら肩で息をしている烈雷こと小野川。

もう一人……いや、もう一体は異形。顔は何と無く虎を連想させるが、体は龍、鳥のような翼をはやし、左腕には亀の甲羅のような盾。右手には漆黒の剣。まるで、翔炎達の種族を足したような感じだ。

ガルドだと思うが、あまりにも今まで戦ったガルドと威圧感が違う。

「……クソッ！！」

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｃｌａｗ』

「あぁぁぁっっっ！！！」

「……！駄目だ、小野川！！」

俺は小野川を止めようとしたが、無駄だった。ガルドは冷静に盾で受け止め、

「……。」

「ぐっ！！」

漆黒の剣で切り裂いた。

「ちっ！！」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

『Ｈｅａｔ　Ａｒｍ』

「波賀君！？」

渉が俺を止めようとしたが、関係無い！

今のガルドには隙が出来ている……これ以上被害を増やす訳にはいかない！

……しかし、ガルドはこの攻撃を食らってもびくともしなかった。

「何っ！？」

驚愕するしかない……何なんだ、コイツ？

「悠樹くん、下がってて！」

『Ｈｏｍｉｎｇ　Ｓｈｏｔ』

いつの間にか変身したらしき霞河は、十八番とも言える追尾弾を放つ。俺は咄嗟に後退。追尾弾は全弾命中したが、効いている様子ではない。

『Ｉｃｅ　Ｓｈｏｔ』

『Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｖｏｌｔ』

「「はぁぁぁっっっ！！！」」

こちらも、いつの間にか変身した渉は氷の球を放ち、小野川は雷を放つ……が、これも全くと言っても良い程効かない。

「……。」

「「「うわぁっ！！」」」

そして、ガルドも反撃にでたのだろう。何をしたのかは知らないが、俺達は全員吹っ飛んだ。

……正月に死ぬなんて……。

そう思いながらガルドを見据える……が、

「グ……ウ……」

「……え？」

ガルドが突然苦しみだした。さっきのような覇気も無い。

「何で……？」

「起動時間、三分……。ふむ、まだそれ位しか動けない、か……。」

唐突に響いた男の声。ガルドの背後に立っている。その姿は幾分か長髪、眼鏡を掛け、白衣を着ている。

一見、ただの科学者のように見えるが、その覆っている雰囲気が、ただの科学者ではないと警告している。

「……何者だ、アンタ？」

「……クク、君達の知っている実験体……君達が呼んでいる“ガルド”の製作者さ。」

『何っ！？』

その言葉に一番反応したのは、翔炎だった。

『貴様か……なら、貴様とソイツをぶっ倒して、大ショッカーに殴り込む！！』

「翔炎、落ち着け……。」

翔炎……お前の気持ちも分かるけど……、

「……大ショッカーは、もう滅んでいる。」

「え？」

……どういう事だ？

「ディケイド……世界の破壊者によって、大ショッカーは滅ぼされた……私は生き残りだ！」

……生き残り、だと？

「紹介しよう……そこの実験体は「ＥＸ－Ｎｏ．０００－Ｇ（エキストラナンバースリーゼロ－　ジー）」……私が作り続けた最高傑作であり、精霊のＤＮＡを持つ最強の怪人だ！！」

『……精霊のＤＮＡ、だと！？』

翔炎は顔を歪めながらその言葉を復唱する。……なんでＤＮＡを？

「この実験体は仮面ライダーの力を擬似的に引き出す為の怪人……しかし、中途半端な体だと、その力をコントロールするのは難しい。」

……だから、今苦しんでいるのか。

「……そこで目をつけたのは、君達の精霊さ。君達の精霊を取り込めば、この実験体は死神博士が作り出したネオ生命体よりも遥かに強力なものとなる！その実験体でディケイド……いや、全てのライダーを破滅へ！！」

コイツ……考えてる事が無茶苦茶だ！……よく分かんない単語が出てきてたが。

「さあ……君達はダメージを負っている……。大人しく精霊達を渡すんだ……！」

そう言って近付いて来る白衣の男。……クソ！こんな所で……って、え？

「ど……どういう事だ！？」

何と俺達四人に、見慣れた灰色オーロラが覆っていた。何故か別々に。そしてそのオーロラによって、回りの景色が変わっていく。

それを見届ける前に先程の戦闘の疲れか、俺は意識を手放した……。

「チッ……逃げられたか！」

白衣の男はアパートの方を見る。

「何故邪魔をする、鳴滝!?」

その言葉とともに、アパートの影から男……鳴滝が現れた。

「貴様……ゾル大佐の力を手に入れ、スーパーショッカーと一員として我々と戦った筈だろう!?」

「私は好きであの姿を手に入れた訳ではない。ディケイドを倒す為だったが、他のライダーにも手を出すなら、私は容赦しない。」

「ふん……なら、貴様が奴らを飛ばした世界を徹底的に調べ上げてまでも、精霊を手に入れる!」

その白衣の男の言葉とともに、白衣の男とガルドは灰色のオーロラに消えていった。

「止めなければ……奴を……!」

そして鳴滝も、灰色のオーロラに消えていった……。

第二十九話：新年と共に訪れる災厄（後書き）

鳴滝によって（一応善意で）跳んだ悠樹達。……実は跳んだ世界は……

ディケイドが通った平成ライダーの世界です（待てい）

とゆー訳で、次回からコラボ?編です（オイ!?）。

……いえ、勘弁してください。こうでもしないと話が……。

ちなみに、それぞれ別の世界に跳ばされてます。誰がどの世界に跳んだかは、お楽しみに。

すみません、駄目作者で。

……こんな駄文ですが、今年もよろしくお願い申し上げます。

第三十話：異世界にご到着（前書き）

……最初に言っておきます（桜井風）

今回は全っ然つまらないです。

……いや、ホントにつまらないですよ？期待しないで下さいね？

第三十話：異世界にご到着

……どうも、波賀悠樹でございやす。新年早々大変な目にあいやした。

……ハイ、なんか灰色のオーロラに包まれて、気が付いたら……

「……ここ、何処？」

『……さあ？』

なんか見知らぬ山に一人と一匹突っ立ってました。

……とまあ、他の三人はいない。長い間気を失ってたか、体が多少重い。

『……灰色のオーロラに包まれた事を考えると、此処は異世界と考えるのが普通だな。』

「そりゃ、分かるけど……山はないだろ、山は。」

つまり俺等は不本意ながらも、遭難状態であると言える。……山登りなんて人生に2、3回しかないんだよ、俺？

「……しかもさぁ……。」

……なんか不気味な声が聞こえる……。獣に近いような声が。

『悠樹！！』

翔炎の言葉とともに、背後から殺気が！俺は咄嗟に振り返る！

そこに立っていたのは……え？女性と男性？

……でもおかしいな。なんか茶色っぽい和服を着ているし……ていうか本当に人？

『……こんな所に、人が。』

『家の子の為に、声を貰いましょう。』

いっ！？女性から男性の声！？男性から女性の声！？コイツ等、一体……！？

とか思っていると、二人の姿が異形へと変わった。

猿に近い体つき。赤い顔に長く鋭い爪。

「この世界の怪人って事か！？」

『そうなるな！！』

とっとと変身準備！！

『Ｓｙｓｔｅｍ　Ｌｏａｄｉｎｇ……Ｓｔａｎｄｂｙ』

……こういう山の中で発声音って合わないなー、とか呑気な事考えている場合ではない。

「変身！！」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

黒いスーツが形成されたと同時に、右手で男だった方に殴り掛かった。

『ぐぅっ！？』

女の悲鳴を上げながら吹っ飛ぶ異形。女だった異形も後退する。

そしてちゃんと、殴った右手からは炎が発生し、赤い鎧を形成した。

『鬼じゃ、ない！？』

「鬼……？」

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｈｅａｔ　Ｓａｂｅｒ』

鬼って……あの怪人と敵対でもしてるのか？と思いながら剣を装備。

攻撃をしかけようとするが……

「うわっとと！？」

そう、足場が悪い。しかし奴等はそんな事も気にせず身軽に移動し、ケタケタ、とムカつくような笑いで襲い掛かる。

だけど……、

「近付いたらこっちにとっちゃチャンス！！」

『グゲッ！？』

俺のチップは主に接近が主体。むしろこっちに来れば攻撃を加える事ができる。

『……退かなきゃ！！』

「あ、コラ逃げんな！！」

やばい、逃がしちまう！！……ってヤベッ！？下の方に少年が！？てか、怪人それを狙ってた！？

「翔炎、急がないと……」

『悠樹、問題無いだろう。』

「はぁ！？だって……って、え？」

……確かに、少年は逃げるそぶりも無いし、右手に何かを持っている。アレは……音叉？

子供はその音叉を近くの木にぶつける。すると、澄んだ音が響く。
音程は何となく「ファ・シャープ」……Ｆｉｓに近い。

……どうでもいいが、Ｆｉｓってのはドイツ音名。ド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ、ド、をドイツ語だとＣ（ツェー）、Ｄ（デー）、Ｅ（エー）、Ｆ（エフ）、Ｇ（ゲー）、Ａ（アー）、Ｈ（ハー）、Ｃ（ツェー）、と読む。シャープ、フラット等は後ろにｉｓやらｅｓを付けて読む。一部例外もあるが。……捕捉しておくと、アメリカ音名（Ｃ、Ｄ、Ｅ、Ｆ、Ｇ、Ａ、Ｂ、Ｃ）とは少し違うぞ。Ｈ（ハー）をアメリカ音名のＢと間違える人が多いので注意。

……って何俺は役に立たない音楽講座してるんだ！？

「はぁぁぁぁぁ……」

って、え？子供に紫色の炎が包んでる？しかも幾分か背が高くなってないか？

「破ぁっ！！」

気迫と共に包んでいた炎を払い飛ばし、子供は姿を現した。
……そういえばいたな、一人。
鬼のような姿をして「音」で戦う仮面ライダー。擬似的な物ながらも、一度戦闘したな……。

「アレが……本場の響鬼。」

そう、少年は……仮面ライダー響鬼だった。

霞河舞視点

「……ここは何処ですか～？」

『舞、回りから変な視線で見られるから止めろ。』

どーもー、霞河舞です。気が付いたら、見知らぬ公園。多分、異世界なんだろうなー。

「風牙～、どうしよう……？」

『まずは、この世界で信用出来る人を探すぞ。でないと何もできない。』

「おぉ～流石現役。」

『……いや、何のだ？』

う～ん、褒めたつもりなんだけど、風牙にはお気に召さなかった様子。

……取りあえず、信用できる人を探そうではないか！と、思った時……

「……ねぇ？」

声をかけられた。それは良いんだけど……問題は、その声。私そのものの声。

私は警戒しつつ振り返った。私の後ろには、

……私!?

鏡じゃないし、なにより鏡のように反転していない。しかも、不気味～に笑ってる。

「……私に成り代わってくれないかな?」

そう言ったもう一人の「私」は、異形に。緑色で……なんか気持ち悪い。しかも、その異形は脱皮?みたいな行動をし、青い異形へと変わった。

それと同時に、回りから先程の緑色の異形が続々と現れる。

「き、気持ち悪いんだけど!!」

『我慢しろ、行くぞ!』

「分かってるけど……変身!」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

変身完了した私は、取りあえず手当たり次第に緑色の異形に攻撃を仕掛けた。

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｃｙｃｌｏｎｅ　Ｄａｇｇｅｒ』

「とりゃっ！！」

「グギッ！？」

緑色の異形は大して強くなく、簡単に倒していく。けど……

「……数が多い！！」

『多分、あの親玉を倒せば！』

親玉って言うと……あの青い奴？よーし……、

「覚悟しろー！！」

相手は油断してる……って、

「え！？」

そう、その青い異形は、フッと消えてしまった。

と、同時に色んな方向から衝撃が。

「く……キャッ！？」

『グ……高速移動か！？』

こ、高速移動！？あのポ○モンの技でもある……って、

「うっ！！」

かなり強い衝撃を受けて吹っ飛んだ。コレって勝ち目無いでしょ……。

「撃て！！」

「え？」

突然男の人の声が響くと、私の後方から無数の銃弾が。緑色の異形は次々と爆散していく。

後ろを見ると、片手に銃を持ち、黒と白の戦闘服を着た人達が。ぱっと見、仮面ライダーみたいだけど、量産型みたいだ。

「キュルル……。」

青い異形は黒白の人達に目を付ける。どうしよう……と思った時、黒白の人込みの中から、一人の男の人が。

短い髪で、どこか気難しそうな人。そして、腰には銀のベルト。

男の人は黙って右手を上に上げると、何処から飛来したか、青い機

械的なクワガタが。……って、あのクワガタ、古池さんが変身した仮面ライダーにくっついてた奴だ！！

「変身！！」

『ＨＥＮＳＨＩＮ』

男の人はクワガタをベルトに装着。幾分か高い発声音が響くと、銀色の鎧が男の人の体を包んだ。どこか、サナギみたいな姿。……ってあの人、仮面ライダー！？

「キャストオフ！！」

『ＣＡＳＴ　ＯＦＦ』

銀色のライダーはクワガタの顎を普通じゃ有り得ない方向に曲げる。すると再び発声音が響き、鎧が……吹っ飛んだ！？

『ＣＨＡＮＧＥ－ＳＴＡＧ　ＢＥＥＴＬＥ』

……何と銀色のライダーは、青色のライダーへとフォームチェンジしたのだった。

小野川海斗視点

「……どこ、此処？」

『俺に聞くな、うざったい……。』

……よう！皆のアイドル、小野川海斗様だ！！

……あ、いや、嘘です。嘘ですからそのデカイ石投げようとしないで。

『何独り言してんだ、海斗？』

「あ、いや、何でもない。」

……まあとにかく、俺＋αは見知らぬ住宅街にいる。

『……オイ、誰が＋αだ？』

……訂正する。俺と精霊爪雷様な。

『よし。』

あ、良かった。……って、

「何で人の心読んでんのお前！？」

『読心術だ。』

「何精霊がとんでもない技術会得してる訳！？」

『クク、出来るようになると、これ以上面白いものは無いぜ！？たとえばお前が今考えている事は……』

「や、止めろぉぉ……って、え？」

『あ？どうした？諦めたか？』

「いや……なんか聞こえないか？金属音みたいな……。」

『……聞こえるな。』

そう、なんか「キィィィン」みたいな金属音が聞こえる。……が、通り行く人達は気にする様子もない。

「ガァァ！！」

「キャアッ！！」

……ってヤバイ！！幼い女の子を鮫のような怪人が襲っている！！

「爪雷！！」

『分かってらぁ！！』

「変身！！」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

「烈雷、参上！！」

よっし、と思いながら鮫の怪人を蹴飛ばすカッコイイ俺。

「さあ、今すぐ逃げるんだ！」

「……。」

しかし女の子はこっちを見向きもせずに、たたた、と去っていった。

「……。」

『……ククク……。』

「笑うなコノヤロウ。」

そんな口論をしつつ前を見据える。鮫の怪人は掛かってくる気配が無い。

っていうか……

「『逃げたぁっ！？』」

そう、怪人はクルッと後ろを向き、後方のマンションへと走った。

……馬鹿め！自分から逃げ道を無くすとは！

勿論俺も追い掛ける。

「はっはっはー！！逃げ道は無いぞ馬鹿がーっ！！」

しかし……

怪人の体は目の前のマンションのガラス入り込むように消えていっ

た。

ばぁぁん！！

「ぐふっ！？」

……当然の如く、俺はガラスに正面衝突した。

「痛っ……な、何で！？」

『ガラスん中に消えていきやがったな……。』

このガラスにカラクリが！？しかし、押しても叩いても、何の変化も無い。

「……どゆこと……？」

「君……仮面ライダーなの？」

「へ！？」

……唐突に声を掛けられた。振り向くと、二人の青年が。

「オイ、シンジ……？」

「……もしかして君、この世界の住人じゃない？」

「……え？」

この人、異世界の住人の存在を知ってる？

「……シンジ、このライダーを知ってるのか……？」

「いや。でも、何か知ってると思う。レンさんはこのライダーを見てて。俺が行くから。」

二人の青年……シンジとレンと言うのだろう。

……ってちょっと待て、勝手に話しを進めないで！？

しかしそんな心の叫びが聞こえるはずもなく、シンジと呼ばれた青年はガラスに向かって、黒い何かの板を向けた。

すると、ガラスから出て来るかのようにベルトが現出し、シンジという男の腰に巻き付く。

「変身！！」

シンジは右手を左斜め上にピンとのばしながら言い、板をベルトにセット。ベルトのランプが点灯すると共に、どこからか二つの残像が現出し、回転しながらシンジの体に重なる。そして、シンジは変身した。

……仮面ライダーへと。

秋元渉視点

「……皆、何処なの……？」

『……。』

どーもです。秋元渉です。現在見知らぬ高層ビルが立ち並ぶような所にいます。

悠樹君達が見当たらないけど……小野川君以外は皆無事かなー……？

「取りあえず、この世界の仮面ライダーを探せばいいかな……その為には、怪人が出て来ないと……って、うん？」

僕は高層ビルに張り出されてある一枚の紙をみた。

“人間とファンガイアの親睦を深めようパーティー”

「……。」

『……。』

「……氷甲、コレってもしかして……？」

『……人間と怪人が共存している世界。』

「……珍しいね、こういう世界も。」

これじゃ、仮面ライダーを探すのは骨だな……。取りあえず、そのパーティーの日にちを確かめる……あ、今日の……って、もうすぐ!?

「早く行かないと……!」

ドガァァァン!!

「!?」

突然の爆音。……い、いきなり何!?

振り返ると、半壊したビル。そして、そこに佇む異形。その異形の回りには、動かない人達。

「……ファンガイア!?」

『頂くぞ……貴様のライフエナジーを!!』

そう言いながら、ファンガイアは襲い掛かって来た!僕はうまく避ける。

「ライフエナジーってのはよく分からないけど……変身!!」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

僕は烈氷に変身。ファンガイアに反撃した。

「はぁっ！！」

『うぐっ……貴様、それはキバの鎧じゃないな！？』

「へ！？」

キバの、鎧……？

『ならば……この俺を倒す事は不可能だ！！』

「……！？」

倒せないって……よく言うよ。

「どうかな……？」

『Ｂｌｉｚｚａｒｄ　ｋｎｕｃｋｌｅ』

「でやっ！！」

『ぐおっ！？』

ブリザードナックルで重いっきり殴った。相手に隙ができた時に、再びチップをセット。

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｉｃｅ　Ｈａｌｂｅｒｄ』

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｈｈｙｏ』

「倒せないって言うのは、言い過ぎたね？君……。」

冷気が最大限に。ファンガイアは凍り付いていく。

『ぐ……が……』

「さようなら。」

そう言って僕は、アイスハルバードでファンガイアを切り裂いた。

『ギャァァッッ！！』

ファンガイアは吹っ飛んだ。ふぅ……呆気ないな……。

『……渉、まだだ……。』

「え？」

嘘！？と思いながら前を見ると、

……まだ立っているファンガイアの姿が。

「な、何で！？必殺技も使ったのに！？」

『言ったろう？貴様ではこの俺を倒せないと……。』

クソッ……だったら、もう一度……

「……キバット！」

「よっしゃあ！キバって行くぜぇっ！！」

「……へ？」

唐突に声が。振り返ると、一人の少年。僕より年下だ。そして……

蝙蝠。……って、え？さっき喋ったの、その蝙蝠！？

「ガブッ！」

……少年は蝙蝠を掴み、蝙蝠は少年の腕を噛む。すると、表現しがたい音が響きつつ、少年に鎖が巻き付くかのようにベルトが装着。

少年の顔にも、何か模様が浮かび上がっている。

「変身。」

少年は蝙蝠をベルトにセット……いや、とまらせた。すると、少年の姿が変わると共に、背が伸びていく。

そして少年の姿が、吸血鬼を連想させる姿に変わった。

そう……仮面ライダーへと。

第三十話：異世界にご到着（後書き）

……ハイ、今回はワンパターンすぎました。

異世界に到着
←
敵に遭遇
←
戦闘
←
その世界のライダー登場

……ワンパターンですね。何度でも言います。ワンパターンです。

……すみません、今回ばかりは目をつむって頂ければ、と思います。
次回は頑張りますので、ハイ。

……さてさて、悠樹の時間軸に登場、ちょびっと音楽講座。

……いや、知る人ぞ知る、というより音楽の道に進む方々知っているかと思います。

もし、「ここ違うだろ」と思う方がいらっしゃいましたら、教えて下さい。
全力で直すと共に教えてくださった方を「先生」と崇めます（嘘で

す）

では、今日はこの辺で失礼します。

第三十一話：怪盗「西鬼」

「はぁっ！！」

少年……いや、響鬼は太鼓のバチのような赤い棒を持ち、怪人に殴り掛かった。

『うぐっ！？』

「でやっ！！」

……何だろう……？アレ見てると、ゲーセンでよく見かけるアレを……って、そんな事考えてる場合じゃ無い！！

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｃｃａ』

「でやぁっ！！」

『！？』

――乱舞・炎激斬――

怪人の一体に隙ができた時に、すかさず必殺技を発動。片割れを倒す事ができた。でも……何で木の葉になったの？てか、何今のテロップ？

『くっ……退かなきゃ！』

「逃がさない！」

響鬼はすかさずバチ（っぽい物）を振ると、その先から炎が飛び、怪人に直撃。

『ギャァァッッ！！』

怪人は悲鳴を上げながら、こちらも木の葉となって散っていった……。

「あなたも異世界から……ですか。」

「その言い方、前にもあったみたいだな。」

「えぇ、まあ。」

現在、この響鬼……アスムと言う少年に大まかな事を話し、仲間がまだ戦闘中だというので、そちらに向かっている。

「まかもー……漢字なのか、コレ？」

「漢字で書くと＜魔化魍＞です。ちなみに、さっきのは＜童子＞と＜姫＞っと言って、魔化魍の教育係みたいなものです。」

「漢字だと余計分からなくなるから、平仮名で行くわ。」

「ご自由に。」

軽口を言い合って現場に到着。そこには異様にデカイ蟹？が二匹と「鬼」が二人。一人は深緑色、もう一人は青。いや、色は別にいい。問題は……、

……何でギターとラッパ？

「音撃斬、雷電激震！！」

「音撃射、疾風一閃！！」

――雷電激震――

――疾風一閃――

深緑の鬼はギターを蟹に突き刺し、青の鬼はラッパを構え……、

演奏を始めた。

「……え？」

「魔化魍は＜清めの音＞と呼ばれる物でないと倒せません。あんな風に……。」

「……ゴメン。楽器と鬼がめっちゃ合わないんだけど。」

そんな事を言ってもどうにもならない。てか、ホントに何、あのテロップ？……まあ、ともかく二人の鬼は演奏を終了させる。と、同時に蟹は木の葉と化した。

「……って、オイ！もう一体逃げるぞ！？」

「僕が仕留めます！悠樹さんは援護を！」

「お、おう！」

『Ｂｌａｚｅ　Ａｒｍ』

取りあえず俺は火球を蟹に投げ付けて攻撃し、直撃。蟹は俺を標的としたのだろう。その巨体を揺らしながらこっちに来た。

……勿論、めっちゃ怖いんですが。

だけど、そこがチャンス！

「はぁっ！！」

アスムは隙ができた蟹にベルトに着いていた丸い何かを付けた。すると、その丸い何かは巨大化した。

「音撃打、火炎連打の型！」

――――火炎連打の型――――

アスムも演奏を開始。……太鼓と鬼は、なんかしっくりくる気がする。

……にしても、清めの音……なんか迫力があるな。まさに、闇を許さない、とでも表現できるような澄んだ音。

……ちなみに、テロップは無視する方向で話を進める。

「はぁぁぁ……はぁっ！！」

アスムは止めと言わんばかりに最後に一発叩く。と、同時に蟹は木の葉と化し、散っていった。

「私はイブキ流師範……アキラと言います。」

「自分はザンキ流師範、トドロキっす！」

「あ……ハイ、ご丁寧にどうも……。」

……居づらい。

あ、現在、ラッパを使っていた鬼……天鬼に変身していたアキラさんの提案により、イブキ流が使用する道場にいる。

……それは良いんだが、

イブキ流の方々とどっかから来たザンキ流の方々が離れた所で俺を見ている。……視線がめっちゃ痛い。

「えーっと……俺は波賀悠樹。そこの焼鳥が翔炎って精霊。この世界に来たきっかけは先程伝えた通りです。」

『誰が焼鳥だコノヤロー。てか、自己紹介コレが定番になってるだろオイ。』

「……精霊、の力を使って変身、か……。」

「へー、自分初めてみるっす！なんかアカネタカに似てるっすね！」

「トドロキさん、落ち着いて……。」

うん、なんか個性的だな。……あ、ちなみにこの流派の元師範……イブキさんとザンキさんって人がいるらしいが、別の用事で現在留守らしい。

勿論、俺が何故この世界に来たか、も伝えてある。

「にしても、スーパーショッカーの残党か……。」

「アレ、俺大ショッカーって言いませんでしたっけ？」

「大ショッカーは以前士さん達が壊滅させたんっすけど、大ショッカーの残党がソレを超えるスーパーショッカーって組織を立ち上げたんっす。」

……士ー、行動早いなー。そして怪人どもー、しつこいぞー。

「そのスーパーショッカーも、つい最近壊滅したんですけど。」

『オイ悪党、もうちょい頑張れよ。』

やっぱ悪は滅びるの早いな、うん。てかアスム、何でそれを知ってるんだ？

「しかし、この世界で何をすれば俺の世界に戻れるんだ……？」

『……確かにな……。』

以前ファイズの世界に行った時にはオルフェノクの王を倒して戻っ

てこれたけど……。それに、今回は翔炎の力でこの世界に来た訳じゃないし……。

「……最近この世界で大変な事ってありませんでした？」

一応聞く事にした。アキラさんが顔をしかめながら答える。

「あるとしたら……変身音叉を盗む怪盗、かな？」

「……へ？」

「自分、この前取り逃がしちゃったっす……。」

「ちょ、待って下さい。変身音叉って……アスムが使うやつじゃ……？」

アスム……普通に音叉持ってるぞ？

「戦国の鬼達が使っていた音叉って言えば分かる？」

「……ハイ？」

……ますます分かりません。

「……ついてきて。」

「え、アキラさん！？アレを一般人に……？」

「アスム君、彼にかけてみましょ。」

……取りあえず、彼等についていく事にした。

「……鬼は、戦国時代からいると言われているの。」

歩きながら話すアキラさん。

「その戦国時代の鬼達が使った変身音叉が今でも残されて、保管されてるんだけど……。」

「……盗まれた、と。」

「……私達も何とかしようとしたけど……一つ、盗まれたの。西鬼って鬼になる為の音叉を……。」

「しかも厄介な事に、その泥棒は西鬼の力を使いこなせているんです。」

泥棒、凄ぇなオイ。

「しかも、今回は全部頂くって予告状を……。」

「怪盗ルパン！？」

予告状って……大層な真似をね……。

「……此処よ。」

そこは……うおっ！？なんか厳重警備の蔵。ガタイのいい男の人達と複数の鍵穴。すっげぇ……。

「犯行時刻はそろそろだけど……。」

「えっ！？もうなんですか！？」

「その為にキミを連れて来たんだけどね。」

「……。」

……最初に言ってよ……。

予告状を見ると……確かにもうすぐだ。けど、怪盗２１．５面相って……何でそんな中途半端な訳！？

……待つこと数分。中々来ないなー。

「！！来たっす！！」

お！？言ってるそばから！？

「ぐあっ！！」

え、警備の人が吹っ飛んだ！？

「はっはっはっは！！愉快愉快！！」

……何、このムカつく笑いをしてるのは。

……気がつくと、前方に一人の男が。普っ通の中年だが。コイツが怪盗２１．５面相？……面倒だから、男、もしくは西鬼と呼称する。

「今までいくつの宝を盗んできたと思っている！？そのような警備で無駄無駄！！」

うわー、ムカつく。すっげームカつく。

「……今回は逃がしません。」

「今度こそとっちめてやるっす！！」

「……行きます！！」

アスムが音叉、アキラさんが笛、トドロキさんが弦を鳴らす。そして、額にかざすと、額に鬼の顔のような物が浮かび上がる。するとアスムには炎、アキラさんには風、トドロキさんには雷が包む。

「破ぁっ！！」

「也っ！！」

「汰ぁっ！！」

三人は一斉にそれを振り払い、鬼へと変身した。

――響鬼――

――天鬼――

――轟鬼――

「……と、俺も……。」

『Ｓｙｓｔｅｍ　Ｌｏａｄｉｎｇ……Ｓｔａｎｄｂｙ』

「変身！！」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

――烈火――

……テロップは無視だ！！無視するんだ俺！！

「ふふふ……鬼になった私の前では、そんなもの無力だ！！」

そんなすっげームカつく事を言った後、男は赤い音叉を出し、鳴らす。アスムと同じ動作で額にかざすと、こちらは炎ではなく、黄色の光が地面から吹き出るかのように包む。光がはれると、男はその姿を鬼へと変えた。

――――西鬼――――

うわー、キラッキラ。

「……はっ！！」

アキラさん、問答無用でラッパ……というか銃を撃ち込む。が、

「はっはっは！！どこを狙っている！？」

ひらりひらりと避ける避ける。なんつー身軽な奴。

「待つっす！！」

トドロキさん、ギターを振りかざした！

「あらよっと。」

「ぶっ！？」

……あっさり避けられた上に、壁に激突してダウン。

「はぁっ！！」

アスムはあの火球を飛ばすが、中々当たらない。……って、何傍観してんだ俺！？

『Ｈｅａｔ　Ａｒｍ』

「このやろっ！！」

「おっと。」

……くそっ、かわされた！！

「……って、アレ？君、鬼じゃないね？」

「……だったらどうした？」

「その姿の原理、面白そうだな……標的、変更！！」

「……え？」

「ぐあっ！？」

奴……西鬼は、どっから出したか剣を振りかざし、俺に攻撃した。

油断してたせいか、吹っ飛ぶ。ご丁寧に、音叉を保管しているという蔵を突き破って。勿論、変身解除。

「うぅっ……。」

「ゆ、悠樹さん!?」

『悠樹!?』

クソッ……コレ、もしかしてヤバイ状況?

「ん~?これは……鳥?ほう……この力で変身してたとはねぇ……。」

ってコイツ、精霊の事が見えてる!?

「ついでに、頂き……。」

『ゆ、悠樹!!』

「……テメッ、翔炎を返せ!!」

俺は西鬼につかみ掛かったが……

「ふん……退け!!」

「ぐっ!?」

吹っ飛ばされた。音叉が飾ってある所にぶち当たり、俺は崩れ落ちる。……偶然だが、飾ってあった内の一つ、黒い音叉が俺の手元に落ちてきた。

「このっ!!」

トドロキさんが切り掛かるが……

「邪魔だ！！」

「うわっ！？」

「キャッ！？」

トドロキさんは吹っ飛ばされ、近くにいたアキラさんに当たり、二人とも倒れる。

「クッ……このっ！！」

アスムも殴り掛かるが……

「若造が、失せろ！！」

「ぐっ！？」

さっと避け、剣で切られた。……コイツ、侮りすぎた。相当強い。

「さて……ついでに音叉も……。」

クソッ……そんな事……

「させるかよ！！」

キィーン

「ん？」

「へ？」

……よく見ると、黒い音叉が展開されていて、はずみで音を鳴らしていた。

……この際もう……

「賭だ！！」

俺は投げやりで音叉を額にかざした。

「駄目だ、悠樹さん！！鬼になるには、体を相当鍛えないと！！異世界の住人である悠樹さんが使うとどうなるか……」

……え？そうなの？って俺、やばいじゃん！！でしゃばりすぎた！！

「……え？」

「……何？」

「……ん？」

アスム、西鬼、俺の順で嘆く。気付いたら、なんか桜吹雪っぽい物が俺を包んでいる。

「え？え？え？」

そう、気がついたら俺は……、

――――歌舞鬼――――

……鬼になってしまっていた。

第三十一話：怪盗「西鬼」（後書き）

どうも、ジャードです。

……どうしよう……今回はヤバイ。
関西弁喋らない西鬼に、成り行きで鬼になっちゃった悠樹……。
……ハイ、すみません。無理やっちゃいました。

ちなみに西鬼が標準語の理由は、僕が関西弁に自信が無い為。なぜ悠樹が歌舞鬼なのかは、映画で悲惨な最期を遂げた歌舞鬼を、ここで活躍させてやろう、という事で……（にしちゃあ、西鬼強すぎた気も……。）。

なんかこのコラボ編、批判がきそう……。

ちなみに次回は霞河が来たカブトの世界の視点に移します。もしかしたら彼女も……？

では、今日はこの辺で。

第三十二話：霞河舞の努力

「はぁっ！！」

青いライダーは肩に付けられていた双剣を使って異形を攻撃。わずかながら、青いライダーが有利だ。

「キュルル……。」

青い異形は……また見えなくなった！？どうするの！？

「クロックアップ！！」

『ＣＬＯＣＫ　ＵＰ』

……え？

青いライダーさんも……消えちゃった。

でも、ガン、ガン！！って金属音はちゃんと聞こえる。あのライダーも、高速移動が出来るの！？

『ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ』

発声音と共に、姿がやっと確認できた。
青いライダーは剣を振った姿勢で。
青い異形は体中をかなり切られていた。

「キュ、ル……。」

青いライダーは剣を肩に戻し、ベルト……クワガタにある黄色いボタンに触れた。

『ＯＮＥ』

『ＴＷＯ』

『ＴＨＲＥＥ』

1、2、3……カウントダウン？いや、違う。多分、必殺技だ。

「ライダーキック！！」

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

発声音が告げると、ベルトに溜まっていたエネルギーが角（正しくは顎）に移動し、そこから右足へと。

「はぁっ！！」

そして、跳び回し蹴り（？）が相手に炸裂！！

異形は緑の爆炎を上げながら散っていった。

「オイ！！」

「……へ？」

私！？あ、ぼーっとしてて気がつかなかったけど、黒白兵隊さん達が、私を警戒するかのように銃を構えている。

「貴様、何者だ！？」

「え、いや、ちょ……。」

「そこまでにしろ。」

……言葉に迷っている時に、青いライダーが止めてくれた。

「あ、アラタさん……。」

アラタ、と呼ばれたライダーは変身を解除。……あ、クワガタ、どっかへ行っちゃった。……取りあえず、私も変身を解除する。

「に、人間！？」

「ちょ、あんな気持ち悪い異形と一緒にしないでよ！！」

「……ワームの事を知らない？」

ワームって……あの気持ち悪い奴？

「……取りあえず君には事情を聞きたい。一緒に＜ＺＥＣＴ＞まで来てくれないか？」

「その＜ゼクト＞というのは知りませんが……分かりました。」

取りあえず了承。少しでも、この世界の事を知っとかないと。

「シャァァ……。」

「……え？」

なんか嫌な予感がしながらも後ろを向くと……絶句。あの緑色の気持ち悪い異形。

「シャアッ！！」

「キャッ！！」

「危ない！！」

いや、遅いよぉぉ！！って突っ込む前に、

緑色の異形が吹っ飛んでいた。

「……え？」

なんか、早い物……いや、赤い何かが緑色の異形を攻撃している。

そして、異形は爆発した。

「な、何……！？」

その赤いのは、一瞬姿を見せた。

赤い装甲、青い目。カブトムシのような仮面。つまり、仮面ライダー。

その仮面ライダーと、一秒だけだが見つめ合う。そして赤いライダーは再び姿を消した。

「シブヤ隕石……ワーム……マスクドライダーシステム……ですか。」

「理解してくれたようで助かる。……ところで、なんでそんなしかめっ面なんだ？」

「……あんな連れて行き方だったら、誰だって顔をしかめますって……。」

あの後、アラタさんの勧めにより、ＺＥＣＴという組織へと足を運んだ。

……いや、それは良いんだけど、問題はその連れて行き方。

「ＺＥＣＴの場所は極秘」とか言って目隠しされた上に車で連行だよ！？いくらなんでも、容疑者みたいな連れて行き方は止めてよ！！

「あぁ……あれは悪かった。しかし、あれも決まりなんだ。」

「……どんな決まりですか、ソレ？」

苦笑い気味のアラタさんを睨む私。……いや、アラタさんが悪い訳じゃ無いんだけど……。

あ、この世界の事をまだ話してなかったね。

この世界では数年前に渋谷に小規模の隕石が落下してきたらしい。幸いにも被害は小さくて、すぐに渋谷も復興できたらしいんだけど……。

問題はそこから。その隕石に地球外生命体「ワーム」が付着していたらしい。

ワームっていうのは、人に擬態してその人に成り代わる、という生き物。この世界をワームが支配しようと考えているらしい。厄介な事に、擬態した人の見た目、能力等も全て引き継ぐ為、見分けるのは極めて困難。

しかもワームには脱皮……さっきの気持ち悪い変化……が出来るらしく、その状態だと「クロックアップ」という高速移動能力が使えるとか。

それに対抗する為に作られたのがマスクドライダーシステム。ワームと同じようにクロックアップ能力が搭載されている、ワームに対抗する為の鎧。

アラタさんが変身していたのはガタック。現在ザビーってライダーが空席らしい。カブト……先程のライダーはなんか訳ありだとか。今はドレイク、サソードというシステムを開発中らしい。

「ところで、アラタさん!!」

「な、なんだ?」

いきなり聞いた為か、驚いているアラタさん。

「マスクドライダーシステム、どれか貸して下さい。」

沈黙。そして、

「……は?」

疑問。……え、私、なんか変な事言った?

『舞……現在数機しか無いマスクドライダーシステムを、ちゃっか

り借りるとはどういう事だ？大体、何を考えている？』

「そりゃ……そうだけど……。」

アラタさんも風牙と同じ意見らしい。こちらをじっと見ている。

「……私はワームに全然敵わなかった。あ、いや、復讐したいって訳じゃ無くて……ワームによって亡くなってる方達もいるし、なによりクロックアップされたら一たまりもない……。ライダーとしてじゃなくて、一人の人として、皆を救いたいんです……。」

……これは、心からの私の思い。ワームだけじゃない。私達の世界にいるガルド、いや、他の怪人から人を救いたい。……この思いは、烈風の力を手に入れてからも思っていた。皆の悲しむ顔を見たくなかった。

……ってアレ？そんな私変な事言った？アラタさんと風牙、なんかポカンとしてるけど。

「……。」

……アラタさんは、なんか意を決したように、何かを取り出した。なんか黄色い腕輪のような物。中心には、何かが収まりそうな穴がある。

「……これはザビーになるための物……ザビーブレス。……君に預

けてみようと思う。」

「!?本当ですか!?」

え、アラタさん!?本当に貸してくれるの!?

『アラタとやら……本当に良いのか?』

「あぁ……。ただし、一日だけだ。舞君、それでも良いな?」

「ハイ!!」

これで、救える命も増える!アラタさんに感謝です!

私の気持ちは嬉しさでいっぱいだった。

……また目隠しされて送り出された事で、その気持ちは崩壊したのだけど。

と、言う訳でさっきの公園に戻って来ました。早速ザビーの力を試

す為にね。

「さて……来い、ザビーゼクター！！」

そう言って私は右手を高々と上げた！！

「……。」

『……。』

「……。」

『……。』

「……アレ？」

……何で来ないの！？

『やはり、な……。』

「いや、あなただけ理解しないで、私にも教えてよ。」

『簡単な事だ。ゼクターは機械だがちゃんと意思は持つ。そして、ゼクター自身が適格者を選ぶ、という事だ。つまり、お前はザビーの適格者として合わない。』

……。

それが目的か、アラタさんんっ!?これだと一日だけじゃザビーゼクターを呼び出せないよ!?

「そんなぁ……。」

『お前の気持ちも分かるが、焦るな。それに、いつまでこの世界にいられるかも分からないのだからな。……うむ、調度昼時だな。そこの店で腹ごしらえでもしよう。』

「……はぁーい……。」

仕方ない……ワームは別の方法で考えるか……。そして私達は＜天堂屋＞というおでん屋へと足を運んだ。

「いらっしゃいませ。」

出迎えてくれたのは、私より年上……いや、同じくらいの女性。おかっぱの髪型が特徴だ。もう一人はお婆さん。なんか頑固そうな雰囲気を漂わせる。

「あ、おでん一つ。」

私は、此処でお昼を済ませる事にした。

「……奴らの居場所が一部分かった、だと？」

「イーッ！」

暗い何処かの実験室。精霊のＤＮＡを引き継いだガルドを作り出した謎の研究者に、黒タイツで全身を覆っている男がいる。

「ふむ……ならば、貴様等で精霊を生け捕りにしてこい。……簡単だろう？」

「イーッ！」

黒タイツの男は、部屋から出て行った。恐らく、仲間と共に、先程の内容を実行するのだろう。

「私の実験は完璧だ……。そしてこの私が、全世界の王に！！」

謎の研究者は、大声で笑いだした……。

霞河舞視点

「ご馳走様でしたー。」

そう言ってお店から出た私。うん、とても美味しかった。具は至ってシンプルなんだけど、味がもう……。

『舞、おでんについて語るのは後にしろ。』

そう、風牙の目線の先には、ワームが。しかも、脱皮した後の状態。って、これはヤバイよね!?

「早くしないと……変身!!」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

私は烈風に変身。武器は勿論……、

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｃｙｃｌｏｎｅ　Ｓｈｏｔ』

毎度お馴染み、ちり紙交換……じゃ無くて、サイクロンショットを装備。一気に攻める!!と思ったけど……、

「キャッ!?」

やっぱり出た……クロックアップ。これ、絶対反則だよね?けど……、

「当たるような攻撃をすれば!!」

『Ｈｏｍｉｎｇ　Ｓｈｏｔ』

ホーミングショットを上に放つ。……すると、弾は起動を変えて、一方に向かう。

「グギッ!?」

そして直撃。追尾弾からは、決して逃れられないよ。そして、

「素早さが私のウリ!!」

烈風ならではの素早さで一気に間合いを詰め、殴りつける。

「グガッ!?」

そして蹴ったり。時たま手に持つ銃を撃ち込んだりもする。……なんにしろ、これがクロックアップの使えない私流の戦い方!

勝てる!!そう思った刹那、ワームは別の所を見た。

そこには……逃げ遅れたのか、幼い子供が。まさか、ワームはこの子を……!?

そんな事、絶対にさせない!!

私の気持ちはそれだけで、その子供を守るべく走りだした。同時に、ワームも走りだす。

「ガァッ!!」

「キャァッ！！」

『グッ！？』

なんとか間に合ったけど……運悪く、ベルトに直撃。風牙に直接ダメージが与えられた為か、強制的に変身が解除された。

「ウゥ……。」

ワームはこちらを見据えている。……うぅ、どうしよう……？

「ひっぐ……ぐすっ……。」

後ろの子供は泣いている。どうにかしたい！けど、今の私じゃ、どうにもならない……。

「グゥ……。」

……でも、私がどうにかしないと！私しか、この子を救えない！！

ブゥゥゥン！！

「グガッ！？」

……え？何？

ブゥゥゥン！！

目の前にあるのは……機械的な黄色い……ハチ？ワームに攻撃したらしくワームは何が何だか分からないといった様子で怯んでいる。

「私に……力を貸してくれるの？」

私がそういうと、黄色いハチ……ザビーゼクターは頷くような仕草をみせる。

私はそれを掴むと、初めて烈風に変身した時のように、何かの情報が流れ込む。

「……変身！！」

私はザビーゼクターを左手に付けているブレスレットのような機械に装着した。

『ＨＥＮＳＨＩＮ』

アラタさん……ガタックのよりも低い発声音が響くと、私の体がどんどん鎧に包まれていく。その姿の名は……＜ザビー＞。

「君、逃げて！！」

子供に逃げるように促す。子供は一目散に逃げていく。

「よし……キャストオフ！！」

『ＣＡＳＴ　ＯＦＦ』

私はザビーゼクターの羽を前に移動させて、その黄色い体を１８０°反転させた。勿論鎧は吹っ飛んで、ワームに追撃を加える。

『ＣＨＡＮＧＥ－ＷＡＳＰ』

ライダーフォームにフォームチェンジ完了！……って、このライダー武器無いんだ……。

「グガァァ！！」

って、そんな事を考えてる場合じゃ無いんだ！！

「はぁっ！！」

攻撃を仕掛けてくるワームを軽くあしらって、パンチで攻撃する。

「グガァ！？」

あ、結構効いてる……って、そうだ！もうこのワーム、そんなに体力残って無い！

「よーし……ライダースティング！！」

『ＲＩＤＥＲ　ＳＴＩＮＧ』

ザビーゼクターのスイッチを押すと、エネルギーがザビーゼクター

へと溜まっていく。

「とりゃっ！！」

そして、そのままパンチ！！

「ギャァァッ！！」

ワームはそのまま爆散した。

「やったぁっ！！やったよ風……牙？」

風牙は……いたことはいたんだけど……

黒タイツのオッサン達に捕獲されていた。

……ってあのオッサン達、風牙で何を！？

「ち、ちょっと、風牙を返してよ！！」

しかし黒タイツのオッサン達はイーッ！としか言わず、灰色のオーロラに包まれていった。

追わないと！と思ったけど、

……灰色のオーロラから、入れ違いで現れたやさぐれたような男の人二人。しかも、こちらを見るなり、目を見開いた。

「兄貴……あそこにもいるよ、ライダーが……。しかも、忌ま忌ましいザビー！！」

「あぁ……アイツも地獄に堕とすか……？」

この人達……かなりの殺気！風牙も気になるけど、どうすれば……！？

「変身……。」

『ＨＥＮＳＨＩＮ』

「！？」

突然片方の男の人がバッタのような機械を呼び出し、緑色の面を表にしてベルトにセット。……って、あんなゼクター、アラタさんからも聞いてないよ！？

『ＣＨＡＮＧＥ－ＫＩＣＫ　ＨＯＰＰＥＲ』

「変身！！」

『ＨＥＮＳＨＩＮ』

片方の人が緑色のバッタのようなライダーに変身するなり、もう片方の人もゼクター（？）を呼び出し、こちらは茶色の面を表にしてセット。

『ＣＨＡＮＧＥ－ＰＵＮＣＨ　ＨＯＰＰＥＲ』

こちらは茶色のバッタのようなライダーに変身。ぱっと見、色が違うだけのように見えるけど……。

「行くぜ……相棒……。」

「兄貴となら……何処までも……。」

そう言って二人は、一斉に襲い掛かって来た。

……風牙……待ってて……！！

第三十二話：霞河舞の努力（後書き）

どーも、ジャードです。

なんか久々の更新……遅れてしまい、申し訳ありませんでした。
今回の内容はなんか走りすぎたなぁ……（オイコラ）

さて、今回は霞河が色々と奮闘。ザビーに変身したり、風牙が連れ去られたり……。以外と彼女の真面目な心境が出てきたりもしました。

また、ソウジさん一家は書くのが難しそうだったので、少ししか出せませんでした。
「天道語録」ならぬ「天堂語録」……。どっちにしろ、考えるのに時間が掛かる（汗）絶対彼女達がいると、どっちかが言いそうな雰囲気なんですよね（苦笑）……ここは、霞河の食事中に彼女達の「天堂語録」を聞いたという事で（ぅおい待て自分！？）

そしてそして、ちょっとしたサプライズで「地獄兄弟」登場！！彼等は意外と好きだったりします（笑）彼等がカブトの世界編でのラスボスだったり……。

ちなみに、今回一人につき二話、異世界移動編を執筆します（最初の四人一斉は除いて）つまり、悠樹や霞河の活躍は次の出番で移動編は終了です（早っ！！）

さて、次回はお馴染みの馬鹿コンビ、小野川と爪雷。龍騎の世界で奴等は何をやらかすのか！？

では、今日はこの辺で失礼します。

第三十三話：鏡の中での恐怖（前書き）

……や、やっと更新だ……。

本っ当に遅れてすみませんでした。

第三十三話：鏡の中での恐怖

「……異世界のライダー？お前がか？」

「……凄ぇ信じてないっぽいっすけど、ちゃんと烈雷っつー名前があるんですからね。」

変身を解いた状態で目の前の青年……レンと会話している。

……にしても、この世界はホントによく分かんねぇ。仮面ライダー裁判とか……。

…え？詳しく説明しろって？仕方ねぇ、耳かっぽじってよく聞け。

この世界では、仮面ライダーで裁判をしてるとよ。

検事、弁護士といった事件関係者がライダーに選ばれて、１３人のライダーの中で勝ち残ったライダーの主張が判決となるとかならないとか。色々ルールがあって、最も公平な裁判って言われてるらしいけど……俺はそう思わねぇ。

だって、犯人の仲間が参加して、上手く勝ち残れば無罪判決を下すことも、不可能じゃないだろ！？

……と、それはともかく、この世界での最近の事件もレンから聞き出せた。

数週間前、ＡＴＡＳＨＩジャーナル（何でアタシ？）っつー雑誌会社で、殺人事件があったらしい。その犯人（しかも各地で殺人を犯したおっかない奴）は捕まって、ライダー裁判によって死刑に決ま

ったらしい（当たり前だな）。

……しかーし！その犯人はどういう事か脱走したとか。しかも、＜王蛇＞ってライダーになる為のカードデッキをパクって。

っつー訳で、特別仕様で王蛇を捕まえろ！！って事になったとか。

しかも、今回はルールに反してライダーの力の使用許可も出たらしい。

「とゆー訳でレン、俺もお前等に同行させてくれ。」

「構わないが……それ以前にお前、年上には敬語くらい使え。」

「面倒だから嫌だな～。」

『海斗……お前、何波賀と同じような事考えてんだ？』

「嘘嘘嘘！！今のは嘘！！てな訳でヨロシクお願いしますレンさん！！」

「……何で態度が１８０°変わったんだ……？」

……っと、どうやらレンには爪雷……つまり、精霊の事が見えないらしい。以前来た形達も、見えてなかったっぽいからな。

「ふぅ……。」

……うわっ！！横からなんか来た！！って、さっきの鉄仮面の赤い

ライダー……シンジって奴か？

「シンジ、どうだ？」

「なんとか倒せたよ……。それにあのモンスター、＜アビス＞の契約モンスターだ。」

「やはり、か……。」

鉄仮面のライダーは変身を解く。……おぉ、やっぱシンジって奴だ。

「……ところでレンさん、この男の子……」

「小野川　海斗だ。覚えておけコノヤロー。」

「……小野川君をどうするつもり？」

「一度ＡＴＡＳＨＩジャーナルに連れて行こうと思う。……役に立つかはどうかは知らんが。」

「サラっと酷い事言ったよな、お前。」

この野郎……だったら俺がこの事件、解決してみせるぜ！！

『無理だと思うぜ？』

「読心術止めろや！！」

ＡＴＡＳＨＩジャーナル、待合室。その一室で、俺は待たされている。

「残ったライダーは、俺達だけ!?本当なんですか、編集長!?」

「えぇ、本当よ……。朝倉は他の事件関係者の人達を倒して、一部のライダー……＜ガイ＞、＜ライア＞、アビスの契約モンスターを奪ったらしいの。アビスの契約モンスターはシンジが倒してくれたみたいだけどね……。」

「そんな……。」

シンジとレンが会話している相手は桃井玲子。ＡＴＡＳＨＩジャーナルの編集長であるとか。

その人の話しによると、殺人犯……朝倉タケシ（あさくらたけし）は相当強いらしく、シンジとレン以外は全員倒されたらしい。

「……で、その子も手伝いたいと……無理でしょ。」

（はっきり言われた!!）

そりゃ、確かに普通の高校生だけどさー……。

「……けどシンジ、レン。残っていれライダーはまだ一人いるわよ。」

「……どういう事ですか?」

シンジが桃井に尋ねる。すると、彼女はポケットから黒い板……カードデッキを取り出した。だけど、なんか感じが違う気が……、

「これは、裁判官……神原シロウ（かんばらしろう）が人工的に作り出したデッキ……オルタナティブ。普通のライダーとは、少し違うんだけどね。」

「……しかし編集長、誰がこれを使うんですか？」

「それは……」

……桃井が言う前に、

――キィィィン――

という金属を引っかくような音が。つまり、

「モンスターか……！」

シンジはそう言い、レンと一緒に外へ出た。

「俺も行くぜ！！」

「あ、ちょっと！！」

俺も追う事にしたが、桃井が声を上げたのはソレが理由ではない。

……ちゃっかり俺がオルタナティブなるデッキをパクったからだ。
ちなみに、無事逃げ切った。

「よーし……これで俺もミラーワールドへ……！」

『盗っ人かお前は！？』

「今は仕方ないだろ！！さ、とっとと行くぞ！！」

『……海斗……俺もう愛想尽かすぞ……？』

爪雷がなんか言ったっぽいけど、気にしない！

……っと、二人共いたな。

「「変身！！」」

シンジは右手を左斜め上にピンと伸ばし、レンは握りこぶしを胸の辺りで構える。そして、二人同時にカードデッキをベルトにセット。その瞬間、何かの幻影がオーバーラップし、二人に重なる。

シンジは再び龍を連想させるライダーに変身。
レンはどこと無く蝙蝠を連想させるライダーに変身する。手には、これまた蝙蝠の装飾が施された剣。

変身完了した二人は、ミラーワールドへと入って行った。

「よーし……じゃ、俺も。」

『……もう知らねぇぞ……。』

取りあえず俺もカードデッキを鏡に翳すと、同じようにベルトが現出。……なんか形が違うが。……大丈夫だろうな？

「……変身？」

出来るか分からないので、疑問形でデッキをセット。すると、前方から幻影がオーバーラップし、俺に重なる……と、一応変身した。

「っしゃあ！！」

……でもさー、コレ何モチーフにしてんの？

まさかゴキか……アレか？アレなのか！？

『いや、コオロギだと思う。』

あ、良かった。

……さて、本当にミラーワールドに入れるのか、そーっと鏡に触れてみる。

……おぉぉ！！摺り抜けた！擦り抜けたぞ！！

「突入ーー！！」

妙な音と共に、ミラーワールドへ入った！

「うぉぉ……。」

『……ほう……。』

……なんか凄いな、ミラーワールド。なにもかも反転してやがる。
俺達のいた世界にも、ミラーワールドってあるのかなー？

……っと、そんな事よりアイツ等を追い掛けないと！
なんか遠くから金属音聞こえるし！

「……ってか爪雷、お前ミラーワールドでも平気なのか？」

『俺様をなめるな。こんなの、どうって事無い。』

……なんかえらく上からの物言いだなー。
……まあ、それはいいや。早くシンジ達に追い付かないと……

『ＡＤＶＥＮＴ』

……ん？

「うわぁっ！？」

って、おぉ！？なんかシンジが吹っ飛んで来た！

「オイシンジ！大丈夫か！？」

しかしシンジは俺の質問には答えず、前を見据える。その視線の先には……

「シャァァァ……。」

紫色の……蛇ぃ！？

いや、無駄にデケェよ！！無駄に怖いよ！！あ、蛇じゃない、コブラだった！！

「な、何だよアレ！？」

「ベノスネーカー……王蛇の契約モンスターだ。」

そう言ったのは、蝙蝠騎士に変身したレン。なんか、槍のような武器を持っている。

「……にしても小野川、何故お前がオルタナティブのデッキを使っている？」

「あーいやー、まぁー……うん。」

……はぐらかさねば！はぐらかさないと、絶対軽蔑の眼差しで睨まれる！

「……今は聞かない。だが、前には気をつけろ。」

「へ？……うぉっ！？」

「シャァッ！！」

危なっ……ベノなんちゃらが急に襲って来やがった……！って、なんか人影も……？

「くはぁぁっ！！何だぁ！？一人増えてやがる……面白いじゃねぇか……！！」

同時にそう言って現れたのは、紫色の装甲を身に纏ったコブラを連想させる騎士の姿。……あれが王蛇？

「気をつけて……アイツは、＜イライラする＞って理由で何人のも人を殺してきた……！」

『ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ』

シンジはデッキからカードを一枚引き、左手の龍を模した……ガントレットって言うんだっけ？まあとにかく、それにカードを装填。発声音が告げると、何処からか赤い剣が出て来て、シンジはそれを上手くキャッチ。

……なんか俺達が変身するライダーのシステムに似てるなぁー。

「はぁぁぁ！！」

「はっ……お前はコイツでも相手にしてろ！」

『ＡＤＶＥＮＴ』

王蛇は何処からか紫色の杖を取り出し、カードを装填。
すると、再び現れるモンスター。
色は王蛇の色とは違い、銀。その姿は一言で言うと……サイ。

……いや、サイはサイなんだけどさぁ……

何で二足歩行してんだ！？何で人間のような体つきしてんだ！？

「メタルゲラス、だと……！？」

「確か、編集長がモンスターを奪ったって……うわっ！？」

「ゴォォォ！！」

雄叫びを上げながらシンジに襲い掛かるサイ。シンジは上手く剣で防いでるけど、その巨体相手には結構きつそうだ。

「シンジ！」

……レンが加勢に行こうとするが、

「クク……させねぇよ！」

王蛇の契約モンスター、ベノなんちゃらが立ち塞がり、レンを攻撃している。

「シャァァァ！！」

「ちっ……」

……そして、残っているのは俺だけ。

……って事は……？

「……そこの黒いの、俺と戦え！今俺はイライラしてんだ……楽しませてくれよぉ！？」

やっぱりかぁぁぁ！！？？何で俺！？嫌だ嫌だ嫌だ、絶対に死ぬべ！？

『頑張れ。』

「一言だけか！？ってか、人事みたいに言うな！！」

『人事だろ。幸い、誰も俺の事見えてないっぽいから、高みの見物といくか。』

「ふざけんじゃねぇぇっっっ！！！」

そう言いながら、俺はダッシュ！勿論、逃げるに決まってるだろ！！

「クク……逃がすかよ！」

『ＡＤＶＥＮＴ』

発声音が響くと……なんか前からエイっぽいの来たぁぁぁ！！！

「げふぅっ！？」

そして直撃……って、コイツどれだけモンスター奪ったんだよ！？

「余計イライラさせやがって……」

『ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ』

気付いたら、なんかサーベルみたいな物を持ってる殺人鬼。

……死んだな、俺。

「はぁっ！！」

「あびゃっ！！」

勿論普通に攻撃が当たり、吹っ飛ぶ俺。

「ちっ……何だ、この程度か……興ざめだ……。」

……あ？今なんつった？

「……こんな雑魚、直ぐに終らせ「ざけんじゃねぇクソヤロー！！」ぐがっ！？」

……え、何があったって？

殴ってやった。おもいっきり。

「ちっ……テメェ……」

「お前よぉ……俺がどれだけ苦しい思いしてるか分かってんのか……？」

「……あぁ？」

「幼なじみに殴られ蹴られ弄られ……一生懸命頑張ってるのにも関わらず幼なじみばかりか異世界の奴等にも邪険に扱われるって……どういう事だコラァァッッッ！！？？」

『……心からの叫びだったな。』

……当たり前だろう。

しかしどうした事か、王蛇はともかく、シンジやレン、ミラーモンスター達も硬直している。

「……何でさ？」

「テメェ……よく分からねぇ事叫びやがって……」

そう言って王蛇はサーベルを構える。

……こうなったら、

「とことんやってやる！！」

そう言った俺は、カードドロー！……なんか剣が描かれているけど。

んで、何をどうすれば良いんだ？

あ、右腕に付いてるヤツを使うのか？

「あぁぁぁ！！！」

げっ、ヤベッ！は、早く……ってコレ、装填型じゃなくてスラッシュ型！？

そう考えた俺は、先程のカードを右腕に付いてる機械に通してみる。

『ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ』

俺の聞いた事の無い、無機質な女性の発声音。そして、燃え尽き、消滅したカード。

……失敗か!?と心配したが、そうでもなかったらしい。何処からか剣が飛来し、俺はソレを上手く掴む。
そして、王蛇に迎撃!

「でやっ!!」

「グッ……な、何!?」

王蛇には予想外だったか、うろたえている。……今がチャンス!!

「オラオラオラオラ!!」

「ちっ……なめるな!!」

『ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ』

発声音が告げると、空中で旋回していたエイっぽいモンスターは、王蛇の下へ向かう。そして、王蛇はソレの上に乗った。

そして……猛スピードでこっちに来たぁ!?

無理、危ない!当たったら死ぬ!!

つー訳で、逃げる。

「うぉぉおっっっ!!!」

「クソッ、ちょこまかと……待ちやがれ！！」

待てと言われて待つ馬鹿はいない！

『何だよ、猛攻劇が始まると思ったが、結局逃げ腰か！？』

「言うなコノヤロウ！！」

……そんな事を言い合っていた為か、前方に気が付かなかった。

前方にはなんと、あの灰色の……オーロラ？っていうか、そう表現できるヤツだな。

よっしゃ、帰れるのか！？

……と思いきや、世界からも俺は邪険に扱われてるらしい。

灰色のオーロラっぽい物から、一人の人間……いや、ライダーが。

その姿……まさにシンジが変身していた……龍騎だっけ？その龍騎そのものだ。違うのは、体全体が黒に塗り潰されている所と、その覆っている空気。

優しい雰囲気のあるシンジには無い、……何て言うか、一言で言うと闇が奴を覆っているような感じがする。

……でもさ、この世界のライダーって１３人の筈だよね？シンジとレン以外はあの殺人鬼……朝倉こと王蛇が倒した筈だけど……じゃあ、アイツは何者！？

「貴様の精霊……貰い受ける。」

そう言った奴……黒龍騎は、俺の口煩い精霊、爪雷にへと襲い掛かった……。

第三十三話：鏡の中での恐怖（後書き）

とゆー訳で異世界移動編、龍騎の世界。飛ばされたのは、我等が馬鹿、小野川。

変身したのは……＜仮面ライダー＞ではなく、＜擬似ライダー＞。誰がアイツを仮面ライダーに変身させるか（オイ）

……しかし、この世界では龍騎系統のライダーのデッキを誰が作ったんだろう……？

それを考えると、オルタナティブもこの世界では仮面ライダーとして扱ってもおかしくはない気もします。ネガの世界では怪人と同じ扱いでしたが。

そして、ラストに出て来た奴。分かる方は分かりますよね。正解はまた龍騎の世界の話で！

では、今日はこの辺で。

第三十四話：ワタルと渉（前書き）

すみません！自分の事情でかなり遅れました。

本っ当に申し訳ありませんでした。

今回も駄文ですが、お付き合い頂ければ幸いです。

第三十四話：ワタルと渉

「はぁぁ！！」

『ぐがっ！？』

吸血鬼みたいなライダーは、ファンガイアなる異形と戦闘中。……僕たちより年下のライダーってのも、いたんだ……。

「ワタル、コイツさっきの水色の奴で弱ってるぜ！」

「分かってる！」

……え？ワタル？……いや、僕も渉（わたる）だよ？とか思っていると、吸血鬼ライダーはどこからか……棒、いや、笛？とにかくそれを出し、蝙蝠に吹かせた。……あ、やっぱり笛で合ってたんだ。

「ウェイクアップ！！」

蝙蝠が宣言すると、音が響くと同時にベルトから離れて……

……え！？夜になった！？

で、吸血鬼ライダーは右足を高く上げて蝙蝠が右足に触れると、なんか、蝙蝠の羽っぽい物が露出。そのままジャンプ。
そして、何故か夜になった空の三日月を背に、ファンガイアに向かってキック！

『う、うわぁぁぁ！！！』

ファンガイアは逃げようとするけど、間に合わずキックが炸裂！ファンガイアはガラスが割れたように散り、地面には蝙蝠のような紋章が浮かび上がっていた……。

「……親睦会じゃないの？」

「奴等の目から逃れる為の手段だ。そもそも、大半のファンガイアは人間と和解している。」

なんやかんやで連れて来られた場所……キャッスルドラン。そこで僕は少年……いや、ファンガイアのキング、ワタルと会話している。
偶然だけど、僕と同じ名前だ。
……それはともかく、あのビルに書かれていた＜親睦会＞は敵から目を欺く為であり、本当の目的は……敵を倒す為の作戦会議のようなものらしい。

また、ファンガイアは敵じゃない。……さっき襲って来ただろう？
と思う方々もいると思うが、それは次の説明から繋がると思う。

「レジェンドルガ……この種族が、今の敵って事だね、ワタル？」

「そういう事になるな。今は殆どのファンガイアは怯えきっている。
……別世界から来たお前の力を貸して欲しいんだ、渉。」

「……なんかややこしいな。」

「ですよね～。同じ名前ですし。」

……ワタルの後に会話したのは、ワタルに力を貸しているキバットなる蝙蝠に、タツロットなるワイバーン。……僕には普通に接しているけど……

「貴様ぁ、キングに向かって馴れ馴れしく名前を！！」

「ちょ、次狼、落ち着いて！」

「争い、よくない。」

……アームズモンスター……所謂、ワタルの側近の約一名（？）はなんかキレている。

それはともかく、この世界の敵はレジェンドルガ。異世界から来て、この世界を侵略しようとしている、どこか幼稚番組で出る敵みたいな宣言をした種族。……この世界では人間とファンガイアは共存している。平和に慣れきったファンガイアはレジェンドルガに怯えているとか。先程のファンガイアも、自棄で人間を襲っていたという。

また、一部のファンガイアは命の惜しさから、レジェンドルガの配下についたらしい。

さらに、またファンガイア側で予想外の事が。

以前対ファンガイア用のスーツを開発していた男、白峰タカトがレジェンドルガ側についたらしい。封印されていた＜レイキバット＞と、危険性から開発を断念した＜アークキバット＞を盗みつつ。

……で、かなり危険とも言える強さを持ったレジェンドルガ族をどうするか、まぎらわしくも会議を開く事となったらしい。

「だけど、ファンガイアって通常の攻撃じゃ倒せないんだよね？……ワタル、どうにかならないかな？」

「……ついてこい。」

あ、なんか方法があるっぽいね。

「ちょ、キング！？こんな若造に＜イクサ＞を……！？」

「現在イクサの資格者は空席だ。渉になら調度いいだろう。……クィーン、お前も準備してくれ。」

「分かった。」

すると、何処からか女性が。恐らく、彼女がファンガイアのクィーンなのだろう。

……彼女の回りに、何か浮遊しているのは、気のせいだろうか。

「次狼、落ち着いてよ……僕たちも準備しないと。」

「カルシウム、取れ。」

「……力、お前の一言は余計だ。」

「……コレが？」

「そう……イクサナックルに、イクサベルト……＜イクサ＞に変身する為のライダーシステムだ。」

別室に案内された僕は、目の前の変身ツールを見据える。ベルトに、メリケンサックっぽい物に……携帯？

「……ワタル、この携帯は？」

「あぁ、イクサの強化ツール……らしい。」

「らしい？」

「前イクサの装着者が使っていたのだが……使い方が、その前装着者しか知らないんだ。」

……じゃあ、僕にはそんなに必要無い訳か？

どうでもいいけど、何故僕がイクサの力を借りようとしているか？と思う人いるよね？
勿論氷甲だって至って元気だ。喋らないからか普通に空気化してるけど、変身はバッチリ出来る。
何故なら、ファンガイアには魔皇石って石を埋め込まれた武器、もしくは力でしか倒せないらしい。ワタル……キバには、体に魔皇石が埋め込まれていたから倒せるらしいけど……。
で、イクサは魔皇石を埋め込まなくてもファンガイアを倒せるように作られたシステムだから、貸してもらおうって事になった訳。

……どうでもいいけど、なんか外が騒がしいような……？

「申し上げます、キング！！」

「どうした、ビショップ！？」

……いつの間にか、ファンガイアの方が。多分護衛かなんかかな？

「レジェンドルガの大群が……キャッスルドランに向かっています！」

……えぇっ！？何でイキナリ！？

「もう動き出したか……。ビショップ、お前はルークと供に迎撃にあたれ。また、戦闘可能なファンガイアへの指示はお前に任せる。」

「はっ！」

こんな状況でも臆さないワタル。……多分、こうなる事はあらかじめ想定していたのだろう。そして、ビショップと呼ばれたファンガイアは駆け出して行った。

「渉、行くぞ。」

「あ、うん。」

ワタルに付いていく僕。……って、アレ？まだ、イクサの力分からないんだけど？

「イクサの力は戦闘中にでも説明出来るからな。」

……心の中読んだ、君？

「クィーン、サガーク。」

……ちょっと驚いていた時に、気付いたら目の前ファンガイアのクィーンとその回りを浮遊する何かがいる。

「サガの力は使いこなせるな？」

「問題無い。……だが、レジェンドルガ族がこんなにも早く行動するとは……。」

「その為の対策もちゃんと考えていた。それに、今は渉もいる。最悪の結果は免れるだろう？」

「そうだな……。ともかく、先ずはレジェンドルガ族が先決だな。」

「人間とファンガイアの平和の為に。」

……こんな状況でも表情を少しも変えない……流石、キングとクィーンか……。滅多にみないであろう光景を見たなぁ、僕……。

「大分騒がしくなってきたな……サガーク！」

クィーンが叫ぶと同時に、先程からクィーンの回りを浮遊していた＜何か＞が意味不明な単語を言いつつクィーンの腰に取り付き、ベルトになる。そして、クィーンは……リコーダー？のような物を持ち、

「変身。」

そう言いつつベルトに挿し、引き抜いた。

『ヘン……シン！』

ようやくサガークが理解出来る言葉を発したと同時に……クィーンの姿が変わっていた。

体全体を覆う銀の鎧、全てを見透かすような青い複眼。体の一部には、黒い石……恐らく、魔皇石。

「……ワタル、これは……？」

「＜キバの鎧＞以前に開発されていた＜サガの鎧＞……別名＜運命の鎧＞。」

……サガ。レジェンドルガに対抗すべく運命に立ち向かう戦士の名

前、か……。

「行くぞ、キバット！」

「おっしゃあっ、キバって行くぜぇっ！！」

再びテンションの高い蝙蝠……キバットが出てきて、ワタルに噛み付く。そして、生成されたベルトにワタルはキバットをセット……じゃなくて、ぶら下げて、

「変身。」

一言。すると、みるみる背が高くなっていき……吸血鬼ライダー、キバへと変身した。

……って、

「ちょっと待ってよ。コレって、空気読んで僕も変身するパターンだと思うんだけど……どうすれば良いの？」

「簡単に言うと、イクサナックルをもう片方の手に打ち付けて、ベルトにセットだ。」

「凄く短くて分かりやすい説明をどうも。」

えぇっと……ベルトを巻いて……ナックルを右手で持って……左手に打つ、と。

『レ・ディ・ー』

……すっごく機械的な発声音が認識する。

「……変身！」

そのまま、ナックルをベルトにセット。

『フィ・ス・ト・オ・ン』

発声音が告げると、ベルト……いや、ナックルから鎧を覆った戦士の虚像が展開、そして僕に重なった。

簡単に言うと、白い鎧……聖職者みたいな姿。……これが……

「……イクサ。」

「そうだ、渉。今はセーブモード状態だが……大丈夫だろう。行くぞ！」

ワタルの掛け声と共に、僕達は駆け出した。

「朱雀が響鬼……青龍がカブト……白虎が龍騎……玄武がキバ、か。」

暗い何処かの研究室……その一室に、ガルドの開発者である男がいた。

「青龍……は大丈夫か。一応別のカブトの世界から雇った奴らがいるからな……。白虎……ふむ、こちらも別の龍騎の世界からの＜ミラーワールドの仮面ライダー＞がいるから、問題無いだろう……。玄武も直ぐに来るか……上手くレジェンドルガを利用すればたやすい。問題は朱雀だ……西鬼が乱入したからな……こうなったら、私が赴くか……。」

「ウゥ……グ……。」

「安心したまえ。」

男の背後にはカプセル……その中に、正月に襲い掛かったガルド……ＥＸ－Ｎｏ．０００－Ｇと呼称された怪物が。

「お前はもうすぐ完成体となる。そして……全世界のライダーに、絶望を！！」

男はカプセル内のガルドをみながら、高らかに笑い続けた……。

「行くぞ！」

『イ・ク・サ・ナッ・ク・ル・ラ・イ・ズ・アッ・プ』

現在、突如現れたレジェンドルガ、裏切りファンガイア連合軍と対抗中。一応必殺技を放ったりしてるけど、数が多い……！

「チッ……キリがない！」

「一気に倒すぞ！」

『ウェイクアップ』

「ガルルバイト！」

二人も必殺技を発動したよう。サガはレイピアでどんどん突き、青くなったキバは夜空の中持つ剣で切り裂いていった。

幾分か数は減ったけど……まだまだ多い……うぅ。

「私は南側を受け持つ！キングと貴様はレジェンドルガの王を倒せ！」

サガ……クィーンはそう言いつつ、走り去った。

……ちょいまて。

「あの……ワタル、レジェンドルガにも王って……？」

「あぁ、いる。奴を倒せば、レジェンドルガを統制できるからな。」

「そうはさせないな。」

「「!?」」

突然会話に割り込んできた声。振り返ると、……若い男の人が。

「白峰……!!」

「お久しぶりですね、ファンガイアのキング。」

この人が、白峰タカト……こんな若い人が、幾つものライダーシステムを作り出したのか!?

「お前……今更何の用だ!?」

「急かさないで下さいよ、キバット……。用があるのは、そこのイクサ、さ……。」

「え、僕?」

そう、何故か白峰という男は、僕を指名した。……何で?

「僕の手に入れた新たな力を試してみたい……レイキバット!」

「行こうか、華麗に激しく!」

突然……キバットに似た蝙蝠が出現。ただ、色は白く、どこか機械的な印象を受ける。

「変身。」

「変身！」

白峰とキバット似の蝙蝠……レイキバットが宣言すると同時に……白峰は宣言通り＜変身＞した。どこか、イエティを連想させる冷気を纏った姿。ちなみに、レイキバットはベルトに接続されている。

「レイ……完成させたのか……！？」

「その通りですよ、ファンガイアのキング……。しかし、私もこの姿になるのは初めて……そこのイクサで試そうと思っているのですよ。」

……うわ、なんかイラッてきた。それってつまり……、

「……僕が弱そうに見えるって事？」

僕はベルトを外し、変身を解除。そして、黙りこくってる氷甲をベルトへと変えた。

『Ｓｙｓｔｅｍ　Ｌｏａｄｉｎｇ……Ｓｔａｎｄｂｙ』

「変身。」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

相手が氷なら、こっちも氷ってね。

「何だ、そのライダーは……！？」

「烈氷って名前。じゃ、そのレイって力、完膚無く叩き潰してあげるよ……？」

そう言いつつ、僕はレイへと殴り掛かった……。

第三十四話：ワタルと渉（後書き）

……約三週間の空き……最近の執筆速度、これぐらいになってますね……すみません。

さて、今回は二人の＜わたる＞が接触。渉をキバの世界に行かせたのも……これが理由です、ハイ。
今回も色々やっちゃってます。いつの間にかタツロットがいたり、クィーンもいる上サガになってたり……これがジャード流、世界の破壊（待て）
文章中に出た前イクサの適格者ってのは……ディケイドのライダー大戦編に出た、あのイクサの事です。カズマによってやられた筈ですが、映画で世界が復活してますので……前適格者さんも復活したと考え、しかし辞退してもらいました（出番無しか）。
サガは……誰が変身してたんだろ（オイ）

また、レジェンドルガは異世界からの侵略者って設定にしてます。
また、レイもアークも、はたまたイクサも白峰タカトによって開発された物として……。有能だな、彼。

そして、キレました渉。普段は小野川のみにドSですが、敵に馬鹿にされたら……。
……なんか性格変わりつつあるな、渉（お前のせいだろ）
彼が変身するイクサは、次の出番で活躍の予定……です。今回は烈氷が目立ち気味ですが。

次回は響鬼の世界に戻ります。歌舞鬼に変身した悠樹は、何をする!?

では、今日はこの辺で。

P．S．恐らくこれからは烈火を中心に執筆を続けると思います。

あしからず。

第三十五話：響け、清めの音（前書き）

ハイ、こちらも約一ヶ月放置です。ホントにすみません。

……この調子だと、いつ異世界移動編終わるんだろ……？

第三十五話：響け、清めの音

……どうなってんだよ……？

気付いたら音叉が開いていた。無謀にも俺はそれを額に近付けた。

……体も鍛えていないのにも関わらず。

しかし……俺は鬼になっていた。

案外簡単になれるものなのか……？

こうなったら、頑張ってでも西鬼をぶっ倒して翔炎を返してもらわないとなぁ……。

しかし、問題はここから。その問題は＜武器＞だ。

まず、音叉が変化したらしき剣。腰にアスムが使っていたのと色違いの棒。……そして、

何で和傘！？

いやいやいや、これでどうするってのよ！？振り回すのか！？いや、ソッコーで折れるだろ！！いくら名前が＜歌舞鬼＞だからって、和傘はどうかと思うぞ！？

「ちっ……厄介だな！！」

「うおっ！？」

剣を振りかざして来た西鬼。……和傘で防御するのは気が引けたので、相手と同じ剣で対抗する。

『オイ、悠樹！！早く助けてくれ！！』

「分かってるっての！！」

俺はそれを弾き飛ばし、腰に付けている棒を取り出し、殴り掛かった。

「おりゃっ！」

「ぐっ！？」

『ぶほっ！？』

……あ、やべ。手が滑って翔炎まで。

『テメッ、悠樹！？俺じゃねーよ俺じゃ！？ちゃんと狙いやがれ馬鹿者！』

「うるっせーな、分かってるよ！！」

「貴様ぁ……調子に乗るなぁっ！！」

大分キレつつある西鬼。……うん、順調だ。そんな時に相手は隙が出来る。てな訳で、

「おりゃっ！」

「むっ！？」

ベルトに着いていた太鼓っぽい物を、アスムがやっていたように敵に付ける……と、太鼓っぽい物は拡大し、それこそ太鼓らしくなった。

「し、しまった！」

『よし、やったれ悠樹！！』

「おっしゃ、音撃打……」

＜業火絢爛＞

「……何て読むんだ？」

『いや知らねぇよ！早く繰り出せよ！！』

「いや、他の鬼の方々も必殺技叫んでたから、俺も言わにゃならん。」

『何だよそのこだわり！？あー……だったら適当に言え！！』

適当、ね……だったら、

「よっしゃ、音撃打、翔炎タコ殴りぃ！！」

『何でだぁぁっっっ！！？？』

――――翔炎タコ殴り――――

『オイ誰だ！？今変なテロップ入れたの誰だ！？』

喚く翔炎。だが、構ってなんかいられない。俺は棒というかバチを持ち、西鬼を叩きまくった。

「でゃあっ！！」

「ぐっ、がっ……がはっ！？」

『ぶっ、べふっ、ちょ、悠樹、痛い、俺にも当たぐふぅっ！？』

時たま翔炎にも当たってるけど、大丈夫だろう……多分。

「でりゃっ！！」

「『ぶべぁっ！！』」

止めの一撃。西鬼（＋翔炎）は吹っ飛んだ。適当に殴ってただけだったが、結構効いている様子だった。

「「「……。」」」

後ろの三人は、かなりシラけてたが。
ま、そんな事より……

「翔炎は返してもらうぞ。」

『悠樹……お前、後で覚えてろ……。』

「き、貴様……なめるな！！」

すると西鬼は、なんか物凄く巨大な……トライアングルのような物体を取り出した。……ていうかデカッ！

「音撃響、偉羅射威！！」

――――偉羅射威――――

……いやさ、いらっしゃいって、どゆことよ？

とか思っていると、西鬼は音叉を取り出し……、

「いらっしゃぁい！！」

「……はぁっ！？」

なんか叫びながらトライアングル（っぽい物体）を鳴らし始めた。
普通に見ると「なんかトライアングルを鳴らしながら叫んでるおっさん」だが（まんまだな）、流石清めの音。ちなみに、これでもダメージ受けてます。

『あぁぁぁぁぁぁ！！！』

……超至近距離にいる（というか、ワキに挟まれてる）翔炎は、もう大ダメージ。かなり絶叫してる。……哀れ、翔炎。

「フフ……今のうちに！！」

西鬼はそう言ったと思ったら、突然演奏を止め、逃げ出した。
……ってオイ！？

「待ちやがれ！！」

しかし泥棒さながらの逃げ足で、見えた時には既に小さくなっていた。……ってか、あの短時間でどうやって！？

「クソッ、早く追わないと……」

「悠樹さん、その格好で追うのはちょっと……。」

唐突にアスムが声を掛けてきた。
……確かにこの歌舞鬼の姿って、アスムの響鬼とかとは違って色派手だからなー……。

「じゃ、変身を解除して……」

「言っておきますけど、鬼は変身すると同時に服を犠牲にします。」

……はい？

「つまりは、変身解除したら即牢獄行きです。」

「……服貸して下さい。」

……危なかったぁ……。

……って、翔炎ッ！？今何処！？

翔炎視点

よう、俺の名は翔炎。精霊の朱雀族、属性は炎。
作品初の精霊視点だ！張り切っていくぜ！！

……と、言いたい所だが、

「ふぅ……あの小僧、よくも邪魔を……もう少しで戦国時代の鬼の遺産をこの手に出来る筈だったが……。」

……現在進行形で大変な目にあってる。
何だよ、怪盗２１．５面相って？中途半端なんだよ、数字が。ネーミングセンス皆無かコイツ？
とか思ってみる。口に出したら大変な目に合うって事くらい、自分でも分かるさ。

「……まあ、この意味分からん生物を頂戴出来ただけでも、よしとするか。」

……ヤバイな、俺。何するつもりなんだ、コイツ……！？
とか不安に思っていると、前方に、

……灰色のオーロラ（悠樹命名）が。
コイツが発生させたのか！？と思ったが……

「何だ、アレは……！？」

どうやら怪盗には予想外だったらしい。初めて見るらしく、そのオーロラを見据えている。
そして、そのオーロラから……奴が出て来た。
ガルドを作りだし、正月早々最強ガルドを送り込んだ科学者のような衣服を着込んだ男。

「貴様、何者だ……？」

「クク……誰だって良いではないか……。私が頼みたい事はただ一つ、朱雀を渡せ。」

「何？」

……待て待て待て、何このパターン？ていうか、率直すぎる。

「珍しい物を手にした怪盗が、見知らぬ者に安々と渡す訳が無いだろう。」

「ふむ……ならば、力付くだ。」

すると、男の背後から再び灰色のオーロラが現出。そして、そこから……二人のライダーが出て来た。
一人は白いスーツに青いラインのライダー。……いつか会ったファイズにどこと無く似ている。背中に何かデカイ物を背負っているのは何故か？
もう一人は、マフラーをした……野性的なライダー、とでも言おうか？どっかで見た事あるような……とにかく、特殊なタイプのライダーだ。

「何だコイツ等！？鬼じゃない！？」

……西鬼が驚くのも分かるが、俺も驚愕している事がある。

『ちょっと待て!!何でライダーがお前の味方してるんだよ!?』

そう、今までの経験から考えると、ライダーは大ショッカーと敵対していた筈だ。そのライダーが、大ショッカーの幹部に味方する訳が無い!!

「クク……雇った、と言えば分かるか?」

『何!?』

「ライダー全てが正義の味方って訳じゃない。中には自分の為に戦ったり、敵対勢力側についている者もいる。そんなライダー達を雇った。私としては駒も同然だが……彼等にも多少の利益が……」

「そこまでにしろ、学者。」

突然、野性的なライダーが男の話を遮った。

「敵の前でベラベラ喋るな。馬鹿か貴様?大体、長々と戦うつもりは無い。……用は、あの鳥を捕えれば良いのだろう?」

「クク……流石はアギト……では、手際良く頼むよ……。」

「フン……だが、もう一人雇っているという事は、俺を信用していないって事か……?」

「そう解釈しないでくれよ、手厳しいなぁ……サイガ、君も頼むよ。

」

「ＯＫ。」

そんなやり取りを終えたのか、二人のライダーはこちらを見据えた。

……やーな予感……。

「さっさと渡してもらうぞ……！！」

「Ｉｔ’ｓ、ｓｈｏｗｔｉｍｅ！！」

そして、二人は一気に掛かって来た。

「ふん……怪盗２１．５面相改め、怪盗西鬼、参る！！」

なんか大変な事になっちまった……。

悠樹、早く来てくれぇぇっっっ！！！

波賀　悠樹視点

「一体どこにいるんでしょう……？」

「あークソ……あの怪盗野郎……。」

取りあえずあの後、男性が多い斬鬼流の方々から服（というか胴着？）を貸してもらった。少しサイズが会わない気がするが、借りているのだから贅沢は言ってられない。

それはともかく、現在はアスムと散策しているんだが……やはり見つかる可能性は少ない。山の方に行ったのは分かるんだけど……

……ん？何だアリャ？
なんか……小型の翔炎？いや、絶対違うな。

「あ、アカネタカ！」

アカネタカと呼ばれたソレは、アスムに反応してこちらに来た。
どうやら、鬼が使うアイテムのような物らしいのだが……こんな物が戦国時代から使われてたと考えると、驚くしかない。

「……アキラさんが西鬼らしき情報を掴んだらしいです。今すぐ向かいましょう！」

……え！？今ので分かったの！？
いや、ディスク型になったアカネタカに音叉を当てただけで……

……鬼ってすげぇ。

「悠樹さん、早く！」

「え、あ、ハイ。」

思わず敬語になりつつ、俺はアスムの後を追った。

たどり着いた場所は、どこぞの山。そこでアキラさん、トドロキさんと合流。

「近所の人の話だと、鬼が山に入って行ったと……。」

「いや……此処で間違いないっす。」

「……ですね。」

鬼の三人が言う通り、此処で間違いない。
いや、何故って……さっきから爆音が聞こえるから。
爆音に混じって「ギャァァ！！」とか、「ヤッハー！！」とか様々な奇声も聞こえる。

「……んじゃ、早く行きますか。」

そんな訳で変身、突入。
流石に変身した方が速いからな、うん。
多くの木を通り抜け、崖を飛び越え飛び降り、たどり着いた時には……

「ぐっ……。」

何故かかなりボロボロの西鬼。前方には見た事の無いライダーが二人。

……って待て！翔炎は！？

「フフ……ついに朱雀を捕えた！！」

『グッ……。』

え？……って、アイツ！！

「お前、あの時の！！」

「ん？その声……あぁ、この朱雀の適合者か。まさか鬼になってるとはね……それより、朱雀は貰ってくよ。」

「ざっけんな！返しやがれ！！」

手を伸ばしたが……その前にあのオーロラが妨害、ムカつく科学者と二人のライダーを覆った。

クソッ、早く追わないと……

「グゥッ……。」

……ん？

「貴様ラァ……舐めやガッて……！！」

……なんか背後の西鬼が……凄く嫌な予感がしますよ？えぇ、物凄く。

「ガァァァァ！！！」

えぇぇぇっっっ！？なんか西鬼が炎に包まれて……牛になったぁ！？

「ま、まさか……！？」

「伝説の魔化魍、牛鬼！？」

伝説ってどゆこと！？てか、何で人間が「まかもー」に！？

「アスム、これどういう事！？」

「簡単に説明すると、鬼の力を上手く扱えない人の成れの果て、とでも言いましょうか！！」

成れの果て……なんとなく分かる気がする。

そして、その問題の牛鬼……伝説と言われるだけあって、凄まじく強い。

「このやろっ！！」

「ガァァァ！！」

「グッ！？」

さっきから殴り掛かっても、衝撃波のような物で攻撃されたりして、ダメージを与える事が出来ない。唯一遠距離での攻撃の可能なアキラさんも、銃弾が効いていない。

「この牛鬼……あの時よりも強い……！！」

あの時……って、どの時だ……？やっぱ、俺がこの世界に来る前か。

……そんな事を考えていたのが悪かったのか、

「ガァァァ！！」

「がっ！？」

奴の攻撃をまともに受け、俺は意識を手放した……。

此処、は……？

どこかの……普通の一般車線……。

雪も降って……って此処、もしかして……あの場所？

―お父さん、お母さん！！早くしないと置いてくよー！！―

そんな雪景色のなか、四歳位の少年が走っている。その後方には、

愛おしそうにその子供を眺めている、仲の良い夫婦。

……何でだろ、今の子供の声、遠くに響く感じだった……。

―悠樹、ちょっと速いわよー！！―

―いいじゃないか、元気な証拠って事だ―

差ほど困っている様子もなく、子供……俺と同じ名前、「悠樹」を小走りで追う夫婦。……この二人の声も、遠くに響いている感じ。

あぁ、俺はこの光景を知っている。今でも信じたくない、この光景を。

―悠樹、危ない！！―

突然様子が一変する夫婦。「悠樹」は気付いていないが……背後から、猛スピードで車が走っている。助け出さんばかりに走り出す夫婦。

……もう見たくない！！

その思いと同時に、揺らぐ光景。気付いた時には、何もなく暗い空間が広がっていた。

……そうだ。今の光景は、全部俺の過去の記憶だ。

あの後俺は気を失っていたのか、気付いた時には病院のベットで寝ていた。

あの時いち早く俺を庇ったのが、父さんだった。即死だったらしい。
四歳だった俺には「死」というものがよく分からなかったが、もう会えないと分かった途端、一晩中泣いていた記憶がある。

その後、女手一つで母さんが俺を育てる事となったが……過労が祟ったのか重い病気にかかり、二年後、皮肉にも同じ日に、後を追うように他界していった。

俺は何もできなかった。ただ見ているだけだった。

しばらくは俺もそのショックで、何も考えたくなかった。何事も無気力で……俺も死のうかと考えた事もあった。

そんな時、俺に声を掛けてくれたのがアイツ等。

―何ぼーっとしてんだ!?見ててイライラすんなお前!!

―君が言える立場じゃ無いと思うよ?ていうか、君も見ててイライラする―

―渉ぅぅぅ!!!―

正直「何やってんだコイツ等?」と興味が無いようにそのやり取りを眺めていたが、気付いた時には俺もそのやり取りに混じっていた。
俺は助けられていた。本人等にその気はないにしろ、アイツ等のおかげで今の俺がいる。

あぁ、あの頃からだっけか？

人を守りたいと思うようになったのは。

考え直すと、俺より不幸な人達だっていっぱいいる。いつまでも悲観的でいるわけにはいかない。

だったら、俺も何かの役に立ちたい。人を助けたい、守りたいと思うようになっていた。

……役に立つような事をした記憶は、あんまり無いんだけどな。

だけど今は、翔炎という相棒を救う為に戦っているんだ。眠ってなんかいられない。

立ち上がらなきゃな……！！

「……っく？」

アレ？俺は……気を失ってた？

何か大切な物を見ていた……いや、思い出していた？そんな気が……。

覚えていないっ事は、その程度の事だったのか……？

……って、アスム達は！？

「はぁぁぁっっ！！」

「グォォォ！！」

「痛いっす！？」

トドロキさんが切り掛かって……吹っ飛ばされてた。アスムとアキラさんは距離をとってる。

……って、待てコラ。

何で牛鬼、あのデカイトライアングル持ってんの！？

「まかもー」だよね！？牛鬼ってさっき「まかもー」って言ってたよね！？アレか？「まかもー」でも名前に「鬼」が付いてるからか！？

「ガァァァッッ！！」

あ、でも振り回してるだけだ。流石に音撃は使えないらしい。

……とにかく、牛鬼は俺から見て背中を向かせている。俺には気付いてない……いや、眼中にはないようだ。

なら、今がチャンスだな……。

「でやっ！！」

「グガッ！？」

隙がありまくりの牛鬼に、バチで攻撃。渾身の一撃だったからか、牛鬼は吹っ飛んで近くの木に激突。

「悠樹さん！？」

「悪い、アスム。少し寝てた。」

そう謝罪しつつ、鬼の方々と並ぶ。

「状況はあまり良くないようだが？」

「ちょっとキツイですね……。」

「……じゃあ、あの方法を使う？」

……アキラさんが提案した「あの方法」。なんか、奥の手でもあるのか！？

「あの時のバケガニのように……」

「一斉に音撃っすか！」

一斉に音撃か……あ、確かにそれなら効きそうだな。

「ソレ、良いんじゃないですか？やりましょうよ。」

「じゃ、まずは俺からっす！！」

起き上がろうとする牛鬼に走り出すトドロキさん。それに気付いた牛鬼は、デカイトライアングルを振り回すが、トドロキさんはそれを器用に避ける。

そして、ギターを牛鬼に突き刺し……

「音撃斬、雷電激震！！」

――――雷電激震――――

ギターを奏で始めた。かすかに動きが鈍くなった牛鬼だが、反撃しようと頑張っている。

……だが、

「音撃射、疾風一閃!!」

――――疾風一閃――――

それを許さないようにアキラさんはラッパを吹き始める。ラッパ特有の高い音は、余計に牛鬼を苦しめる。

そしてアスムも駆け出し、ベルトにある太鼓……音撃鼓を牛鬼に付ける。

「音撃打、爆裂真紅の型!!」

――――爆裂真紅の型――――

この前の「火炎連打の型」より一発一発の威力が高そうな技を、アスムは放つ。ラッパと対象的に重く低く響き渡るその音は、牛鬼へのダメージへと変わっていく。

これだけで合奏として成り立ってるけど（見るからに異様だが）、敵を倒さにゃ意味が無い。

「じゃ、あとは俺か……。」

俺も同じ動作で音撃鼓を牛鬼に（背中に）つける。そして、巨大化&一体化。

……大丈夫大丈夫、技名はちゃんと聞いたって。「翔炎タコ殴り」なんてやらん。

「音撃打、業火絢爛（ごうかけんらん）！！」

――――業火絢爛――――

そして俺も、この合奏に合わせて叩き始めた。音楽センスは無い俺だけど……そんな事愚痴っても仕方ない。とにかく、がむしゃらに叩く。

「ガ、グ、アァァァ！！」

牛鬼は流石に四人分は耐えられないのか、悲鳴を上げる。以前の怪盗の面影なんて、微塵にも残っちゃいない。

「「「だぁぁぁっっ！！！」」」

合奏もラストスパート。気合いを入れて音撃を放つ。ラッパを吹いているアキラさんは、流石に声を上げられなかったが。

「「はぁっ！！！」」

俺達は一斉に演奏を終える。すると同時に、牛鬼は木の葉となって散っていった。
怪盗野郎もここまで、か……。

……って、何感傷に浸ってんだ俺！？翔炎どうするんだ！？
と、心配になったが、あのオーロラは俺達の戦いが終わるのを待っていたかのように存在していた。

「行くんですか？」

いつの間にか顔だけ変身を解除したアスムが、俺に問い掛けてきた。

「……あぁ。あの焼鳥助けにゃならんからな。」

「……絶対にソレ、返して下さいよ。」

アスムが言う「ソレ」とは、多分歌舞鬼になる為の音叉と借りてる胴着の事だろう。苦笑いしつつ俺は答える。

「分かってる……絶対に返しに行くって。」

そう言うと同時に、アキラさんとトドロキさんも顔だけ変身を解き、俺を見る。
言う事は何となく分かっているので、俺は黙って頷く。そして……

「じゃ、行ってくる。」

そのまま背を向け、俺はあのオーロラへ駆け出した……。

第三十五話：響け、清めの音（後書き）

やっとこさ倒しました、怪盗。というか牛鬼。
響鬼の世界でのラスボス……オロチも考えていたんですが、なんか長くなりそうだったので没。牛鬼ですが……ヒビキさんと区別する為、あのトライアングルは持ったままです。魔化魍でも「鬼」が付いてますし、アリだと……信じたい（何ですと!?）

そして出ました、学者。暗い実験室に篭っては一人バカ笑いしてるあの人です（言い方酷ぇ）
名前すら出てませんが……いっその事、このまま学者でいいか？（良くねぇ!!）
雇ったライダーの一人……アナザーアギトってのはお分かりでしたでしょうか？スーツが腐ってた為ディケイドでは未登場のあのライダーです。アナザーアギトは結構好きだったので出したくなりました。
……え？サイガ？あれは気分です（だから酷いなお前!?）

途中出た悠樹の過去。前は軽く言ってましたけど、やはり思い出すのは誰であれ辛いものだと思います。彼の場合、今でも信じたくない……という感じです。
自称、シリアス苦手の自分ですが（どこでそんな事言った？）上手く表現出来たのかなぁ……？

さて、次はカブトの世界だ～。

……その前に、取り掛からなきゃならない小説があるんですよね。
仮面ライダーソウルもどうかよろしくお願いします（どこで宣伝してるの！？）

では、今日はこの辺で。
感想、ご指摘等も待ってま～す。

第三十六話：地獄からの使者、謎の集団

前回までのあらすじ。
なんやかんやで異世界に来て、二人のバッタライダーに襲われてます。

……いやいや、軽く言ってますけど、かなりキツイんですよ!?
ていうか二人供強い!!中々攻撃が出来ない!!

「はぁっ!!」

「うわっ!?」

現在灰色……いや、茶色?みたいな方のバッタライダーと交戦中。
パンチしかしてないけど……力が強い。さっきから防御しかしてないもん、私。
なんとかして後ろに回り込まないと……

「クロックアップ!!」

『ＣＬＯＣＫ　ＵＰ』

隙を見計らって高速移動!早く後ろへ……

『ＣＬＯＣＫ　ＵＰ』

……アレ?

「だあっ！！」

「キャッ！？」

え、ちょ、何、え！？なんか殴られて、え！？

「フン……クロックアップ出来るのがお前だけだと思ったか……？ＺＥＣＴのライダーは全てクロックアップが出来るんだよ……！」

あ～忘れてた……。
アレ？でも……

「おじさん達のマスクドライダーシステム、アラタさんからは聞いてないけど……？」

「お、おじっ……！？」

あ、意外と効いてる。今なら……

「はぁっ！！」

「ぐっ！？」

ザビーゼクターから蜂の針のような物を連射！やっとダメージ与えられた……。

『『ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ』』

高速空間から脱出した私達。緑色のバッタは相方の様子に気がついたみたい。

「相棒……まさか、あんな奴に圧されてる訳じゃないよなぁ……？
地獄の住人ともあろう奴が……。」

「クッ……兄貴は手を出さないで！アイツは、俺がやる！！」

『ＣＬＯＣＫ　ＵＰ』

「わわっ！？ク、クロックアップ！！」

『ＣＬＯＣＫ　ＵＰ』

いきなり高速移動するから、ビックリしちゃった……。
このザビーの姿も肉弾戦主体だけど、パンチはあちらが勝ってるから……どうにかしないと……。

「はあっ、せやっ！！」

「わっ、ちょっ！？」

とか考えている間に、あちらは攻撃を仕掛けている。
右、左、下、真っすぐ、右、かと思ったら左。
まるでボクサーのように殴ってくる。……私はボクシング未経験者です！！

「あーもう……でやっ！」

「ふっ！」

あ、駄目だ。がむしゃらにパンチしても、普通に防がれてる。これ

じゃ、勝ち目無いじゃん……。

「でやあっ！！」

「キャッ！！」

渾身の一撃だったのか、私は吹っ飛んでしまう。

この人、ホントに強い……じゃあ、この人が「兄貴」って呼んでた人は、もっと強いの！？

『『ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ』』

で、再び高速空間から戻ってきました。

クロックアップって体に結構負担が掛かるのかなぁ……？相当疲れてきてる……。

「終わりにする……！！」

『ＲＩＤＥＲ　ＪＵＭＰ』

ゼクターを操作すると、バッタライダーはジャンプした……って、高っ！！

「ライダーパンチ！」

『ＲＩＤＥＲ　ＰＵＮＣＨ』

恐らく必殺技であろうそのパンチは、真っすぐ私へと向けられている。

でも、死ぬ訳にはいかない！

「ら、ライダースティング！！」

『ＲＩＤＥＲ　ＳＴＩＮＧ』

私も必殺技を発動。落下速度を利用している相手に勝てるとは思えないけど、やらないよりマシ！！

「あぁっ！！」

予想通り、私はダメージを受けつつ再び吹っ飛ぶ。これでも軽減した方だと思うけど……。

あ、よく見たら相手もダメージを受けているらしく、膝を付いている。攻撃のチャンスなんだろうけど……私じゃ無理だ。

「うぐっ！？」

……ってアレ？なんか膝を付いてるライダーに銃弾！？って事は……？

「ふう……舞君がまさかもうザビーに変身しているとは……それに、あのライダー達は一体……？」

そう、アラタさんだ。銀色の鎧で包まれた姿……ガタック・マスクドフォームの状態。両肩には、何やらバルカン砲のような物が。

……そんな時、緑の方のバッタライダーが、ゆらりとアラタさんに近付く。

「お前…この世界のガタックか……どうだぁ？お前も地獄に来ないかぁ……？」

「クッ……得体の知れない奴だ……！」

『ＣＡＳＴ　ＯＦＦ』

『ＣＨＡＮＧＥ－ＳＴＡＧ　ＢＥＥＴＬＥ』

一気に青で鎧に身に纏った姿……ライダーフォームへフォームチェンジしたアラタさんは、緑のバッタライダーと共に高速世界へと突入していった。

「クソッ……余計な真似をっ……！！」

あ、ヤバイ、片方のライダー立ち上がった！私……どうするの！？

「わ、わわっ！？」

「グッ！」

幸い、ゼクターが遠距離用の武器を持ってたから今はどうにかなったけど……

あぁ～神様ぁぁぁ！！どうにかしてーっ！！

「あわわ……どうしよう、おばあちゃん……？」

此処は先程、霞河舞が昼食を取っていた所……「天堂屋」と呼ばれるおでん屋。
その入り口の付近でこの「天堂屋」の看板娘……マユが、外の状況を見てうろたえている。

「無視しな。出て行ったら負けだよ。」

「無視しなって……無視出来る訳ないでしょ！！！さっき此処に来た女の子がなんか変身して……偽物のお兄ちゃんの姿になって……もう訳分かんないよ……。」

外では青と緑の何かがぶつかり合い、もう一方では、立ち上がろうとする灰色のライダーに針を連射している黄色いライダーの姿も見られる。
そんな光景に、状況が上手く飲み込めず混乱するマユ。それを無視するかのように淡々とおでんを作り上げるマユの祖母。

しかし……おでん屋にいたのはこの二人だけではなかった。二人以外の人物は……店の隅っこでおでんを食べている青年。
そして、そのおでんを食べ終えると立ち上がり、勘定を置いていく。

「ありがと、美味しかった。」

「……まいど。」

そして青年は出入口へと歩く。……の様子は分かっているのか？と疑ってしまう程、その足取りは重くない。

「ち、ちょっと!?外は危ないですよ!?」

その青年を必死に呼び止めるマユ。しかし、青年は……

「……大丈夫。あれくらいだったら、俺も対抗できるし。」

「……へ?」

思わず素っ頓狂な声を出してしまうマユ。

対象的に意味深な笑みを浮かべる青年は、そのまま店の外へと出て行った。

「……お兄ちゃん……。」

マユは一人、その存在を思い出すかのように嘆いた。

一方、高速空間内では……

「はあっ!!」

「ふっ……!」

双剣を振るうライダー……ガタックと、その攻撃を軽く足で払う……キックホッパーと呼ばれるライダーが戦闘を繰り広げていた。

戦闘……と言っても、その戦いは一方的。ガタックの攻撃を軽くあ

しらい、キックホッパーが蹴りを加えている。

「はあ、はあ……お前達は一体、何処から……！？」

「地獄からさ……お前も来い……！！」

『ＲＩＤＥＲ　ＪＵＭＰ』

答えになってないような返答をしたキックホッパーは、ゼクターを操作し高々とジャンプ。

「……！！」

『ＯＮＥ、ＴＷＯ、ＴＨＲＥＥ』

同じくガタック……アラタも、ゼクターを操作。その過程は違えど、同じ名の必殺技を、二人は準備する。

「「ライダーキック！！」」

『『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』』

バッタの戦士は空中から、桑形の戦士は地上から、同じ名前の技をぶつけ合う。

……だが、

「うわぁっ！！」

やはり体力の関係からか、ガタックが吹っ飛んでしまう。それに比

べて、キックホッパーは余裕そうにガタックに近付く。
もう駄目だ……そう思ったアラタだが……

「ぐっ！？……何だぁ？」

キックホッパーの動きを妨害するように、何かが飛び回り、攻撃している。
その何かは、紺色の……ガタックゼクターより小型の桑形の機械。
その機械は……いつの間にかいたであろう、おでん屋から出て来た青年の元へ飛び立つ。

「……貴様ぁ……また邪魔しに来たかぁ……？」

「……そりゃ、ガタックに死なれちゃうのは困るし、何しろ、お前等のする事には妨害するのがセオリーだ。」

……青年は右腕を上げる……と、小型の機械……ゼクターと思われる……は、青年の右腕に付けているブレスレットに斜めに収まる。
そして、そのゼクターを正位置に動かしながら青年は言い放った。

「変身！！」

『ＨＥＮＳＨＩＮ』

「何っ！？」

……アラタは驚愕した。
ＺＥＣＴが開発していないライダーが三人も出て来たとなると、驚くしかないだろう。
そう考えている間にも、青年の体を紺色の鎧が覆っていく。

『ＣＨＡＮＧＥ－ＳＴＡＧ　ＢＥＥＴＬＥ』

電子音声が告げると同時に、複眼が発光する。
その姿は……どこか、ギラファノコギリクワガタを連想させる。

「チッ……なら、先ずは貴様からだ、ギラファ……！！」

「へっ……がっかりさせんなよ……？」

ギラファと呼ばれたライダーは、キックホッパーへと殴り掛かった。

霞河舞視点

……何がどうなってるのか、よく分からない。
アラタさんがやられそうになった途端、誰かがやって来て、変身。
これまたアラタさんから聞いていないライダー。

なんか……昔やってたデータカードダスの某虫バトルゲームに似たような昆虫がいたような……？
ギラ……ギラ……何だっけ？思い出せない。

とにかく、その乱入したライダーは、兄貴と呼ばれているライダーとほぼ互角のバトルを繰り広げています。

「兄貴と……互角!?」

相棒さんもビックリ。最初こそはうろたえてたけど……

突然こっちを見て……

「……忌ま忌ましいザビーを潰して、兄貴の加勢に向かわないと!!」

なんでそういう結論になっちゃう訳ーっ!?

『ＲＩＤＥＲ　ＪＵＭＰ』

うわわっ!?ホントにトドメをさすつもり!?ちょ、死ぬのは嫌だ!!!

『ＲＩＤＥＲ　ＰＵＮＣＨ』

「喰らえぇっ!!」

「絶対嫌です!!」

『ＣＬＯＣＫ　ＵＰ』

「何っ!?」

冷静さを欠いていた相棒さんは、高速空間内では止まっているよう

に見える。流石に反応出来なかったか。

「ライダースティング！」

『ＲＩＤＥＲ　ＳＴＩＮＧ』

そして、相棒さんの背中に思いっきりパンチ！

『ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ』

「ぐあっ！？」

高速空間から抜け出すと同時に、吹っ飛んでいった相棒さん。だけど……またすぐに立ち上がった！？

「な、なんで！？」

「……俺は負けられない……外の奴らに、地獄の住人である俺達は負けられないんだ！！」

「私だって……風牙を助ける為に、あなたを倒す！！」

やっぱり、戦う事になるのか……そう思った瞬間、

「何っ！？」

「え……！？」

大量のワームが……私達を囲んでいた。
いつの間に!?って思ったけど……よくみたら、あの銀色の幕から出ていたみたいだ。
うわぁ……ここまで大量にいると気持ち悪い……。

「邪魔を……するなぁ……!!」

「なっ……うじゃうじゃと!」

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

『ＲＩＤＥＲ　ＢＥＡＴ』

兄貴さんと謎のライダーもワームを倒す事に専念している。……あれ、なんで兄貴さんと相棒さんもワームは攻撃してるんだろ?同じ幕から出て来たのに……。
まさか……!?

「あなた達……アイツに裏切られたんじゃ!?」

「……俺達は元々、アイツを信用していない。」

……え!?

「俺達地獄の住人は……外の人間なんて信用しない。」

「戦って……ただ楽しめれば、それでいい。」

言いつつ二人は、次々とワームを倒す倒す。ホントにそれが楽しんでいるように見えるから……恐怖さえ感じてしまう。

にしても……相棒さんは落ち着きを取り戻したのかな？

「シャァァ……。」

……ん？

ってわぁぁぁあ！？いつの間にか後ろにワームが！？

『ＲＩＤＥＲ　ＣＵＴＴＩＮＧ』

あ、でも電子音声と共に、ワームは爆散。後ろにはガタック……アラタさんが。

「舞君、油断するな！」

「あ、ハイ！」

気を引き締めた……けど、この数は無いでしょ！？あの時のガルド百体……まではいないと思うけど、流石に多過ぎる……。

……アレ？なんか……ワームがどんどん爆発していってるような……？

誰かが、ワームを倒してる……？しかも、殆ど瞬殺って……。もうワームいないじゃん。さっきまで数の多さに困ってたのに……。

「クロックアップ！！」

一体誰が？そう思いながら高速空間へ突入すると……誰かがいた。

「……あなたは……。」

赤い装甲。青い複眼。甲虫を模した仮面。逆手に持つのは小型の剣。

「……仮面ライダー、カブト……。」

この世界に来たばかりにも出会ったライダー……カブトだった。

「……その姿とはいえ、君はこの世界の人間じゃない訳だ。」

「!?」

やっぱり、知ってた……!?

「俺は総てを司る男……この世界の事は何だって知っている……ってな。まあ、今のはお祖母ちゃんの受け売りなんだけど。」

お祖母ちゃん、息子さんに凄い事言ってますね!?

「そして、招かれざる客が何名か……。」

そして、カブトが見る先には……げっ、あの二人!?

「兄貴、この世界のカブトだよ……二人で倒す……?」

「……いや、やめにしよう。」

……アレ?案外アッサリ退いちゃうの?

「此処で戦っても、俺達が見たい地獄は見れない……カブトという

名の太陽がいるかぎり、な……。」

兄貴さんが言い切ると……あの灰色のオーロラ、というか幕が出現。

「じゃあ……行こう、兄貴……。」

「あぁ……次の地獄が待っている……。」

そう言って……二人は幕へと消えていった。

……最後の最後まで不気味だったなーあの人達……。

「やっと帰ったか、アイツ等……あ、遅い到着だったな、この世界のカブト。」

……！あの人、さっきの……！？

「そこのお前、一体何者だ！？さっきの二人だって……」

「ちぇっ、カブトが来るまで地獄兄弟から青龍の適合者を守れって言われてたけど……結局最後まで此処にいるなんて……。ま、いっか。」

いつの間にかいたであろうアラタさんの問いには答えず、謎のライダーはいつの間にか付いていた、ベルトの横の銀色の機械昆虫を軽く叩いた。

『ＨＹＰＥＲ　ＣＬＯＣＫ　ＵＰ』

「じゃーな。」

発声音が響くと、謎のライダーの間だけ空間が歪み……謎のライダーは消えていった。

……本当に一体、あの人は何者だったんだろ……？

「……いくら総てを司る俺でも、アイツの正体は分かんなかったな……。」

「凄い態度デカイですね。……えーっと……？」

「あぁ、そうか……俺の名はソウジだ。」

カブト……ソウジさんは名乗ると、未だに残っている灰色のオーロラを見やり……

「……そういえば君は、このまま此処にいても良いんだっけ？」

……しまったそうだ！！風牙の事忘れてた！！

「えーっと、ソウジさん、ありがとうございます！アラタさん、ザビーゼクターもうしばらく借ります！！」

「……緊急事態のようだから貸すが、必ず返してくれよ。」

謎のライダーを逃がして悔しそうなアラタさんだったけど、すぐに返答してくれた。

……もうなんにでもなれって感じが漂ってる気がするけど。

「ありがとうございます！お世話になりました！」

『ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ』

最低限の挨拶だけ済ませて、私はあの幕を潜った……。

「……ソウジさん、助かりました。」

「えっと……アラタだっけ？いや、これでもかなり遅れたんだ。」

「え？」

「……もう一人の……黒いカブト？にな……。アイツは一体……？」

『ＨＹＰＥＲ　ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ』

「ただいまー。」

どこかの施設……その空間の一部が歪み、そこから出て来たのは……ギラファ、と名乗ったライダー。変身を解き、近くの椅子にドカ

ッと座る。

「お帰りー、リョウ。やっぱり遅かったね。あ、ワンシーンどう？」

青年……リョウに近付くのは、二十歳くらいの青年。表情には、どこか幼さを残している。そして、右手にはオレンジ色のビデオカメラが。ワンシーンというのは、これで映像でも撮る？という意味だと思われる。

「疲れてるから遠慮するよ、シュウ。……それと、やっぱり遅かったって、どういう意味だ？」

「いやさ、それが……カブト、いや、天堂ソウジを遅れさせた奴がいるんだ。君もよく知ってると思うけど……。」

「ダークカブトか！！あーくそ、カブトのプロトタイプなのに強さはそのままだからなぁ、アイツ。やっぱり、＜ハイド＞に雇われてたって訳か。」

「可能性としてはね。朱雀の適合者が行った響鬼の世界にも出て来たらしいし。その時にはアギト……あ、もう一人の方ね。あと、サイガを護衛に付けてたらしいよ。＜ジャキ＞って凄いよねー。どこから様子を見てたんだか。」

シュウと呼ばれた青年は、手に持つビデオカメラでリョウを撮影しながら事の成り行きを話す。どうみても二十歳なのに、その喋り方や様子が子供っぽくみえてしまうのは、何故だろうか？

そして……会話に出てきた＜ハイド＞と＜ジャキ＞なる人物も気になる。

「……あれ？そういえばそのジャキと、その他もろもろは？」

「ジャキと他の皆はまだ仕事。他にいるのは……。」

「俺だけだ。」

シュウの言葉を妨害するかの如く現れたのは、またもや青年。
他の二人と違う点は……なにもかも青。髪の毛も、服も、ズボンも全て青。

「あ、アオ。どう、ワンシーン？」

「遠慮しておく。てか、会う度に一々聞くの止めてくれ。……リョウ、戻って来たから聞くまでも無いが、どうだった？」

「上々。青龍の適合者も無事ザビーゼクターを持って、あのヤローの基地に向かったし。朱雀もそうだっけ？」

「あぁ。確かアイツは歌舞鬼だったか？」

「うわ、派手な色の奴になったなー。」

「あー二人とも、そこじゃ逆光映るから、もうちょい移動してー。」

恰好をそのまま名前にしたような青年、アオはリョウに状況を聞くなど、どうやらリーダーのような役割を持っているようだ。
その二人の様子を……シュウは何故か撮り続けている。

「……精霊といえば、ジャキから大変な報せだ。」

「え？なんかあったのか？」

アオが大変な報せ、と言った途端、二人は真剣な顔付きになる。…シュウはそれでもビデオカメラを手放さないが。

「……＜麒麟＞が動き出した。」

「「嘘ぉっ！？」」

麒麟、という単語に大袈裟とも言える反応を取る二人。……それほど危険な事な意味を持つ単語なのか？

「え、ちょ、ホントに！？」

「あぁ、アイツの事だから本当だろう。……麒麟の動きで吉とくるか、凶とくるか……。」

施設は一変し、重苦しい空気になってしまう。

……それを和らげたのは、誰かの携帯の着信音。

「……メールか。」

「いやさ、アオ……チャルメラって……。」

「俺の自由だろ。」

「あ、そうそう。この角度良い感じー。」

アオは……これまた青い携帯を取り出し、メールを確認する。
……未だに撮り続けるシュウに誰も突っ込まないのは、慣れているからなのか？

「ジャキからだ……龍騎の世界で、リュウガが乱入したみたいだ。」

「うわっ。アイツ俺嫌い。何考えてるのか、ちっとも分かんない。」

「アレはアレで良いけどねー。特にドラグブラッカーがね。」

「とにかく、奴……いや、奴等のする事は食い止めなければならない。俺が行こう。」

そう言ってアオがポケットから取り出したのは、何かの板……いや、カードケース。
そのカードケースも青く、表面には龍のような装飾が施されている。

「……行ってらっしゃい、＜蒼い龍騎士＞さん。」

「……あぁ。」

フッと笑いながら、アオは灰色のオーロラに包まれ、どこかへと消えていった……。

「あ、今のシーン結構良かったかも。」

「お前、いつまで撮り続けてんの？」

第三十六話：地獄からの使者、謎の集団（後書き）

どーも、ジャードです。今回は早めに投稿してみました。

さて、今回は……もはややりたい放題ですね。

ソウジさんが無事出せたので、そこは結果オーライなんですが、今回はカブトより、謎の青年達が目立ったような……。

一応設定としては考えていた彼等。そこからちょびっと登場しました、リョウ、シュウ、アオ、ジャキ（名前のみ）

一応彼等とその仲間は、原作を元にしたオリジナルライダーへと変身します。

オリジナルライダーって……やっちまったぜチクショウ（オイ）

とあるカブトの世界のライダー、ギラファ。このモチーフは、ブレイドから来てたりします。

ご存知のように、ブレイドには桑形モチーフのライダー、ギャレンがいます。

スペードスートのカテゴリーキング……コーカサスビートルアンデットって、さりげにカブトにも彼と同じモチーフのライダーがいますよね？なので、ダイヤスートのカテゴリーキング……ギラファアンデットと同じモチーフのライダーがいてもアリじゃね？と考え登場したのが……仮面ライダーギラファです（無茶だろぉっ！？）

おそらく、今回出て来た彼等も持ち物とか名前とかから、どの世界のライダーかはちょいと分かるかと思います。

ハイドは……もう分かりますよね？

そして、＜麒麟＞……烈火投稿時から考えていた、時たま存在を忘れそうになった奴です。
とある場所でその存在をちょいと明かしてますが……それは置いておきましょう。
正体については、期待……しても何も出ませんよ？（うるさい黙れ）

……なんか烈火という作品から遠ざかっている気が……

こんな駄文ですが、今後もお付き合い頂けると幸いです。
では、また次回。

第三十七話：龍と蝙蝠と蛇とコオロギと

『うぅわぁぁぁ！？』

この絶叫は……俺の精霊、爪雷が発している。まあ、何故なら逃げているからだ、得体の知れない奴に。
その得体の知れない奴は、簡単に説明すると「黒い龍騎」。漆黒の剣を持ち、爪雷に向かって切り掛かっている。……それを、爪雷は頑張って避けているのだが。

……ってか、俺も冷静に状況説明してる場合じゃないからね！？

「さっきからうろちょろと……さっさと死ねぇっ！！」

「うぉあっ！？」

あ、危なっ！！さっきからエイに乗った王蛇が追い掛けてんだっけ！？てか、そっちもしつこいよコノヤロー！！

『ＮＡＳＴＹ　ＶＥＮＴ』

……ん？何だ？なんの発声音？

～しばらくお待ち下さい～

「ぎぃやぁぁぁぁっっ！？」

「うぐっ！？あ、頭がっ！？」

「……っ！？」

い、いきなり……でけぇ蝙蝠が来て……超音波放って……うわぁ……頭ぐわんぐわんする……げ、ちょっと吐き気が……。

まあ、そのおかげで王蛇もエイから転げ落ちたし、黒い龍騎も苦しんで爪雷逃がしたし……。

「結果オーライ……な訳無ぇだろがぁぁぁ！！テメッ、レン！？」

「仕方なかったんだ……まあ、よく耐えた。」

「レンさん……僕も結構苦しかったんだけど……。」

そう言いつつ、レン、シンジと合流。二人が戦っていたベノなんちゃらと銀色のサイは、さっきの超音波が余程聞いたのか、未だに苦しんでる。

「にしても……もう一人の、僕！？」

「ライダー裁判でも見た事が無い……オルタナティブと同じように、新規で開発されたライダーか？」

……正体不明の黒い龍騎は、シンジ達の疑問には答えず、カードを

バイザーに装填した。

『ＡＤＶＥＮＴ』

その発声音はシンジ達やオルタナティブのとは違い、くぐもった感じ。闇から聞こえるような、低い音声。

発声音が響くと、唐突に……これまた黒い龍が現れ、こちらを見据える。その威圧感は……かなり凄まじい。

「黒い……ドラグレッダー！？」

「まさか……ここまで似ているとはな……。」

シンジ達はあの龍の似たような奴も知っているらしい。いや、多分……龍騎の契約モンスター似か？

「……行け。」

龍に命令……って、え？何処へ？え、まさかこっちぃ！？

いやいやいや、来ないで下さい。龍に食われてオダブツだなんて、絶対ぇ嫌だ！なんか勇者の死に様っぽいけど……痛いのは嫌だぞ俺は！？

だが、黒い龍が向かった先は俺達ではなく……

『何で俺なんだぁぁぁ！？』

建物の影に隠れてやがった爪雷。逃げようと駆け出すが……一歩龍の方が速く、爪雷はその痛そうな口にくわえられた。

「爪雷っ！？」

「……ねぇレンさん……あの龍、何であっちに行ったんだろ……？」

「分からない……だが、小野川が反応しているから、何かがあるらしいが……？」

あ～やっぱり……後ろの二人にゃ見えちゃいねぇ。畜生、俺だけでなんとかしなきゃ……

「貴様等ぁ……何楽しそうな事してんだぁ……？俺も交ぜてくれよ……！」

うーわー！！来たぁぁっ！！殺人鬼王蛇来たぁぁぁっ！！ヤベッ、もう回復したのか！？

「くっ……小野川君、アイツは僕達が抑える！君は君がすべき事を！！」

おぉ！サンキューシンジ！！よーし、早く黒い龍騎をぶっ倒さねば……

「ククッ……誰も逃がさねぇ……全員ぶっ殺してやる！！」

『ＵＮＩＴＥ　ＶＥＮＴ』

……え？なんか発声音が響いたら……三体のモンスターが集まって……なんか重なって……

「ガァァァァ！！！」

なんか気持ち悪いのになったぁぁ！？

「モンスターが……合体した！？」

「噂には聞いていたが……アレがキマイラ型モンスターか……！」

合体モンスター！？聞いてねぇよ俺！いや、当たり前か！？

「……獣帝ジェノサイダー、か……。厄介な奴には相手をしている暇は、無い……。」

よく分からん単語を使った黒い龍騎は……後ろにオーロラを発生させた。

……って待て待て待て！！せめて爪雷は置いてってぇ！！

「爪雷ぃぃぃっ！！」

『海斗ぉぉ！今すぐ助けろぉぉ！！』

絶叫する爪雷は一切無視し、黒い龍騎は龍と共にオーロラへと消えていった……逃げられた……。

……アレ？だけど……何でオーロラが二つもあったんだ？

「小野川君、来てるよ！」

「へっ？うおわぁっ！？」

あ、危なっ……なんかキマイラだか何だか知らない奴が襲い掛かってた……。

爪雷を助けんのは、後回しにするしかねぇか……！

何処かの世界……荒野。何もないその地に、黒い龍騎は立っていた。

「……何故、だ……？」

黒い龍騎は分からなかった。自分は「奴」のアジトに戻り、白虎を渡そうと思った筈だったが……荒野に行こうとは思っていない。行き先を間違えた？いや、そんな筈が無い。では、一体……？

『オイッ、テメェ！！早く俺を放しやがれ……って痛い痛い痛い！！ごめんなさい、噛む力強くしないで！？』

白虎族の精霊……爪雷はわめき立てるが、黒い龍にくわえられている為か、上手く叫ぶ事が出来ない。

そんな時……黒い龍騎の背後からオーロラが発生し、一人の青年が現れた。

「……成る程、貴様か……。」

青年を見るなり、納得する黒い龍騎。そして、油断なく構える。

「俺の発生させた＜時空の橋＞よりも早くお前が発生させた＜時空の橋＞で俺をこの地に誘った……それに、俺の発生させた＜時空の橋＞は残ったまま……つまり、あの適合者にアジトへと行かせる近道となる、か……。」

「相変わらず頭の回転が早いな……＜リュウガ＞。」

黒い龍騎……リュウガへと答える青年……アオ。彼の手には青いカードデッキ、腰にはベルト……Ｖバックルが装着されている。

「俺だけ＜時空の橋＞を扱うのが器用だったからな……やっとお前と二人になれた。」

「まだ俺を止めようというのか……蒼士（そうじ）？」

「その名前は今は捨てている……俺は、アオだ！」

そう言いつつアオは、右手を胸に当てる。その何かを誓ったかのようなポーズで、Ｖバックルにデッキをセット。

「変身！！」

言い放つと同時に彼の姿が変わった。

それは、龍を模した姿。だが、龍騎でも、ましてやリュウガでもない。そのうえ、スーツの色は……蒼。彼の仲間であるリョウが言ったような、まさに＜蒼い龍騎士＞。

「龍蒼（りゅうそう）、か……その姿を見るのも、久方ぶりだ。」

「リュウガ……お前は今の事を止めるって選択肢は無いか？」

「……そんな物は、無い。そして、敵と認識した奴は……全て、潰す！」

リュウガが言い放った刹那、二人の拳がぶつかり合っていた……

小野川海斗視点

「うぅおあぁぁぁぁ！！？？」

「ガァァァァッッッ！！」

うわ、危なっ！！キマイラだか何だか知らない……所謂気色悪いモンスターの攻撃を華麗に避け続けている俺だけど、ホントコイツ怖いわー。

ていうか……ホント気色悪っ！！

「くははっ……お前等ぁ……もっと俺を楽しませろぉ……！！」

この元凶の張本人である王蛇。今度はサイの頭を模した手甲状の武器でレンを翻弄している。上手くマントでガードしてるっぽいけど……絶対ぇ時間の問題だな、こりゃ。

『ＳＴＲＩＫＥ　ＶＥＮＴ』

おっ、シンジが龍の顔を模した手甲状の武器を装備した。そして、シンジの回りを赤い龍が旋回している。

「でやぁっ！！」

そしてその手甲状の武器を突き出すと同時に、赤い龍もそれに沿うように前に出て、口から炎を放つ。所謂、火炎放射という奴だな。しかし、キマイラモンスターはその攻撃を物ともせず、鬱陶しいと言わんばかりに振り払っている。
ん～……勝てんのホントによぉっ！？

「レンさん……まずい、もう時間が無い。」

「だな……後2、3分程か……。」

いつの間に王蛇を振り切ったのだろうか。息を切らしたレンがこちらに来る。王蛇は……残念そうに、今度はムチを構えている。

……いやいや、ちょい待て。

「な、何だよ？後2、3分て？」

「ミラーワールドでの長時間活動は不可能だ。」

「最長でも、9分55秒しかいられないんだ。」

……何でそんな中途半端な数値何だよ！？なんてツッコミはしない。
突っ込んでると時間を費やすしな、やっぱ。

……オイそこのお前、今「小野川にしては中々懸命な判断だったな。」とか考えなかったか？

「てか、それ以上ミラーワールドにいると……？」

「粒子化して消滅する。」

そんなん嫌だぁぁぁっっっ！！消滅て！？消滅って痛いの！？

「こうなったら……シンジ！！」

「あぁ、分かってるよレンさん！！」

そう言い放った刹那、二人はカードを引く。すると……二人のバイザーが、変わった。

シンジのバイザーは、ガントレットから銃のような形に。レンのバイザーは、剣から盾のような形へと。

そして二人は、その変わったバイザーへとカードを装填。

『『ＳＵＲＶＩＶＥ』』

エコーの掛かった発声音が響くと……シンジは炎に、レンは風に包まれる。

……これを見てると、波賀と舞さんを連想させるなぁ……。

そんな事はともかく、その過程で二人を覆う鎧の形状が変化した。

さながら、強化されたかの如く。

それを見た王蛇は……何故か興奮しているかのようにムチを投げ捨て、尋ねた。

「……何だ、そのカードは？俺も見た事が無いぞ……？」

「当たり前だ、本来なら裁判中では禁止カードに当たる。」

「今回ばかりは許可を貰ったからね……朝倉、お前も終わりだ！」

シンジが言い放つと同時に、何処からか先程の赤い龍と、超音波を振り撒いた迷惑な蝙蝠が出現。

その二体のモンスターも……進化したかのように、姿を変えた。

『ＡＤＶＥＮＴ』

……何故だ？此処までくると、自分も契約モンスターを召喚したくなった。

なんか、こう……一斉に敵を追い詰めるって、壮観じゃね？

ともかく……ＡＤＶＥＮＴのカードで出て来たのは、コオロギのような機械的なモンスター。王蛇を敵とみなしたか、隙の無い構えを取る。

これだけいりゃ、流石に王蛇も勝てないだろ。そう思っていたが……、

「……ククッ……クハッ……クハハハハッ！！！」

……！？

笑っ、た……？

「……何故この状況で笑っていられる？」

「クハハッ……確かに勝てないかもしれねぇが……幾分かイライラは発散出来そうだなぁ……？それに、お前達にとって相応しいカードだってある……クハッ……クハハハッッ！！」

こいつ……殺し合いを、楽しんでる！？馬鹿な……どんな人生を送ってきたんだ、奴は！？

「さぁ……この攻撃に……貴様等は生きていられるかぁっ！？」

『ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ』

発声音が響くと……キマイラモンスターは……うげっ、自分の腹を食い破ったぁ！？

「ガァァァァッッッ！！！」

そしてなんかその腹から色々吸い込んでるぅぅぅっっ！？

「はぁぁぁ……っ！！」

……うぉっ！？王蛇が突然ジャンプしてこっちに来た！？しかも……

俺の真後ろに。

「……へ？」

「死ねぇっ！！」

「ぴぎゃあっ！？」

そして蹴られて……俺も吸い込まれるぅぅぅっっ！？
やーめてぇぇ！！俺まだ死にたくないっ！！

「くっ……しまった！」

『ＢＬＡＳＴ　ＶＥＮＴ』

『ＳＨＯＯＴ　ＶＥＮＴ』

なんか蝙蝠が来て風を放ったり、龍が火球放ってキマイラモンスターを妨害したりしてるけど……風はともかく、火球は効いているように見えない。
もーヤダァァッ！！どうにかしろチクショーッ！！

『ＥＸＣＥＥＤ　ＣＨＡＲＧＥ』

……へ？
なんか、音質が違う電子音声が響いて……なんかオレンジ色の衝撃波っぽいのが飛んできて……

「ギャァァァァッッッ！？」

キマイラモンスターに直撃。モンスターは苦しみながらよろめき、膝をつく。……うぉっ、吸い込まれずに済んだ。

何だったんだ？そう思って衝撃波の飛んで来た方向を見てみたけど……誰もいねぇ。

「……！レンさん、今だ！」

「よく分からないが……今がチャンスだ！」

『『ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ』』

……っと、二人がカードを装填すると……

……なんか龍と蝙蝠が変形して、バイクになった。……え？ちょっと待て。アレってバイク？え？嘘ぉ？

んで、二人はバイクと化したモンスターに乗り込む。……え？突っ込むの！？敵にそのまま突っ込むのかアレ！？

うん……ＦＩＮＡＬって言う位だからさ……多分必殺技だと思うけどさ……驚いてばっかだけどさ……これだけは言っても良いかな……？

俺今回、目立つ事全っ然してねぇじゃん！！

コレはマズイ……ものっそいマズイぞ……なんとかして俺がクライマックスだけでも決めねば……！！

つー訳なので。

『ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ』

俺もやるぜコノヤロォッ！！

「お、小野川、君……？」

「お前、何を……？」

二人はなんかビックリしてるけど、俺は気にしない！さあ行くぞ、我が契約モンスター！！

……って、アレ？なんか、契約モンスターも段々変な方向に曲がっ……じゃなくて、変形してんぞ？つーか、コレって……

「バイク！？」

何でコレもバイクなんだ！？何でコイツもバイクになりやがるんだ！？いや、「ライダー」だからかもしれねぇけど、俺は無免許だぁっ！！

大体、なんで二人に続いてバイクの必殺技何だよ！？流行ってんのか！？てかコレ、突っ込むのか！？いやいやいや、二人のはなんかゴツイから良いけど、俺のはやけにシンプルだぞ！？

いや契約モンスターさん、その状態で「大丈夫」って感じで頷かれても、見た目的に痛々しいし俺は大丈夫じゃないからな！？

いや待て、落ち着け、落ち着くんだ小野川海斗。
俺はさっきクライマックスだけでも決めると判断した筈だ。しかも、さっきから呆然としてた俺は無視したらしく、シンジとレンはバイクでキマイラモンスターに突っ込んでる。龍の方なんか、その状態で火球なんて放ってやがる。

ヤバイヤバイヤバイ。俺完全に遅れ取ってる。早く行かねば！
で、その契約モンスターバイクに跨がる、が……操作どうすんのよ？

……うぉっ！？なんか勝手に動き出した！？流石契約モンスター、名前は分かんねぇけど尊敬するぜ！！
いよっしゃー！！気合い入れてこの際もう突っ込むぜ……

ガガガガッ！

……ガガガガッ？いや何今の音？

とか疑問に思った刹那……バイクはスリップしていた。

……いや、早ぇよぉぉぉっっ！！宣言して突っ込もうとしたばっか

なのに、そこで転ぶか俺!?波賀とか渉とかいたら絶対ぇ爆笑してるぞ!?

いや、諦めるな小野川海斗!!此処で転ぶ訳にはいかん!なんとかしてバランスを保たねば……!!

おっ、なんかイケるんじゃね?なんか上手くバランス保てたし……

ガガガガッ!

……いや、またか!?またスリップするかオイ!?

アレ、今度は上手く体制を立て直せねぇぞ?なんか……段々回転して……

「うぅぅおぁぁぁぁぁぁぁっっっっ!?」

グルグルグルグル回転してるぅぅっ!!やべっ、絶対酔うぞ俺!!

てか、何で真っすぐキマイラモンスターに進んでるのよオイ!?そこだけ親切設定!?

「う、嘘だろ……?」

シンジが呆然と嘆いていた気がするけど、ゴメン、ツッコミ入れられない。

てかぶつかるぅぅっ！！

ガッ！

そんな音と同時に俺は契約モンスターと共にキマイラモンスターへと激突、中を舞い、吹っ飛んで行った……ように見えただろう、周りから見たら。

あぁ……なんでこういうシーンはスローモーションで感じるんだろ……？って、アレ？俺が吹っ飛ぶ方向を見ると、あのオーロラが……。

そして俺は契約モンスターと共に、そのオーロラへ、入って、いき、まし、た……。

結局の所。

二人のライダー……龍騎サバイブとナイトサバイブが放った必殺技＜ドラゴンファイヤーストーム＞＜疾風断＞はキマイラモンスター……獣帝ジェノサイダーに炸裂した。
ジェノサイダーはもがき苦しむが……耐えられず、そのまま爆散した。

「はぁ……やっと倒せた……。けど、小野川君は一体……？」

「シンジ、アイツの事も気になるが、まだ一仕事残っている。」

レンが言うと同時に振り返る二人。二人の視線の先には、色を失った未契約の姿……ブランク体と呼ばれる姿になった王蛇……朝倉タケシがいた。彼はどうした事か、膝を付き、うなだれている。

「……どうする？このまま連れられて裁きを受けて死ぬか、このミラーワールドで消滅していくか？」

「たった二回しかライダー裁判に参加してない記者が言うのもアレだけど……アンタは罪を重ねすぎた。まだ情が残っているのなら、裁きを受けた方が良い。」

二人は朝倉にそう諭す。言っている二人の体も段々粒子化してきている事から、時間が無い事を伺わせる。
だが……途端に朝倉は震えだし……

「……ククッ…クハッ……クハハハッ……！！」

「……！？何故笑う！？」

体全身を震わせ、さも愉快に笑う朝倉に、不気味に思った二人はつ

い後ずさってしまう。

「ククク……あの攻撃を免れるとは思わなかったが……俺はただ戦いが楽しけりゃ良いんだ……！もっと……もっと楽しませてくれよぉっ……！！」

心の底から命のやり取りを楽しんでいるであろうその発言は、一瞬で二人を恐怖させた。

サバイブ体二人とブランク体一人だというのに、威圧感は圧倒的に朝倉が勝っているのは、その狂気故だろう。

朝倉……王蛇は何処からか、蛇の装飾が無くなった灰色の杖を取り出し、二人に襲い掛かった。

勝つのではなく、楽しむ為に。

「ハハハハハァッ！！」

「うっ……！？」

「クソッ……！？」

二人は金縛りにあったかのように動けない。

……だが、

「なっ！？」

突然朝倉の動きが止まる。

……何故なら、彼の周りを灰色のオーロラ……時空の橋が囲んでいるからだ。

「何だコレはぁ……？ふざけるな！！」

朝倉は時空の橋を破壊しようと試みるが、びくともしない。

そうしている内に、時空の橋は朝倉を完全に囲み、彼と共に……消え去っていた。

「……！？何だったんだ、アレは！？」

レンは今の光景に驚愕しているが、シンジは幾分か冷静だった。

恐らく、かつて門矢士がこの龍騎の世界を訪れた際に発動した「ＴＩＭＥ　ＶＥＮＴ」……タイムベントによって歴史が改変された……その影響だろう。

それにシンジはライダー対戦にだって参加している。知らない方がおかしいだろう。

（だけど……気になる。）

シンジは一人考えていた。獣帝ジェノサイダーを攻撃した謎の存在について。

あの電子音声はライダー対戦時に聞いた事がある気がするが……状況が状況だった為、覚えていない。

それに、何故あのオーロラは朝倉を妨害したのだろう？朝倉を何処へ？一体誰が？なんの為に？

考えるとキリが無い。

だが、長居は無用と判断したか、レンは指示を出した。

「……シンジ、流石にこれ以上此処にいるのは危険だ。」

「……分かったよ、レンさん。」

シンジはレンの指示に従うと同時に、近くのガラスへと走り出す。

だが、内心不安だった。

（一体、世界は何が起こっている……！？）

どこかの世界の荒野……そこには、一人のライダーがいた。

そう、リュウガと戦っていた……龍蒼と名乗っていたライダーだ。

だが、様子がおかしい。体中傷だらけ、手に持つ剣もボロボロだ。

そんな彼の前に、オーロラ……時空の橋が出現。そこから……またもやライダーが出て来た。

その姿は、黒いスーツにオレンジ色のライン、緑色の複眼。その仮面は、ギリシャ文字のΥ（ユプシロン）を連想させる。

「……どうやら派手に彼にやられたようだね。」

「あぁ……アイツ、あそこまで強くなってるとは……参ったな。」

唐突にオレンジのライダーが話し掛けるが、龍蒼は知り合いなのだろう、至って普通に応対する。

龍蒼は言いつつベルトからデッキを取り外し、変身を解除。……元のアオとしての姿に戻る。

「しょうがないよ。龍蒼は……元々龍騎よりもパワーは劣るし。契約してる龍……＜ドラグブルード＞も、レッダーやブラッカーとは違って……言っちゃあアレだけど、それほど強くないし。」

「それもあるが、俺だって特訓した。だが……アイツは俺をさらに越えていた。」

「僕は見てなかったけど……相当凄いらしいねー。」

オレンジ色のライダーは、腰にある箱型の機械……恐らくデジタルカメラからグリップ状の物を取り外し、変身を解除する。

「……俺の不様な姿は撮らないのか、シュウ？」

「僕はボロボロ……今の君のような人のシーンなんて撮る趣味は無いからさ。」

変身を解いた青年……シュウは、腰から取り外したデジタルカメラを構え、周りの荒野を撮り始める……が、殺風景だからか、すぐに止めた。

「にしても……君がボロボロだったからとはいえ、僕危なかったんだよ！？下手したら粒子化する所だったのに……。」

「……悪かったな。」

素っ気ない感じかつ一言だけだが、心の底から謝っているという事が伝わるのには、シュウにとっては充分だった。

……そんな時、唐突にアオは立ち上がり、時空の橋を発生させる。

「アレ？もう帰るの？」

「いや。キバの世界も決着がつく頃だろう。……奴の研究所に向かう。」

「……彼等の援護？」

「いや、念の為だ。シュウ、お前も付き合え。」

「りょーかい。……そいえばさ、キバの世界って……＜あの人＞だよ、ね？……大丈夫なの？色んな意味で。」

「一応＜彼女＞も同行させた。大丈夫だろう……多分。」

「不安直撃～。」

そう言いながら、二人は時空の橋へと入っていった……。

第三十七話：龍と蝙蝠と蛇とコオロギと（後書き）

どーも皆さんお久しぶりです、ジャードです。
……ハイ、思いの外早くケータイが使用可能になったので、高速で執筆しつつ投稿に至りました。

何故だ……!?羽黒さんがどうしてもオリジナルの蓮さんに性格が近くっ……!?
てか、シンジってディケイド見ててもよく分からないキャラですよね。羽黒さん戦闘時では「俺」って言ってたのに、士共闘時は「僕」って……。
もしかして、彼って二重人格者!?（な訳無い）
てな訳でこの小説では「僕」に合わせました。前回の龍騎の世界でも「僕」に修正している……筈です（曖昧な）。

羽黒さんいわく「サバイブ」は禁止カード。……何故だ、禁止カードって単語を見ると、某カードゲームを思い出す……（知らんがな）
それに続いて、青い眼の白い龍をこよなく愛する社長の馬鹿笑いするシーンが浮かんで（だから知らんと）
取りあえず、この世界にもサバイブカードは存在するって事で。普段は禁止、今回のような緊急時に支給される、とか。
……いやだって、ディケイドでオーディン、羽黒さんにあっさりやられてたじゃないですか。つまり、サバイブを使用してなかったら……って事になると、自分は納得しちゃいますね（苦笑）

そして、もう二人オリジナルライダー登場。……いや、もっと出て来る予定ですけどね、ハイ。
龍蒼の詳細については……また追い追い。もう一人のファイズ系統のライダー（ネタバレェッ!!）はまだ秘密だったりします。

……この執筆速度で何時まで続くんだろう、とつくづく思うんですが……お付き合い頂けると幸いです。

では、この辺で。

第三十八話：破滅の王、謎の傍観者達（前書き）

なんか後悔しか残らない今回。

久々の更新ですが……取りあえず、覚悟だけはした方が良いかと。
長文、乱文、駄文の三文字が見事に揃っています。

後、訂正。
キバの映画はロクに見ていなかった為……登場人物の名前もうろ覚えだった始末。
第三十四話にて修正は完了していますが……「白峰タクト」を「白峰タカト」へ変更。リ・イマジネーションのキャラなのに、名前だけカタカナにした始末です、ハイ。
タクトって……指揮棒じゃないのに。何やってんだ俺。

前書きの場で謝ります。大変申し訳ありませんでした。

ソレを踏まえて……許してくれるという寛大な読者様は、先へどうぞ。

第三十八話：破滅の王、謎の傍観者達

ファンガイアとレジェンドルガ連合軍が戦いを繰り広げている場所、キャッスルドラン。
その先には、赤き蝙蝠の戦士……キバと、四体の異形。それぞれ、ミイラ男、メデューサ、マンドレイク、ガーゴイルを連想させる姿をしたレジェンドルガ達は、キバを見るなり憎々しげに睨む。

「貴様が……ファンガイアのキングか。」

「貴様は……我等がロードがこの世界を支配するのに、最も邪魔な存在なのよ。」

「……。」

「裏切ったファンガイア共はどうだ……？全員今の政治に反対している奴等だ……同族殺しってのは、見てて笑えるもんだなぁ……！！」

罵りつつ戦闘体制に入るレジェンドルガだったが、キバ……ワタルは、冷静さを保っていた。

「オイ、ワタル……あんな奴等に構っている暇はねぇ……って言いたい所だが、アイツ等の後ろ……黒い変な穴に、レジェンドルガの王＜アーク＞がいるみたいだ。」

「分かってる……彼等を呼び出そう。早めにケリを付ける。」

そう言ってワタルは、三つの笛……フエッスルを取り出し、キバッ

トに吹かせた。

「ガルルセイバー！」

一つ吹かせると同時に、立て続けに残りのフエッスルも吹かせた。

「バッシャーマグナム！そして……ドッガハンマー！」

キャッスルドラン城内。

とある広間で二人の男と一人の少年が、息を一斉に吐き出していた。

彼等の回りに散らばっているのは……ガラスの破片。つまり、ファンガイアの遺骸。

だが……何体かは生かしているのか、気絶している。

「……まさか、レジェンドルガに脅されて……敵になるファンガイアがいるとはな……。」

「今までしてきた僕等の努力は……どうなっちゃうんだろうね、ガル……じゃないや、次狼。」

「ドッガ……いや、力（リキ）、悲しい。」

三人は、ファンガイアのキング……ワタルの親衛隊、アームズモンスター。
ガルル、バッシャー、ドッガの三体は、キバの新たな力を使う鍵として、そしてキングを守る為にその身を尽くしてきた。

だが、ある時……ディケイドの影響により、世界の融合が始まり……「ブレイドの世界」、「響鬼の世界」と融合、「キバの世界」は融合した世界と共に消滅してしまう。
だが、時を経て……ディケイドとその仲間達による活躍で、消滅した世界が復活した。

だが、変わった事があった。
親衛隊であるアームズモンスターやビショップ、ルークと呼ばれる存在が……どういう訳か、人間としての体を手にしていたのだ。
世界が消滅や復活を辿った影響かどうかは定かではないが……彼等は特に気にしなかった。
ファンガイアのクイーンであるユウキも、人間としての体を持っていたのだから。

その中で、アームズモンスター達は……人間体の状態では、別の名前を使う事とした。
ガルルは次狼、バッシャーはラモン、ドッガは力という具合に。
恐らく、人間とファンガイアの共存がさらに発展するアピールにもなると考えたのだろう。結果、共存の道への大きな一歩を踏み出した。

だからこそ、今回のレジェンドルガの強襲はソレに大きな打撃を与えた。
裏切ったファンガイアが人間に直接的な被害を出した事には……共

存の二文字にヒビが入ったのだから。
それ故に、レジェンドルガは許せない。
「……感傷に浸っている場合では無いぞ、三人供。」
「そんな暇があったら、裏切り者供を粛正しやがれ。」
そこに、二人の男が入って来る。
彼等も親衛隊のメンバー。長身の男がビショップ、大柄な男がルークというコードネームを持つ。
その二人の言葉に、三人はしばし考え込むが……運命は、そんな時間さえも与えないようだ。
閉じ切っていた扉が蹴破られ、そこから何体かのファンガイアが敵意を剥き出しにして入ってきたのだ。
さらに……場内に、三種類ものメロディーが響く。すなわち……アームズモンスター達の呼び出し。
「……キングはこの件に関して、どのようにお考えなのだろうか……。」
「次狼、今は……レジェンドルガを倒そう。考えるのは、それからだ。」
「異界の、戦士、頑張ってる。」
「……そうだな。行くぞ、バッシャー、ドッガ。」
三人のアームズモンスターが言い終わった……刹那、その姿は異形

のものへと変貌し、続いて、何かの彫像のような物に変化。そのまま何処かへと飛んでいった。

「さぁて……待たせたな、裏切り者供ぉ……！！」

「裏切り者には、死しか待っていない……分かるよな？」

ルークとビショップ……二人の言葉につい怯んでしまうファンガイア。だが、その内の何体かは……二人に襲い掛かった。

「でやっ！！」

「ふっ……はぁっ！」

「うわっ！？」

今現在、白峰なる人物が変身したライダーと戦闘中。僕はアイスハルバード、相手は小野川君の使うのに似てる爪で切り合っている。ただ……二人供属性が「氷」だから、たいしたダメージを与える事が出来ない。

……だとしたら、

「やっぱりコレだよね……。」

取り出すのは、翠色のチップ。一分間属性を変える、ちょっとした隠し玉。ソレを、バックルの上部にセット。

『Ｅｌｅｍｅｎｔ　Ｃｈａｎｇｅ……Ｃｙｃｌｏｎｅ』

聞き慣れた男の発声音が響くと、僕に翠色の球体が包む。すると、水色の鎧は翠色へと変化する。……唯一、バックルの色は変わらないけど。

とにかく、確か「氷」属性は「風」属性に弱かった筈だ。相手の「氷」も、その法則に関係しているなら、この姿が良いと思う。

「色が変わっただけで！」

「いやー、そうでも無いんだよね。」

多分今僕は、小野川君を弄ってる時と同じような笑みを浮かべているんだろうなぁ……。

そう暢気な事を考えつつ、風を纏ったハルバードを振るう。

「ていっ！」

「うっ……ぐっ！？」

あ、何と無く効いている気がする。このままいけば、キングに追い付くかな……？

「くっ……なめるなっ！！」

「ウェイクアップ！」

……ん？なんか白い蝙蝠が宣言して、相手が僕に手を翳した瞬間……

「嘘っ……！？」

『……。』

一瞬で体が凍り付いた。風の力を持っているのに、どれだけ大きな氷の力を持っているの、この人!?

「でゃぁあっ!!」

そしてそのまま切り付けられまくる。あ、駄目だ、もう無理。大体、力の無い体育苦手の自分が仮面ライダーとして、ここまでよく戦えたものだよね。

……気が付いたら、大の字になって倒れてた。勿論、変身解除の状態で。少し離れた所に、氷甲が倒れている。白峰って人には氷甲は見えてないみたいだけど……僕はもう駄目だな……。

―やっぱ命ってさ、そう簡単に投げ出すような物じゃないよな―

……?

―死んだって何も残らない。あるのは悲しみ、そして虚しさ……だっけか?―

……この声……確か……？

―生まれ変わる……と言ったって、人間に生まれ変わるのは、また時間の掛かる事だろうな。母さん、父さんも……もしかしたら、別の生き物に生まれ変わってるかもしれない―

……そうだ、彼だ。何を考えているかよく分かんない顔をしている、どこと無く面白い彼。

―っつっても……コレ、お前が言ってた事だよな……あぁ分かってる。言っちゃあアレだけど……お前のおかげで、今の俺がいるからな。あ、ついでに小野川な。……って何だその目。お前の言った事復唱しちゃ駄目だったか？―

中学生の頃だったっけ……恥ずかしそうに、僕に打ち明けてたな。……自ら命を絶とうとしてるように見えた彼を引き止めた一週間後……の事、だっけ？

ちょい待て。

コレ、走馬灯じゃないよね？うん絶対違う。

僕が死んじゃ駄目だ、って言ったのに。あんな偉そうに言ったのに。言った本人が「もう駄目だ」って言っちゃ……格好がつかないな。

「な、何っ!?」

「まだ……諦め切れないな……変身。」

『フィ・ス・ト・オ・ン』

そうだ、まだやるべき事がある。
白峰を倒して、氷甲と合流して、キングの所に行って……自分の世界に帰る。
早く元凶を倒して元の生活に戻りたいってのは……まだ難しそうだから、だったら最低限の事だけは、やり遂げたい。そう思いつつ、目の前の敵を見据えた。

イクサに変身した僕は、手持ちの武器を剣へと変えて、構える。

「……ふっ。たかがセーブモードごときで……。」

……うわっ、なんか相手が何したのか分かんないけど、敵を吹雪が覆っている。波賀君だったら、大騒ぎする所だな……。
セーブモード……って事は、パワーアップする形態もあるって事かな……?
仕方ない、どうやらサーチシステムってのがあるらしいから、それを使って……。

……ってアレ?何だコレ?

サーチ画面の……こっちから見た視界の上側に、なんか書いてあるんだよね。なんか気になる。

えーっと……「Ｐｌｅａｓｅ　ｒｅｔｕｒｎ　ｔｈａｔ　ｌｉｆｅ　ｔｏ　Ｇｏｄ」？

「……その命、神に還しなさい……？」

……そう言った刹那。

体だ熱くなった。

……いや、比喩じゃなくてね。実際に鎧が熱を発してるのね。

うわぁぁぁ、目茶クソ熱いっ！！何コレ何コレ、何なのコレ！？分かったのは、なんか仮面が開いたって事くらいだよ！？

「なっ……バーストモードたと！？クッ、前装着者……まさか、イクサシステムに暗証コードを隠していたとは……！」

……よく分かんないけど、チャンス！

『イ・ク・サ・カ・リ・バ・ー・ラ・イ・ズ・アッ・プ』

腰に付いていたフェッスルをベルトへ読み込ませる。電子音声が響くと……うわ、もっと熱くなった気が……

この力、波賀君だったら上手く使いこなせたかもしれないけど……

これは「炎」じゃない。言うならば……「太陽」だ。

「チッ……しまった……！」

「遅い！！」

同時に、煌々と輝く剣を、白峰に振るった。
その一撃には耐えられなかったのか、白峰は吹っ飛び、近くのビルに突っ込む。
……遠くてよく見えないけど、どうやら倒したみたい。

「よし……じゃあ、早く行こう氷甲……？」

……アレ？氷甲がいない？おっかしいな……さっきまであの辺にいた筈なのに……。

「イーッ！」

「そうそう、イーッて……ん？」

何だ今の声……で、振り返る。
その先には……変わった黒タイツのおっさん達が、氷甲を抱えつつ走っていた。

ちょっと待て。
何であのおっさん達は氷甲の事見えてるの？何で拉致してるの？

……まさか、あの時の科学者っぽい敵の仲間！？

「まずい！！」

僕は、走り去るおっさん達を追うのだった……。

涉が離れてから暫く経ち。
ビルの壁を突き破って、レイ……白峰タカトが出て来た。

「あのガキ……よくも私を此処までコケにしやがって……許さん……！！」

「タカト、激しいのも悪くはないが……今のお前は、華麗じゃない。少し落ち着け。」

「うるさい！！……なんとしても、奴をこの手で引き裂いて……！！」

戦う前とは一変し、怒りを隠しきれない白峰。レイキバットが忠告するが、それをも聞かず、涉が走り去って行った方向を見据える。

「あの方向は……レジェンドルガの方々、それにロードの気配……フッ、だったら私も向かわねばな……。あの方達がわざわざ手を下すまでもなく、この私が……！！」

「残念ながら、それは無理だ！！」

「！？」

唐突に響く男の声。白峰が振り返った先には……一人の男と少女が。

男は階段の一番上に堂々と立っている。何故か……白いマスクを被り、これまた白いマントを羽織っている。
少女は……逆に、階段の一番下に佇んでいる。掛けている眼鏡を通した視線の先には、一冊の本が。どうやら、先程の男の声をものともせず、悠々と読んでいたらしい。

「とおっ！！」

男は突然ジャンプし、階段から飛び降りる。上手く着地に成功した後、ビシッとポーズを決めた。

「白いマスクは希望の印……全ての世界を守る正義のヒーロー……キャプテン・レックス、見参！！」

ちゅどーん。と、背後が爆発するのではないかと思う程、某戦隊ヒーロー物を彷彿させる決めゼリフを言い放った男……キャプテン・レックスと言うらしいが。

「はっはっはーっ！！世界を支配しようとしている悪党め！このキャプテン・レックスが、今此処で天誅を……」

すっぱーん。
という音と共に、キャプテン・レックスの言葉が途切れた。
彼の背後には……先程の少女。手に持つ文庫本で、彼を叩いたみたいだ。

「……ちょっとマナちゃん、痛いしそして酷い。今なんか良い感じの決めゼリフだったじゃん。空気読もうよ、そこは。」

「ケンゴさん……じゃなくて、キャプテン・レックス。明るい性格かつ子供に人気なのは良いですが、ハイテンションすぎると流石に引きます。それに、相手は子供じゃありませんよ？」

「えー、良いじゃん別にー。……まあ良いや。なら、大人用の決めゼリフを……！！」

「要は調子に乗るなって言いたいんです。死にますよ？」

「……って言いつつ何で国語辞典取り出したの！？てか、どこにあったの！？そしてソレをどうするつもり！？」

「次言ったらブン殴ります。」

「さらりと恐ろしい事言ったよこの娘！？てか、戦う前にソレで殺す気！？死にますよって、そういう意味！？」

どこか漫才じみたやり取りを繰り広げる二人。……いや、本人達は割と本気なのだろうが。

「貴様等ぁ……ふざけるな！！」

「ウェイクアップ！！」

そんなやり取りを黙って見ていられる訳がない。白峰は遂に激昂し、レイキバットが笛……フェッスルを吹きつつ宣言。同時に、両腕に巻かれた鎖……カテナが開放され、巨大な鉤爪……ギカンティック・クローと呼ばれるソレが出現する。

流石にこの様子にはたじろいだのか気を引き締め、キャプテン・レ

ックス……いや、ケンゴと呼ばれた男は叫んだ。

「レックスキバット！！」

「ＯＫ、噛み切るぜぇっ！！」

唐突に宣言、現れたのは……レイキバットと同じく、機械的な茶色い蝙蝠。ケンゴの回りを旋回し、彼の腰の辺りで浮遊する。

「変身！」

「変っ身！！」

すると、レックスキバットと呼ばれた蝙蝠は逆さまになり、腰に接続。同時に、恐竜の足跡のようなマークが前方に出現。それが弾け、彼の体を包んだ。

「……！？その姿は……？」

白峰は驚愕していた。

さっきまでふざけていた男が、仮面ライダーに変身したのだから。

両腕両足、そして胸に巻かれたカテナを見る限り、かなり動きにくそうな格好だ。

カテナは無視してその姿を見ると……どこか、ティラノサウルスを彷彿させる。

「はっはっはーっ！！仮面ライダーレックス、只今登じょ、～～……うん分かった。もう真面目にやるからやめてよマナちゃん。」

再び見栄を張ろうとしていたケンゴの背後には、今度は両手に分厚い辞書を持ち、今にも振りかぶらんばかりの体制で構えていた、マナと呼ばれている少女。
彼女は真面目なのだろうが……文庫本や辞書を武器にしている時点では、何とも言い難い。

「では、気を取り直して……ドーピングゥゥゥッッ！！」

「言い方はなんかアレだが……ウェイクアップ！！」

ケンゴはレックスキバットにフェッスルを吹かせる。すると……体中に巻き付いていたカテナは一気に弾け飛ぶ。
同時に、胸、腕、足の筋肉が……増強した。
カテナで封じていたその筋力は凄まじいらしく、瞬間、彼の周囲の地面が凹んだ程だ。

「なっ……！？」

「さぁ……始めようか！」

ずびしっ。と指をさしつつ、彼……仮面ライダーレックスは言い放った。

……はたまた場所は変わり、キャッスルドラン前。
ドガバキフォームと呼ばれる形態にフォームチェンジしたキバ……ワタルは、レジェンドルガ達を追い詰めていた。

目の前で生き残っているのは……メデューサレジェンドルガのみ。

「おのれぇ……キバ！貴様のような奴に、我々が……！！」

「へっ、ファンガイアのキングを……ワタルをなめるな！！」

「この世界の秩序を乱した貴様は許せない……残された道は一つ、死だ。」

「ウェイクアップ！！」

ワタルは言いながら、その幼い声には似合わない、キングの威厳を纏った言葉を言い放つ。

そのまま必殺技を発動し……跳び蹴りの態勢に入った。

「おのれぇ……だが、我々には……ロードがいるぅぅぅっっ！！」

その跳び蹴りをまともに受け……メデューサレジェンドルガは……爆散した。

「……やっと片付いたか。」

「あぁ。五分以内に済んで良かった。」

その言葉と共にワタルは、その姿を通常形態……キバフォームと呼ばれる姿に戻した。

いや、実際はキバットが戻したのかもしれないのだが。

先程の……三体のアームズモンスター達の力を使った姿……ドガバキフォームと呼ばれるソレは、命を伴うリスクを持つ。キングであ

るワタルも、その姿は約五分間しか保てないのだ。

……そんな彼等の目の前にある黒い穴から、一人の男が出て来た。

「……え？」

「……何？」

だが、その男に二人はア然とした。

なぜなら、その男は……何故か、ボロボロの作業服を着ていたからだ。よく見ると、顔や髪型も汚い。

「ほう……貴様がファンガイアの王、キバか……。」

「お前がロード、か……だが、その姿は……？」

「どうやらコレが、俺の復活の為の生け贄のようだな……ようやく復活できた。」

生け贄。その言葉を聞き、静かに怒りが沸き上がるワタル。お前達の目的の為に何人もの人間、ファンガイアが犠牲になっていると思っている。そう叫びたかったが……

「ねぇねぇ、此処どこ～？もしかして、君がロード～？」

唐突に、灰色の……レイキバットやレックスキバットと同じく、機械的な蝙蝠がバッサバッサと飛んできた。その蝙蝠に……ワタルとキバットは驚く。

「馬鹿な……アークキバットだと！？」

「白峰の野郎……マジで完成させてたのか！？」

「ホウ……どうやら貴様が、俺の力を引き出す鍵のようだな……力を貸せ、アークキバットとやら。」

「ドロンドロ～ン、行きましゅよ～。」

アークキバットは気にせずロードに近付き、腰の辺りに浮遊する。
そして……

「変身。」

「変～身っ。」

ロードの姿がみるみる巨大化し……その姿を変えた。
その巨体は３Ｍ程。黒い体は、何処かバフォメットを連想させる。

「白峰……あれからやはり、アークキバットに手を付けていたか……。」

「アークキバットを……ロードの力を引き出す為に改造したって言うのかよ！？」

慌てふためく一人と一匹を無視し、ロード……いや、仮面ライダーアークは襲い掛かった。

あーッ！駄目だ、捕まらない！てか、早いよあの黒タイツ軍団！しかも何処からか続々と出て来て妨害するし……

「イーッ！」

「煩い邪魔！」

「イッ！？」

急いでいる理由……何故なら前方に、何かデカイライダーのような奴がいるからだ。多分、全長３Ｍ程。どういう訳か、奴等はそのデカイライダーの方へ向かっているんだけど。

というか、あんなデカイのも仮面ライダーなんだ……世界って広い。

……アレ？なんかデカイ奴が……なんか投げ飛ばしてきて……ってアレ、もしかしてワタル！？

「うわっ！？」

「ぶへっ！？」

キバ……ワタルキングは調度僕に激突。本人は何があったか分かってないっぽいけど……痛い、痛いし重いですキング。

「……っつ……って、渉！？お前……」

「いやあの、喋る前にどいて下さい。重い……。」

「……あ、すまない。」

っあー……腰が、腰がヤバイ……って氷甲!?氷甲は……まさか、黒タイツに!?

「ふん……虫けらが一匹増えたか。」

うわっ、デカイライダー、いつの間にこっちに来たんだ!?ていうか、近いと怖い……。

あ……よく見たら、デカイライダーに黒タイツ軍団蹴飛ばされてたっぽい。氷甲は……何処だろ?

「ワタル……どうする?奴に勝つ為には……。」

「分かってるよ、キバット。……タツロット!!」

「ビュンビューン!お待たせしましたーっ!テンション、フォルテッシモ〜!!」

待ってましたと言わんばかりに出て来たのは……金色の龍、タツロット。キバの鎧に巻き付いている幾多の鎖を放ち、最終的に左腕に収まった。

「変っ身!!」

タツロットが宣言した……刹那、キバの姿が変わった。

黄金の鎧に真紅のマント。まさに、キングに相応しい姿。

風貌だけでなく、彼から発せられるその威圧は、見る物総てが平伏しそう。あの姿に一番合う言葉は……「皇帝」だと思う。

「ほう……それが、キバの本当の姿か。」

「あぁ……この姿を見た敵は、お前が二度目だ。」

そう言いながら、ワタルは長い……装飾の施された剣を構えて……

「何ッ!?」

「……え?」

いつの間にか、デカイライダーの眼前へと移動……切り掛かっていた。

「フッ!」

「グアッ!?」

見事にヒット。勿論、デカイライダーは怯んでいる。

おっ……コレは、もしかしてチャンス?

「渉!イクサライザーを構えろ!」

……ハイ!?何だって!?

「い、イクサライザーって!?」

「あのイクサの強化ツールだ!バーストモードで自力になったお前なら……多分、使いこなせる!」

曖昧ですね、ワタルキング!!

そーいえば……確かイクサライザーって口部にセットされてた筈……おっ、取れた。
だけど、イクサライザー……平たく言えば、この携帯電話は、どうやって扱うのよ……。
なんか入力？適当に押して……あ、駄目だった。

「……１９３。」

「え？」

唐突に背後から声が聞こえた。
振り返ると……一人の少女が。
……少女って表現使ってるけど、多分僕より年上。髪はロングで、凄い無表情。今時珍しく和服を着てて、手にはバイオリンが。
うーん、なんか合わないな。服装と楽器が。
てか……１９３って？

「ソレに……入力……。」

あぁ、成る程ー。イクサで１９３、かー。
……って待て。

「なんであなたがソレを知ってるんですか！？」

「……。」

……答える気は無いようだ。
この人、気になるけど……今はワタルの加勢に行かなきゃ。後ろか

ら凄い爆発が聞こえる。
今は……戦闘に集中しなきゃ。
『ラ・イ・ジ・ン・グ』
入力後……イクサの姿が変わっていく。
一部の鎧が吹っ飛んで、白いアーマーの一部が青へと縁取られていく。
この姿が……イクサの、強化形態。
多分、ココをこうすれば……あ、イクサライザーが銃になった。
「……ちょこまかとぉっ！！」
「うわっ！？」
……ワタルが、デカイライダーに殴られている。
……今、奴は油断しているから……
「せやっ！」
「ッ！？」
イクサライザーの銃口を奴に定め、放つ。予想外だったのか、尻餅をついて倒れ込んだ。
「……！？渉、お前……。」
「あ、ワタル。なんとか強化変身出来たよ。」

「……お前の直感には、本当に驚かされる。」

「……え？　いや、女の人に聞いたんだけど……。」

「……何？」

僕の視線を追って、ワタルも先を見据えたようだけど……アレ？

どういう訳か……いない。

もしかして……やっぱり一般人で、この騒ぎだから逃げた？　いや、だったら何でイクサライザーの暗証コード知ってたんだろ……？

「……渉、後でその女を捜せ。」

……へ？

「何で？」

「イクサライザーの暗唱コードを知っているのは、前装着者だけだ。その女と前装着者と接点があったにしろ……話は聞かなければならない。」

……結構厳しいんだなー、この世界って。

とか、そんな呑気な事を考えている場合じゃ無い。

デカイライダーが……いつの間にかユラリと立ち上がっていたのだから。

「貴様等……生きて帰れると思うな……！」

「ウェイクアップッ！！」

いつの間にかアークキバット……だっけ？が、フェッスルを吹いて……唐突に夜が訪れた。

この世界に来たばかりの時も、キングが必殺技の時に夜が訪れていたけど……唯一の違いは、月。

何だか……月に、目玉のような物が付いているのだから。

その目は、真っ直ぐデカイライダーを……何かを待ち構えているように、じっと見つめている。

「おぉおぉおぉおおッッ！！」

デカイライダーが吠えた……刹那、胸に巻いてあった鎖が弾け飛び……解放した胸から、何もかもを吸い込んでいった。

近くにあるゴミ、一部崩壊したビルの破片。その他もろもろ。まるで、ブラックホールの如く。

この戦いで逃げ惑っていた人々も、この光景を見てより恐怖に陥る。

いや……この後、僕も正直驚いた。

月に付いていた目が……デカイライダーへと近付いて来ているのだから。

デカイライダーもゆっくりと浮遊し……その目を、取り込んだ。

取り込んだ刹那、その目に纏わり付いていた……根っこのような物が段々と形を変えて……悪魔を連想させるような羽、巨大な三、四本目の腕となった。

取り込んだ筈の目は……デカイライダーの胸でギロリとこちらを睨んでいる。

巨大な羽、三つの目、四本の腕……。
これじゃもう、ライダーじゃなくて悪魔だ。

「こ、コレが……アークだってのかよ!?」

「まさか……ここまで変貌するとは……!」

キバットとキングが驚いているとほぼ同時に……アークキバットの外装が、外れた。
おどろおどろした先程の顔とは違い……今の顔は、完全に「機械」だ。
デカイライダーにエネルギーを与える、ただの機械へと成り下がったかのように思えてしまう。

「光栄に思え!我が一族の……最強の力を見せてやる!!」

「Ｇｏ　ｔｏ……ｈｅｌｌ!」

デカイライダーとアークキバットが宣言したと同時に……周囲を衝撃波が襲った。

「!!」

幸い、僕等には当たらなかったけど……その衝撃波を受けたのは、一般の人々やファンガイア達。
痛みに苦しんで倒れる人もいれば、その姿、力に恐怖して逃げる人も多々。

「……貴様ァ……!!」

「……本当の音楽を知っているか？ファンガイアのキングよ。」

怒りを見せるキングに……意味深な質問をするデカイライダー。

……どういう意味だ？

「我々にとって、音楽とは……人間の悲鳴だ。」

「「！？」」

何を……何を考えている！？

「人間の出す悲鳴とは様々だ……その幾多の悲鳴が……我々を満たしてくれる。それが、我々の唯一の娯楽。」

「そんな物……音楽じゃない！人が苦しんで奏でる音楽なんて……いや、音楽なんかじゃない！」

「……やはり、話が合わぬか……少しでも共感したら、見逃してやろうかと思ったが……。」

共感を求めているのか？

人の悲鳴を音楽と呼び、それで心を満たしている事に。

そう言って怯えた人々を、何人も殺してきたのか。

レジェンドルガという種族は……元から、悲鳴を好む種族だったのかは知らないけど……尚更、許せなくなった。

力だって弱い、その辺にいる一般人が言うのもアレだけど……

「最低だよ。」

「……何？」

何故だか、分からない。

この高ぶった感情を……今は、抑えたくはない。感情の赴くままに、爆発させたくなった。

「アンタは……レジェンドルガは、人の命を何だと思っている。」

「そうだな……言うならば、音楽を奏でる楽器、か？」

「音楽は、人が……多くの自然が奏でる物。楽器は、人が操りソレを手助けする物だ。声や動作も楽器と表現するけど……怯え、苦しむ声なんて、楽器なんかじゃない。」

「それは、貴様等の定義だろうて。我々にとって人間は、我々が一番満足する音楽を奏でる道具だ。……その辺に転がっているゴミよりは、利用価値はあるがな。」

「貴様等の物差しで、人の命を計るな。」

「……やはり、どこまでも話が合わんか。何処の世界の人間であれ……そこだけは頑固なのだな。」

そして、唐突に後から増えた方の右手を……逃げ惑う人々に向けた。

……まさか……！？

「ならば……特別に貴様等にも聴かせてやろう……このアークの最大級の力で……！！」

そう言いながら、その手に朱いエネルギーのような球体を作り出している。
……あんなのが人に当たったら……！！

「……アーク、貴様！！」

「駄目だワタル！この距離じゃ間に合わねぇ！！」

「でも、此処で黙って見てても……こんなシーン、ドラマチックじゃない！」

「タッちゃん！お前が喋ると何かこんがらがるから黙って！？」

キング達も焦るけど、やはり動く事が出来ない。
このまま黙って見ている事しか出来ないのか……！？

「さぁ、聴け！レジェンドルガの王が直々に奏でる、最高の音楽を！！」

そう言って、そのままエネルギー弾が放たれる物だと思っていた。
けど。

「……っぐ！？」

唐突に、デカイライダー……アークが、膝を着いたのだ。

何故か、苦しそうに耳を塞いでいる。
……何か聞きたくない音でも響いているのかなー？とか思って耳をすませてみると。

「……バイオリン……？」

キングの嘆き通りに、何処からかバイオリンの音色が響いてきた。
音楽の事はよく分からないけど……コレは、相当上手い人が弾いているのだろう。心が安らぐ。

「き、貴様……何者……！？」

苦しみながら後ろを振り向くアーク。
何で苦しんでんだろ？とか思いつつ、アークの見据える方向を僕も見てみると。

驚いた。

よもや……「鬼」がバイオリンを弾いているなんて。
全体的に真っ黒な姿をした鬼は、構わずに演奏を続けている。

「アイツ、ファンガイアでもない……何者なんだ……！？」

ファンガイアでもない？

じゃあ……僕等の世界でも「キバの世界」でもない、別の世界の住人？

「そこの鬼……その忌ま忌ましい演奏を……止めろォッ！！」

「……音撃奏……破邪冥葬……。」

よく分からない単語を出しつつ、鬼……声からして女……は、バイオリンの演奏を続けた。

先程とはなんら変わりない演奏だと思うけど……何故か、アークの苦しみ様は尋常じゃない。

「あ、ぐぁ、あぁぁぁぁあぁッッ！？」

先程より苦しいのか、耳（？）を塞ぎながら膝を付き、もがく。

普通の曲は聞くに耐えられない……つまり、僕等とは感覚までもが違うのだろうか。

だけど、これだけは分かる。

「……今だ、渉！」

「了解、キング！」

「ウェイクアップ・フィーバー！！」

……相手が怯んでいる、今がチャンスだと。

タツロットの宣言と共に、ワタルはジャンプ。僕はイクサライザーに付いていたフェッスルを、ベルトにセット。同時に、イクサライザーにエネルギーが溜まっていく。

そして、銃口を……アークへと定めた。

「き、貴様ァ……や、やめっ……ぐ、オォォオォッ！！」

アークが叫ぶと同時に、震える大地。
このまま放っておくと、マズイ事になる。苦しんでいるとはいえ、アークはまだ力を隠し持っているに違いないのだから。

……そう考えている内に、ワタルは跳び蹴りを繰り出していた。
足に付いた、鋭い蝙蝠の羽のような物で連続攻撃。その後敵は後退するけど……アークはまだ倒れていない。

だけど、まだ僕の攻撃が残っている。

イクサライザーの銃口の先には……アークの力の根源でもある、アークキバット。アレを破壊すれば……アークを倒せる！！

「ガッ……駄目だ……止めろォッ！！」

躊躇はしない。
僕はイクサライザーの引き金を……引いた。

「良かったんですか？白峰タカトを生かしといて。」

「正義の味方は、無駄な殺生はしない！」

「ソレ以前に、あなたがやっている事自体はたして正義と呼べる物なのでしょうか？」

「その通り！！何故なら私は正義のヒーローなのだから！」

「そんな胡散臭い格好をした正義のヒーロー、私だったらお断りです。大体、正義って正しい事が正義って訳じゃなくて……。」

「さぁー早く帰るぞ！麒麟に対しての修業もせねばならないし、＜ヒカリちゃん＞がどうしているかも気になる！！」

「聞いてないし、あのオッサン……まあ、後者においては、多少賛同しますが。」

場所は変わり。

キャッスルドラン東部にて、ケンゴとマナは既に帰還する準備を終えていた。彼等の前方には、誰かが発生させたであろう銀色のオーロラが。

先程、戦闘を繰り広げていた筈だが……そんな疲れは、微塵にも見せていない。

「ま……待てッ……。」

だが、ソレを引き止めるかのように声を掛けられる。

後方には……体中ボロボロになっている男、白峰タカトの姿が。傍

らには、既に破壊されているレイキバットが転がっている。
ソレを踏み潰し、白峰は激昂する。

「何故……何故、私を生かした!?情けでもかけるつもりか!?」

「正義のヒーローは無駄な殺生はしない!!」

「……だそうです。」

「ふざけるな!!そんな理由で……屈辱以外の何物でもない!!」

「それでも、あなたはまだ救われている方だ。」

激昂していた筈の白峰の表情が、疑問へと変わる。
マナの言葉が、理解出来ないとでも言うように。
対するマナは……悲しそうに、表情を歪める。いや、ケンゴも先程とは違い、表情を曇らせている気がする。

「あなたには、あなたの世界がある。だけど、私達は……帰る事が出来ない。」

「……どういう意味だ!?」

「私達が＜原離者＞だから。その運命からは、逃げる事が出来ない。……だからこそ、あなたが少し、羨ましい。」

「……そこで何をしている!?」

意味深な発言が気になったが……ソレを遮るように現れたのは、ファンガイアのクイーン……サガ。

その姿を見た二人は……話はこれまでと言わんばかりに顔を背ける。

「……ファンガイアのクイーン、白峰タカトを頼みました。」

「お前達!?」

ファンガイアのクイーン……ユウキの呼び止める声が届く前に、二人は銀色のオーロラへと消えていった。

まるで、最初からこの場には彼等がいなかったかのように……。

……馬鹿な。

イクサライザーでの光弾は……直撃した筈なんだ。

けど……アークキバットが破壊された様子はない。破片さえ無いのは、やはりおかしい。

見えるのは……汚い作業服を着た男が倒れている姿だけ。

「いやー、危なかった危なかった。」

……だけど、今の声で分かった。

何者かが、僕の攻撃より一足先にアークキバットを奪ったんだ。

案の定、すぐ側には……黒い仮面ライダーが。

引き立たせるのは体中に張り巡らされた金色のラインに、赤い一つの複眼。風にたなびかれている漆黒のマント。

手に持つ剣は、何故か天を差していて……よく見ると、金色のエネルギー状の何かで剣先が伸びている。その先っちょに、アークキバットが収まっていた。

「いやー、紛いなりにもアークを倒すなんて、やっぱり凄いねー君達。」

「……お前は……？」

「ん？オーガ。＜地の帝王オーガ＞。」

案外あっさり名前を明かしてくれたライダー……オーガ。一見、親しそうに接しているけど……どうしても、ソレを打ち消してしまう。理由を説明するとなると……オーガの剣や体にこびりついている、血の臭いで。裏では絶対……言葉では説明しがたい事をやってのけてきたのだろう。

そんなオーガは……伸ばしていた剣先を戻し、先っちょに収まっていたアークキバットを掴み取り、フー、と息を吐き出した。

「いやー、アークキバットが上手く手に入って良かったー。さて……君達とはもうちょっと話していたかったけど、時間が時間だから。そろそろ帰るね。」

じゃーねー、とか言いながらオーガは銀色の幕を発生させて……黒タイツのおっさん達と共に、去っていこうとする。

……って待て待て待て！！今回は黙って見てられないよ！？

アークキバットの行方が気になるのも確かだけど……氷甲は拉致されっぱなしじゃん！！

あーでも、このままだとイクサの状態のままだし……

「……追ってくれ、渉。」

「……へ？」

……え、良いの王様？

このままだとイクサの鎧持ったままだよ？

とは思いつつも、オーガや黒タイツのオッサン達は銀色の幕を既に潜っている。早く行かないと、銀色の幕が消えてしまうかもしれない。

「危険だが……アークキバットの破壊をお願いしたい。アイツを利用されては……他の世界が危ない。」

「……成る程、同感。でも、イクサは……。」

「そのまま使っていけ。その変わりに……。」

「必ず返す……絶対にね。」

よし、交渉成立！

そのまま、消えかけていた銀色の幕を……くぐり抜けた。

キャッスルドランから離れた、人気の無い裏道。そこに、先程バイオリンを奏でていた「鬼」が、膝を着いて苦しんでいた。
唐突に「鬼」の体を闇が包み……それが消えると、そこには「鬼」はいなかった。
変わりに膝を着いていたのは、１８歳程の少女。先程、秋元渉にイクサライザーの暗証コードを教えた少女と、同一人物。

「……貴様……引っ込め……！！」

―貴様の体は……いつになったら手に入る!?何故諦めず、我に体を渡さんのだ!?―

「……絶対に……嫌だ……！！」

何故だろうか。
この場には彼女しかいないのだが……もう一人、男の声が響いている。だが、その主は分からない。……恐らく、彼女しか分からないだろう。

刹那。

彼女が映していた自身の影は……牛のような怪物の影にへと、変貌していた。

だが、彼女は「何か」への抵抗をやめない。
自身が呼び出したであろう銀色の幕へと……転がり込むように入っていった。

訪れるは、静寂。
だが、裏では……騒がしいとも取れるように、得体の知れない何かが……既に、目覚めていた。

第三十八話：破滅の王、謎の傍観者達（後書き）

本当に後悔しか残りません。

てな訳で今晩は、ジャードです（嫌な始まりだわぁ……）

取りあえず、仮面ライダー烈火復活しました。

何だか今回は視点があっちこちに移動する始末。うわ、酔いそう。

秋元君だけパワーアップツールを手にして楽に戦闘してます。……

小野川でさえ擬似ライダーだってのに。

何故か。

何故かアークが、魔化魍みたいな感じになってしまった。

いや、だって……普通の人は悲鳴を聞きたくは無いですよね？けど、

レジェンドルガはソレを好む。

イコール……もしかしたら、音楽に対する感覚は人とは真逆じゃねぇのか？という自己判断に至った訳です。

資料調べでしかキバの映画を見ていない為……この解釈が違っていたら、ご報告頂けたら幸いです。

二つ目の後悔。

オリジナルライダー、レックスことケンゴさん。名前から……誰が基になったかは分かるかと思います。

ソレを考えると……全くの別人ですよね、彼。せめて、関西弁にしたかったんですが……自分が書くと明らかにエセ関西弁になっちまいますから、断念。

周りにも関西出身だった方々はおらず……。

誰かぁぁぁ！レクチャーして下さぁぁいッ！！（無理）

この異世界移動編。
取りあえず出したかったのは……「原離者」と呼ばれる存在です（おかげで別の小説と化してますが）
この原離者……読んで字の如くです（苦笑）
多分お分かりの方もいらっしゃるかと思いますが……アオ、ジャキさん、ヒカリちゃんを除いた四人は、原典での登場人物の方々の名前（もしくは一部）をお借りしています。

さて、次回にてやっと異世界移動編終了
ソレを書く前に……別の小説を抱え込んでいる為、かなり遅筆になるかと思いますが、今後もこの駄文にお付き合い頂けましたら幸いです。

裏二話：結末・ネガ世界の烈火（前書き）

この話は元々烈火の外伝として執筆していた「揺らめく炎の裏側（削除済み）」にて掲載していた物です。
削除前の小説の時の内容をそのまま転載していますが、ご了承下さい。

また、ご存知でない読者様に申し上げますと……この話は、ネガの世界に存在する烈火の物語です。
この話の掲載前に、外伝時のこの話でばらまいた伏線を烈火にて回収した為に、意味不明だった事が少しでも分かる……かも、知れません（待てや）

ともかく、お付き合い頂けたら幸いです。

裏二話：結末・ネガ世界の烈火

世界は無数に存在する。……この「世界」という定義は「平行世界」もしくは「パラレルワールド」と呼ばれる物だが。
その内の一つ一つの世界にも表と裏と存在し、独立している。
表の世界は、普段我々が住む世界と思えば良いだろう。
対象的に裏の世界……またの名を「ネガの世界」は、「世界の破壊者」である「ディケイド」によって幾つにも増え出してしまった内の、欠陥とも言える世界。表の世界と世界観は大差無いが、世界の滅びの現象に関わらず、いずれ崩壊、消え行く世界だ。

そのネガの世界と呼ばれる一つの世界が、崩壊を迎えようとしていた……。

「はあっ、はあっ……！！」

とある町……いや、町だった場所……その通りに、一人の少女が走っていた。……何かから逃げるように。
少女は何かを詰め込んでいるボストンバッグを背負い、天使の人形を抱き抱えながら何度か後ろを振り返り、必死に走る。

彼女の後ろからは……十体以上のも、黒い異形が。

その様々な姿をした異形達は、少女を追っていた。その少女を……
消さんとばかりに。

（逃げないと……殺されちゃうっ！！）

自分にそう言い聞かせ、必死に異形から逃げ続ける少女。だが……
何かに躓いて転んでしまう。
その何かは、人……いや、人だった物。所々血が出ていて、白目を
剥き出しにして横たわっている。
たいていの人を叫ぶか腰が抜けるかするだろうが……少女は違った。
彼女は、その「人だった物」を慣れているかのように見やり、一言
「ごめんなさい」と呟き、再び走り出した。

……よく見ると、彼女が躓いた「ソレ」だけでなく、回りには多く
の「人だった物」が転がっていた。体のパーツが所々無い物、白骨
化している物……もはや原型を留めていない物。
それを臆陶しそうに蹴り飛ばし、少女を追う異形は、どこと無く焦
っていた。……何かが来るのを予期しているかのように。

「あっ……！？」

途端に足を止める少女。……目の前が行き止まりというのは、なん
という不幸だろうか。
振り返ると、直ぐ側には異形の集団が。

「……ごめんね、お兄ちゃん……。」

天使の人形をギュッとにぎりしめたまま、そう呟いた少女。その表

情に……何故か、恐れと言った物は無い。
そんな少女にゆっくりと近付く異形達。
しかし……

「だぁぁりゃあぁぁっ！！」

唐突に上から黒い「何か」が少女の前に着地、一番近くにいた異形を武器であろう大鎌で切り裂いた。

「ギィィッ！？」

突然の事で分からないその異形は、攻撃してきた「何か」を見る事はなく爆散した。
その「何か」も、一言で言うと異形。黒い体や手に持つ大鎌を見ると、どこか悪魔や死神を連想させる姿だ。

「ったく……アイツに謝る前に、アタイに謝って欲しいんだけど！アンタが死んだら、アタイだって砂になっちまうじゃないさ！」

「……あ、＜ディーア＞、大丈夫？」

「ハッ、アタイをなめんな……それより、早くベルト！とっととガルドなんて倒さないと！！」

「うん……え～とベルトベルト……あ、コレコレ。」

そう言いつつ、ボストンバッグを探り……一つの銀色のベルトを取り出し、異形……ディーアに渡した。
何故かその様子を異形……ガルド達は黙って見ていた。いや……少しずつ後ずさっている。まるで、ディーアを恐れているかのように。
そんなガルド達を無視し、ディーアはベルトを腰に巻く。装着したら、一つだけしかない大きめのボタンを押した。すると、不気味な……いや、悲しげなメロディーが流れ出す。
そして……

「変身！」

『Ｌｕｃｉｆｅｒ－Ｆｏｒｍ』

何処からかパスを取り出し、ベルトに翳す。すると、電子音声が認識し、ディーアの姿が……変わった。
一瞬で黒いスーツ、紫色の鎧に包まれていたその姿は、先程の姿より死神に見える。

悪魔の名前を冠する死神……ディーアは、腰に取り付けられているツールを外し、組み立てる。
……先程使っていたソレよりもより機械的な大鎌へと組み立てたディーアは、その大鎌をガルドへと振るった。

約十体の内の二、三体が斬激を受け、爆散、消滅。残っているガルドは、忌ま忌ましそうに、そして怯えつつディーアを睨んでいる。

「さぁーて……苦しみなんて味わせねぇ……その魂、ズタズタにしてやるから覚悟しやがれ！！」

そう宣言したディーアはガルドの元へ一気に駆け出し、近くにいたガルドを切り裂く。その隙をついて別のガルドが背後から襲い掛かるが、

「だやぁっ！！」

「ギィッ！？」

それを分かっていたかのようにディーアは体を反転させて攻撃をかわし、そのまま大鎌を振り落とす。案の定、ガルドは切り裂かれ、爆散した。

危険と考えたか、一斉に襲い掛かる事にしたのだろう。残ったガルドは円を組み、ディーアを囲んだ。

……だが、そんな状況でディーアは仮面の下で不敵な笑みを浮かべていた。

「良いのか？……そうやって円を作ったって、アタイには通用しないんだぜ……？」

言いつつ、何処からか再び何かのパスを取り出した。そして、ゆっくりとベルトにパスを近付ける。

「……そうそう、アタイを囲んでいるガルド諸君、アタイの言葉が分かるかどうか知らねぇけど……そこ、普通に攻撃範囲内だから。」

『Ｆｕｌｌ－Ｃｈａｒｇｅ』

さらりととんでもない事を暴露したと同時に、ディーアはパスをベルトに翳す。電子音声が認識した刹那、ベルトから紫とも黒とも似つかない色の稲妻のような光……いや、エネルギーが現出、大鎌に繋がる。そのエネルギーは大鎌を伝って刃に広がり、大鎌はより大きく、より鋭くなる。

ガルドは今頃ディーアの言葉を理解したのか、慌てて後退しようとするが……

「遅ぉいっ！！」

一歩早くディーアは大鎌を回転させ、全てのガルドを切り裂いた。

「「「ガァァァ！？」」」

切り裂かれたガルドは一斉に爆散。残っているのは……ただの塵。

「あ～終わった終わった……あ、光（ひかり）お待たせ。」

ディーアは変身を解き、少女……光へ近付くが……、

「ディーア、後ろ！！」

光は血相を変えて叫ぶ。驚いたディーアが振り返った先には……鋭い爪をディーアに突き出そうとしている、狐を連想させるガルド。

ディーアは変身を解いているし、油断もしていた。避けられない、とディーアは思っていたが……

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｃｃａ』

唐突に響いた発声音。同時にに、ガルドは炎に包まれ、バラバラに崩れ去っていた。

ガルドだった物の後ろには、一人の戦士が立っていた。
黒いスーツに赤い鎧。どこか鳥を連想させる仮面に、黄色い複眼。
手には、炎を纏っている剣が。

「……お兄ちゃん！！」

「よ。二人とも無事か？」

仮面ライダー烈火……波賀悠樹が、そこにいた。

「油断は禁物だぜ、ディーアさん？」

「なっ、テメェ！！アタイだってガルドの気配は分かってた！テメェが来なくても……！！」

「ちょ、ディーア抑えて……。」

『悠樹、お前も茶化すな。』

「へーいへい。」

戦いの後、二人と一体と一匹（？）は、戻る場所……もとい、悠樹の自宅へと向かっていた。

ただ、周りの住宅は全て廃墟と化している……恐らくガルドの仕業による物だろう。殆どの住宅が全壊している。

それだけでは無く……道ばたに無数の「人だった物」が転がっている。それを見る度、彼等の心は痛む。

「もう……俺達以外に、生きている人は……。」

思わず、悠樹の口からそう漏れる。これだけの「人だった物」を見ると、この地球上には自分達以外生物がいないのでは？と、彼にしては珍しく考えてしまう。

「そんな訳無いって！私達だって今此処で生きてるんだから、何処かでまだ人は生きているよ！」

「……光……。」

「あ、ホラホラ、お家だよ！」

暗い雰囲気を吹き飛ばすように光は駆け出す。その様子を、悠樹は、ディーアは、翔炎は、辛そうに眺めていた。

悠樹の済むアパートは、奇跡的に無傷だった。
無傷、とは言っても、一部の壁が崩れていたり、至る所に血が付いていたりするが。

「ほーら、ただいまー！」

「……ただいま。」

そう言いながら自宅へ入ったのは光と悠樹。ディーアは先程とは打って変わって黙り、翔炎も何か考え込んでいる。

「あ、そういえばいっぱい食料見つけたんだ！今からお昼作るね！」

「おっ、楽しみだな。」

そう言って光は、ボストンバッグから大量の缶詰や野菜等を取り出す。そして、台所へと向かって行った。
悠樹は彼女の様子を笑って見ていたが……光が台所へ行った刹那、表情を重くした。

『……希望は無いぞ、悠樹。』

「……分かっちゃいるんだけどね……。」

「……光に、この世界の事を伝えないのかい？」

「光は純粋すぎる……知らない方が、アイツにとっては良い。」

「此処がネガの世界……だから今、こんな状況にあるって……言えないだろ？」

翔炎と出会ってから数ヶ月……突然、何処からか現れた大量のガルドが、悠樹達に襲い掛かった。

最初こそは彼等は抵抗したが……その数の多さに対抗しきれず、最初に烈氷……秋元渉が倒れた。

続けざまに、烈雷……小野川海斗がガルドの一斉攻撃を受け、烈風……霞河舞は悠樹を庇い、力尽きた。

同時に、精霊……風牙、氷甲、爪雷は……自身の適合者の戦闘の記録を大ショッカーに渡す訳にはいかない為、彼等の後を追うように

消滅していった。

精霊は表の……適合者が存在する世界に入ると同時に、ソウルチップに記録を残す為か無意識に分身を作り出し、その分身はネガの世界へと向かう。

表の世界の精霊は分身の存在を知らないが、分身は表の世界の精霊の状況を知る事が出来る。そこで、大ショッカーの存在を知った。

だからこその、自害だった。

『あの大量のガルドさえ来なけりゃ……せめて、悠樹達が寿命を終えるまでは、この世界ももった筈なんだがな。』

「皮肉にも、ガルドのお陰で……光やディーアに出会えたんだけどな。」

「アタイも……大ショッカーに、あの男の下で動くのは嫌だったから。光と契約して……今があるから。」

―アンタ……なんで、そんなに必死に生きようとするんだい？―

―お兄ちゃんと……生きて元の生活に戻るって、約束したから！―

―へえ……こんな、もう人類が絶滅する状況でも、か？元の生活に戻るなんて、不可能だと思うがな―

―そんな事は無い！お兄ちゃんが……皆が、アンタ達なんてやっつ

けるから！―

―……アンタのような純粋無垢な奴、面白いね……よし、アンタの願いを言いな。一つだけ、何でも叶えてやるよ―

―……私達に協力して！皆を守る、光となって！―

「＜皆を守る光＞って……アタイは悪魔と死神がモチーフだってのに……。」

「お前が根っからの悪じゃ無いって事が、アイツには分かってたんだろうな……幼い故に優し過ぎる。そんな奴が、此処まで生き残るなんてな……。」

彼と光が出会ったのは、一ヶ月程前の事だ。
何処かの空き地でガルドと戦闘していた際、霞河が光を見付けた。
その時、彼女は神に祈りを捧げるようなポーズで天使の人形を抱き抱えながら、空き地の隅っこでひたすらジッとしていたらしい。ただ、相当辛かったのだろう。見付けた途端、泣き付いて来た。
両親がキリスト教信者だったらしく、人形も母親が作った物だとか。
だからその人形を、今まで大切に、肌身離さず抱いていた。
彼女は何時も言っていた。

―……どんな辛い時でも、諦めちゃ駄目。いつか救世主「メシア」

が現れて、皆を救って下さるんだから―

「救世主なんて、いやしないさ。」

『悠樹……。』

そう嘆いた彼を、翔炎は何度見てきた事か。
悠樹は目に涙を浮かべ、続ける。

「……メシアなんて大層な奴がいたら、さっさとこの世界を救ってくれよ。渉を……小野川を……霞河を……皆を、生き返らせてくれよ……。」

そう言って悠樹は、自分の部屋へ閉じこもってしまった。
だが、仕方が無い。本来は普通の高校生が、こんな状況に平静でいられる訳が無いのだから。

……自分達の命も、何時までもつんだろうか……。

翔炎とディーアは、そう考えた。

あまり使わない勉強机に悠樹は座り、俯いている。そして、何かを思い出すかのように、記憶を巡らす。

―……皆は、先に行ってて。僕は……ガルドを足止めする。……大丈夫、また戻って来るよ。弄る為の本、まだ読み切ってないし―

―ケッ……何で俺が、こんな状況になって……ガルドの野郎供……。アイツ等に負けるのはしゃくだな……波賀、お前との勝負……しばらくお預けだ、チクショウ―

―あ、アハハ……なんか体が勝手に動いちゃった……。そうだ、悠樹くんは……一つだけ願いが叶うなら、どうする？私は……出来る事なら、あの頃に戻りたいなぁ……皆でじゃれあってた、あの頃に―

それが、彼等の……仲間の、悪友の、最後に聞いた言葉だった。

心配させないように何時もの爽やかな笑みで走って行った、毒舌男。

多数のガルドに立ち向かい、虚しくも散っていった、誇り高き馬鹿。

自分が受ける筈だった攻撃を代わりに受け……叶う筈の無い願いを、笑いながら夢見て消えていった、変わった少女。

それを思い出し……よりいっそう、涙を流す。

ふと、机に立て掛けられてある写真が目に映った。

自宅の前で、四人が立っている。……小野川が怒ったようにまくし立て、渉がソレを爽やかな笑みで毒づき、悠樹は欝陶しそうにソレを眺め、霞河は笑いながら傍観。

一見すると最悪の写真。だが、見直すと、彼……悠樹にとっては、最高の一枚に見えた。

それぞれの個性が、その一枚に良く現れているのだから。

（あの頃は……まだ、幸せだったのかな……。）

数分後。

自身の高ぶった気持ちも収まり、悠樹は夕食にありついている。光が調達した食料で、カレーライスを作ったらしい。

「いっただっきまーす！」と元気に言って光は食べ、苦笑いしながら悠樹は食す。ディーアはイマジンだからか、カレーも普通に食べている。……唯一、翔炎はソレを黙ってみていたのだが。

だが、そんな明るい雰囲気は、一瞬で崩れ去った。

何故なら、直ぐ近くから……爆音が響いたからだ。

「……っ!?まさか、奴等……!?光、此処でおとなしくしてろ!行くぞ、翔炎、ディーア!」

『おう!』

「っしゃあ!」

そう言って三人……いや、一人と一体と一匹は、外へと向かった。

……だが、

「お兄ちゃん……。」

普段は「頑張って!」と見送る光も、この時は何故か不安になった。悠樹と、もう二度と会えないかのような気がしてならなかった……。

「コレは……マズイだろ……。」

嘆いたのは、悠樹。いや、翔炎もディーアも、そう思っているだろう。

眼前には、周囲を埋め尽くすかのように……ガルドが群がっていた。

その数は……はたして数えられるのか。

「コレが……本当に最後の戦いになる、か？」

『悠樹……最後まで付き合うぜ？』

「アタイは……光に触れようとする奴を、ぶった切る！」

彼等は言い放ち……悠樹は翔炎をベルトに変え、ソウルチップをセット。ディーアもベルトを腰に巻いた。

『Ｓｙｓｔｅｍ　Ｌｏａｄｉｎｇ……Ｓｔａｎｄｂｙ』

「「変身！！」」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

『Ｌｕｃｉｆｅｒ－Ｆｏｒｍ』

悠樹は、炎を司る戦士……烈火へ。

ディーアは、未だ名も無き仮面ライダーへと変身した。

「さぁ……開戦だ……！！」

この言葉は……悠樹の癖だ。確か、初めて変身した時も、無意識に口走っていた。

この言葉を言うと……どんな敵でも倒せる気がする。そんな根拠の無い思いが駆け巡るが……今まで、この言葉を言って負けた事など無かった。

今度は……光という「家族」を守る。
そう誓い、眼前にいる無数のガルドを見据えた。

外から何回も爆音が響く。その度に、光はビクッと震える。
二人は大丈夫なのだろうか……？
ただ、不安が募るばかりだった。

そんな時、

「うわぁっ！？」

壁を突き破って……ディーアが、外から光のいる部屋へと突っ込んで来た。

「ディ、ディーア！？」

「いっつつ……って光！？怪我は無いのかい！？」

「え、な、無いけど……ってディーア！？あなたは！？」

「アタイは全然へい……っ！！」

言いかけたディーアだが、目の前の光景に表情を固くする。そんな彼女等を目に付けたか、何体かのガルドが部屋に入って来た。

「テメェ等……光には触れさせねぇ！！」

『Ｆｕｌｌ－Ｃｈａｒｇｅ』

ディーアはパスをベルトに翳す。刹那、ディーアの持つ大鎌がエネルギーによって巨大化。

「だぁりゃぁあぁぁっ！！」

そのまま、数体のガルドを切り裂いた。
勿論必殺技に耐えられる訳が無く、ガルドはそのまま爆散したのだが。

「はあ、はあ……数が、多いっ……！！」

「ディーア……。」

その様子を、光はただ見る事しか出来ない。
何故？いつもだったら、自分も何かを手伝っていただろうに……。

『Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｃｃａ』

上空から、炎が舞い散る。ガルドがいた場所から赤い斬激が容赦無く振り放たれ、ガルドはもがき苦しみ、爆発する。

飛翔形態となっていた悠樹だが……長期戦に疲れが見え始めて来た。
その姿を、元の通常形態へと戻したのだから。

「クソッ……数が、多過ぎる……。」

『悠樹……どうせ死ぬなら、コレを使うか……？』

「……え？」

翔炎が言った瞬間、悠樹の目の前に……何かのチップが浮遊していた。
雰囲気的にオーバードライブチップに近いかもしれないが……色が、紅い。

「……コレ、は……？」

『烈火の……本当の力を引き出す、禁断のチップ。この力を、本当の意味で使いこなせていたのは……初代烈火、俺の祖先の精霊とその適合者だ。』

「……それ以外は？」

『何代か前は多少使えていたが……それ以外は、その膨大なエネルギーに耐えられず……死んだ。』

死んだ。だが、その言葉に今更驚く悠樹では無かった。
今までに、多くの「死」を見て来たのだから。

「確かに……このままいても、無駄死にだな……。」

そう、こうして会話している間にも、大量のガルドが悠樹を囲んでいた。
一体何故、この世界にここまでのガルドがいるのか。それを知る者は、恐らく少ないだろう。

「なら……使ってやるよ！」

悠樹は……そのチップを手にし、バックルに……セットした。

『Ｆｕｌｌ　Ｍｅｍｏｒｙ　Ｌｏａｄ　Ｓｔａｎｄｂｙ』

「あぁぁぁあぁぁぁっっ！！！」

電子音声が響いた刹那、悠樹は苦しみ始め……炎、いや、烈火という表現が正しいか……ともかく、凄まじい勢いの炎が悠樹を包んだ。勢いが凄まじい為、よく目を凝らさないと分からないが……炎の中で、悠樹の……烈火の姿が変化している。

『Ｍａｓｋｅｄ　Ｒｉｄｅｒ　Ｒｅｃｃａ……Ｅｖｏｌｕｔｉｏｎ』

再び発声音が響くと同時に……烈火は、炎を振り払う。
だが、その姿の烈火を垣間見る前に……悠樹は、目の前にまたもや浮遊しているチップを……掴んでいた。

『Ｌａｓｔ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｃｃａ』

熱が頬を撫でる。火花が散り、辺りを物を燃やす。
ディーアに庇ってもらっていた刹那……視界が、炎しか見えなくなった。それは、どうやらディーアも同じみたいだ。

「な……なんだい、コレは!?光、大丈夫かい!?」

「ディーア……うん、平気。」

しかし、もう一人の安否が気になる。自身を拾い、家族として認めてくれた……兄のような存在が。

「お兄、ちゃん……?」

気が付くと、炎は消えていた。……所々、先程の炎の影響で多少燃えてはいたが。
穴の開いた壁から、よく見ると……何かが、浮いている。しかしソレは、力尽きたかのように……地面へと、落ちた。

「……お兄ちゃん!!」

光は直感的にアレは「波賀悠樹」と判断。靴も履かずにアパートを飛び出し、悠樹が倒れたであろう場所へ走っていた。

その走る勢いは止まらない。いくら足が擦り切れようと、何度転ん

でも、未だ残っている炎に足を焼かれようと。
その足は、真っ直ぐ悠樹へと向かっていた。

「お兄ちゃん！」

まるで天を仰ぐかのように、悠樹は倒れていた。
変身は解けているが……何故だろうか、翔炎の姿が見当たらない。

「お兄ちゃん！」

「光……まだ早い！！」

「……え？」

刹那。
ディーアが光を庇い……倒れ込んでいた。
遠くに目を凝らすと……まだ、沢山のガルドがいる。その内の誰かが、狙い撃ちをしたのだろう。

悠樹の決死の攻撃は……完全にガルドを根絶やしにするまでには、至らなかった。
そして……戦う筈の二人は、立ち上がる事が出来ない。

「そんな……。」

「ひか、り……に、逃げ……ろ。」

息も絶え絶えに、悠樹は光に逃げようと諭す。
こんな状態になっても、悠樹は光を逃がそうとしている。絶望しか感じなかった彼が、何を感じたかは……誰も知らないが。

光は、悠樹と変身が解けているディーアを、交互に見る。
何も出来ない自分を……何時も守ってくれた二人。

自分は見ているだけだった……いや、甘えていただけなのかもしれない。

だから……、

「だから……私が、戦う！！」

そう言い放ち、光は……ディーアが付けていたベルトを、腰に巻いた。

「……っ！？ひ、ひか……り……！？」

「な、何やってんだ！それは、特異点にしか……っくっ！？」

苦しみながらも、彼等は光を止めようとする。
出来る訳が無い。出来たとしても、勝てる訳が無い。
出来る事なら、最後まで希望を持って逃げてほしかったのだが……

「変身！！」

『Ｓｅｒａｐｈｉｍ－Ｆｏｒｍ』

「「！？」」

本当に……変身、した。

今の彼女は……ディーアが変身するライダーとは対照的。白いスーツに金色の鎧。どこと無く……天使を連想させる姿。

「……あなた達は……許さない……。」

……何時もの彼女だったらありえない、怒りに満ちた声で話す。

その声はよく響き……満身創痍の悠樹の耳にも届いた程。

「お兄ちゃんも……ディーアも……舞お姉ちゃんも渉お兄ちゃんも海斗お兄ちゃんも、みんな、皆……傷付けたあなた達は……たとえ神様が許しても……私が許さない！！」

『Ｆｕｌｌ－Ｃｈａｒｇｅ』

光がパスをベルトに翳した……刹那、背中から白い……天使の翼とも言えるソレが開く。

そして、腰に付けてあるツールを組み立て、レイピアのような武器

に変え……

「やぁぁあぁぁぁっ！！」

ガルドの大群へと、突っ込んだ……。

「……ネガの世界の精霊が、全て消滅だと！？」

何処かの世界の研究所……その研究所に設置されているカプセルの中には、全て黒い異形が浮かんでいる。恐らく……ガルド。

一瞬で此処は、大ショッカーに関係する研究所、だという事が分かる。

その中にいる一人の男……大ショッカー元幹部ハイドは、黒いタイツを着た男達……ショッカー戦闘員と呼ばれる異形（？）の報告に驚愕していた。

「チッ、奴らめ……表の世界の様子が、どうやら分かるようだな……。フン、所詮はただの分身……この最高傑作には役にも立たないか。」

そう言って、カプセルに入っている一体のガルドを眺める。

だが……そのガルドだけ、他のガルドにはない異様な雰囲気が包んでいた。

「精霊の細胞だけでは、すぐに時間切れか……。やはり、精霊そのものを取り込まないと……コレはどうにもならないみたいだな……。コレではまだ、最高傑作には程遠い。」

そう呟いて、ハイドは先程から待機していたショッカー戦闘員に言い放った。

「もう一人のアギトとサイガに伝えてくれ。雇ったとは言っても、使わないと無駄遣いだからな……。近い内に奴らを襲撃する、と。あぁ、お前等も準備しておけ。」

「イーッ！」

ショッカー戦闘員の代表者らしき者が声を上げ、ササッと退散していく。

（あのネガの世界は……もう終わったな。裏切ったディアボロスも……ネガの世界で消え去るだろう。私にとって邪魔な奴は消えるのだから……まあ、よしとするか。）

ニヤリと笑いつつ、最高傑作の入ったカプセルを愛おしそうに見つめた。

そんな様子を眺めていたかのように……ハイドの言う最高傑作が、わずかながら動き始めた……。

「はぁ……はぁ……。」

決死の覚悟で、フルチャージアタックを発動させた光。今更ながら、自分が変身出来た事に驚いていたが……それを勝る思いが、彼女の中で渦巻いていた。

遂に……本当に遂に、ガルドを倒した。

それが分かると……力尽きたように膝を着く。そして、変身解除。

「やった……ガルドを……ガルドを、倒した、ん……だ……。」

そう疲れ切った声で、意識を失った光。

今まで自分達を苦しめた元凶を倒した達成感、開放感と共に、同時に溜まりに溜まっていた疲れが爆発したか。まるで死んでいるかのように、静かに寝息をたてている。

だが……

（ガルドを倒しても……世界の崩壊は止まらない、か……。）

悠樹が心の中で嘆くとほぼ同時に、遠くから町が……砂になるように消滅している。

ガルドによる殺戮、破壊活動により、この世界ももたなかったのだろう。

（間に合わなかった、のか……。）

気付いたら、ディーアも光に寄り添うように気絶している。

恐らく……この世界で未だ生き残っているのは、此処の三人だけだろう。

（このまま黙って起こさにゃ……苦しみなんて味わず、静かに死んでいくな……。）

そう思った刹那……何処からか、燃えている「何か」がヒラヒラと悠樹の近くに落ちてきた。

（……！！コレって……。）

その「何か」は……大分燃えていてよく分からなかったが、ソレは……悠樹を含めた四人が、かなり頑張った末に撮る事に成功した写真だった。

（あの部屋、穴が空いてたから……風に煽られたか？）

その燃えていく写真と……光やディーアと交互に見やる内に……段々と、悲しい気分に浸っていく。

翔炎の言う通り……この世界には、希望など無い事を。

（結局……このネガの世界ってのは……何もかもを奪っていくのかよ……。）

そして再び……いや、「最後に」光とディーアを眺め……現実的に叶う筈の無い願いを、心の中でポツリと呟いた。

（神様……ってのが本当にいるんだったら、せめて……あの二人は助けてやってくれよ。少しの間……俺達に「光」を与えてくれた、俺にとっての「メシア」に……。）

そして……傍らの写真が完全に燃え尽きたと共に、悠樹の意識も……完全に、遠退いた。

数分後、この「ネガの世界」は消滅した。
この世界に存在する物全てを、道連れにして。

誰も知る筈が無い。
この「ネガの世界」の消滅によって、ある「表の世界」が、混乱に陥るなど。

―これは無数に存在する、一つの世界の結末―

第三十九話：久々の集合、狙うは奪還（前書き）

先に謝っておきます。申し訳ありません（土下座）

この一話で異世界移動編を終わらせたかったのですが……思いの外、かなり長くなってしまった為、前後編に分けます。

とゆー訳で、数分後には後編的な話を投稿する……と、思います。

……なんだかダラダラと申し訳ありません。

第三十九話：久々の集合、狙うは奪還

例の銀……いや、灰色のオーロラを通過すると、見慣れない場所へとやってきた。
暗くてよく分からないけど……多分、どこぞの研究施設。

……ただの研究施設じゃ無いんだろうけど。
ちなみに、灰色のオーロラはすぐに消滅した。

……さて、ここからどうするか。
右も左も分からないこの状況。で、今の姿は鬼である歌舞鬼。勿論、変身を解いたら大変な事になる。

「……帰りてぇ……。」

ゴメン、コレ心からの一言。
正月の始まりから……あんな出来事があってたまるかっての。まだ参拝もしてねぇってのに。

他三人は……無事なのか？
……いや、小野川はどーでも良いや。

とか何とか、考え事をしてた刹那……コツ、コツという足音が響く。

「クク……やはりやって来たか、朱雀の適合者。」

暗くてよく見えなかったが……部屋の奥から、この現状の張本人である……あの科学者ヤローが現れた。
……こんな時にノコノコと現れやがって……なら、音叉剣で……！

「……翔炎を返せテメェッ！」

その音叉剣を奴に振るった筈……だが、

「ハッハァ！」

「なっ！？」

何時からいたのか……先程科学者の近くにいた白いライダーが、青いトンファーのような武器で音叉剣の攻撃を受け止めていた。

コイツ……強い……！

「クク……慌てるな……まずは自己紹介にしようか。……私の名はハイド。よろしく。」

「……三秒で忘れておこう。」

「ククク……面白いな……まぁ聞きたまえ、私の目的を……サイガ。」

サイガ、と言うらしいライダーを下がらせ、目の前……つまりは俺を見据えていた。

「私は大ショッカー元幹部。それは今でも変わらない。だからこそ、ライダーを全滅させる為に行動している。」

「それは前にも聞いたな。……だからこそ、お前を倒して、翔炎を返してもらう。」

「まぁ聞け……私は君、いや、君達以上に良い手札が揃っているのさ。」

……何だと?

ハッタリだ、と思っても……奴の不敵な笑みが、その想像をどうしても打ち消してしまう。

……動揺してるのがばれちまうな……極力平静を装うか。

「だったら、それを全てブッ潰す。手札なんて見る必要も無いな。

……いつかの平和だった日常を、取り戻してみせる。」

「クク……なら、その平和な日常を献上しよう、と言ったら?」

「ッ!?」

意味が分からない。

何が言いたいんだ?コイツは何をしたいんだ?

……疑問しか浮かばない。

「君達がライダーになる為の<精霊>……それを私に譲ってくれたら、君の住む世界への攻撃は止めよう。今後も一切干渉しない。……どうだ?良い条件だろう。」

良い……条件?

どこがだ?そんな事でなんになる?

無意識の内に、音激棒「烈翠」をにぎりしめていたが……それに気付いたか、奴はますます不気味な笑みを浮かべた。

「……私が何故精霊を狙っているのか、知っているか?」

急に話を切り出しやがった。
知りたくも無いが……奴は淡々と話を続ける。

「一時は大ショッカーの為に、精霊を殲滅しようとしたが……ある研究の末、私の実験体と精霊の力を合わせると、凄まじいエネルギーを持った生命体が生まれる事が分かったのさ。仮面ライダーの力を擬似的に引き出す生命体を、な……。」

ここまで話し切った後……悔しそうに顔を歪めた。

「私はその最高の生命体を作り出したかった……。だが……今まで消した精霊のＤＮＡだけでは、最高には至らなかった。そこで、ある仮説が出たのさ。」

そして、楽しそうな……いや、ワクワクしているような表情を浮かべ、俺を指差した。

「君……いや、君達の持つ精霊そのものを取り込めば、完全無敵の生命体が生まれるのではないか？とね……。」

ククククッ、と不気味な笑い声を上げ、濁り切った目で俺を見つめる。まるで、俺の答えを待っているかのように。

……だがな。

「断る。」

「……何？」

「お前のくだらない欲求の為に、これ以上犠牲を増やすなんて嫌だ

な。……最初こそは、口煩い焼鳥ヤローだと思ってたけど……一緒にいた時間が長すぎたな。お前のような奴なんかに、精霊……いや、相棒は渡さねぇよ。」

それが、俺の答え。

翔炎のせいで生活は大幅に変わったけど……その分、アイツのお陰で世話になった事もあるし、アイツがいない生活なんて……慣れきった今だと、考えられない。

その答えに……さも残念そうに溜め息をつき、奴は……言い放った。

「ならば……此処が君の墓場だ。」

「Ｅｎｊｏｙ！Ｍａｓｋｅｄ　ｒｉｄｅｒ　ＫＡＢＵＫＩ！」

ハイドは奥の扉へと入って行き……近くにいたサイガが立ち塞がった。

……マズイ。これは非常にマズイ。

歌舞鬼の要の音撃鼓……牛鬼との戦闘で使ったから、必殺技が使えねぇ……。

うわ、こりゃヤバイ。今更気付いても……無理無理、絶対無理。

アイツも……実力はかなりの物っぽいから、尚更ヤバイよ……どうすんの？

とか何とか、思っていたら、

「……おっ、これはナイスタイミング？いや……ある意味バッドタイミング？」

「どっちでも良いさ。僕は、お宝が手に入れば何だって良い。」

唐突に灰色のオーロラが現出。そこから、二人の男が現れた。
一人は……年齢は２０位か。オレンジ色の服に、長い前髪……うわ、うまく目が見えん。だけど、アイツ自身は見えてるらしいな。普通にビデオカメラ構えて、俺映してるし。

……って待てや。
何なんだアイツ。いきなり灰色のオーロラからって……怪しさ全開じゃねぇか。

そして、もう一人は……何でや。何で泥棒……じゃない、怪盗が……

海東大樹が何故、此処にいるんだ。
いや、どうせまた「お宝」だろう。というか、俺のいた世界ではお宝は見つかったのか？
だが、そんな事を考える前に……海東さんに、驚きつつも声を掛けていた。

「……海東さん！？」

「やあ、少年君。久しぶり。突然だけど、手伝いに来たよ。」

海東さんの言う事も驚きだが……もう一人の奴も意味の分からん事

を言ってきやがった。

「えーと……君が朱雀の適合者だよね？今は歌舞鬼だけど……まぁ良いや。取りあえず、ハイドって奴を追って。精霊を助けるにしろ助けないにしろ、奴は危ない。」

……いきなり何言ってんだコイツ！？いや、お前も充分危ないって！

「さ、行こうか少年君。此処は彼に任せて。」

「……僕の事を知るのはまだ早い。それより、早く追わないと……手遅れになる。」

「……ッ！？よく分かんねぇけど、今度会ったら詳しく話せ！」

手遅れ……は流石にマズイ。そう頭で反復し、奴が入った扉へと向かおうとするが……

「あ、ちょっと待って。」

「……どっちだよもう。」

海東さんの一言で足を止める。何をやってるんだ……と思い、後ろを見ると……海東さんは男に手を出している。何かをよこせ、と言わんばかりに。

「……この手は何？」

「前払いだ。君達のカードはレアモノだから、すぐにでも欲しいんだ。」

「……ちゃんと行動してよ、頼むから。」

呆れたように男は、海東さんに一枚のカードを渡す。柄はよく見えなかったけど……多分、海東さんや士が使うカードと同じ種類のソレだった気がする。ソレを手にした海東さんは、新しいオモチャを買ってもらった子供のような表情をしていたが……こちらを見るなり、表情が険しくなる。

……いや、どうしたのさ、一体？

「……時に少年君、後ろには注意したまえ。」

「……は？」

と、自分でも情けない声を上げると同時に、背後を見ると、

「Ｇｏ　ｔｏ　ｈｅａｖｅｎ！」

という声と共に、後ろから青い光弾が俺に向かってくる。

……しまった！サイガの存在すっかり忘れてた！

当たる……と覚悟していたが。

「Ｔｈｒｅｅ、ｅｉｇｈｔ、ｔｗｏ、ｏｎｅ！」

『ＪＥＴ　ＳＬＩＧＥＲ－ＣＯＭＥ　ＣＬＯＳＥＲ』

どこかで聞いたような音質の発声音が響き……気が付いたら、ゴツイバイクが、光弾を防いでいた。

「……Ｗｈａｔ!?Ｊｅｔ　Ｓｒｉｇｅｒ!?」

サイガが、さも驚いたように叫ぶが……今がチャンス。
あの男の正体は気になるけど……今俺がやるべき事をするんだ。
そう改めて決心して、海東さんと供に扉をくぐった。

走り去った悠樹と海東の足音も、段々と遠ざかっている。
サイガも諦めたのか、第二の標的を見据えていた。
……自身の知らない存在が、自身の知っているマシンを使用したのだから。

「Ａｒｅ　ｙｏｕ……ＤＥＬＴＡ?」

「デルタ……とはちょっと違うな。まぁ僕は、オリジナルのデルタ……三原修二から生まれたような感じだけどね。」

そう言いながら、男は何処からかベルトを取り出して腰に巻く。そして、手に持つビデオカメラを、ベルトの右側にセット。さらに、オレンジ色のグリップを取り出して構えた。

それは……色は違えど、サイガにとっては見覚えがある物らしい。
焦ったような声で問い掛けた。

「Ｗｈｏ　ａｒｅ　ｙｏｕ!?」

「僕?僕は……＜原離者＞の一人、シュウ。またの名を……仮面ライダーユプス。」

「……ＹＵＰＵＳ?」

「そ、ユプスさ……変身。」

『ＳＴＡＮＤＩＮＧ　ＢＹ－ＣＯＭＰＬＥＴＥ』

電子音声が響き、グリップを……ベルトに取り付けたビデオカメラにセットした刹那、男……シュウの姿が変わった。

黒いスーツに、体中に張り巡らされているオレンジ色のライン。そして、ギリシャ文字「Ｙ（ユプシロン）」を連想させる仮面。

この姿こそが、シュウの言った……仮面ライダーユプスらしい。

「Ｓｔａｇｅ　ｏｐｅｎ!舞台裏のカメラマンの実力……なめない方が良いよ……?」

困った。その一言に尽きる。
あの後、扉を抜けたのは良いんだ。そこは良いんだようん。

問題はその次。
唐突にガルドが至る所から出て来て襲って来るわ来るわ。逆に多過ぎて、気持ち悪いったらありゃしない。

……いつかの士が来た時も多かったよな、確か。いつの間にか変身したであろうディエンド……海東さんは、「兵隊さん」と称して一枚のカードで三人のライダーを召喚し、対応している。
今更だけど……ライダーを召喚って、反則じゃね？

「ニャァァアッ！！」

「！！」

うわやべ油断した！まさか背後から攻撃仕掛けてくるとは！
あの姿形は……ネコ？名付けるなら、ガルド・キャットってトコか。
……って何暢気に考えてんだ俺！？攻撃を避けられないからって開き直ったか！？

『ＲＩＤＥＲ　ＳＴＩＮＧ』

……って、え？
なんか電子音声が響いたと思ったら、急にガルド・キャットが爆散。
それだけじゃなくて……なんかどんどん、ガルドが爆発している…
…うわ、結構減ったな。コレは……海東さんでもない、な。

一体誰が……？と思ったが、その誰かに関係しているであろう発声音が響いた。

『ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ』

そこには……黄色い蜂のような戦士。至ってシンプルなベルトだけど……左腕には、これまた機械的な蜂が留まっている。

「……仮面ライダーザビー、か。」

多少離れてはいるけど、蜂ライダーの姿を確認したのだろう。海東さんの呟きから……あの蜂ライダーはザビーって名前だって事は分かったけど……何者なんだろ、コイツ？
そしてその蜂は、俺の姿を見るなり……警戒してきた。

「……鬼？まさか、大ショッカーの一味！？」

「ちょ、待てそこの蜂ヤロー！俺を大ショッカーなんかと一緒にすんな！」

「……って、え？その声……悠樹、君？」

「……へ？」

……そーいやこの声って……どっかで聞いた事……まさか！？

「霞河！？」

「あ、やっぱ悠樹君だー。」

アイツも何かあったらしい。別のライダーに変身しているなんてなーコイツも。

「……にしても悠樹君、何でそんな派手な格好をしてる訳？」

「俺だって好きで変身してる訳じゃないの、蜂ヤロー。」

「蜂ヤローじゃない！女王蜂様とお呼び！」

「……言い方の問題かよ。てか、キャラ変わってんぞオイ。」

そんなミニコントをかまして……未だ周囲にいるガルドを見据えた。

……で、まだまだわんさかいるけど……一体奴は何処へ行った？

まあ、今のこの状況……まずはガルドを倒した方が良いだろうな……。

『イ・ク・サ・カ・リ・バ・ー・ラ・イ・ズ・アッ・プ』

……って何じゃい。

なんかまた電子音声が聞こえたら……白いライダーが、炎を纏った剣を奮ってガルドを倒している。

……あのフォルムのライダーも見た事無いなー。仮面ライダーって、どんだけ種類ある訳？

……っと、あらかた倒した白いライダーは、何故かこちらに歩み寄っている。

……俺達も一応ライダーだから、何かしらのコンタクトを取ろうとしてるのかもしれないけど。

「あの、すみません。さっき、青い亀を担いだ黒タイツのオッサン達を見ませんでしたか？」

「……ハイ？」

……イキナリ何言ってんだコイツ。霞河なんて素っ頓狂な声出したぞオイ。

なんじゃい青い亀って。何だべさ黒タイツのオッサン達って。アレか？レアい亀ゲットした怪しいオッサン方を追っています的なアレか？

渉がいたら、なんか毒舌で攻撃するだろうな……。

……って待てや俺。

渉？え、さっきの声渉？

青い亀って？青い亀って……え、氷甲？

しまいにゃ黒タイツのオッサン？……は知らねぇや。

よく分かんないけど……コイツ……まさか、渉？

「えーと……黒タイツのオッサン達には私も用があるんですけど……。」

ぅおい霞河！？その相手渉！渉だから！てか気付け！そして何でお前も黒タイツのオッサン達をご存知！？

「あ、奇遇ですね。僕は仲間を連れ去られちゃって……。」

「あー私もなんですよ。気が付いたら＜イーッ！＞って言いながら逃げてて……。」

「あーやっぱり？」

何ほのぼのとしてんだお前等ぁぁぁっっ！？

気付けよ！いい加減気付こうよ！相手知人だからねオイ！てか「イーッ」て！気ィ抜けるわコノヤロー！そんな奴らに精霊拉致られたのかお前等！？

「じゃ、一緒に探しましょうかー。」

「そうしましょうかー。」

「気付きやがれボケ野郎供！！」

「「痛いッ！？」」

取りあえず二人の後頭部にげんこつをかました。

痛そうに二人は頭を摩り……恨めしそうな雰囲気を醸し出しつつ、こちらを睨んでいるっぽい。

「……いや、実は気付いてたんだよ、悠樹君？」

……は？

……何だって？

「そりゃ、声から気付くってー波賀君。舞さんはともかく、鬼さんは誰だろーと思ったけど……雰囲気から波賀君だと思った。」

「……なんで雰囲気なんや。」

「何年君の親友だと思ってる訳？」

あっけらかんと言い放つ渉。……だったら霞河も悪ノリすんなや。

「……で、秋元君が来た道も違うって事は……。」

「あぁ、この道だね。」

一応、分かれ道があったんだ、俺達から来た方向から見ると。

ただ、一方は渉が来たから……多分、奴が行った道は、もう片方。

……ソレは分かったのだが、突然海東さんがこっちに来たから、二人がビックリして話がまた逸れた。

「……え!？海東さん!？」

「一体、どうして此処に……!？」

「お宝がある場所に僕はいる。そのお宝は手に入ったけど……持っていた彼から、君達が自身の世界に戻るまで君達を護れって頼まれているからね。」

……いや、色々ツッコミ所満載のセリフだったけど……中でも、気になった事が一つある。

「……護れって、どういう意味だ？少なくとも俺は、あの男を知らない。」

「彼も言っていただろう。＜知るのはまだ早い＞ってね。」

ソレを言われても……気になってしまうのが人間だ。早く知りたい……とは思ったが、渉がソレより話を早く切り出した。

「気になるけど……それはまた後で良いと思う。で、なんで急いでたの二人とも？」

「あ、実はかくかくしかじか……。」

「……成る程、じゃあ、あの科学者的な人は向こうだね。こっちにはガルドしかいなかったし。」

「今ので伝わったんかお前等！？なんかもう何でもアリだなオイ！？」

渉の言う事も尤もだったから、話題を変えても文句は言わなかったけど……霞河、その説明は無いだろう。そして渉、ソレで納得するな。

だが、俺の全力のツッコミも無視され、あの二人は気にせず先へと進む。

……俺、いなくても別に大丈夫じゃね？

そうは思いつつも、やはり後をそそくさと追うのだが。

朱雀族の精霊、翔炎……つまりは俺だな、は……嫌な夢を見ていた。
波賀と、いつも通りにガルドと戦っているんだが……いつの間にか、ガルドが大量に出現。
渉、舞、海斗の三人は、ソイツらに次々と殺されていって……遂には、俺達まで死んじまうっつー、悪夢とも言える内容。
確か死ぬ前に、天使のような奴がガルドを全て倒していたが……何せ、夢は夢。覚えている筈が無い。

そんな為、寝起きで寝ぼけてるのかと思ったが……どうやらそうでもないらしい。スマン、ちょっと叫ばせてくれ。

『……此処、何処だぁぁぁッ！？』

朱雀族の精霊、翔炎……イコール俺は、謎のカプセルに閉じ込められていた。

……よし、冷静モード終了。テンパりモードへ移行する。

……うわ、何処だ、此処。あの科学者……ハイドと言ってた気がするが……に、拉致られて……何かされて……そっからの記憶が無い。
分かる事は……此処は「響鬼の世界」でも俺達が仮に住んでる……まあ所謂「烈火の世界」でもない。

……捕獲された哀れな鳥だな、みたいな事を考えたそこのお前、後で覚えてろ。

「……ククク……目覚めたようだね、朱雀……。」

『……お前は……！！』

そんな時……何処からか、ハイドとかいう大ショッカーの幹部が現れた。

遂に御登場か……あの野郎……！！

『色々と聞きたい事があるが……何故……何故、俺達精霊を狙う！？』

「何度同じ説明をすれば分かるんだい？全ては、私の為さ。」

『くだらない目的の為に……これ以上の犠牲を増やすな！！』

「くだらない、か。……ふう、何故誰も共感出来ないんだ……まぁ、何を言っても無駄だ。もう誰にも止められない。」

そう言い切り、見る者を凍り付かせるような鋭い目で……俺を睨む。その後言い放たれた……ある単語が、とても衝撃的だったのだが。

「麒麟も目覚めたら……たとえ君達が逃げ切っても、全世界は終わりだ。」

『き、麒麟だと！？あの、伝説の……馬鹿な、夢物語だった筈だ！！』

「だが、実際に存在する。その危険な意思や世界を融合、破壊させる強大な力故、初代の精霊や適合者、終いには当時のオリジナルから最も離れた紛い物供に封印された……伝説の精霊。ソレを、私が

目覚めさせた。」

『そんな奴を……貴様ァ……！！』

「そんな＜奴＞ときたか。お前達精霊から言えば＜神＞同然の存在だというのに。」

『だからこそだ！だが……お前等の命令など、聞く筈が無いぞ！！』

「確かにそうだ。麒麟は私の言う事を無視して、何処かの世界へと消えていったからね……手なずけるのは難しそうだ。」

怒りが、収まらない。

コイツは……仮面ライダーだけではなく、人類をも滅ぼすつもりか！？

『何処までも精霊をなめやがって……！』

「なめなてなどいないさ。素晴らしい、実に素晴らしい。最高傑作の力を引き出す為の、素晴らしき実験体だ。」

……この狂乱科学者（マッドサイエンティスト）め……。

正直、生きて帰れるか分からない。この状況を、どう打破すれば……

「……あぁ、言い忘れてた。君以外の三体も既に捕獲済だ。」

『何ィッ！？』

俺が叫ぶとほぼ同時に、俺の頭上から同じカプセルが出て来て、俺の横に配置される。

その中には。

『まさか、大ショッカーに捕らえられるとは……。』

『テメェッ、コレどうにかしろっ！！あの真っ黒野郎に制裁を加えてやる！！』

『……。』

風牙、爪雷、氷甲が俺と同じ状況に陥っていた。

……どうすりゃ良いんだ、一体！？

「……とは言っても、騒がれてはたまらない。君達には少し、眠ってもらおうか。」

奴が言い放った途端、かなりの眠気が俺達を襲い……意識が、遠退いた。

四体の精霊が並べられると、大ショッカー元幹部……ハイドは、不気味に笑う。

コレで、全世界の仮面ライダーを滅ぼす為に一歩前進した。

最高傑作に精霊達を取り込ませれば……もしかしたら、麒麟をも超

えるかもしれない。

失敗したら、上手く麒麟を利用するか……。

と、不気味に笑っていた、刹那。

「……とっとと例の物を……渡してもらおうか。」

キィィン、という耳が痛くなるような音と共に、目の前の機材から……一人のライダーが現れた。

黒スーツと装甲で覆った龍騎士。暗黒龍ドラグブラッカーというミラーモンスターと契約した、ミラーワールドで唯一時間制限の無い「ミラーワールドの仮面ライダー」。名を、リュウガと言った。

「おや、城土君……早かったねぇ。双子の弟さんは？」

「逃げられた……話を逸らすな。例の物を返してもらおう……俺達は急いでいるんだ。」

「そうそう、城土君の言う通り。」

そこに、別の男の声が響く。

何処からともなく現れたのは、ギリシャ文字の「Ω」をモチーフにしたライダー。

黒いスーツに張り巡らされた金色のラインが特徴。とある「ファイズの世界」が作り出したギアシステムの中で、最高スペックを誇る＜地の帝王＞の異名を持つライダー……オーガ。

「騎馬君か。君には……ファイズブラスターが無くても、充分強い

じゃないか。」

「いやー、鬼に金棒って奴だよ。それにホラ、コレだって手に入れたんだし……返してくれるよね？」

何か良い事があったのか、楽しそうに話すオーガ。だが、ソレが彼を不気味さを引き立てる。

そんな彼が何処からか出したのは……「キバの世界」で強奪した、アークキバット。

だが、アークキバットも黙ってはいない。バッサバッサと羽を動かし、脱出を試みる。

「ねぇねぇ、放してよ～！」

「うるさいなぁ……。」

「！？」

だが、それは叶わない。

オーガがグッと力を入れた瞬間……アークキバットにヒビが入る。

その動かなくなったアークキバットを……ハイドは何の感情も無く見つめる。

「……ソレは、私が直すんだよ？」

「良いじゃん良いじゃん。いやー、手に入っただけでもありがたいと思ってよ。危うく破壊される所だったのに。」

「……半分、君が殺したような感じですよね。」

「アレ、日下部君？いたんだ。」

……そんな中、再び黒いライダーがスタスタと現れる。物腰は丁寧だが、纏っている雰囲気は……どことなく、オーガに近い印象だ。黒い装甲に施された赤い何かの痕。黄色い複眼が特徴的な、カブトムシ型の仮面。

「カブトの世界」で作られたマスクドライダーシステム＜カブト＞のプロトタイプで、その配色から……ダークカブトと呼ばれている。

「天堂ソウジ……流石に、どの世界でもカブトはそこそこ強いですね。おかげで、多くの時間稼ぎが出来ましたが。」

「……そういえば日下部君、地獄兄弟の二人は？」

「……どうやら、あなたの事は最初から何も考えていなかったようですね。何処かの世界へ移動したようです。」

ソレを聞いた途端、ハイドの表情が鋭くなる。ソレを見て……ダークカブトは、仮面の下で不思議そうな顔をするのだが。

「……日下部君、君に一時ハイパーゼクターを返す。彼等を……消してくれ。」

「あ、まだ一時的ですか……残念です。しかし、彼等はオリジナルに最も近い存在です。……それでも構いませんか？」

「構わない。不安分子は徹底的に潰す。コレを成功させたら、そのままハイパーゼクターは君に返そう。」

「……って待ってよハイドさん！？」

だが、今のハイドの言葉を……別の解釈をしたのか、オーガが声を荒げる。何故だか、冷静そうに見えるリュウガも……焦っているかのように、一歩前に歩み出る。

「それって……僕にはまだアレを返してくれない訳!?」

「俺達も、仕事はやりこなした……それでも……か？」

「あぁ、まだ君達にはやってほしい仕事が沢山あるからね……それまでは返せないよ。」

「えーっ!?日下部君、ずるい!!」

「いや……私に言われましても……。」

どうやら、彼等はハイドに何かを預けているらしい。ソレを返してもらう為には、ハイドに協力をしなければならないようだが……。

まだ返してもらえないと分かった二人は残念そうにうなだれ、踵を返す。

「ちぇっ、期待してたのにさー……行こうよ、城土君。」

「……チッ……。」

二人はいつの間にか発生させたであろう銀色の幕へと入っていく。

……が、オーガは入る前に、ダークカブトを一瞥し……、

「……失敗を祈るよ。」

そう言葉を残し、リュウガに続いて入って行った。
その言葉を聞き、ハイドは苦笑いしつつダークカブトに言葉を投げかける。

「……嫌われたようだね。」

「構いませんよ。所詮彼等も……他のライダーだって、全員敵です。信じられるのは、我等ネイティブと……今の所、あなただけ。」

「成功したら……いや、ハイパーゼクターを手にしたら、私を裏切るかい？」

「さぁ……何の事でしょう？」

クスクスと笑いながら、ダークカブトは右手を上げる……と、その手には、いつの間にか銀色の機械昆虫が握られていた。
マスクドライダーシステムが使用する超高速移動「クロックアップ」以上の速さを引き出し、＜太陽の神＞＜戦いの神＞の異名を持つマスクドライダーが真の力を発揮……時や次元をも超える事ができるカブトムシ型ツール……ハイパーゼクターと呼ばれるソレを左腰にセット、ホーンを倒した。

「ハイパーキャストオフ。」

『ＨＹＰＥＲ　ＣＡＳＴ　ＯＦＦ』

少し高めの電子音声が響くと同時に、漆黒の装甲は更に強化され……角も巨大化する。
姿が強化された瞬間……いきなり周囲の機材が壊れたりするのだか

ら、その力は計り知れない。

『ＣＨＡＮＧＥ―ＨＹＰＥＲ　ＢＥＥＴＬＥ』

「では、行ってきますね。」

『ＨＹＰＥＲ　ＣＬＯＣＫ　ＵＰ』

ダークカブトはハイパーゼクターのスイッチを軽く叩き……空間を歪ませ、姿を消した。

――此処までは、計画通り。あの駒達が上手く動けば、更に計画が進行する。

ククク、とまたもや不気味な笑い声を上げつつ、ハイドは見上げる。

――精霊も全て手中に収めた。この力で仮面ライダーは滅び……

「……私が大ショッカーに代わり、全パラレルワールドを支配する……！！」

その時のハイドの表情は、狂喜そのもの。彼が言う駒達にも、最高傑作にも見せなかった、真の顔。

もう奴らに勝ち目は無い。

そう思い、既に勝ち誇ったかのように彼は狂喜の笑みを浮かべていたが……刹那。

「何だ！？」

突然背後から凄まじい音と共に、何かが外れるような音。その衝撃は凄まじいのか、近くの机に置いてある資料もろもろが散らばっていく。

ハイドが振り返り、視界に入ったのは。

他の部屋以上に強度が高い扉が、中を舞っている様。

「……は？」

彼が今の状況を理解する前に、

「ぐふっ！？」

そのでかく硬い扉の、下敷きになっていた。

第四十話：感じるは不安だけ（前書き）

取りあえず申し上げますが、本日投稿したのは三十九話が先です。
未読で興味のある方は、そちらからどうぞ。

第四十話：感じるは不安だけ

無数の平行世界の中でも辺境とも言える場所に位置する、どこと無く異様なとある世界。
そこで見渡せるのは、森や草原。緑が多く、空気も清んでいそうな場所。近くには湖も見られる。
更に遠くには、太陽の光で輝く海が。どこまでも広がっているその勇姿は、「母なる海」という言葉に相応しい。

そんな大自然の中、不釣り合いな建物が建っている。公立の中学校くらいの広さだが、学校というより、何かの施設のような建物。

この世界に存在するのは、それだけ。
それ以外の建物は……何一つ、存在しない。だからこそ、異様に感じてしまう。

先程の施設……その一室……というより小部屋にて、一人の少女がベットに横たわっていた。スヤスヤと、気持ちよさそうに眠っている。
近くでソレを見ているのは……黒い、異形。悪魔のような姿をしているが……その異形の瞳には、悪意といった物は無い。むしろ、少女を守ろうとする強い信念が見て取れる。

「……よく寝てるなぁ、〝光〟は。」

異形は、記憶を辿っていた。
何故自分は此処にいるのか。どういう状況に陥っているのか。

全世界を征服するという組織を裏切り、この少女と”契約”。少女とその仲間を護る為に戦い続けたが……最終的に、少女の世界は消滅した。

なのに。

「……アタイ達は、何故生きているんだ……？」

浮かぶのは、一つの疑問。恐らくこの異形と少女は、確実に死ぬ筈だった状況に陥った事があるのだろう。夢、という解釈も出来るが……生憎、この場所や個室さえも知らない。

おぼろげに覚えているのは……数人の集団。その中でも一際目立っていたのは、全身青ずくめの青年だった気もする。

「……関係無い。」

だが、異形はソレを一蹴し……再び少女を見やる。

その目は……何かを振り切って、決意をしたような表情。

「”契約”はまだ切れていない……最後まで光を、護ってみせる……！！」

自身がイマジンという、未来からの侵略者だなんて関係無い。

この少女を護る事が、自分の生き甲斐なのだから。

そう決意したとほぼ同時に、眠っている筈の少女は呟いた。

寝言なのだろうが……何故だか、彼女の閉じている目からは……涙が流れていた。

「……悠樹お兄ちゃん……。」

「ぶえっくし！！」

「……風邪かい、少年君？」

「いや、なんか鼻がむずむずして……。」

うわ、なんつー格好悪い始まり方。……よし、気を取り直して。
俺、波賀悠樹は……霞河＆渉と合流。何故か＋αで海東さんと一緒にある場所へと向かっていた。
その場所へ向かうとよりいっそう、ガルドの数が増えている気がする。

つまり……

「この先が……ハイドっていう、風牙を含めた精霊を拉致した人がいる……かな？」

「なんでも良いよね。誰であろうと、完膚無く叩きのめすまでだか

ら。」

霞河が微妙に分かったのか、話を分かりやすく説明してくれた。
渉のセリフに若干寒気を感じたんだが……あそこまでアイツは黒かったろうか。
そういや、かつて……「自分の世界に絶対帰ってみせる」と言っていた「トランスの世界」の住人……形も、渉みたいに黒かったな。

……いやいや、まさかアイツに感化された訳ではあるまい。恐ぇもん、アイツも。二十超えてるから尚更だよ。

……とか、目の前のガルドを音叉剣で切り裂きながら思っていると、海東さんがいきなり話掛けてきた。

「……そうそう、少年君。」

「……何だよ。」

「一応気になったから伝えておくけど……士の持つ君のカードは、まだ力を解放していない。」

……俺の、カード？って……確か、俺を身体構造完全無視変型させた、あの悪魔のカードか？

「本来、士は力を失ったカードの力を取り戻すには、その世界のライダーと心を通わせる必要があったんだ。だが、君の世界から出た後も……ライダーを武器へと変える、ファイナルフォームライドのカードしか力が戻らなかったんだ。」

それ以前に、士のカードって力を失ってたんだ、とある意味納得す

る自分。
でも、ソレって……どういう意味だ？
その俺の心情を読み取ったのだろう。海東さんは続ける。
「……原因は定かじゃないけど、僕はちょっと気になってね。君も気をつけたほうが良い。」
理由は分からず終い、か……。ソレを聞くと、かなり気になるんだかなコノヤロー。
そんな事を考えている内に……辿り着いた。
「……あ。」
「……どうやら、此処のようだね。」
目の前には……かなり頑丈そうな、大きめの扉が。やはり簡単には開きそうにない。
案の定、押しても引いても音撃棒で叩いても、びくともしない。
多分、この先に……あのムカつく野郎がいるに違いない。
「よーし、私に任せてー。……ライダースティング！」
『ＲＩＤＥＲ　ＳＴＩＮＧ』
ライダースティング、という技らしい必殺技を、霞河は扉に……ぶつけた。
だが、扉はグワン、と鈍い音を響かせるだけで、びくともしない。
「……あれ、ウソ？」

「あ、じゃあ僕が。」

「いや、イクサの力を使っても無駄だ。」

この結果に、渉が一歩前に出るが……ソレを海東さんが止める。やはり、結果が分かっているのだろう。

「……じゃあ、どうするんだ？」

「勿論、戦力強化さ。」

……そうか！

ディエンドの最大の特徴は……ライダーの召喚。人数を増やせば、扉を破壊できるかもしれない。

そして海東さんは、三枚のカードを銃に装填し……

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ……』

「さぁ、手伝ってくれたまえ。」

『ＨＩＢＩＫＩ、ＫＡＢＵＴＯ、ＫＩＶＡ』

トリガーを引くと同時に三つの光る球が射出、直ぐに弾け、幾つもの幻影が動き回り……ソレが重なると、三人のライダーが立っていた。

一人は……俺と同じ鬼、というか……数分前に会っていたアスムが変身する、響鬼。

二人目は……赤い装甲とは対称的に青い複眼を持ったカブトムシライダー、カブト。

三人目は、どこと無く吸血鬼を連想させる体に鎖を巻いたライダー、キバ。

これだけライダーがいれば、扉を破壊できるかも、と思っていたが……海東さんの考えは、俺の斜め上を行っていた。

何故か海東さんは、またもや……三枚のカードを構えていたのだから。その絵柄は……俺が以前、大変な目に合ったあの悪魔のカードと柄自体は同じ。違うのは……描かれているライダー。

……まさか、ね。うん、まさか、そんな筈は無い。

……だが、海東さんは俺を軽く裏切ってくれた。

『ＦＩＮＡＬ　ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ……』

「痛みは一瞬だ。」

『ＨＩ・ＨＩ・ＨＩ・ＨＩＢＩＫＩ、ＫＡ・ＫＡ・ＫＡ・ＫＡＢＵＴＯ、ＫＩ・ＫＩ・ＫＩ・ＫＩＶＡ』

ラップ調の電子音声が連続で告げ……三人のライダーが、見るのも辛い身体構造完全無視変形を行った。

響鬼は、必殺技の要でもある巨大な音撃鼓に変形。カブトは……これまた、巨大な赤いカブトムシへと。キバは……ベルトに付いていた蝙蝠の姿を模した、弓矢へと。

……やっぱりイタイよ、見た目的に。霞河も若干引いてるし。

いやさ、海東さんはともかく……何故に渉は平気そうに見てる訳よ。

ともかく。

それぞれ響鬼は硬い扉に取り付き、カブトは霞河の側に寄り添い、キバは渉の手に持たされる。

「……コレで破壊しろと？」

「ま、物は試しさ……さあ、いくよ。」

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ』

俺達に返事をさせる暇も与えず海東さんは三枚のカードを装填、発声音が告げる。

……まぁ、たとえ返事をしなくても、扉を破壊するという意味では充分だ。

俺は音撃棒を構え……音撃鼓となった響鬼を、叩きまくる。

……取りあえず謝る、ごめんアスム。

少し、効果はあったようだ。暫く叩いくと……扉は段々と凹んできたのだ。

「悠樹君、離れて！次は私がいくのだよーっ！！」

年頃の女子にしては随分奇妙な言葉を使った霞河だが……ソレはあえてスルーし。

霞河は左手で巨大なカブトムシを押し出す。カブトムシは回転しながら扉に突っ込むが……扉は中々頑丈だ。先程よりは凹んだけど……それでも、まだ破壊するには至らなかったのだから。

「次は僕だね。……完膚無きまでに破壊してあげるよ。」

「キバって、いくぜぇっ！！」

……ものっそい寒気が走ったぞ、今。渉、カムバック。
そう心の中でぼやきつつも、ソレが伝わる訳もなく……喋る弓矢の言葉と同時に、渉は矢を放った。

……ヤバイよ、あの扉。
なんで必殺技三回も放ったってのに……扉は破壊しない訳よ。どれだけ硬い訳よ。そして何故中にいるであろう奴は出て来ない訳よ。いや、扉自体は凹んでるしね。まさか、防音対策までもが施されているのか。

「……コレは予想外だな……じゃあ、止めは僕が。」

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＤＩ・Ｄ Ｉ・Ｄ Ｉ・Ｄ ＩＥＮＤ』

……ん？
と思った時には、俺の脇辺りに……無数のカード状の物質で構成されたロックオンサイトが展開されていた。
召喚された三人のライダーもカード状の物質へと変化、ロックオンサイトへと吸い込まれていく。

……今まで体験した事ってさ、アレだよね。
非現実的。
……普通に生活していたあの頃が懐かしい。

「ハッ！」

ともかく。
海東さんはトリガーを引き、レーザー砲を放った。

ビビった。
いや、扉は破壊出来なかったんだけど、ある意味通れる状況になったんだ。
つまり。
凹んだ部分に砲撃を受けた扉は、綺麗に孤を描きながら中を舞っていたのだうん。

扉の奥の部屋には資料が置いてあったらしく、先程の影響で資料が散らばっていた為、部屋の様子はよく見えなかったが……分かった事がある。

「ぐふっ！？」

……何かが扉の下敷きになりましたよ的な悲鳴が響いたのだ。

うわ、やっちまったなぁ……みたいな、微妙な空気が流れるなか、扉の下から、男……ハイドが、ヨロヨロと出て来た。
……なんでだろう、かなり申し訳無い気持ちになってしまう、が、苦笑いが止まらない。あ、仮面しているから気がつかないか。

「……貴様等……何故ディエンドまでいるかは気になるが……人が良い気分になっている所に横槍を入れるとは……！」

「えーっと……まあ、過失だからさ。」

「許すか普通！？……良いだろう、こうなったら私が、直々に貴様等を……！！」

刹那。
かなりの殺気が、俺達を襲う。
……やはり、ガルドを作ったってのは頷けるかもしれないな。そう思い、俺達は一斉に構える。

対して、奴は……何処からか「W」と書かれた、USBメモリのような物を取り出した。
ソレで一体、何をするのか……と思ったが。

ブウン。
ヒュッ。
バキッ。

「「ぐぼはぁっ!?」」

ドサッ。

……音声だけだったけど、分かった？いや、分かる訳ないか。

詳しく説明すると。

突然奴の横からオーロラが発生して。
そこから黒い何かが出て来て。

物凄い勢いで奴に突っ込んで。
倒れた。

……しばし呆然してます、はい。

……で、よく見るとその「黒い何か」は二つ存在している。
一つは……多分、腰にベルトを巻いているから……仮面ライダー、だと思う。けど問題はもう一つの方の「黒い何か」。
……あからさまに異形なんだよ、こっちは。

けど、異形はライダーに肩を預けて立たせている。むしろ、敵意は無いな……。

「……アレは、オルタナティブ……？」

……海東さんいわくオルなんとかって言うらしいが、ソイツはゆっくりと立ち上がって……辺りを見渡して……あ、こっちに気がついた。

「……あぁぁぁっ！泥棒野郎！！」

唐突に何故か海東さんを指差し、駆け寄ってくる。アイツは海東さんを知っているみたいだが……海東さんは、どうやら知らないようだ。

「……僕、君と会った事あったっけ？会った記憶は無いけど。ついでに言うけど、僕は泥棒じゃない。怪盗だ。」

「なんだよ、その何とかの世界って。……っつーかそれより、助けてくれよ！！ミラーワールドの制限時間だって、あと少しなのに…

…」

「……君、此処は現実世界だけど。」

「……は？」

……話が……話が噛み合ってない……。

だけど、このオルなんとかってライダー……どっかで聞いた事あるような……いや、気のせいか？気のせいだなうん、間違いない。

「……災難だったね、小野川君。」

……ん？

……小野川？

え？小野川って……あ、そういやいなかったな、今まで。渉が言うまで忘れてた。

……チッ、頭から存在消してたのに。

「ま、まさか……この声……わたｒぐげごほぁっ！？」

……うわぁ。

嬉しそうに両手を広げて小野川は渉に抱き着こうとしたけど……渉は華麗に鳩尾（みぞおち）にストレートパンチを食らわせやがった。

鳩尾を押さえつつもがく小野川だが……更に追い打ちを掛けられる事となる。

「嫌ァァァァッッ！！」

「あだだだだだッッ！？」

急に霞河は絶叫して、左手に付いている機械蜂から針のような弾を連射、小野川に放っている。
……ここまでくると、逆に哀れに思えてくるな。

「ちょ、この声、舞さ痛ッ!?ちょ、何でいきな痛いッッ!!攻撃をイタイタイタッ!!あ、腕が!?なんか感覚が無くなって痛ァッ!?」

「こっちに来ないで黒いGィィィッ!!」

「く、黒いGって痛いよだから!!てか、この姿のモチーフ痛ッッ!!モチーフはあばっ!?頬に、頬に当たっ痛ァッ!?」

……なんか必死に弁解しようとしてるけど、その度に針が当たってるから、口も聞けない状態。まあ我慢しろ、さっきから霞河、プルプルと震えつつも耐えてたんだから。
それよりも、先程の異形までもが霞河の危険を察知して離れているんだから……ホントに哀れだ、小野川。

「だから舞さ痛い痛いッ!このモチー痛ェッ!?コレ、コウロ痛ッ!?今絶対脳天にぶち当たっぶぎゃあっ!?」

「……え?コオロギ?」

コオロギ。
この単語を聞いた途端、針の連射を止める霞河。だがもう遅い。奴の体はある意味蜂の巣だ。
……仕方ないから、針を一本ずつ抜いていくのだが。

「……あぁ……マジで花畑が……花畑で踊っている婆ちゃんの姿が

見える……。」

「大丈夫、お前の婆ちゃんはまだ生きているから。」

「……おぉ、この声は……波賀か……ふふっ、俺はどうやら……此処までのようだ……。」

「だよね。普通の人だったら既にポックリ逝ってたね。」

どーでも良い会話をしつつ針を抜くが……渉はソレを面白そうに傍観してたり、霞河は今のやり取りを既に頭から消去したのか、異形にそーっと近寄ったりビクッとしたり。

……お前等、ホント呑気だな。

「……取り込み中失礼するけど、アレを見たまえ。」

そんな中、海東さんの一言で行動がピタッと止まり、彼が指差す方向に視線を向ける。
そこには、四つの細長い球状のカプセル。そのカプセルの中には……

「……翔炎!?」

「風牙もいる!」

「氷甲!」

「……え、爪雷?」

俺達の相棒とも言える存在……四体の精霊が入っていた。

だが、気を失っているのか……反応が無い。

それに、よく見ると……カプセルには謎のパイプが伸びており、奥の壁に繋がっている。

……明らかに怪しい。

「ぅおい、さっき頭ぶつけた科学者野郎！アイツ等を開放しやがれ！」

先程のダメージは何処へいったのか。小野川か立ち上がり、近くで目を回していたハイドの胸ぐらを掴みブンブン揺らす。

……ホント体力底無しだよな、小野川。

で、そんな事をされちゃ起きるしかない。呻きながらハイドは目を開け……何故か、ニヤリと笑った。

刹那。

「！？」

唐突にグオン、という重低音が響く。ソレが耳に響いて、少し足がふらついてしまう。

「テメェ！何しやがった！？」

「……ククク……アレを見ろ……。」

ゆっくりとハイドが指差した方向を見ると……先程の、精霊達が入ったカプセルが。

しかし、よく見ると……パイプを伝って、何かが壁に流れ込んでい

る。翔炎のパイプには赤、風牙のパイプには翠という、それぞれの属性の色が。

「アレは……！？」

「……君達が此処まで来たから、多少計画が狂ってしまった。仕方ないから……精霊そのものではなく、エネルギーを奥の部屋にいる最高傑作に……流し込んでいる。」

「！！」

そんな事をしたら……翔炎達が……

「だが、あの精霊達は今まで捕えた精霊よりも中々上質な存在だ……最高傑作にとっては、充分すぎる程の、な……。」

「あーチクショッ……待ってろ爪雷！」

ハイドの言葉に一番焦っているのは、どうやら小野川。何を考えたのか、ベルトのバックルから一枚のカードを取り出し、右腕に付いているカードリーダーのようなソレにスラッシュした。

『ＷＨＥＥＬ　ＶＥＮＴ』

俺にとっては聞き慣れない女性の発声音が響き、カードが燃え尽きて消滅。その瞬間……小野川と供に吹っ飛んで来た異形が、段々と変型していく。あの形状は……バイクか。

……今日何回、妙な構造変型を見たのだろうか。

「はいよーシルバーッ！！」

そのバイクへと変型した異形に乗ったバカは、意味不明な奇声と供にバイクを走らせた。その方向は……真っすぐ爪雷へと向けられていたが。

バリバリバリ！

「ぎぃやぁぁぁあぁぁッッ！！」

爪雷のカプセルの目の前まで来た途端、雷がカプセルを包む。
良い子は急には止まれない。いや、悪い子も急には止まれないがな。
というか奴は悪い子に分類される。
そんな感じで小野川と異形はまともに雷バリアに突っ込み、感電。
というか、もはや感電ってレベルじゃないが。
そして勢いが強かったのか、これまた綺麗な孤を描きつつこちらに吹っ飛んで来て、頭から床に突っ込んだ。

「……アレは一体……？」

「……どうやら、精霊の膨大なエネルギーをパイプだけで吸い出そうとするから、彼等のエネルギーが漏れ出しているようだね。」

「そんな……！！」

……まるで先程の一連が無かったかのように話を進める三人。小野川もプスプスと黒い煙を出しつつ、ピクリとも動かない。

ちなみに、カプセルに再び視線を戻すと……爪雷だけでなく、翔炎達のエネルギーまでもが漏れ出しているようだ。炎が覆ったり、氷が包んだり、風が吹き荒れたり。
……コレは流石にマズイな。ふざけている場合でもない。

「……どうするか……。」

「じゃ、君達を使おうかな？」

「「「……は？」」」

悩んでいた所で……海東さんの言葉に、固まる俺達。
……使うって、え？何、またあの悪魔のカードを使う訳？

「僕のディエンドライバーは、ライダーと接触する事でそのライダーが記録されたカードを使用する事が出来る。君達と以前接触した事で……この四枚が使えるようになったのさ。」

「……はい？」

「ようは……烈火の世界で手に入れたお宝は、コレって訳。」

……すみません、話に付いていけません。
呆然としつつ、海東さんを見つめていた訳だが……次の行動で、分かる事になる。

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ……』

「さあ、出番だ。」

『ＲＥＣＣＡ、ＲＥＰＰＵ、ＲＥＨＨＹＯ、ＲＥＴＵＲＹ』

海東さんが召喚したライダーとは……

「……あ、僕だ。」

「え、あ……おぉ。」

「いつつ……って、なぁっ!?幻覚でも見てんのか俺!?」

三人が驚いたように……目の前に立つのは、俺達が変身する烈火、烈風、烈氷、烈雷。

……見てて凄い不思議な気分になるんだが。

その擬似俺達は、カプセルへと駆け出し……駆け出しって、待てや!

「あのまま言っても自爆するだけだろ!?」

「あ、悠樹君。多分平気。」

「……は?」

冷静な霞河によって、幾分か落ち着く俺。……って何だよ、何で「多分」なんだよ。

だが、霞河の言う「多分」は的中した。

「……なんじゃ、アレ?」

「エネルギーを……吸収している?」

涉の言う通り、烈火は炎を、烈風は風を……というように、自身の力と適格する物質を吸収している訳だ。
……どういうこっちゃ、と思ったが、霞河がこれまた丁寧に説明してくれた。

「ずっと前に風牙から聞いたんだけど……普段私達が使う＜アタックチップ＞や＜ウェポンチップ＞は、風牙達精霊のエネルギーで作り出してるんだって。でも、外からのエネルギー……烈風だったら風とかも、吸収する事で自身の力に変える事が出来るんだって。ちなみに、私のあの素早い動きは、外のエネルギーの力だとか。」

クソ長い説明をご丁寧にどーも。
さて、それを踏まえて再び擬似俺達を見ると……漏れ出したエネルギーを吸うわ吸うわ。こりゃ凄い。

でも、気になる。
……何故、エネルギーの勢いが止まらない？
普段俺達が使っている、もしくは見るエネルギーより……遥かに多過ぎる。
まさか……底を知らない程の膨大なエネルギーを、精霊は持っているって事か？

「おぉ……アレが、精霊のエネルギーか……これほどあれば、私の最高傑作も……！！」

「……マズイね、早く救出しなければ。」

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＣＲＯＳＳ　ＡＴＴＡＣＫ』

ハイドの言葉に焦りを感じたか、海東さんが一枚のカードを装填。
刹那、烈火はヒートセイバー、烈風はサイクロンショット、烈氷はアイスハルバード、烈雷はサンダークローをそれぞれ装備し。

ソレを使って、カプセルを破壊した。

幸い、翔炎達にはダメージは無かったようだ。擬似俺達はそれぞれ精霊達を抱えて、俺達の元へ戻って来る。
精霊達を受け取った後、擬似俺達は役目を終えたのか、消滅していったのだが、それを確認する前には、精霊達は無事か否か確認していた。
ちなみに俺は翔炎の顔をペチペチと叩き。
霞河は風牙の尻尾を掴んでブンブン振り回し。
渉は氷甲の甲羅を利用してグルグル回し。
小野川は爪雷を地面にたたき付けたり。

……何だか酷い気がするが、これでも精霊達は目覚めないのだから、尚更心配になってくる。

「海東さん……。」

「……僕は精霊に関して詳しくは知らないけど、もしかしたら……大量のエネルギーを放出したから、極度の疲労状態に陥ってるんじゃないかな。」

「畜生……そこの科学者野郎！よくも爪雷を！！」

「さっきその爪雷をたたき付けてた奴が何を吐かすか。」

「……。」

小野川の怒りを、渉が軽く毒舌アタック。ただ、渉も氷甲が心配なのか、軽く言っただけで済んだのだが。

……あえてもう一度言うが、アレでも軽くだ。心配しながら毒舌するのも凄いがな。

とか何とか、解説している時に……

頭に、響いた。

―お前等も戻って来たんだ、そろそろ帰ればどうだ?―

何故か、そんな言葉が……しかも、俺の声で。意図すらしてないのに……不気味だ。

周りを見ると、どうやら俺にしか聞こえていないようだが……刹那。

「……え?」

「……光ってる!?」

そう、唐突に精霊達が、しかも四体一斉に輝き始めたのだ。

この光は……世界の、移動。

……さっきの声と、関係しているのか!?いや、まさか……そんな

筈が、ある訳が無い。

「海東さん！！」

「……精霊を取り戻すという、彼等の頼みも叶ったんだし……僕は此処までだ。後は君達で頑張りたまえ。」

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＩＮＶＩＳＩＢＬＥ』

一生懸命考えている間に、海東さんは脱走。普段だら「逃げやがったよコノヤロウ！」と叫んでいただろうが……残念ながら、今はそれどころではない。

変わりに小野川が言ってくれたが……ソレを言い切る前に、光が最大限にまで輝き、

俺達は、この世界から……消えた。

光が収まった時には……精霊と適合者は、消えていた。

……精霊の力で、適合者達はこの世界を移動した。恐らく、自身の世界に戻ったのだろう。

そう判断した男……ハイドは憎々しげに、彼等が消えた後を睨んだ。

「……甘く見ていた……少しでも、奴等を妨害していれば、最高傑作は……完全とまではいかなくても、完成した筈なのに……。」

だが、妨害は難しかっただろう。

たまたまとある世界を覗いて、興味本意で自身が作り出した、人間を異形へと変える兵器「ガイアメモリ」が……オルタナティブこと小野川と激突した事で、部屋の端っこへと転がっていったのだから。

ハイドは部屋の端っこに転がっている「W」と印されたガイアメモリを拾い、胸のポケットにしまう。そして、同時に胸ポケットから出したのは……電車に乗る時によく見かける、パス。左手には、いつの間にかカードが握られており……それをパスに収納。

ハイドは、適合者達がそれほど……というより全然目に付けていなかった、モニター等の精密機械が集まった場所へと移動、ソレにパスを翳した瞬間。

ゴォッ！

という音と供に、部屋がスライドするかのように狭まっていく。段々と何かを形作っていき……その形は、電車。さらには、壁で遮られていた、パイプの繋がっていた部分までが引き寄せられ……電車の車両へと接続される。

パイプに繋がっていたのは……精霊達が捕らえられていたカプセルより大きめのソレ。中に入っていたのは……ハイドが最高傑作と称するガルド。

この部屋だけで電車と化したソレに乗ったハイドは……ただ、嘆く。

「……今度は＜原離者＞に見つかりにくい場所にでも、ラボを作ろ

う。」

言い放ったとほぼ同時に、どういう原理かは知らないが……前方にレールが敷かれ、その先には……空間が歪んだ、穴が。
電車は走りだし、歪んだ穴の中へと……消えていった。

銃撃音が響く。
それも単発ではなく、連射で。

自身を＜原離者＞のシュウと名乗った男が変身するライダー「ユプス」と、＜天の帝王＞の名を持つライダー「サイガ」の戦いは、激しさを増していた。

だが、ある意味一方的だと言っても良いだろう。
サイガは飛行用ウェポン「フライングアタッカー」を駆使して縦横無尽に飛び回り、ブースターライフルと呼ばれるソレでユプスを狙撃しているからだ。

「痛っ！？くそ……Ｆｉｒｅ！」

『ＢＵＲＳＴ　ＭＯＤＥ』

ユプスも「ユプスムーバー」と呼ばれる銃に音声入力。光弾を発射し、相殺を試みるが……相手は高速連射をしている為、全てを相殺する事はほぼ不可能。たいていの攻撃が当たってしまう。

「いっつ……。」

「Ｈｅｒｅ　ｗｅ　ｇｏ！」

『ＥＸＣＥＥＤ　ＣＨＡＲＧＥ』

怯むユプスを、サイガは見逃さない。必殺技の準備に入ったのか、銃口に青いエネルギーが溜まっていく。

「うわっ……ヤバイ、アレでしか避けられないよこりゃ……でも、アレ使うと……かなり体が痛くなるしな……。」

ソレを見て、段々と焦るユプス。ユプスムーバーとサイガを交互に見ているが……意を決したのか、というか投げやりなのか、音声コードを発した。

「えぇい、もう成るように成れだ！……Ａｃｃｅｌ！」

『ＦＯＲＭ　ＡＣＣＥＬ……ＣＯＭＰＬＥＴＥ』

刹那、ユプスの胸のアーマーが展開、肩に接続されたが……全ての過程を終える前に、サイガは必殺技を放っていた。
青い砲撃が……ユプスにぶつかり、爆発。その影響で発生した煙が、辺りを包む。

「Ｂｙｅ……ＹＵＰＵＳ。」

サイガは、既に勝利を確信していた。
あの必殺技を避けるまでもなく、ユプスはまともに攻撃を受けたのだから。

……だが、

「……Ｃｏｕｎｔ　ｄｏｗｎ．」

『ＳＴＡＲＴ　ＵＰ』

声が、響いていた。
だが、必殺技を放った痕には……誰もいない。

「……何処を見てるの？」

……サイガが気付いた時には、既に遅し。いつの間にか彼は、上へ吹っ飛んでいた。
サイガが最後に目にしたのは、姿の変わっていたユプス。アクセルフォームと呼ばれる姿。

彼等と同じギアシステムで変身するファイズにも、アクセルフォームが存在する。赤いライン……フォトンストリームと呼ばれるソレの出力を最大……銀色へと無理矢理上げ、高速移動を可能にした姿だ。
だが、ユプスの出力は違う。フォトンストリームの色は銀ではなく……＜地の帝王＞の名を持つオーガのフォトンストリームと同じ、金色だったのだ。

「Ｃｈｅｃｋ．」

『ＥＸＣＥＥＤ　ＣＨＡＲＧＥ』

高速移動のさなか、必殺技を発動。サイガが気がついた時には……自身の体に、オレンジ色の四角錐形のエネルギーが五つ、突き刺さっていた。

その中に入り込むようにユプスは現れ、四角錐に足を突き出して蹴りを繰り出そうとするが……

「……グッ！？」

ズキッ、と体中に痛みが走る。少し体勢を崩したからか、四角錐形のエネルギーが二つ消滅していた。

「……うぉおおおおおッっ！！」

だが、ユプスはそのまま蹴りを続行。一つ、二つと四角錐形のエネルギーがサイガをえぐるかのように回転、サイガの体の中に入り込むようにして消える。

「ガ……アァァァァッ！！」

サイガは叫ぶが……もはや、遅い。

自身の体にオレンジ色の「Ｙ」の文字が浮かび上がり……灰と化した。

『ＦＩＶＥ……ＦＯＵＲ……』

「ぐあっ……か、Ｃｏｕｎｔ　ｓｔｏｐ.」

『ＴＩＭＥ　ＯＵＴ……ＲＥＦＯＲＭＡＴＩＯＮ』

アクセルフォームは１０秒間維持が可能だが、ユプスにとっては辛そうだ。まだ時間が残っているが、強制的に基のフォームへと戻り……変身を解除した。

「あ……もう、無理……。」

バタリと倒れつつ、嘆きながら……シュウは突然発生したオーロラ……時空の橋に飲み込まれ、消えていった。

「……シュウの移動は完了、と。」

場所は変わり、ハイドの研究施設で最も広い部屋。その真ん中に、青ずくめの男……アオが立っていた。

アオは原離者の中で唯一、遠くからでも時空の橋を発生させる事が出来る。その特徴を生かし、シュウを一時帰したのだろう。

ハイドが移動したのなら、もう此処には用は無い。

そう思い、自分もこの世界から去ろうとしたが……

「……そのカードデッキ、僕にくれないかな？」

「！？」

唐突に、第三者の声が響く。

この部屋には自分しかいない筈だと思い込んでいたばかりに、多少焦りつつ振り返る。アオの視線の先には……一人の少年が。

黒い髪に瞳。白いシャツの上には水色のジャケットを羽織い、水色のジーンズと、服装はアオに近い。

だが、彼の雰囲気は……どこと無く、精霊の適合者の手助けをしてもらった男、海東大樹に近い。

「……何だ、お前は？」

「僕は古川大輝。そして……。」

古川と名乗った少年が、言葉を溜めつつ何処からか取り出したのは……

「……なっ！？」

「……仮面ライダーディエンド、さ。」

海東大樹がディエンドへと変身する為のツール、ディエンドライバー。

……ソレを、何故この少年が持っている？

頭が混乱するアオだが……古川はソレに気付いていないのか、淡々とカードをディエンドライバーに装填する。

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ……』

「変身！」

『ＤＩ－ＥＮＤ』

古川がトリガーを引くと同時に電子音声が告げ、彼は、ディエンドへと変身する。
弄ぶようにディエンドライバーをクルクルと回しながら、バーコードを模した青い仮面は……油断無く、アオを見据えている。

「……馬鹿な……。」

ディエンドは海東大樹ただ一人の筈。
アオは自分にそう言い聞かせたが……一瞬にして、目つきが変わる。
この少年を捕えて……無理矢理でも、事情を聞こうと。

「さあ、痛い目を見たくなかったら……デッキをおとなしく、僕に渡したまえ。」

「断る。それより、お前が何者か……無理矢理でも聞こうか。……変身。」

アオもその身を仮面ライダー……龍蒼へと変え、ディエンドに殴り掛かる。
だが、ディエンドはソレを軽く避け……カードを一枚、装填した。

「手始めに……コレだ。」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ……Ｇ』

ディエンドが召喚したライダーは……Ｇに酷似したマークが刻まれたプロテクターを纏った、赤い仮面ライダー。
ある世界の秘密結社によって改造人間にされ、愛する者を守る為に超人的身体能力で悪に戦いを挑んだ戦士。

「今、僕のヴィンテージが芳醇の時を迎える！」

威風堂々と言い放った戦士……仮面ライダーＧは剣を構え、龍蒼へと切り掛かった。

「……チッ……。」

『ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ』

アオはカードをバイザーに装填、青龍刀の形状に近い剣を持ち、Ｇを迎え撃つ。

が。

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＢＬＡＳＴ』

「……！ぐっ！？」

ディエンドがホーミング性能を持った青い光弾……ディエンドブラストを放つ。
上手くＧを避けてアオに直撃した為か、アオは怯んでしまう。幸い、

Gの攻撃を防ぐ事には成功したのだが。

「……面倒だな……」

『ＡＤＶＥＮＴ』

2対1は分が悪いと考えたか、アオは再びカードを装填。
アドベント……契約モンスターを召喚するカード。その効力により、近くの機材によって出来た反射物から現れたのは……蒼い、龍。咆哮しながらアオの周りを旋回し、二人のライダーを威嚇する。
蒼甲龍ドラグブルードと呼ばれるミラーモンスターは、Gやディエンドに向かって青白い火球弾を放った。

「……！」

「おっと……危ない危ない。」

二人は火球をあっさりと避ける……が、その油断が仇となる。

「！？」

いつの間にかGの背後へと移動していたドラグブルードは、背中に向かって火炎を放つ。
その勢いでGは吹っ飛ぶが……その先にいるのは、剣……ドラグセイバーを構えた龍蒼。

「でやぁあっ！！」

アオは通り過ぎ様に剣を振るい、Gのベルトを傷付ける。
Gは苦しみながら地面へと倒れ込み……消滅した。

「へえ……中々やるじゃないか。」

「どうでも良い。お前は何者か、話してもらおうか。」

「僕は通り過がりの……怪盗さ。」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ……ＲＹＵＫＩ』

ディエンドは懲りずに再びライダーを召喚。

龍蒼に酷似したライダー……龍騎は、龍蒼とは対象的に赤いドラグセイバーを構え、切り掛かろうとする。

だが。

「……！！」

龍騎を見た途端アオはビクッと反応し……それからワナワナと奮え始め……

「……あぁっ！！」

「！？」

龍騎の攻撃が届く前に、アオは普段の彼にしては考えられないような荒い声を出し、剣を振るった。

上手く避けた龍騎だが……構わずアオは、ブンブンと剣を振るう。

だが、その太刀筋は単調。先程の戦闘スタイルとは一変し、焦っているかのような荒々しい戦闘スタイルとなっていた。

「……！！」

「ぐぅっ！？」

龍騎は冷静に攻撃を避け、攻撃の合間にアオへと攻撃した。ソレに怯んでしまったのか、アオドラグセイバーを落としてしまう。そこからは、猛攻。龍騎はアオにドラグセイバーを振るい続ける。

「ぐっ、がっ……うわぁぁっ！！」

銀色の装甲は傷付き、息も切れ切れとなるアオ。龍騎を見た瞬間、冷静さを欠いてしまったのは……一体、何故か。

「ハハハッ、何だ……君ってその程度なんだ。君って、龍騎の事が苦手？まあ良いや……龍騎、彼のカードデッキを奪っちゃって。」

ディエンドの命令に頷き、ゆっくりと近付く龍騎。ソレを、呆然として眺めていた龍蒼だが……。

「……グッ！？」

唐突にドラグブルードが、アオを尻尾で払った。近くの壁にぶつかったアオは、いきなりの事に驚くが……ドラグブルードの目を見るなり、調子が元に戻る。

「……そうだ……そうだったよな。」

―俺達は逃げられない。だったら、運命にそのまま向かえば良いんだ―

そう心の中で呟き、龍騎を……見据える。

「……まさか、自分のペットに攻撃されるなんてね……。」

「ブルードはペットじゃない……仲間だ！」

主にミラーワールドで活動するライダーと契約モンスターとの関係は、無理矢理従わせるという関係の筈だが……アオは契約モンスターを「仲間」と言った。

だが、ソレを否定しないかのようにドラグブルードは吠えるのだから……彼等は、極めて珍しく……絆で結ばれているのかもしれない。

アオは言い放ちながら、一枚のカードを装填する。

描かれていたのは……黒い、蝙蝠。

『ＡＤＶＥＮＴ』

電子音声と供に甲高い鳴き声でやって来たのは……元々は仮面ライダーナイトの契約モンスターである筈の、ダークウィング。寄り添うように、アオの横で羽ばたく。

「……アレ？ソレは確か、ナイトの契約モンスターの筈……。」

「……仲間の、形見だ。」

『ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ』

アオは意味深な発言と供に、蝙蝠のマークが描かれたカードを装填する。

電子音声が告げると同時に、アオはいつの間にか持っていた剣……というより槍を持ち、高くジャンプ。それに合わせて、ダークウィングもアオの背中に付き、マントと化す。
ドラグブルードも……カードは装填されていない筈だが、ジャンプしているアオに沿うように旋回、上昇していく。

マントと化したダークウィングはアオの持つ槍に沿って包み……まるでドリルのようにマントの形態を変えて。
ドラグブルードは後ろから後押しするかのように火炎を放ち。

火炎を纏ったマントと下に突き出した槍で、アオは龍騎へと突っ込んだ。

「……！！」

「うわっ！？」

その勢いは凄まじく、龍騎は避けられる訳も無くまともに攻撃を喰らい……そのまま、消滅していった。

ぜえぜえ、と肩で息をするアオは……槍の切っ先をディエンドに向けるが……ディエンドはソレをさも可笑しそうに笑う。

「……何が可笑しい？」

「いや、本当に珍しいし面白いなって思って……ハハッ、もう良いや。デッキは後回しだ。今は、司（ツカサ）よりも先に……次の世界に廻って、お宝探しを楽しむ事とするよ。」

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＩＮＶＩＳＩＢＬＥ』

そう愉快そうに言いつつ、ディエンドはカードを装填。気がついた時には……既に、消えていた。

「……あ、疲れた……早く、戻らなきゃ、な……。」

ソレを見届けた瞬間、ガクンと膝から崩れ落ちそうになる。
正体不明のディエンドの前にもリュウガと交戦している。やはり今までの戦いで相当疲れたのか、眠そうな表情で、魂をも抜けそうなため息を吐き出し、いつの間にか発生させたであろう時空の橋へと転がり込む。
ソレを慌てたように二体のミラーモンスターが続けて入った……刹那、時空の橋は消えていった。

『……フン、つまらん。』

いつの間にかいた、金色の光を放つ存在など……知る事も無く。
そして、その光を放つ存在も……気がついた時には、この世界から消えていた。

第四十話：感じるは不安だけ（後書き）

うわぁーい、グッチャグチャだー。
何だかもう色々視点が……あ、疲れてきた。
てな訳でどーも、ジャードです。家から一歩も出ないと流石に暇です。

かなりの量の為、前後編的な感じで分けました。何だかごっちゃごちゃですみません。でないとページ数がホントにヤバかったんです。

取りあえず先に、皆さんにご報告を。
えーこの度、オメガさんが執筆する小説「Ａｎｏｔｈｅｒ　ｏｆ　Ｄｅｃａｄｅ＜Ｎ９５４８Ｋ＞」の登場人物、もう一人のディエンド「古川大輝さん」をお借りしましたー！
この場にてオメガさんに改めて御礼申し上げます。
以前オメガさんの「Ａｎｏｔｈｅｒ　ｏｆ　Ｄｅｃａｄｅ」とコラボの約束をした為、先駆けの登場となりました。
……活躍したのはアオの気がしますが（待てや）なんだかすみません。

さて、かなりツッコミ所満載な今回ですが……だが俺は謝らｎ（殴）
取りあえず今回登場した海東さんは、ちゃんと理由があって颯爽と現れた、とだけ。
……無意味にイキナリ登場させませんよ！多分！（オイ）

では、今日はこの辺で失礼します。

第四十一話：動き出す歯車

とある何処か。白い空間。
上も下も右も左も、見渡せる物も何もない、白い空間。宇宙とは、また真逆の光景。だが、宇宙のように……星は見当たらない。

否、存在した。

白い空間にポツリと、黒い球体が浮かんでいる。その黒い球体には……青い点状の何かが、無数に存在する。

そんな白い空間に……突如、金色の何かが現れた。
生き物なのだろうが……上手く表現出来ない。だが、その姿は……伝説の生き物「麒麟」を彷彿させる。

その存在は、黒い球体を見下げて……興味が無いように眺め……その中の一つの青い点を、睨む。

すると、その青い点が、金色の存在から見て上に見えるように移動し、その点から……逆円錐状の何かが展開した。
その円の部分……フィールドには……端に「北」「南」「東」「西」の文字が書かれている。その円の中心には……棺桶が。

だが、既に棺桶には蓋が開いており、中身は空。
そして蓋には……「麒麟」の文字が。

『……忌々しい。』

金色の存在は吐き捨てるかのように言い放つ。何故か、人間が話す言葉を用いて。いや、金色の存在にとっては当たり前なのかもしれないが。

金色の存在……伝説の精霊と呼ばれていた「麒麟」は、此処で眠っていたのだろうか。それを知る者は、存在するのだろうか。

麒麟が目を閉じると同時に、円錐状のフィールドが消える。

そして再び、同じ青い点を睨むと……そこから、一本の線が伸びる。

刹那。

一本の線が枝分かれし、二本へ。それがまた枝分かれし四本。別の場所からも伸びて五本。それが続き……幾つもの線が、麒麟から見て上へと伸びていた。その光景はまるで……新芽から巨木へと成長する過程のようにも見えた。

だが、その線の大半が、唐突に消滅していく。残っているのは……最初に比べ、もう残り少ない。

初めて枝分かれした一本の線が消えると同時に……線の消滅は止まる。残ったのは、直線に伸びる一本と……それ意外に枝分かれする何本か。

『……物語も、もう僅かか。』

つまらん、と麒麟は吐き捨て、中の最も太い線を睨む。刹那……麒麟の姿が、なんの前触れも無く消えていた。

白い空間に浮かぶ黒い球体、そこから伸びる多数の線。残ったのは、それだけ。

だが、中でも一本の線が……無数に線が存在していた時より何故か……存在を主張しているようにも見えた。

白い空間、黒い球体、多数の線。
この意味を知る者は、現在までは……麒麟しか、いない。

あれから、一週間と四日が経った。
冬休みも終わったが、相当疲れが溜まっていたのだろうか、翔炎は未だに起きない。霞河達にも聞くと、どうやら他の精霊達も目覚めないようだ。どういうこっちゃ。

幸い、ガルドはこの世界へ精霊を狙いに来なかった。恐らく、ハイドが持つガルドの数も少なくなったのだろうと思うんだが。何と言うか助かったと言うべきか。

……ともかく、冬休みが終わった為、翔炎は自宅で寝かせたまま学校へ来た。

来たのだが。

……帰りたい。

いや、もう面倒臭いったらありゃしない。
学校初めての、そして俺が大ッ嫌いな行事が、始まるのだから。

「……波賀君、聞いてるの!?」

バン！
と、目の前の机を叩く女子が、視界に入る。あ、言っておくが霞河ではない。

ちなみに自分達以外の生徒は、回りをあせくせと動き回ったり、何かと作業をしてたり、暇が無いようだ。よくあんな一生懸命にやってられるよなー。

「……波賀君、ホントに聞いてる?場合によっちゃ、それ相応の処置を取るよ?」

「……聞いてるっての、委員長。」

相手はしつこく話し掛けてくる為、取りあえず返事だけはする。
目の前に立つ霞河より若干背が高めの女子……委員長こと岩坂(いわさか)紫(し)織(おり)は、ずり下がった眼鏡を中指で元の位置に戻し、これまた怒ったような表情で俺を睨む。
……いや、実際に怒っているんだけどな。

「……前も話し合いサボってたら、まさかとは思ったけど……あなた、ホントに学園祭嫌いなの?」

「嫌いだな。あんな事やってる暇があったら授業してる方がよっぽ

ど良い。」

「何度か抜け出すくせに？」

「……ほっとけ。」

そう、二日後、この学校は一月に、受験生が最も忙しい季節に学園祭を開く。何でも、受験生に気合いを入れる為だとかどうとか。だが俺は学園祭だとか、小学校で言う運動会だとか、かったるくて嫌だ。運動会だってダラダラ走って最下位、何故やったかも分からないダンスも突っ立ってただけだったからな。

……そん時の俺の精神状態も問題だったのかもしれねーけど。え？よく分からん？あ、いや、分からないなら良い。

ちなみに冬休みの宿題にも、学園祭の出し物とか考えろ的なヤツがあったが、未記入で提出。やってられるか、見て二秒で即ポイ捨てしたわ。

そんな俺の反応を溜息をつきながら委員長は言った。

「ったく、仕方ないわね……ホラ、他数名もまだグループに入ってないから、あなたも組んでグループとして入りなさい。」

「……えー……。」

「拒否権は無いわよ。ホラ、立ちなさい。」

あぁー……委員長は真面目過ぎる。何人かいなくたって、面白けりゃ問題無いだろうに。

と、愚痴っても意味を成さない。仕方なく俺は委員長の後を追う。

多くのクラスメイトとすれ違う物だから、どーせならどんな作業を

しているかをチラッと眺める事としようか。

……お、渉は他数名と実験的な事をしてる。意外と面白そうだが、邪魔をしてはいけない。

霞河は、女子グループと……メイド喫茶ぁ？何故だ、何故委員長はアレを認めた？それ以前に霞河は何故ノリノリなんだ？

……まさか、河豚の陰謀かッ！？

とか阿保な妄想をしつつ、委員長に着いて行き……目の前の男子三人に視界が入る。

えーと、二人は外処に谷口か。

この二人は……まあ、一応付き合いはある、何度か。良く授業後にはゲーセンへと行ってるらしいが。

「……よー外処&谷口。」

「よー波賀。何だ、お前もサボりたいか。」

「……こんな事をやるなら、ゲーセンに行った方がマシってハナシ。」

外処も谷口も面倒臭いらしい。明らかに嫌そうな顔で委員長を睨んでいるが……完全に知らん顔だなオイ。

さて、俺の目が間違ってなけりゃもう一人いた筈だけど……

ゲ。

と、軽く、それでも思わず声に出しつつ呟く。嫌な奴が視界に入ったが故に顔を背けてしまう。

……奴の視界に入っちゃいないよな、大丈夫だよな、問題無いよな。

「……うわ、波賀だ。」

あぁ、どうやら相手は気がついてたらしい。
だけど……こっちこそ「うわ」だよ。何でお前もいるんだよ。しかも何で視界に入るんだよ。
何で小野川なんだよ。

どーにもならない疑問が頭に次々と浮かびつつも、それを口にする事無く、直ぐに伝わるようなシンプルな問い掛け……否、願望を相手……小野川にする事とした。

「……小野川、今すぐ失せろ、てか失せて下さい。」

「丁寧語になっても誰が失せるか!?とゆーか、会っていきなりその反応は無いだろ!!」

「お前も同じような反応だったろ馬鹿。」

「……委員長ー、何であの二人はいつも仲が悪いんだよ。いや、何と無く分かるけど。」

「じゃ、聞かないでよ。……いや、私もなんとなく分かるんだけどさ。」

「……小野川は弄り甲斐があるってハナシ。」

「とゆー訳で。」

「どういう訳ですか委員長？」

「一々口を挟まないで波賀君。話はとっとと進めなきゃ。」

いや、そこまで急ぐ必要があるのか委員長。空気読もうぜ。どんだけ急いでいるのだか。というか省略しすぎだろうよ。何だ今の間は。沈黙が流れたようにも感じるぞ。

そんな意味を含めた視線を委員長にぶつけたが、彼女は知らん顔。どんどん話を進めていく。

「じゃ、明日までに何をやるか決めて、私が担任に報告。分かったわね？」

「「「分かりません。」」」

「……分かったって前提だからね。拒否権は無し。」

なんて強引な。

とは思っていても、どうにもならない。委員長は無視して別の女子

グループに混じっている。……こっちに戻ってる確率は、限りなく低いだろう。チクショーめ。

……あまり気は進まないが……一応、提案はしておこう。

「……そろそろ真面目に考えるか？」

「こうなったらサボろうぜー。新発売されたポ○モン進めてーし。」

「……サボったら、単位が取れなくなるってハナシ。」

「……あ、俺ちょっとトイレ。」

「逃がさんぞ馬鹿が。」

「うぐふぇっ！？」

……何故か最近新発売されたゲームの話題に走ろうとした外處に谷口がツッコミを入れてくれたのは助かった。流石に馬鹿にもツッコミを入れる俺からは捌ききれん。

とまあ取りあえず、口実を作って逃亡を謀った小野川を襟首を掴む事で阻止。かなり面倒臭いが、俺達は学園祭の出し物を考える事となった。

……開放感無いわぁ……。

『何なんだ……さっきから……!?』

声が響く、真っ黒い空間。それが奇妙に歪んだり、赤黒く変色したり、はたまた明るい緑色へと変色したり、どことなく不安定な空間である事がうかがえる。だが此処は何処なのか。パラレルワールドに値する「世界」とは違う事は、確かなようだ。

その空間の真ん中に、赤い鳥……朱雀族の精霊、翔炎が浮かんでいた。だが、どういう訳かその表情は苦痛に歪んでいる。何か、見たくない物を見てしまったかのような。

錯乱する翔炎は、ただ叫ぶ。

『何なんだよコレは!?何で、何で”悠樹達”が……殺されてんだ!?』

――ソウルチップに刻まれし記憶……って言えば、分かるか？――

苦しむ翔炎の頭に突如響いたのは……くぐもった、声。

どこからともなく、頭に直接入り込むかのように声は、淡々と話し掛ける。

――っと、こうやって話すのは、お前にとっちゃ初めて……か？――

『何なんだお前は!?俺がハイドに捕らえられてから、突然お前の声が響いて……俺達の世界に戻ったのは分かったが、何故俺は此処にいる!?この精神世界に留まらせたのは、お前か!?』

どうやらこの不安定な異空間は「精神世界」と呼ばれる場所らしい。
声……何者かの意志によって、翔炎はこの「精神世界」にいるようだ。
どうやって自身の意志に反して、翔炎が何者かの意志によりこの「精神世界」にいるかは、不明だが。

問い詰められた何者かは……再びくぐもったような音質で話しを続ける。

――お前には知る義務がある。お前は精霊とはいえ、当時の「精霊界」の精霊の奴らに比べると若かった。更には、その仲間達を殺されちまったから詳しい事は分かっていない筈だ。勿論、アイツ……風牙も同じ筈だが――

『風牙の事まで……まさか、他の精霊も「精神世界」に!?』

――いや、他の精霊は単にまだ気絶しているだけ。精神世界に留まっているのは、お前だけだ。……何故かって?――

声の主は、先程とは違い……その声からは考えられないような、物凄く面倒臭そうな感じへと変わり、これまた面倒臭そうに答える。
……翔炎でも意味が分からないような単語を用いながら。

――どういう訳か<裏の世界の適合者>である俺の人格が、表の、しかも<主歴史の適合者>であるお前等のソウルチップに記録されちまったみたいだ――

『……裏世界?主歴史?』

その単語を聞くと同時に、この精神世界の色が赤く染まり、歪みが消え安定する。……どうやらこの空間は、翔炎の心境で様子が変化するらしい。少し、落ち着いて聞く気になったようだ。

……何者かが言う「知る権利」。自分は一体何を知らないのか、気になったからか。

その精神世界の様子を何者かも見たのか感じたのか、安心したようにホッと息を吐き出し、話し出した。

……声色を、段々と少年の物へと変えて。

段々と、声の主の姿を、翔炎の前へ現して。

――裏世界は、「世界の破壊者」や「麒麟」の影響で生まれた「欠陥の世界」であり、主歴史とは表裏一体の世界。俺もソウルチップの記録を覗いて分かったんだけどな――

――ま、これから話す事は、精霊にとって知っとかなきゃならない重要な事だ……耳かっぽじって良く聞いとけ――

『お前、は……！？』

「俺が主役だぁぁッ！！」

「うっさい黙れ馬鹿。」

「とゆーか、真剣に考えろ!!」

「サーカスに売り飛ばすぞってハナシ。」

……いつの間に視点が変わっていたのだろう。どの視点だったんだ一体。まーともかく、視点がこちらに戻ってきた所で。

あれから一時間経過したものの、ね……一応「劇やるか?」的な案が出たんだけどね。ロクな劇じゃないんだよなー。やはり小野川が提案しているからか。

浦島太郎って……小学生ですか俺等は。

「どう?少しは進展したー?」

……っと、良いタイミングで委員長がやってきた。見るかぎり……あちらは、もう作業が済んだようだ。

……こうなりゃ、この際だから疑問と不安をぶつけてやりゃあ。

……何故自分達のクラスは、他のクラスが行っている事をやっていないのか、を。

「……委員長、何故此処のクラスは別々でグループを作って出し物をするんだ?他のクラスをちらっと見たが……他のクラスは、一つに固まって屋台だったりとかだぜ?」

「……あなたがいなかったからよ。」

「何?」

「あと小野川君と秋元君。全員あの集まりにいて、全員が同意したら屋台とかを出す許可を貰えたのよ。ちなみに分かれて出し物をするのは、皆の意見を採用したもの。……あなた、寝てたから知らないでしょ？」

……あぁ、あの時か。

トランスの世界から形達がやってきた時、もとい世界を渡っていたディケイドこと士が、この世界から去った後。

……仕方ないだろう、かなり眠かったんだから。昼寝タイムを作るべきだ。

にしても、形達がこの世界から去ってから、何があったかは知らんけど色々と俺等意外の記憶が少し変わったよな。

主に……メイとの接触。気が付いた時には、アイツはいなかった事になってたからな。

……と、それはともかく。

「……じゃー委員長。今教員供に話せば大丈夫じゃないか？」

「今更は無駄。もう決定事項だから。」

だが、委員長は非情だ。いや、先生が非情なのかもしれないが。寝るべきではなかったのか。

そんな事を考えている俺を委員長は無視し、こちらの進展を聞いてきた。何をするかっつっても……

「一応……劇？」

「……何で疑問形？」

いや何でって言われましても。発案者が発案者なだけにちょいと微妙なんだもん。チョイスしている劇もなんかアレだし。やる気が出ない。

とか思いつつ、うーんと唸る委員長を眺めるのだが……ふと顔を上げた委員長は、こうもらした。

「……劇でも良いんじゃない？」

「何ッ！？」

「いや、何ッ！？じゃなくて……一応、受験する中学生よりも、遊びに来るような小学生の方が人数的には多いのよ。」

「……そりゃ、時期が時期なだけにな。」

苦笑いしながら、他三人に視点を戻すと……俺が主役だ！と叫んでいる小野川に対し、さも面倒臭そうな表情を露骨に浮かべている外處と谷口。

……劇、やっぱやなんだ。小野川が提案したからか、尚更か。

「おっしゃ、早速練習すっぞ劇ぃぃッ！！」

「うるせー小野川。永遠に黙れ。」

「……やる気が失せるってハナシ。」

「……つー訳で、何やるか決めた方が良いか？」

「今日中にストーリー自体は決めた方が良いんじゃない？」

と、委員長の提案が出た。

そんな訳で、やる事は決まったんだけど。

「……小野川いると、なんか……ね。」

「右に同じくー。」

「……更に右に同じく。」

「……どーゆー意味だお前等ぁぁッ！！」

「……元気よねーあなた達。」

冷静にさらりと言い放った委員長は、役目を終えたと言わんばかりにスタスタと去っていく。

……さて、この馬鹿はどうするか？

「ここは桃太郎でどうだ！？勿論俺が桃太郎で、他三人は犬猿キジ！！」

「……この馬鹿置いといて、別の劇考えようか。」

「賛成以外に選択肢は無い。」

「……異議無しってハナシ。」

「……お前等ぁぁぁッッ！！」

……この前と比べると考えられない程、うるさく騒がしい一日を過ごしていると……何だか、ギャップを感じる。

けど、気を緩めちゃいけない。

ハイドが放ってくるであろうガルドを、警戒せにゃならないのだから。

「……で、どうするんですか？」

「何がだ？ガリ勉女。」

「あなたのような野蛮な人には何も聞いていません。」

「……アオ、コイツぶん殴って良いか？」

「アオさん、この野蛮人を外の世界へ放り出しても良いでしょうか？」

所変わって、辺境世界。

会議でもするのであろう大きなテーブルを挟み、リョウとマナが、額にシワを寄せながら……近くのソファーで布団を羽織りながら横になっているアオを睨んでいる。
ちなみにアオの額には「冷えピタ」が貼ってある事を追記しておく。
そんなアオは苦笑いしながら……二人の怒りを鎮めようとする。

「……あのな、落ち着け二人供。こんな状況でも、事態は緊迫してるんだ。」

「……じゃーお前、コレはどういう意味だ？」

「何故、私達以外にメンバーがいないのですか？」

そう、二人が怒り、八つ当たりをしている理由。
この大きなテーブルに座っているのは……アオを除いた、たった二人だけだったのだ。
顎に手を当てながら、アオは説明する。

「……えーと、シュウはアクセルフォームを使用したとかで、全身筋肉痛。暫くは動けないだろ。ジャキは……中の牛鬼が暴れてるらしくて、今鎮めている。ケンゴさんは……『悪者を退治しにいく』とか言って、辺境世界番号０９５へ向かった。」

「……オイ待て。キャプテン・レックスの理由が意味不明なんだけど。」

「あの人は本々、カンが鋭い方です。何かがその辺境世界に存在するのでは？」

各々、結論づけたのだろう。ハーッと溜め息を付いたり、納得する

かのように額に手を当てる等様々な反応を取った後……真剣な表情になり、アオを伺う。
ソレを見て……アオも、真剣な表情になるのだが。

「……取りあえず、まずは……原離者捜索を、一旦中断する。」

「……は！？」

その言葉に声を上げて驚いたのは、リョウ。いや、マナも声には出していないだけで、表情は「何故？」と訴え掛けている。
予想通りの反応だったのだろう。アオはリョウを「どうどう。」と収め……話を続ける。

「俺達が今、やるべき事は……電王の原離者、桜井　光の容態確認……それとお付きの、ディアボロスイマジンへの納得のいく説明、だな。」

あぁ、と二人は納得する。
ディアボロスイマジンと呼ばれるソレは、彼等にとっては手の掛かる存在らしい。冷や汗をかきながら……つい、納得してしまう。
怖ず怖ずと手を挙げながら……マナは、何と無く気になった事を問い掛ける。

「……しかし、また襲って来たら……。」

……また。
何度かディアボロスイマジンと呼ばれる存在は、彼等に襲い掛かって来た事があるらしい。リョウも机に突っ伏しながら唸る。
……相当、手の掛かる相手のようだ。
そんな彼等に、アオはさらりと言い放つ。

「……怪我をさせない程度で応戦しろ。」

「「……へ？」」

しかし、アオの言葉にキョトンと、さも驚いたように二人は声を重ねながら驚く。

アオは真剣な表情のまま……話を続けるのだが。

「麒麟が目覚めてからまだ日が浅い。奴が何を仕出かすかも分からない。だから、今のうちに彼女を交渉をしないと危険だ。彼女を助けた意味が無くなる。」

「……戦いながら話す、とか？」

「あ、出来ればソレで。」

「……出来んのかよ、ホントに……。」

リョウは軽く頭を抱えるが……上手い具合に話を纏められ、マナと二人で廊下へと出る。

学校のような長い廊下が奥まで続いているが……所々にある部屋は、殆ど使われていない。人数の問題なのだろうが。

白塗りの壁に沿いながら二人は無言……というより睨み合いながら歩き、一番奥にある茶色の扉へと辿り着く。

フーッと深呼吸したリョウは、コンコンと扉を叩くが……中からは、返事が無い。

とはいえ、彼等も仮面ライダー。気配で中に誰かがいる事くらい分

かる。
身構えながらリョウはそーっと扉を開け……

「でやぁっ！！」

「うわっ！？」

中から出て来た「何か」の攻撃を転がりながらかわした。
その何かは、黒い異形。女の体つきに黒いマフラー。悪魔のような姿形をしている。更に、両手には……その異形の身長以上の大鎌が。
この異形こそが、先程話に出て来たディアボロスイマジンなのだろう。

「……相変わらず危なっかしいなコイツ……。」

「アンタ達は何が目的で此処へ連れて来た！？助けてくれた事には感謝するけど……正直、怪し過ぎる！」

「……あやしいってよ、ガリ勉女。」

「いや、あなたの事でしょう野蛮人。」

「ざっけんな、いつの間にか世界から拒絶されてヘコヘコとやって来た弱虫が。」

「あなたこそ、でかい態度の割に泣き虫ですよね？身内を殺された上に世界への拒絶。あぁそっか、泣かずにはいられませんよね。」

「……言ってくれるじゃねぇかテメェ……。」

ディアボロスのセリフはさておき、再び喧嘩に発展するのではないかと思う程二人は口論し始める。いや内容は明らかに気になる物なのだが。というより不毛だ。

「……ってオイ！聞いてるのかいアンタ達！？」

「うっせー黙れ失せろ。」

「その辺の隅っこで体育座りでもして待ってたらどうですか？」

ブチッ。

と、何かがキレるような音が耳に届いた時には、既に遅し。ディアボロスの額には怒りの四つ角が幾つも浮き出ており、大鎌を握る力も強くなっていた。

「……コロス……。」

若干片言だったのは何故だろうか。

その言葉が二人の耳に入った時には、ディアボロスの腰にはベルトが巻かれていた。

一つしかない大きめのボタンを押すと同時に、ターミナルバックルが黒く発光、まるで悲しみを連想させるような低い音程のミュージックホーンが鳴り響く。

その状態でディアボロスは、何処からか黒いカード……否、電車等の乗車の際に使用されるパスを取り出し、バックルにソレを翳した。

「……変身！」

『Ｌｕｃｉｆｅｒ－Ｆｏｒｍ』

電子音声が認識すると同時に、ディアボロスの周囲を黒い破片のような物が散らばるように舞い……それらがディアボロスの体に触れると共に、黒いスーツと鎧を生成していた。
黒いスーツに紫色の鎧。悪魔を連想させる仮面。首には線路を模したマフラーが巻いてあるが……そのマフラーの先は、線路を無理矢理引きちぎったかのような痕が残されていた。

多くの仮面ライダーを見てきた彼等でも、初めて見るライダーだった。

「やっぱ、コイツも原離者って訳か……。」

「そこのガキ、動くんじゃないよ。その首、簡単に体から外してやる。」

「……そりゃ嫌だな。」

冷や汗をかきつつもリョウは身構え……刹那、彼の周囲を機械昆虫……ゼクターが舞う。
ガティックゼクターと呼ばれるソレが、リョウの右手首に巻いてあるブレスレット型変身ツール「ライダーブレス」に斜めに接続、ソレを正位置に動かした。

「変身！」

『ＨＥＮＳＨＩＮ』

先程ディアボロスが変身した時とはまた音質の異なる電子音声が響き、紺色の鎧がライダーブレスから広がるように展開、構成されていく。顔をギラファノコギリクワガタを模した仮面が包み込み、複眼が発光する事で変身は完了した。

『ＣＨＡＮＧＥ－ＳＴＡＧ　ＢＥＥＴＬＥ』

仮面ライダーギラファ。
太陽の神・カブトを基に造られたヘラクス、ケタロス、コーカサスの後継機とも言えるマスクドライダーシステム。闘いの神・ガタックを基に造られた仮面ライダーだ。

「……！？その姿……大ショッカーん中で見た資料にあった……ガタック！？」

「近いようで遠いな。……おいガリ勉女、手伝え。」

「普段だったら全力で拒否していましたが……状況が状況なだけに、仕方ありませんね。」

物凄く嫌そうに表情を歪めたマナだったが……本当に仕方ない、といった感じで、先程から持っていた文庫本を近くのテーブルに置く。

すると、普段の彼女からは考えられないような、拳法を彷彿させる構えを取った。
両腕を交差させ素早く腰へ。その後左手を突き出し、手の甲を見せ

るように動かした。

すると、どうした事か。彼女の腰に、いつの間にか……青いベルトが巻かれていた。

風をモチーフにしたようなシャープな形をしたベルトは、待機音のような不可思議な音が響いている。

マナは、その体勢のまま呟く。

「変身。」

刹那、彼女の体を光が包み、周囲を風が舞う。

その姿は……黒を基調としたスーツに、青い鎧で包まれていた。

どこと無く龍を連想させる四本角に赤い複眼。その仮面からは今の彼女の表情は伺えないが、恐らく先程から嫌そうな表情から変わっていないのだろう。

このライダーの特徴は、変身。ディアボロスやリョウが変身した時とは、明らかに違う。ギラファの変身は身体へ「装着」とするならば、マナが変身したライダーの変身は身体を「変化」と表現すべきか。

「アンタは……アギトなのかい！？」

「ええ。あなたが知るアギトとはまた違いますが。」

「……おら、行くぞガリ勉女。」

「命令しないで下さい野蛮人。」

各々軽口を叩き合った後……二人のライダーは、ジリッと構えたの

だった。
詳細不明のライダー達の戦いの火ぶたは、切って落とされた。

「つっかれた……。」

放課後から約一時間後。腕時計を見ると４：１２。未だ冬は過ぎ去ってないが故に空は暗く染まりつつある。

……うっわ、寒ぃ。風なんて吹くなよチクショー。
とか何とか、体を貫く冷たい風を恨みながら通学路を進む。
……え、お前の事はどーでも良いから話を進めろと？分かった、分かったから。

結局学園祭に関しては……うやむやのまま、明日へと持ち越される事になった。つまり、後一日で劇の内容、台詞等を考えねばならんっつー訳だ。
いや、出来る訳無いだろうよ、そんな事。どーするか、当日休むか？
と、平和な頃の生活を思い出しつつ歩を進めていたら。

「グルルルル……。」

「……え？」

……決して腹が鳴った訳ではないぞ。低い、獣特有の唸り声。

ボーッとしながら下を向きつつ歩いていた為か「何か」が目の前にいる事に気がつかなかった。

警戒しつつ、ゆっくり後ろに下がりながら顔を上げると……。

「ッ！？」

いや、顔が上がる事は無かった。

何故なら……気付いた時には既に、俺の体は「何か」に吹っ飛ばされていたからだ。

視界が縦横にグルグル回る。何が何だか分からない。どう受け身を取るかさえも、この瞬間では忘れていた。

唐突に、背中へと走る激痛。その時の態勢から、俺は近くにある木製の壁に激突していた事が分かった。

頭がグラグラする。先程の回転のせいか、バランス感覚が若干吹っ

飛んだか。おお気持ち悪ぃ。
同時に、口の中から妙な違和感が。突如、鉄のような味が口に広がったのだ。言わずもがな、コレは血だろう。多少だけど、制服に垂れている。何時もだったらクリーニングがどーたらこーたら考えているだろうが、今はそんな状況じゃない。

バランス感覚が戻った事で、ようやく目の前の様子が分かる。
目の前には、三体の黒い異形……ガルドが。それぞれ狼、兎、イルカのような姿形をしている。名付けるならば「ガルド・ウルフ」に「ガルド・ラビット」、「ガルド・ドルフィン」か。

しかし、この三体のガルドは……俺が今まで変身し、戦っていた時の殺気と比べると、別物だ。いや、もしかしたら変身している時と変身していない時とで、感じる殺気さえも違うのか。
この感じは……初めてガルドに遭遇した時と、近い。当時の感情が蘇る。

恐い。死にたくない。

……いや、変身している時だって恐い時はあった。死にそうになった事だってある。
その度俺を支えてくれた相棒……翔炎がいたからこそ、周囲に俺と戦ってくれる仲間がいたからこそ、俺は戦い続けられたんだ。

だけど、今は誰もいない。相棒も、仲間も、みんな。
孤独のまま、俺はこいつ等に殺されていくのか。

……それも、良いのかもしれないな。俺は、元々なんの取り柄も無い一般人だったんだから。俺が適合者じゃなかったら、とっくに死んでいる筈だ。

けど、何故だ？
言葉ではこうも言えるのに、心の何処かで納得していない自分がいる。「まだ死んではならない」と叫んでいる自分がいる。
何故なんだ？
そんな疑問に呼応するように頭に浮かんだのは、幼き頃の記憶だった。
――ねえ、悠樹――
――何？母さん――
十年前だったか。その時の俺は、とある病室にいた。
目の前には、白いベットに横たわる女性……俺の、母親が。更には、そのベットの回りに白衣をきた人達が数人。
母さんの顔色は悪く、息も切れ切れ。重い病気によって寿命が縮められ、今にも「死」が間近に迫っていた。
だけど、母さんは笑っていた。とても幸せそうに、俺を見ていた。
何故死にかけているのに笑っていられるのか、そもそも「死」という物が良く分からなかった当時の俺に、母さんの気持ちなんて分か

る筈も無かった。

――あなたに、「友達」、は……いる？――

母さんは苦しそうに、それでも俺に分かりやすいように丁寧に聞く。
当時の俺には、その質問が良く分からなかった。「友達」と呼べる存在なんて、回りには多くいた筈だから。
けど、今になって考え直してみると……母さんが言っていた「友達」と当時の俺が認識していた「友達」とは、少し意味が違っていたようだ。

――悠樹が、もう少、し……成長、したら……分かる、かも、ね――

――「友達」、は、ただ遊び、合う、ものじゃ、なくて……互いの、事を、思い、やって……助け合う、もの――

――難し、すぎた、かな？――

あぁ、難しすぎた。あの時の俺だと分かる訳ないって、母さん。
……けど、今になって漸く分かった気がするよ。

――母さん……一人ぼっちは……嫌だよぉ――

――大丈夫、よ……その為に、「友達」、が、いるんでしょ？――

――探して、みなさい。時間はかかる、かも、しれない、けど……

「友達」は、きっと、すぐ側に、いる。……だから――

――諦めないで――

当時の俺には、母さんの最期の言葉である「諦めないで」を「友達を探すのを諦めないで」と解釈していた。……っつっても、ショックが大きすぎて中学までこの言葉を忘れていたんだけど。

けど、今は……何と無く、違う解釈が浮かんできたのだ。

「父親の後を追って死ぬ自分のように、自分の後を追って直ぐに死ぬな。」

……ぶっちゃけ「命を粗末にするな」って言いたかったのか？と思うんだ。もしかしたら、一人ぼっちになった俺は、自ら命を絶つのではないかと考えたのだろうか。

その答えが合っているか間違っているかは、正直分からないが……ふと気が付いたら、映像が途切れていた。ぼやけた視界に入るのは、三体の黒い異形。余裕そうに、ゆっくりと近付いて来ている。

一気に現実に引き戻された。そうだった、俺はかなり危機的状況に陥っている。逃げようにも、上手く足に力が入らない。口に広がる

血の味が、何とも不快だ。

だけど、諦めない。諦めたくない。諦められない。

「納得していない自分」が「弱気になっていた自分」を打ち倒した事で、必死に生にしがみつこうとする。

まだ、死ねない。アイツ等に何も言わずに、死ぬ事なんて出来ない。

霞河。

渉。

……一応、小野川（バカ）

……母さん。もしかしたら母さんの言う「友達」、見つけたかもしれない。「友達」がいるから、今まで俺は生きていけた。

そう思いながら、今は亡き親に伝えながら、俺はどうにか立ち上がる。

……それにしても、よく立てたな俺。

さて、今の俺の選択肢は「逃げる」か「戦う」だ。ポ○モンのようには上手くいかないだろう。傷だって増えるだろう。だけど、まだ死ねないんだ。

「戦う」にしても……あぁ、一応「響鬼の世界」の産物である音叉は、一応持っている……今の俺の状態じゃ、多少無理があるかもしれない。「逃げる」も、多少キツイ。

アイツ等に連絡すれば、どうにかなったのだろうが……何と言う事だ、先程の衝撃で俺のケータイはガルド供の近くに落ちている。

こうなると「戦う」しか無いのだろうか。これはキツイかもしれない。

多少の怪我を覚悟して、ポケットに入れてある音叉に手を伸ばした

が……。

『まだ立ち上がるか。面白い、実に面白いな、。』

唐突に、声が響いた。同時に俺の視界が、金色の光で塗り潰される。眩しくて、思わず目を塞いでしまう。

相手の力かとも考えたが……どうやらガルドも、俺と同じ状況に陥っているようだ。そこだけが救いとも言えるな。

そんな中、謎の光を発する存在は続ける。

『助かる可能性は限りなく低いというのに、未だ闘志が消えないか。面白い、面白いぞ、忌々しき「現在の朱雀の適合者」。久々に我は楽しめた。』

「……誰だ？」

『我は、麒麟と呼ばれているらしい。かつての四神により、永い間封印されていた、悲しき存在よ。』

麒麟と言うらしい存在は、時折笑い声を含ませつつ話続ける。光によって姿は視認出来ないが……雰囲気から、分かる。

……人間じゃない。

っつっても、なー……現在？四神って何だ？

「……お前は一体」

『おっと、貴様に発言権は無いぞ、小僧。我の話を聞き、それに答えるだけで十分だ。貴様の質問に答える気は無い。』

なんて我が儘なヤローだ。話くらい聞けや。

と、思わず口にしそうになったが……それより早く、麒麟は口を開いていた。

『小僧、貴様はこの状況から助かりたくは無いか？』

「何？」

『一人ではどうにもならないこの状況から、助かりたいとは思わないか？ならば、我が力を貸してやろう。あぁ、こんな気まぐれ滅多に無いぞ。我を楽しませてくれた、礼のようなものだ。』

「……一体、何を考えている？」

『貴様の質問に答える気は無いと言った筈だ。早く決めろ……我の気が変わらん内にな。』

悪魔の誘惑にも聞こえる提案。相手は本当に俺を助けてくれるのだろうか。

死にたくはない。だが、この提案に乗るかと問われると、微妙だ。

正直、胡散臭い。

だが、ガルド供はもうすぐ近くだ。迷っている暇は、無い。

……大丈夫だ。俺だったら、何とかなる。

「……今だけ、力を貸せ。」

『……良いだろう。』

ニヤリ、と相手はずる賢く笑った気がした。

が、それを確認する前に……俺の意識は、無理矢理吹っ飛ばされていた。

「……漸く、肉体を手にする事が出来た。」

いつの間にか、金色の光は消えていた。同時に、少年……波賀悠樹は、先程の怪我をものともせずに歩き出している。

視界も戻ったのだろう。三体のガルドは憎々しそうに悠樹を睨む。

だが悠樹は、普段の彼からは考えられないような口調で言い放っていた。

「寄るな、化け物供が。」

その声には重みがあり、聞く者を戦慄させる。三体のガルドもビクッと体を震わせ、足を止めていた。

ソレを見てつまらないとでも言うように、悠樹……否、悠樹に取り付いている存在は、一人呟く。

「大ショッカー、と言ったか。我の封印を解いた輩も、その一人、か。まったく化け物製造といい、世界の理を破壊するような事を。いや、我も暇潰しに分岐世界を破壊しているから、他人の事は言えんか。」

どことなく楽しそうに呟く取り付いた存在は、目だけは油断無くガルドへと定めていたが……その目からは、見下すような視線がガルドを貫いていた。

動けないガルドを見て、取り付いた存在……麒麟は、不気味な笑みを浮かべる。ふと気がついた時には……彼の腰に、白いベルトが巻かれていた。

翔炎が変化した時のソレとの違いは、色だけではない。白いソレには、スライドカバーに文字が刻まれていなかった。

翔炎達精霊が変化するバックルのスライドカバーとカバーに隠れている部分には、それぞれの属性の文字が半分刻まれているのだ。例えば烈火の場合、スライドカバーには「火」の文字の左半分が、隠れている部分には「火」の文字の右半分が。

しかし、白いバックルには属性を表す文字すら刻まれていない。何か、意味はあるのだろうか。

麒麟のプレッシャーの中、ガルドの一体……ガルド・ウルフは、意を決したかのように飛び掛かった。それに続き、残りの二体も飛び掛かる。

「良いぞ、我を楽しませろ。我に本気を出させてみろ。」

麒麟はその相手の行動が面白かったらしく、軽く声を上げて笑う。
驚く様子もなく、流れるような動作で右手でカバーをスライドさせた。

「変身。」

刹那、今まで一番強烈な光が、辺りを包んだ。

第四十二話：目覚め（前書き）

……今回は珍しく、一貫して第三者視点です。途中、ちょびっと誰かさん視点が入るだけです。
その辺をご了承の上で、どうぞ。

第四十二話：目覚め

霞河家

「ふーうがーッ！！」

『痛い痛い、止めろ舞、苦しい！！』

霞河が学校から帰宅すると、今まで意識不明だった精霊、風牙は目を覚ましていた。
このまま二度と起きないのではと、最悪な状態すら考えていたのだから、風牙が目を覚まして嬉しいのだろう。目に少し涙を溜めていた。

「風牙ー……」

『分かった。分かったから離れろ苦しい』

「水臭いなーもー。もうちょっと」

『止めろ、ちょ、首、しまるッ！』

「あ、ゴメン」

流石にやり過ぎたか、風牙は顔を青くしてのたうちまわる。ソレを見てやっと、霞河は離れたのだった。
ぜーぜーと呼吸を繰り返す風牙を見て、霞河は心配そうに声を掛ける。やはり長い時間寝ていたのだから、体に異常があるのではないかと不安になったからだ。

「風牙、体とか大丈夫？」

『あぁ、大丈夫だった、先程までは』

「……だから謝ってるじゃん」

先程とは一変、冷めた目で風牙を睨む霞河だったが……あぁそうだと、風牙に尋ねる。

「前々から気になってたんだけどさ……聞いても良い？」

『……何だ？』

ずいっ、と風牙の目の前まで顔を近付けた為か、若干びっくりしつつも冷静に返す。

……何故か威圧感を放つその体勢のまま、霞河は話し出した。

「風牙って、何者？」

『……私は青龍族の精霊、風牙。それが何だ？』

「いや、それだよ！」

『？』

何処の事だ？　前々から自分の事は話した筈だが？

風牙の頭に幾つもの「？」が浮かんだが、構わず霞河は続ける。

「せいりゅーぞくとかは、今は置いといて……精霊って、何なの？」

『……ッ！！』

「他の世界へ移動したり、なんか膨大なエネルギー持ったり、変なオッサンが狙ったり……なんだか、私が思っている以上に凄い存在だと思うんだ、精霊って」

後もう一つあるんだけど、と霞河は続ける。

「もう一つは、パラレルワールド。特にパラレルワールドに関しては、他のライダーも知ってたから深く考える事は無かったけど……アレって、正しくは“もしもの世界”でしょ？　もし自分が別の服を着ていたら、もし自分が今とは別の学校に行っていたら、もし自分が……この世に存在しなかったら、とか」

『……』

「けど、私が今まで渡ったパラレルワールドは、そんな物じゃなかった。今まで廻った世界は……もしかしたら“もし別の仮面ライダーがいたら”って世界だと思うけど、此処は“仮面ライダー”って名前すら使われてないからさ。なんか気になっちゃって」

『成る程』

霞河が言いたい事が伝わったのか、軽く頷く風牙。その瞬間、頬を風が撫でた。

部屋中を風が舞い、近くの机の上に置いてある本のページがパラパラと動く。青っぽい髪が風に撫でられ、思わず手で髪を押さえる。

彼女にも何と無く、事の重大さが伝わってくるようだ。それを認識したか、気を引き締める。

いつになく真剣な表情をした彼女を見て、風牙は意を決したのか…
…話し出した。

『……私にも分からん』

「……えエエエッ！？」

沈黙。そして。

絶叫。
まさかの予想を遥かに裏切った答えに、霞河はのけ反りながら絶叫。
近くにあった彼女の机に頭をぶつけたが、それどころでは無い。

「え、ちょ、知らないって、え！？」

『……私が物知りだと思ったら大間違いだぞ』

違うんかい。今までの情報通は何だったんだ。
ツッコミたくなったが、驚きの方がソレを上回り、あわあわ口が上手く動かない。

その様子を呆れたように、風牙は眺めるのだが。

『驚き過ぎだろう。何故そこまで驚く？』

「いやいやいや驚かなかったら逆にビックリなのだよ風牙さん。まさか君にも知らない事があったなんて……」

『仕方ないだろう。精霊界をガルドが襲う前の我々四体は、精霊の中でも一番幼かったんだ。人間で言うなら5、6歳程度か』

「何、その頃から流暢に言葉話してたの!?　そんな5才児って腹立つね！　嫌味!?　私に対する嫌味!?」

『なんでそんなにヒステリックになる？』

何故か霞河、半分涙目で声を張り上げている。どれだけ予想外だったのか。風牙が知らない事があるのが認められないのか。

少しだけ顔をしかめた風牙だったが……唐突にあぁ、という声を上げた。

「……何？」

『絶対に分からないとは言い切らないが……絶対に分かるとも言い切れない話を思い出した』

「何その曖昧な情報。君らしくもない」

『仕方ないだろう。私が2歳頃に聞かされた話だからだ』

「2歳児に語る事って完全に幼稚な話じゃない!?　ていうか覚え

ているの!?　それ以前に君って何歳!?」

『何気に失礼な事を言うな、舞。この数日間何があった?ちなみに私は人間で言うなら１８歳だ』

「年上!?　私より年上!?」

何だか何時も以上にツッコミを入れる一日だな、と一人霞河が考えたが、風牙の話を聞こうと思考を変える。流石に幼い頃に聞かされた事とはいえ、聞くのと聞かないのとでは全然違うだろう。

「という訳で、一応聞かせて下さい風牙さん」

『いきなり丁寧語か。年上がそんなにショックだったか』

まあ良いか、と若干投げやりになった風牙は……昔の記憶を辿るように、話し出した。

『……昔々、ある所に』

「昔話ッ!?」

ついまたもやツッコミを入れてしまった。彼女らしくない、本当に

何があった？　いや、内容的にツッコミを入れたくなる気持ちは分からなくも無いが。
変な物でも食べたか？　と不安になりつつも、風牙は冷静に口を開く。

『ツッコミは止めろ。キリが無い。本当に何があった、舞？』

「大丈夫、何も無い。梓の「滅多に無い体験だから着ちゃえ、絶対に似合う！」って助言でノリでメイド服をつい着ちゃって、着終わった後に物凄く恥ずかしくなった事以外は何も無いよ」

『……本当に何があった』

思わず同じ言葉を二度続けて呟いてしまう。何だか本当に彼女の事が心配になってきたが……話はまだ始まったばかりだと言う事を思い出し、話を戻す事にした。

『ある所に……何もない真っ白な所がありました』

「どんな所ッ！？」

『……ある時、そんな所に神様が現れました』

霞河のツッコミに関しては何も考えずに話を進める事にしたのだろう。淡々と昔を思い出しつつ語る。

『……神様はその白い所で、黒くて丸い物を作り出しました。後に「次元宇宙」と呼ばれる物です。その次元宇宙に神様は一つの……初めて世界を作り出しました。それが私達がいる「精霊界」なのです。

神様はどんどん世界を作り出していきます。私達とはまた別の生き物、人間が住む世界。陸地が存在しない海だけの世界。逆に海が存在しない陸地だけの世界。命ある者は、皆は幸せに暮らしていました。

とはいえ、神様一人で総ての世界を見て回るのはとても難しいのです。そこで神様は精霊界で、自分の分身を作り出しました。朱雀の「炎鳳凰」、青龍の「疾風竜」、白虎の「迅雷虎」、玄武の「氷蛇亀」……そう、私達の御先祖様です。御先祖様達は神様をお手伝いする「四神」となりました。

神様は御先祖様に、場所事に世界を見て回るように御先祖様達に命令しました。

御先祖様達は黙々と仕事をします。ある時には精霊が見える人間達と触れ合ったりもしました。

しかし、とある時にある世界に悪さをする人達が現れました。なんと世界征服を狙い、人間をさらって怪物にしてしまうのです。

しかし、怪物にされかけたとある人が逃げ出し、戦士として人々を守り、悪人達を倒しました。

「仮面ライダー」と呼ばれる戦士の誕生です。

仮面ライダーは、人間ではどうにもならない悪人が現れる一部の世界で、その悪人を倒す為に現れます。作り出した世界と比較すると少ないものの、どんどん仮面ライダーの世界が現れました。

世界を護る為に悪人と戦うその姿を見て御先祖様達は感動し、自分達も、力を持たない善良な人間達に力を貸したいと思うようになりました。

そんな時、ある世界で突如異形の集団がが現れ、危機に晒されていました。
御先祖様達はその世界の人間達に力を貸して、共に異形と戦いました。そして、長い時間を経て異形の集団を倒しました。
その時に貸した力は、自分達から見た「仮面ライダー」という存在を反映した物らしいのです。この姿は、今でも受け継がれています。

ある時、御先祖様達が仕事を終え、精霊界に戻った時……神様は、言いました。

「……世界を破壊したい」

と『

「いやいやストォップ！」

いきなりの衝撃発言に絶叫。霞河の絶叫には、流石に今回は彼にも分かるらしい……風牙も、どこか分からないという表情をしている。

「何で！？　何で自分で作った世界を破壊しようとするの！？」

『幼い頃の私も、コレには良く分からなかった……だが、最近になって思うんだ』

「何、を？」

『考えてみろ……ここで語られる「神」は、何の為に世界を造りあげたんだ？』

風牙の言葉に、唸りながら考え込む霞河。彼が語っていた昔話を、新しい記憶から辿ってくと……一つの結論にたどり着く。

「……言って、ない？」

『そうだ。この昔話には「神」が何故世界を造り出したか、という理由が無い』

「え、でも、昔話だからじゃない？　子供に聞かせる程度の」

『私も考えすぎだろうとは思っていた……が、私達が捕らえられていた時に、ハイドと名乗る元大ショッカー幹部の男が、こう言っていたのだ』

――君達の神とも言える存在……“麒麟”は、作り出した世界に飽きて、全世界を暇潰しの代わりに破壊を考えた。……ディケイドより質が悪い存在だな

「暇潰し……！？」

『あの男が言う事だ。何処が正しく、何処が間違っているかなど、私には分からない。
麒麟というのは、恐らく昔話で言う神の事だろう。精霊は……世界を管理する存在だったという事は、確かだ』

スケールがデカすぎる。

……霞河の率直な感想だ。

何よりも、自分の相棒ともいえる、力を貸してくれた小さな龍が……世界を管理する存在だなんて、想像すら出来ない。正直、今でも信じがたいけど、相手が風牙だから何故か納得してしまう。

……そう考えると、あの残りの三体も同じ立場にあると考えられるのだろう。同時に、苦笑いもした。

……爪雷に世界を管理する事が出来るのか、という失礼な考えが出た為か。

『……とはいえ、説明するには私の情報だけでは足りないな。他の三体に聞けば、何か分かるかもしれない』

「え？　翔炎達も知ってるの？」

『奴等も、私と同年代だからな。何か知っていても、おかしくは……ッ！？』

……どうしたのだろうか。

風牙は突然言葉を途切らせ、驚いた表情で息を呑んでいる。彼を纏う風は、どういう訳か激しくなっていた。

先程よりも、深刻な様子が伝わってくる。

「えと、風牙？どうし……ッ！？」

『精霊の、気配……！？』

精霊は、互いの存在を伝えるかの如く、何処の場所にいるか等の疎通が可能だ。

だが、風牙は分からなかった。

精霊は自分を含めた四体。他の三体の存在は既に分かっている。

だが突如、自分の知らない”五体目の精霊”の気配を感知したのだった。今まで感じた事も無い、精霊の気配を。

『……まさか、これが麒麟!?』

風牙のただならない反応に、霞河は息を呑む。どういう訳にか彼女にも、訳の分からないプレッシャーのような何かを、風牙の反応と同時に感じていたからか……尚更、不気味に思えてきた。

『舞、変身だ！　今すぐ向かうぞ!!』

「うん。手っ取り早く行こう」

いつになく真剣な表情で、霞河は頷く。バックルへと変身した風牙……レップウバックルとも言えるソレを腰に当て、ベルトとして装着する。

ベルトになったと同時に、左腰に現れた円形のホルダーから一枚のチップ……ソウルチップを取り出し、バックルの左側に装填した。

『Ｓｙｓｔｅｍ　ｌｏａｄｉｎｇ……ｓｔａｎｄｂｙ』

久々に聞く電子音声を確認しながら、「風」の文字の左半分が刻まれたカバーを右側へとスライドさせる。隠れていた「風」の文字の右半分が露出し、カバーの文字と繋がる事で「風」の文字は完成した。

「変身！」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

電子音声が告げると同時に「風」の文字が浮き出るかのように投影され、弾け飛ぶ。それらは球状のエネルギーを作り出し、霞河の体を包む。

球状のエネルギーによって黒いスーツを構成し、霞河の姿を人間から離れた者へと変えていく。エネルギーが消滅し、風が彼女の身を纏うように吹く事で翠色の鎧を構成した。

青龍族の子孫・疾風竜の姿をモチーフにした、風の精霊の力を司る戦士・仮面ライダー烈風へと変身した霞河は、再びホルダーからチップを取り出しバックルの上部に装填する。

『Ｔｅｌｅｐｏｒｔ』

アタックチップ・テレポートの効力により、自身の体は風になったかのように揺らめき……部屋から、その姿を消す。

突然現れた”五体目の精霊の反応”を頼りに、風となって瞬間移動を行い、謎の精霊がいる場所へと辿り着いたかを示すように、その姿を烈風のものへと戻した。

視界に入ったのは、少し雑草が生えている空き地。すぐ側には、土管が三つ積み重ねられ横たわっていた。

「此処って……確か二丁目の空き地だっけ？」

霞河はキョロキョロと周囲を見回し此処の様子を確認するが……その途中で、視界の隅に人影が映った。

その正体は、霞河もよく知る人物である訳で。

「悠樹くん！？」

自分と同級生で同じ仮面ライダー・波賀悠樹が、何故この空き地で立っているのか分からなかったが、恐らく此処にいたのならば“五体目の精霊”とも接触しただろう。
そう思い、走って近寄ったのだが。

「……ほう？　“現代の青龍の適合者”か。やけに懐かしく、そして忌々しい格好をしているものだな」

「！？」

彼女の知る波賀悠樹とは思えない、今まで聞いた事も無い口調で、目の前の”波賀悠樹”は呟いた。
彼から感じる気配は、どういう訳か先程感じた五体目の精霊と同じ。
だからこそ、何が起こっているのか分からなかった。
いつもとは違う悠樹の気配を感じ取ったか……風牙は叫ぶ。

『……まさか、貴様が麒麟なのか！？』

「よく分かったな、現代の青龍。やっとの事で体を手にしたが……やはりこの餓鬼は、神の器には程遠い」

刹那、悠樹の体が光り始め……金色の閃光が、視界を塗り潰す。

眩しすきて、何も見えない。思わず、腕で顔を覆ってしまう。

『暫くは、世界を廻るとしようか。我に見合った、器を見付けるまではな……』

麒麟と思わしき存在の言葉が途切れたと同時に、光が収まった時には、いつの間にか悠樹の体は地面に横たわっていた。同時に、麒麟らしき存在がいた時に感じた、妙なプレッシャーも消え失せていた。

『……この世界から消えたか』

「あのさ、風牙。なんか急展開すぎて頭が追い付かないんだけど……早く悠樹くんを連れて、戻った方が良いよね」

『……何故だ？』

風牙の疑問は、すぐに解消される事になる。

……周囲から、人の話し声が聞こえるのだ。それも、段々と近付いている。恐らく先程の光に反応して、気になったのか野次馬達が近付いているのだろう。流石にこの姿を見られると厄介だ。

「警察のお世話になりたくないよ……。というか、捜査ってまだ続いてるの？」

『慌てるな、舞。テレポートの効果は続いてる。悠樹は精霊の適合者だ、多少姿は見られるかもしれないが……彼はテレポートで連れていける』

「……悠樹くん、大丈夫かな？」

気絶している悠樹は気になったが……まずは、此処から移動するのが先決だ。そう思考が回った時にはテレポートの効果が発動していた。

霞河……烈風の姿が風へと変化し、悠樹の体を包む。そのまま高速で移動し、この空き地を後にしたのだった。

――おいアオ！？子供が倒れてるぞ！？

あれ？

……今の、誰の声？

確か私って、仮面ライダーに変身して……。

――まさか、この子が原離者か

――かなり若いですね。そういえばこのイマジンも、見た事がありますけど

――悪の組織、大ショッカーのイマジンだろう。だが、裏切って正義の為に戦うとは……素晴らしい！

――けど、この世界は酷いや……苦しんでる。映したくもないよ

誰だろう、この人達。もうこの世界に、人はいない筈なのに……。

――よし、二人共生きているようだ。急ごう、この世界も限界だ……早く連れて行くぞ

――……アオ、この子……波賀悠樹、は……？

お兄ちゃん？
そっか……お兄ちゃんも、すぐ傍にいたんだっけ……。

――無駄だ、ジャキ

――この世界の波賀悠樹は、既に死んでいる

え？

……死んで、いる？

嘘だ、そんな筈は、無い。悠樹お兄ちゃんが、今まで私を護ってくれた、お兄ちゃんが……。

――……アオ、その子……

――泣いてますね。意識はあるのかも

――こんな子供にも、僕たちと同じ運命を背負わせるのかい？　この先はもっと、辛くなるのに

――今麒麟の事を考えないと、取り替えしのつかない事になる。正直、今の人数でも足りないくらいなんだ……厳しい現実だが

――急ごうぜ。早くしねぇと、俺達まで滅びの現象に巻き込まれる

――この子は“皆を護る”という正義を下に、よく戦った……最後は、敬礼しようではないか

嘘だ。

嘘だ嘘だ嘘だ。

悠樹お兄ちゃんが、死んだなんて……。

「嘘だッ！！」

意識が覚醒する。
同時に視界が暗転し、別の光景が目に映る。

白い個室。
小さなテーブル。
その上に置かれた、カバーが付いている文庫本。
すぐ後ろには窓。暖かい日光が、そこから差し込んでいる。

自分は、真っ白なベットに横たわっていた。

「……夢？」

いや、そんな筈は無い。
何故なら此処は、自分の知らない場所なのだから。

ならば、これが夢？
それも無い。それだけは、実感できる。

「……ッ！？」

突如響く、金属音。
音の発生源を見ると、そこには開け放したままの扉。そこから見えるのは、向こう側の白塗りの壁。どうやら廊下へと続いているらしい。

「ディーア！？」

自分の相棒……いや、友達とも言える存在を思い出し、ベットから飛び出し扉へと向かう。

部屋から出ると、右へと廊下は続いていた。更に視界に入るのは、三人の、仮面ライダーの姿。
内二人は見た事が無かったが、一人は自分もよく知っている。大ショッカーから奪ってきたというベルトで変身した、ディーアの姿だ。見るからに二人のライダーに、苦戦している。ように彼女からは見えた。

嫌だ。
誰かが傷付くのは、もう嫌だ。

「……止めて！」

無意識の内に、少女……桜井　光は、ディーアの下へと走り出していた。

第四十二話：目覚め（後書き）

……うーわ中途半端。何この微妙な終わりかた？

……新年早々すみません。ぶっちゃけ、新年明ける前に投稿したかったんですけど……クソッ、間に合わなかったか（言い訳）

とゆー訳で。

新年明けましておめでとうございます。

今年も色々やらかすとは思いますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

それでは。

第四十三話：極端な正義・極端な害悪

波賀と霞河が厄介な状況に陥っている時。

「……なぁ、渉」

「何？　小野川君」

時を同じくして。

「……俺さ、思いッきりツッコミ入れても良いか？」

「別に構わないけどさ」

小野川・秋元の二人は。

「……何ッで俺は、お前の重てぇ荷物まで持たされてるんだよ！？」

……至って何時も通りだった。

何時も通りでは無い事といえば、小野川は学校に持っていく時のカバンの他にも、中身がパンパンに詰まったカバンも背負っていたり、両手には沢山の本が入った手提げ袋を持っている点だろうか。

何故か渉には荷物が見当たらない。持っている物といえば、カバーで被せられた本くらいだろうか。どういう訳か、小野川は“二人分”の荷物を持っていた。

「何でって言われてもさ……計画性のカケラも無い小野川君が“ジャンケンで負けた方が荷物持ち”とか意味の分からない小学生レベルの事言い出したからでしょ？」

「いや、だからさ……今まで五回もジャンケンした！　だが！　何故、五回も俺が荷物を持っているんだ！？」

「……単純にジャンケンに弱いからじゃない？」

非常にくだらない内容だった。

小野川は渉の正論に何も言い返せず、ただ歯ぎしりするだけ。ついに苛々したような声を出しつつ手提げ袋を地面に叩き付けた。

「だぁクソッ！　もう一回だ渉！！」

「……良いけどさ、君には“諦める”って選択肢は無いの？　そうすれば、自分の荷物は自分で持つし。それと、その手提げの中って借りた本だから乱暴に扱わないで」

「うるせェッ！！　勝ち逃げなんて許せるか！！」

パタンと本を閉じた渉は、面倒臭そうに小野川と向かい合う。

「ジャーンケーン！　ポォォン！！」

小野川はジャンケンでは滅多に見られない気迫でグーを出した。

「……ポン」

渉は渉で面倒臭いと言わんばかりにチョキを出す。

「あっち向いて！　ホォォイ！！」

ずびしっ、と小野川は人差し指を右へ向ける。

「……」

渉は無気力に左へ向く。

「チッ、読みが甘かったか……ならばもう一回！　ジャーンケーン！　ポォォン！！」

小野川は勢い良くチョキを出す。

「ポン」

渉は気だるげにグーを出す。

「あっち向いてホイ」

「うぐふっ！？」

渉は指を上へ向け、小野川はソレにつられるかのように上へと向いてしまった。

……結果的に、小野川が負けた訳だ。

「じゃ、後もうちょい頑張ってねー」

「何故だ、何故負けた……。そして渉、お前中指で上に向けたろ、さりげなく本音暴露したろ」

「うるさいな、黙っててよ。いまワトスン博士がホームズとモリアーティ教授がライヘンバッハの滝から落ちたのを知った所なんだか

ら」

「な、何だと……まさか渉、俺をそのメルヘンバッハの滝から突き落とそうと考えているな！？」

「メルヘンじゃ無いから。何その天使とか飛んでそうな滝の名前」

ギャーギャーと声を出す小野川を軽くあしらう渉。本当に、何時も通りの光景。

――平和だなぁ

ふと本から目を離し、空を見上げる。雲一つ無い青空は、どこまでも続いている。まるで、今の平和な日常を映し出しているかの様だった。

「本当に平和だよねー」

「あぁ、平和だな！　俺がこんな大量の荷物を持ってさえしなければな！」

「……あぁ小野川君。そういえば居たんだっけ」

「忘れ去られてるーッ！？　まさかの平和ボケに俺という存在が抹消されたーッ！？」

「よくそんな重い荷物を持った上にデカイ声出しながら歩けるよね。君の体力って底無し？　そして、言葉の意味はちゃんと理解して使おうね」

「……涉……お前はどんな状況でも、その性格は変わらないんだろうな……」

「褒め言葉として受け取っとくよ」

あぁ、いつも通りだ、怖いくらいに。今までの現実離れした日常が、まるで夢で見た出来事のように思えてしまう。

――けど、夢じゃないんだよなぁ

ふと、本に目を戻す。そのとあるページには、滝から落ちる二人の男が画かれていた。

この絵のような非日常は、暫く見ない。まるで自分達に、休憩でもしろと言わんばかりに感じる。いやまさか、隙を付いて敵が来るのかもしれない。

そんな考えが頭に過ぎりつつも、涉はいつの間にか本の文字を読み進めていた。

――こぉんの野郎……

小野川は、内心怒り狂っていた。いや、いつもキレている彼だが、彼にとって今回のは人生でトップ5に立つ程の怒りらしいのだ。どーでも良いが。

何故、自分はこんなに苦しい思いをしなければならないのだ。何故、自分はこんなに運が悪いのだ。神様のバカヤロー。

普段だったら荷物なんて投げ捨て、相手に殴り掛かっているだろうが、残念ながら荷物の持ち主は涉だ。そんな事をしたら自分はどう

なるのか、火を見るより明らかだ。

――あぁぁぁぁッ！　何で俺はこんな状況なんだ!?　空はこんなに青いのにぃッ!?

内心は絶叫の連続。雲一つ無い青空に心の中でシャウトする。だが、そんな彼にも虚しく風が吹き付けるだけ。通り過ぎ行く人達は「何アイツいかにも叫びそうなポーズしてんの」と言わんばかりに見つめていた。

――畜生、ホントに雲一つ無ぇや！　俺をけなしてるのか!?　クソ、別に波賀が飛んできたって、俺の心は晴れやしな……

自身の言葉に違和感を覚え、心の中での絶叫が途切れる。ふと、視界の端から一瞬にして、何かが横切ったように見えた。
いや、何かではない、人だ。
いや、人は人でも。

「……波賀ぁッ!?」

彼の友人である波賀が、襟首を何か見えない物に引っ張られるかのように、猛スピードで空を突っ切っていた。

「波賀が飛んでるぅぅぅッ!?」

「うるさいなー小野川君。君の眼球はアテにならないから黙って」

「いやいやいや、だってさ今波賀っぽい何かがなんか気絶してるっぽくて動かなくてなんか見えない何かに空で引っ張らぶッ!?」

まくし立てた言葉の数々は、渉による本のビンタによって唐突に中断された。ビンタの威力はそれほどでも無かったが、渉を纏う謎のオーラは、ドス黒く歪んでいくのが何故か小野川には見えた。

「落ち着いて話そうか、小野川君？」

「……ハイ、そうっスね……マジすいませんした」

物凄く笑顔で諭す……否、脅し付ける渉に、小野川は顔を引き攣らせるのだった。

あぁ駄目だコイツ。目が笑ってねぇ。言う事聞かないと、命持ってかれる。

実際、友人同士なのだから命云々の問題に発展する訳が無いのだが、小野川には考えてしまう程に渉は怒っていたのだった。

「……で、ソレは何処へ行ったの？」

「え？　あれ、もしかして渉、信じてくれr」

「何・処・へ・行っ・た・の？」

「かい摘まんで説明させて頂きますカイザー渉様」

駄目だコイツ。

通り過ぎ行く人々は、小野川に対して一斉にそう思ったという。

「で、あの方向に波賀君っぽい何かが飛んで行った訳だね？」

「その通りでございますです渉様」

「……どーでも良いけど、道端で土下座してて恥ずかしくないの？」

地面に頭をぶつけつつ土下座しながら報告した小野川に、流石にやり過ぎたかと苦笑いする渉。頬を掻きつつ、波賀っぽい何かが飛んで行ったであろう方向を見据えた。

そういえばと、渉はふと考える。

「……確かあっちって、波賀君家の方向だよね？」

「え？　あ、そーいやそうだな」

「よし。小野川君、念のために波賀君家に行ってみよう」

「えー！？　何でだよ、渉ん家はもうちょいなのに、波賀ん家だともっと歩くじゃねーか！　この重い荷物いつまで持てば」

「行くよ？」

「……サー・イエッサー」

渉に脅されながらも、小野川は重たい荷物を引きずりながら従うのだった。

「……何処だぁ？　此処は」

男は、ふと目が覚めると、自分は何処かの洞窟に横たわっていた。
そこから見える景色は、此処は本当に地球なのかと疑問に思ってしまう程に荒れ果てていた。
建物やビルは無い。見渡せるのは、大地だけ。舞うのは砂塵ばかり。
空は曇り、青空を塗り潰している。
ただそれだけ。この世界に人は、自分しかいないのではと錯覚してしまう。

「俺は確か……ミラーワールドにいた筈……」

「そう、お前は俺達が連れて来た」

「……あぁ？」

男が振り返ると……背後には、自分より年上であろう男が自分を見下ろしていた。
やさぐれている。それが第一印象だった。相手はニヤリと笑いつつ自分に語りかける。

「無事に目が覚めたようだな、兄弟」

「……オイ、俺に兄弟はいねぇぞ？　つーか、お前死ぬか？」

「止めときなよ……アンタじゃ兄貴には勝てない」

ふと気が付くと、洞窟の奥からもう一人の男が現れた。この男は自分より年下か。唯一の共通点は、この男もやさぐれている、という事。

何だコイツ等、俺に殺されたいのか。

男・朝倉タケシは、訝しそうに彼等を睨みながら、ズボンのポケットからゆっくりと灰色のカードデッキを取り出すが。

「無駄だと言う事は分かっているだろう？」

「……チッ」

そう、此処には“反射物”が存在しない。存在する筈が無い。たとえ存在していたとしても、契約モンスターはいない。勿論、ブランク体のままでも人間より高い身体能力を得る事は出来るだろう。だが、ブランク体のままでは勝てない。何故だか朝倉の本能が告げていた。相手はただの人間じゃない。そう思ってしまうのは何故か。

「……まぁ、まだ頭が混乱しているだろう。水でも飲んで落ち着け」

「兄貴ィ、何でソイツに構うのさ？　闇を見ているにしても……ソイツは危険すぎる」

「危険であるくらいが俺達にはお似合いなのさ、相棒。この男は、既に闇の住人……拒む理由は、俺達には無い」

兄貴と呼ばれていた男が手にしていた水筒が、朝倉に投げ渡される。片手で上手く掴み、ソレをボーッと見つめているもつかの間……唐突に、嫌な気配がした。

何と無く自分に近い、血を何度も浴びたような気配が。だが、自分

よりソレは濃く冷たい。根拠も無いのに、何故かそう感じてしまった。

「兄貴」

「あぁ……来たな」

だが、朝倉の気のせいでもなかったようだ。やさぐれた二人組も、何かに反応している。やはりこの二人も、ただの人間ではないと朝倉は確信する。

そして。

『ＨＹＰＥＲ　ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ』

唐突に外から、高めの電子音声が響いた。

空間がグニャリと歪む。そこから、黒い装甲を身に纏ったカブトムシのような“仮面ライダー”が現れた。

腰に付いていた銀色のカブトムシのような機械が消え、装甲も若干簡素な物になってしまったが、黒いカブトムシは気にせず、やさぐれた男二人組を見据えていた。

「やっと見つけましたよ……巴ソウ、御影シュン」

「何の用だ、日下部ェ……？」

「いえ、たいした用事ではありません。あなたがた二人を始末するように命令されているだけです」

「ははっ！　ネイティブを統率する一番のお偉いさんが、あんな野

郎に従うとはな！」

「なんとでも。ハイパーゼクターさえ私の手に渡れば、後は用済み。その為にも、あなたがたには死んで頂きます」

「出来るのかよ、俺達兄弟を……？」

突如、生き物の気配さえ感じないこの場へ、何処からか二つのバッタ……否、バッタ型の機械が跳びはねてきた。片面が緑、もう片面が茶色という変わった配色のソレ・ホッパーゼクターを手に取り、兄貴――巴が緑の面を、相棒――御影が茶色の面を、それぞれ向けつつベルトにセットした。

「変身……」

「変身！」

『『ＨＥＮＳＨＩＮ』』

二人の言葉を復唱するかのようにエコーのかかった電子音声が告げる。同時に二人の体が、ヒヒイロノカネと呼ばれる金属で構成された鎧に包まれていく。

『ＣＨＡＮＧＥ－ＫＩＣＫ　ＨＯＰＰＥＲ』

巴は、緑色を基調としたバッタの仮面ライダー・キックホッパーへと。

『ＣＨＡＮＧＥ－ＰＵＮＣＨ　ＨＯＰＰＥＲ』

御影は、茶色を基調としたバッタの仮面ライダー・パンチホッパーへと、それぞれ変身した。

「……あなた達ごときが、私に勝てるとでも？」

「ほざけ、偽りの太陽が」

「お前も地獄に引きずり込んでやるよ……！」

『ＣＬＯＣＫ　ＵＰ』

三人が同時に、ベルトの右腰に搭載されたスイッチを押す。瞬間、朝倉の視界から三人の姿が消えた。響き渡るのは、殴り合う音だけ。視認出来ない程、高速で移動しているのだろうと朝倉は結論付ける。

だが、それよりも。

「イライラするッ……！」

誰でも良い、殴りたい。けど、あの中では殴れない。死んでしまうと、もう殴る事が出来ない。

何もできずにイライラし、思わず力が入ってしまう。渡された水筒が、握られた圧力によって凹んでいく。

柄でもないが、水でも飲んで待とう。生き残った奴にでも、イライラをぶつければ良い。そんな事を考えながら、水筒からコップに水を注いだが。

「……ッ！？」

唐突に、ガラスを引っ掻いたような嫌な音が響く。だが、周囲にガ

ラスなんてある訳が無い。
この音には、聞き覚えがある。そう、「龍騎の世界」で、ミラーモンスターが近くにいる合図。
ふと、コップに入った水に視線を移すと、その水には、いる筈の無い“黒い大蛇”が写っていた。

「……良い獲物がいるじゃあねぇか」

ニヤリと笑みを浮かべながら、朝倉はカードデッキを水へと向けた。

「成る程……中々のコンビネーションですね」

「……ッ、ほざけ！」

クロックアップ空間内。
巴が蹴り、御影が拳で上手く連携攻撃を仕掛けるものの、黒いカブトムシ・ダークカブトは、ゼクトクナイガンと呼ばれるクナイ型の武器を駆使して受け流している。
巴の回し蹴りをゼクトクナイガンで受け止めた後、ソレを弾いて後退した。

「偽りの太陽とは、言ってくれますね」

「……？」

「ダークカブトは、太陽の姿の一つである“皆既日食”の化身。あなた方のような地で跳ねる下等生物とは、違う！」

言葉に怒気を含ませながら、巴に向かってゼクトクナイガンを大振りがちに振るう。だが、その攻撃が巴に当たる前に御影が素早く前に出て、相手の右手……ゼクトクナイガンを持つ手を殴っていた。

『ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ』

カランとゼクトクナイガンが地面に転がる。同時にクロックアップが解除されたようだが、ダークカブトは構わず御影に殴り掛かった。御影は紙一重でかわし、拳を突き出す。そのパンチも、ダークカブトの掌によって受け止められる。

「下等生物か……今の俺達には、ピッタリの言葉じゃないか？　兄貴」

「あぁ、相棒……俺達は光を拝めない、下等生物そのものだ。ソイツに分からせてやろうぜ……？」

無防備な状態のダークカブトの脇腹を、巴の蹴りが飛ぶ。まともに喰らい、乾ききった大地へと転がる。

ダークカブトへとゆっくり歩み寄る二人。ダークカブトは近くに落ちていたゼクトクナイガンを拾いつつ直ぐに立ち上がったが。

「ハーッハッハッハーッ！！」

この場に不釣り合いに笑い声が響く事で、戦闘は中断されたのだった。

その声の出所を見据えると、白いスーツに白いマントを身に纏った白いマスクの男が立っていたのだった。

ビシッとポーズを決めつつ、男は言う。

「白いマスクは希望の印……全ての世界を守る正義のヒーロー……キャプテン・レックス、見参！！」

仮面ライダーの変身ポーズを彷彿させる構えで、男……キャプテン・レックスは言い放っていた。

凍り付いたかのように固まる三人。空気読んでやって来いよコイツ、と御影がボソリと呟いたのは、気のせいか。そんな事は構わず、キャプテン・レックスは続ける。

「ふっふっふ……私の感は当たっていた！　この辺境世界に！　十中八九！　君達のような悪人が！　いると思っていたのだから！　さあ受けるが良い！　正義の鉄拳を！」

何言ってんだコイツ。そもそも何処から来やがった。つーかうるせー。

そんな空気が三人の周囲を漂ったが、もはやどーでも良いと彼等は切り捨てた。

そして。

「……白という色は、俺には眩しすぎる」

「さて、仕切り直しといきましょうか」

今の光景は無かった事として処理した三人は、再び向かい合ったの

だった。

……所謂、ガン無視というヤツにキャプテン・レックスは、まるで凍ったかのように固まってしまう。

何故や。正義のヒーローがやって来たんやぞ。悪は何かしらの反応を取ったって良えやん。俺がまるで空気読めて無い人間のように見えてしまうやないか。あかん、もう抑えられんわ。

悶々とする中、何処からか出てきた機械コウモリ・レックスキバットが苦笑いしつつ声を掛ける。

「おいケンゴ、此処で固まるなっつの……って、聞いてないよコイツ。おーい、俺達は何しに来たんだー？」

「……ろ……」

「ん？　何だって？」

「そらあかんやろォォ！！」

「……は？」

突如発狂し始めるキャプテン・レックス。否、ケンゴ。どういう訳かソレは、心からの叫びのようにも見えた。というか心からの叫びそのものだった。

浮遊するレックスキバットをガシッと掴みつつ、それはもう近づきたくないような目で三人を睨み付ける。その標的である三人は、若干引いていた。

「許さへん……この俺に注目せえへん奴等なんぞ、ボッコボコにし

たるわぁぁぁ！」

「いやいやケンゴ、そこで暴走するなよォォッ！」

レックスキバットの叫びも虚しく、ケンゴはレックスキバットを腰に押しあて。

「変身んん！」

彼の前方に恐竜の足跡を模したような紋章が投影され、弾ける。その破片がケンゴの体を包み、その姿を変えた。

ティラノザウルスを連想する姿をした仮面ライダー・レックス。変身と同時に筋肉が増強し、その勢いで彼の周囲の地面が沈む。その姿を見て、三人の空気が変わる。

「……あぁ、成る程。あなたが噂で聞いた鑑（かがみ）の弟と同類ですか」

「へぇ、アイツもなんだ。えーっと……何だっけ」

「“原離者”だ、相棒。境遇だけだと地獄に堕ちてもおかしくない輩ばかりだった筈だがなぁ……」

「ま、何だって良いです。危険因子は……排除のみ！」

言って、ダークカブトが先陣を切った。ゼクトクナイガンを逆手に持ちつつ駆け出す。素早く接近し、直立不動のままのケンゴへとソレを降り下ろした。

「ふんッ！」

「んなっ！？」

だが、傷が付かない。レックスの胸の装甲、というか筋肉が硬すぎるのか、むしろゼクトクナイガンが弾かれてしまった。

驚愕するダークカブトに向けて、ケンゴは筋肉で膨れ上がった右腕を降り下ろす。咄嗟の事で反応し辛かったが、ダークカブトは飛び退く事でなんとか躱した。

右腕は空を切る。だが、その勢いか“地面に拳の跡が残った”。

あまりの馬鹿力に、ダークカブトは感心さえ覚える。もしかしたら筋肉に得体の知れない物でも埋め込んでいるのではないかと、ふと考えた。

「動きは遅い。だが、その分力は凄まじいですか」

距離を取った後、顎に右手を当てながら冷静に分析。何やら相手は「俺を無視すんなやぁぁ！」と叫んでいるが、特に気にしない。

後ろを見ると、完全に傍観を決め込んでいる地獄兄弟の姿が見える。二人の様子から、介入する気配は皆無。ならば自分一人で片付けるしかない。

「アレを使いますか」

ダークカブトは呟きながら何かを掴むように手を前に向ける。刹那、空間を斬り裂きながら何処からか赤い装飾が施された漆黒の大剣が飛んで来た。ソレを掴み、刀身をケンゴへと向ける。同時にダークカブトの周囲を、金・銀・銅色三色のカブトムシ型機械昆虫・カブティックゼクターが舞っていた。

やがて三つのカブティックゼクターは、漆黒の大剣へと収まる。そしてダークカブトは、銀色のカブティックゼクターの側に配置され

たスイッチを押した。

『ＨＥＲＣＵＳ－ＰＯＷＥＲ』

「ハイパービート」

『ＨＹＰＥＲ－ＢＥＡＴ』

バチリと、大剣の刀身をエネルギー・タキオン粒子が纏う。ソレは刀身全体を包み、力の大きさを視覚的に判断する事が出来た。ダークカブトは再び駆け出す。重そうな見た目に反して素早く、大剣はケンゴの体へと振るわれた。

「ふぬぅおッ！」

だが驚くべき事にケンゴは、タキオン粒子を纏っている大剣の刀身を両手で挟んだのだった。真剣白羽取り、というべきか。凄まじいエネルギーであるにも関わらず、ケンゴはピクリとも動かなかった。

「ほう……」

「はっ！　そんなちっぽけな剣で、俺を倒せる訳無いやろ！」

先程までの正義のヒーローっぽい雰囲気は何処へいったのだろうか。今のケンゴは、まるで別人、否、これが隠れた本性なのかもしれない。余裕そうに剣をへし折ろうと力を込めるケンゴだったが、ダークカブトはその様子を見て鼻で笑うだけだった。

「……何が可笑しい！？」

「いえ。ただ、無駄な努力だなあ、と思いまして」

『ＫＥＴＡＲＯＳ－ＰＯＷＥＲ』

「ッ！？」

『ＨＹＰＥＲ－ＢＥＡＴ』

今度は、銅色のカブティックゼクターの近くに配置されたボタンを押す。大剣の刀身に、更に多くのタキオン粒子が纏わりついた。いきなり大剣の力が強まり、油断したのかケンゴは剣を支えたまま一歩下がった。が、それ以上は下がらない。両足が多少地面を抉り、そして動かなくなった。

「ぬ……うぉぉぉッ！？」

「流石、まだ耐えますか。ただの筋肉バカではなさそうですね」

「だ、誰が……筋肉バカやぁぁぁ！」

声を張り上げながら、大剣をダークカブトの方へと押し出す。大剣を抑える両手の装甲はタキオン粒子の影響でボロボロになり、血も出ている。が、ケンゴは気にも留めずむしろ更に力を出していた。

「うぉぉぉぉ！！」

「！？」

ここまでしても力の衰えを見せないケンゴに、ダークカブトは若干焦った。

――まだ大剣の力を放出する事は可能だが、これ以上放出してしまうと、今の姿……ライダーフォームでは逆に私が持たない。だが、このままだと力押しされてしまう。出し惜しみしてしまうと、負けてしまう。

――そんな事はあってたまるか。私は、日下部ソウイチは、ネイティブの統率者なんだ！

『ＣＡＵＣＡＳＵＳ－ＰＯＷＥＲ』

「なっ！？」

ダークカブトは吹っ切ったかのように、金色のカブティックゼクターのすぐ傍に配置されたボタンを押した。溢れんばかりに刀身から漏れ出すタキオン粒子は、確実にケンゴの腕を斬り裂き、抉っていた。先程とは比にならない力に、ケンゴも耐えられない。

「……これで終わりにしましょう、原離者！」

『ＨＹＰＥＲ－ＢＥＡＴ』

三度、この場には不釣り合いな電子音声が響き渡る。それを聞き届けたとほぼ同時に、大剣を振るった。

「ッ、アァァ！？」

三度目の正直、というべきか。今回ばかりはケンゴは抑える事は出来ず、刀身は自身の両手から離れ、自身の茶色く分厚い装甲と筋肉を深く斬り裂いた。

力が抜けていく。足が震え、やがて身体の体重を支えきれなくなっ

たか地面に膝を着いた。

倒れまいと、両手を地面に着け体を支える。だが、両手からは血が流れ出ているからか、ケンゴの表情は仮面の下で歪んだ。それよりも、自身の胸からは血が止まる事も知らず流れ出て、乾いた地面を濡らしていた。

だが、ダークカブトも無事では無い。大剣を握っていた筈の両手はだらしなく垂れソレを包む装甲はもはやボロボロで、血が流れていた。

地面に落ちた大剣には持ち手や刀身に血が付着している。生々しく血肉を削ったのだと、嫌でも理解してしまう。

「ぐ、うぅぅ……ッ」

「ふふ……ここまでしぶといとは。前世は家庭内害虫Ｇですか？」

両手に怪我を負いつつも、優勢なのはダークカブトである事に違いない。

余裕を取り戻したダークカブトは、右足でケンゴの後頭部を強く踏みつける。成すすべもなく、ケンゴは地に倒れた。

「うぐっ！？」

「随分手こずらせてくれましたね……直ぐに終わらせましょう」

『ＯＮＥ・ＴＷＯ・ＴＨＲＥＥ』

ボロボロの左手で、ベルトに接続された機械昆虫・ダークカブトゼクターのスイッチを順番に押していく。ゼクターの角を元の位置に戻すと、ゼクターがエネルギーを集めているのか低い音が周囲に響

いた。

「――ライダーキック」

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

電子音声が淡々が告げると、ベルトからタキオン粒子が仮面へと流れる。カブトムシを模した角へ達すると、一気に右足へと向かい――

「おっ、もっ、いっ」

テレポートの効力も消え、変身も解除して。

悠樹くんを引きずりつつ、彼のアパートの部屋の目の前までやって来たのだよー。

以上、霞河舞からの報告でした。

『何実況してるんだ、舞』

勿論、今までのおさらいさっ！

と、声を出さずに近くで浮遊する精霊・風牙に返事をした。

そんな感じで、今私は悠樹くんのアパートの部屋のド真ん前にいま

す。そんでもって私の両手には、とある人の“足”が握られています。

……その足は、勿論悠樹くんの物である訳で。

テレポートでアパートの前まで移動した後、なんとか引きずってわざわざ二階の彼の部屋の前まで運んで来たのであります。

『そもそも、悠樹自身は大丈夫なのか？　絶対コブがいくつか出来てるぞ』

「問題無い！　多分！」

『……最近、何処かいい加減だな、舞』

気のせいなのだよッ。

そう言い返しながら、悠樹くんが背負っていたカバンの中から鍵を取り出し、扉を開ける。見た目の割に結構重い悠樹くんを、部屋の中へと引きずり込んでいく。玄関から上がる時にまたもや悠樹くんが頭をぶつけていたけれども、気にしない。

そのまま進むと、畳部屋にたどり着く。その隅っこに、畳まれた布団が積んであった。

「よっこいせ……と」

ゆっくりと悠樹くんの足を下ろし、空いた手で畳んであった布団を敷く。再び悠樹くんの足を掴み、引きずって布団の上に転がした。

「良し！」

『いや良くないだろ。使い方荒すぎだろ舞』

「いやいや、気のせい……でしょ？」

『目を反らすな私の目を見ろ。それ以前に悠樹の頭を見ろ。ここまで彼がボロボロになった姿を、私は見た事が無いぞ』

言いすぎだってー風牙ー。私だって女の子なんだから、そこまで荒くは無いのだよー。

と、本来ならそうやって言い返したい所だったけど、悠樹くんの頭を見ると、たんこぶだらけ。あぁ、うん……流石にいい加減すぎたかも。と、若干後悔する。それより、よく目を覚まさなかったなー。

……というか、更に深い眠りに着いちゃった訳じゃない、よ、ね？

軽く現実逃避をすべく、悠樹くんのアパートの室内を見渡す。特に散らかってもいない普通の部屋……でもなかった。彼の勉強机の上には大量の教科書プリント類が積み上げられていたのだから。結構ずぼらなんだねー。

その直ぐ傍には、浮遊したままボーッとしている悠樹くんの精霊・翔炎が。

……って、翔炎？　今まで寝てたっぽいけど、やっと起きたのかな？

「ねぇねぇ風牙風牙。翔炎が翔炎が」

『もう気付いている。外出中にでも目が覚めたのだろうか……翔炎、体に問題無いか？』

『……』

風牙はゆらゆらと体を浮遊させながら翔炎に近付き、声を掛ける。
当の本人はボーッとしたまま、動かない。

『……翔炎？』

『え？　あ……おぉ、あ、うん、風牙か』

『なんだその物凄く曖昧な反応は』

もう一度声を掛けて、漸く反応する。起きたばかりで状況を把握しきっていないのかどうかは知らないけど……いつの間にか目の前にいた風牙に動揺してるっぽい。起きたばかりかもしれないから、まあ解らなくも無いかも。
あれでも、翔炎も精霊……神様的存在なんだよねー。なんだか、見た目的にそうは思えないけれど。

『風牙、だよな？』

『……何を言っている？　頭でも打ったか？』

『で、そこにいるのは……舞？』

「うんオーケーオーケー、合ってる合ってる」

それぞれの顔をジッと、まるで確認するかのように見回す。そしてその視線は、寝ている悠樹くんへと向けられた。

『悠……樹……？』

『……本当にどうした、翔炎？　何があった？』

寝過ぎたからだろうか、記憶が……無くなっちゃった？　訳でも無いか。なんというか、今の翔炎は……少し、おかしかった。

……いや、別に笑う方の“おかしい”じゃないよ！？　心配する方の“おかしい”だからね！？

『いや、大丈夫だ……すまん、心配掛けて』

「悪い夢でもみた？」

『……夢だったら、どれだけ気が楽なんだろうな。』

……？　どういう意味なんだろう。まるで「辛い現実を見た」と、遠回しに言っているようにも聞こえる。

風牙も今の言葉の意味が解りにくかったみたい。どういう意図の物か聞こうと思っていたらしいけれど。

『……ッ！　このタイミングでか！』

風牙と翔炎の体が、何かに反応したかのように身構えられる。この反応を取るという事は、近くにガルドが出現したという事。

ガルドの感知なんて出来ない私でも、この空気は何と無く解った。

新年の始まりから、いきなり攻撃してきた、あのガルドかもしれない。

翔炎の事も気になるけど、こっちが先決。風牙よりも先に、アパートから飛び出す。階段を駆け降り、道路へと走り込む。

「やっぱり……！」

私の目の前には、一体の異形。竜のようなしなやかな体。ゴツい左腕に付いている亀の甲羅のような盾。背中から生える猛禽類のような翼。虎のような獰猛な顔。

エキストラなんちゃらとか言っていた、めちゃんこ強いガルド。直立不動だったソイツは、赤い眼をギョロリとこちらへと向けた。

ご丁寧に待っていたのだろうか、一般人には手を掛けていない。それとも、今来たばかりだから？

舐められたような気分だけど……以前、ボッコボコにやられてるからなー。何とも言えない。

後からやって来た風牙も、ガルドの姿を見て警戒を高める。

『あの時のガルドか……。あの男、嫌な時に攻めてくるな』

「風牙、最初から全力で行くよ！」

『油断はするなよ』

風牙の体が光輝き、翠色のバックルへと姿を変える。そのバックルを腰へ押し当てると、バックルの両端から旋風が腰に纏わりつき、ベルトとなる。左腰に付いた円形のホルダーから「舞」の文字が刻まれた一枚のＩＣチップにも似たソレ・オーバードライブチップを取り出し、バックルの左端にセットする。

『Ｏｖｅｒ　ｄｒｉｖｅ　ｓｙｓｔｅｍ……Ｓｔａｎｄｂｙ』

「変身！」

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

電子音声が告げた後、バックルに「風」の文字が投影され、弾ける。弾けた結晶が集まって翠色の球体となり、私の体を包む。その中で、体の上から黒いスーツが構成されていく。
翠色の球体を払うかの如く発生した竜巻が、黒いスーツの上から翠色の装甲を形成する。私が両手で払った後、竜巻は霧散した。

私の体を守るかの如く装着された翠色の鎧。髪の毛のように仮面の後ろから露出している長く白い毛。背中からは、竜の翼とも牙ともとれる翠色のエネルギー物質が現出している。
烈風・嵐舞形態。私が今出せる、最大の力。

「――先手必勝！」

『Ｈｕｒｒｉｃａｎｅ　Ｄａｎｃｅ』

バックルからもう一枚ＩＣチップ状のアイテム・アタックチップを取り出し、腕の装甲にセット。刹那、私の体を旋風が包み込み、体が軽く宙に浮く。
背中のエネルギー物質を翼のように動かし、宙を滑空しながらガルドの距離を一気に詰めながら。

「やぁぁぁッ！！」

ガルドの顔面へ、蹴りを繰り出した。

第四十三話：極端な正義・極端な害悪（後書き）

約半年ぶりの更新だーい！　ふ、六月のうちに更新できたぜ（威張れるような状況ではない）
ツッコミ所満載ですが、どうぞ遠慮無くツッコミを入れちゃって下さい↑

最近思った事：サブタイを考えるのが一番難しいのでは？（えぇぇぇ）

第四十四話：解放（前書き）

お久し振りです。もう本当マイペースです、はい。
取りあえず自分の小説は、読者の皆さんが忘れた頃に更新されると思いますが悪しからず↑

あ、それと。
第一～六話まで編集完了致しましたので、暇潰し程度にでもそちらに目を通して頂ければ幸いです。

第四十四話：解放

痛い。

……意識が覚醒し始めたと同時に感じた感覚が、コレな訳。何コレ身体中が目茶苦茶痛いんだけれども。

目を開けると、そこは見慣れたアパートの天井。どういう訳か、俺は自分の布団で寝ていたようだ。いつの間に？　寝た記憶は無いんだけどな。

少し、記憶を辿って見る。思い切り記憶に強く残っているのは、麒麟とかいう奴。ピッカピカに光ってて、姿は何も解らなかったけど、何だか胡散臭い奴だった。

で、確か奴に体を貸して……気を失って……。

いや待て。そもそも麒麟の件から俺の夢だったんじゃないか？　……だとしたら、何処からが夢？

……止めよう。考える度に身体中が痛くなる。というか何でこんな怪我してる訳、俺？　こんな傷を負った覚えは無いんだけど。

確かにガルドにパンチ一発お見舞いされた記憶はあるけど。あれ、確か骨の一つや二つは折れてただろうけど……痛く、無い？　つーかもしかして治ってないコレ？　何で？

そんな疑問に駆られながら、ふと横を見ると。

「翔炎！？」

俺の相棒である精霊・翔炎が目覚めていた。

異世界からこの世界へと帰って来てから既に１１日経過したという

のは、いつだった説明した気がする。それまでずっと翔炎は、眠りながらも唸ったり何なり不思議な状態だったから、やはり不安だった訳だ。こうして目が覚めてくれると俺も嬉しいさ。

ただ、さ。

なんでそんな驚いたように目カッ開いて見てる訳よ。なんで何気にマジな表情でそんな反応してる訳よ。ツッコミに困るよ翔炎さん。

「……翔炎？」

『悠樹、だよ、な……？』

「何故疑問形なんだ。俺以外に何があるってんだ」

寝起きから何でそんな質問をしたのだろう。眠りすぎてボケたか？

記憶でも吹っ飛んだ訳じゃあるまいし。

そんな事を考えながら答えた俺の言葉に、物凄く安心したような表情を浮かべ。

『そうだな……そうだよな……』

納得したように何度も頷いた。

……何て言うか、少し様子がおかしいな翔炎。

「色々と大丈夫かー、焼鳥野郎？」

『誰が焼鳥だコノヤロー』

あぁ、そこはちゃんと反応する訳ね、翔炎らしい。そこで反応する

のなら大丈夫だろうな。きっと。
……そんな事より気になるんだけどさ、なんでさっきから外から爆音とか聞こえるのだろうね？　外に何かいるのか、まさかガルドか？　と言っても、この妙に感じる悪寒は……すっげー覚えがあるんだけどな。いやちょっと待て俺。何で変な察知能力を身に付けてる訳よ。もはや普通の人間から遠ざかっちゃいないか俺。

「翔炎、早く行くぞ」

『……え？』

「いやガルドだろ！？　外から爆音聞こえるだろ！？」

『……あぁ、そうだな。行くぞ悠樹』

本当に大丈夫なのかコイツ。

『ＣＬＯＣＫ　ＵＰ』

「……ッ！　クロックアップか！」

辺境世界。何かの施設にもみえる建物の中で。

仮面ライダーへと変身したディアボロスイマジン・ディーアに向かって、リョウが変身した姿・ギラファが高速移動で翻弄していた。タキオン粒子を操作する事で時間流を自在に行動出来る超高速移動・クロックアップ。その速さの前に、ディーアは動く事が出来ない。

「チッ、ちょこまかと！」

「相手は一人だけじゃありませんよ？」

「……ッ！」

身の危険を感じたのか、ディーアはその場に屈み込む。刹那、彼女が立っていた時に頭があった場所へと、風で構成された矢が貫かん勢いで通過していた。

……その矢はどういう訳か、超高速移動をしていたリョウの横っ腹にブチ当たっていたのだが、クロックアップ中であるが故に吹っ飛ぶのも速く、その光景がディーアの視界に入る事は無かった。

さて、そんな矢を放ったのは原離者の一人・マナ。とはいえ、今は仮面ライダーへと変身した姿なのだが、それはさておき。

この姿をディーアは“アギト”と呼んでいたが、少なくともディーアはこのアギトを知らない。唐突に出来事が連続で訪れて混乱しているのか、考える気力も無かった。

「アンタ……本当にアギトか？　アタイが知る限り、アギトは遠距離用の武器は持たない筈だけど？」

「アギトはアギトでも……異常な存在、とでも理解して頂ければ」

マナの言葉に疑問を感じつつも、再び大鎌を構える。それに迎え撃

つべく、マナも左手に持つ弓をディーアに向け、ベルトから一本の矢を取り出す。
その刹那。

『ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ』

「ふざっけんなよガリ勉女ァ！」

ディーアの後方から怒声が響き渡った。背後を見ると、ぜえぜえと息を荒げながらディーア……ではなくマナを仮面越しに睨んでいるであろうリョウの姿が。

「チッ。生きてましたか」

「殺す気だったかコノヤロウ！？　たまには共闘してやろうかと気が緩んだ所に攻撃するか普通！？　てか良く当てられたな！？」

「うわ、誰が貴方なんかと共闘しますか。妄想も程々にして下さい」

「……よーく解った。まずテメェからブッ潰す！」

リョウは両肩に接続された双剣・ゼクトツインカリバーを引き剥がすように乱暴に取り外し、そのままマナに向かって駆け出す。カリバーの刃をマナの首元に降り下ろす最中、マナは咄嗟に弓でカリバーの軌道を反らす。そのまま右手に持っていた弓をそのままリョウに向かって突き出すが、もう片方のカリバーで弓を弾いた。
そのままリョウはマナの腹目掛けて蹴り出す。その勢いでマナは吹っ飛ぶが、彼女の身体を旋風が包み込み、ゆっくりと宙で一回転した後着地した。

一瞬の戦闘を見て、ディーアはふと思った。
なぜ仲間同士でいきなりガチバトルしているのだろう、と。
というか仲間割れが早すぎやしないだろうか。そもそもどんだけ仲が悪いんだ。

「というか、アタイを忘れていないかい……？」

再び怒りが煮えたぎる。自分を無視しているならば、無理矢理でも気付かせてやる。
そんな事を考え、ディーアは何処からか取り出したパスケースをベルトに近付けるが。

「……止めて！」

再び背後から悲鳴にも近い声が響いた。
声の正体に、物凄く心当たりがある。が、ソレを確認する前に、声の正体はディーアの目の前に現れていた。

「光！？」

白いパジャマを着た小柄の少女・桜井光が、両手を広げてディーアの行く手を塞いでいた。
無事か。身体は大丈夫なのか。まだ寝ていなくても良いのか。そこにいると危ない。
声を掛けようにも、様々な思考が頭を駆け巡って言葉が上手く出て来ない。最初に何と言えば良いのか、混乱してきて解らなくなってきた。
最初に声を発したのは、やはりディーアではなく光だった。

「もう、止めて」

「……光？」

「もうディーアが、傷付く所を見たくない。見たくないよ……」

起きたばかりだというのに、自分の気を遣う少女。その健気な想いに、思わず目頭が熱くなった。

ふと気が付くと、前方にはバツが悪そうに二人のライダーが立っていた。頭……というか仮面を掻きながら、リョウは言う。

「あー、正直アンタ等には俺等の事を信じられねーだろうけど……取りあえず、お互い変身を解除しないか？」

「良い考えです。野蛮人にしてはナイスアイデアです」

二人はその姿を人間のものへと戻し、両手を上げて敵意が無い事を示す。その姿を見て苦笑いしながら、ディーアもベルトを外して変身を解除した。

「……ま、まあ、アタイは心が広いからな。信じてやるよ」

「……先に攻撃してきたのはお前だろ」

ボソッと呟いたリョウの横っ腹にマナの鉄拳が炸裂する。予想もしてなかった攻撃に目をカッ開き、その場に倒れ込む。幸い彼の呟きは相手には聞こえなかったようだが。

そんな彼を無視しつつ、マナは深々と頭を下げた。

「数々の無礼をお許し下さい。予想もしない事態に、貴女達の力を

貸して欲しかったのです」

「力、つってもねぇ……」

「一つ聞かせて……貴女達は何者なんですか？」

「私……いや、我々は“原離者”。平たく言えば、自身の世界から拒絶された、オリジナルから最も離れし存在です」

予想もしなかった彼女達の正体に、二人は驚愕する。平たく短かった為か、その言葉の意味を理解する事が出来なかった。

世界から拒絶。意味を理解しようとすれば、ますます訳が解らなくなる。そんな事は有り得るのか、一体彼等は何者なのか、不思議と疑問が込み上げてくる。

そんな彼女等を余所に、マナは続けた。

「……貴女方に事情を説明したいと思います。宜しければ、今からリーダーの下へと案内させて頂きます」

『急げ海斗！　もうすぐだ！』

「いや、あのさ……マジ辛いんですけど……！」

四ノ上町のとある住宅街の一角にて。
海斗と渉は、悠樹の住むアパート・南方荘へと全力疾走で向かっていた。

「ちょ、俺、もう、ギブ！」

「何バカな事言ってるの小野川君。もしかしたら、あのガルドかもしれないんだよ？」

『あそこにゃ舞と風牙がいるが、アイツ等だけじゃキツいぜ！？』

『……我々も、向かうべき』

「いや解ってるよ！？　解ってる、けど、さ！？」

「小野川君て、そんな体力無かったっけ？」

「お前の荷物のせいだろォ！？」

唯一海斗だけ荷物が多いせいか、彼だけ息を切らしてへばっていた。
もう走るのも限界である事は誰が見てもすぐ解る。対して渉は持っている荷物というべき物が何もないからか、物凄く涼しい顔だ。

そんな状況でも海斗は耐える。俺だって活躍せねば、渉を見返さねば。という煩悩全開のものだったが。それでも彼は必死に走った。

「……舞さん！」

「ぜえッ……やっと、着いたッ……ごほっ、げぇほげほっ」

やがて視界に映ったのは、烈風・嵐舞形態が敵……正月にやってきた精霊のＤＮＡを持つという謎のガルドと、戦闘を繰り広げている光景。パッと見烈風が僅かに押しているが、ガルドは未だ余裕があるようにも見える。長期戦はキツい。

そう考えた渉は、横で座り込みながら嘘せている海斗を尻目に一歩前へ出る。

「小野川君は邪魔だから、少し下がってて」

「……ッ、邪魔だと！？　渉、今はふざけてる場合じゃ無ェだろ！」

渉の言葉に、いつもとは違い明らかな怒気を言葉に含めて言い放つ海斗。今回ばかりは冗談では済まさないのか、流石に彼も真面目に戦闘に入ろうとしているのかもしれない。

故に、渉の返答は海斗にとって想定外のものだった。

「別にふざけちゃいないよ」

「へ？」

渉とは長い付き合いの海斗でもあまり聞かない、渉の静かで、それでいて真剣な声。思わず海斗はその場で固まる。

渉はそのまま傍らに浮遊している氷甲に手を差し出す。氷甲は黙って頷き、その身体を水色の光に包ませバックルの形態へと姿を変える。

渉はバックルを腰に押し当て、やがてベルトとなって左腰に現れたホルダーから一枚のＩＣチップ状のアイテムを取り出す。それは変身に用いる「氷」の文字が刻まれたソウルチップではなく、「零」の文字が刻まれた深い青色のチップだった。

ソレをバックルの左側に装填する。

「君まで巻き込むと、これは危ないから」

『Ｏｖｅｒ　ｄｒｉｖｅ　ｓｙｓｔｅｍ……ｓｔａｎｄｂｙ』

「……え？」

無機質な電子音声を聞いて、海斗は素っ頓狂な声を上げる。聞き覚えがあるようで無いような、そんな感じ。確か俺の記憶が正しけりゃ、コレってまさか。

海斗の疑問に答えるように、渉はバックルのスライドカバーへと手を伸ばし。

「変身」

カバーを右側へ、払うようにスライドさせた。

『Ｌｏａｄ　Ｕｐ』

バックルから投影される「氷」の一文字。その文字が弾け、やがて水色の球体となって渉を包み込む。しかしその球体は、どういう訳か段々と凍り付いていった。

氷のオブジェとなって冷気を放出する球体。それはやがて弾け飛び、中から水色の装甲を身に纏った仮面ライダーが現れた。

装甲が更に重厚なものへと変質し、肩や腕に亀の甲羅のような意匠が見られる。水色の身体からは、白い冷気が止めどなく溢れ出ていた。

更には彼の足に接している地面が凍り付いていき、それは彼を中心

に広がっている。
海斗が見た事の無いその姿に、彼は思わずマジマジとその姿を見つめる。
「わ、渉……？」
「烈氷・零結（れいけつ）形態。これが烈氷の解放形態さ」
「……いや待て渉。お前その姿、いつから出来るようになった？」
「ディケイドが異世界行った辺りからかなー」
「随分早ェな！」
渉の言葉を聞いて、ふと海斗は考える。
――え、ちょっと待て。つまりどゆこと？
――確か波賀のヤローは一番最初に解放形態になったよな？
――で、舞さんがディケイドが来た時になれて、そのほぼ後に渉が？
――ちょっと待て。俺だけ？　俺だけ解放形態ってのになれねーのか？
一つずつ頭の中を整理していき、すぐ傍らで浮遊している相棒・爪雷へと視線を移す。爪雷は爪雷で烈氷・零結形態の姿を「おぉ」と面白そうに眺めていた。
半ば諦めたような表情で海斗は訊ねる。

「爪雷……もしかして、俺だけ？」

『解放形態にゃなれねーな』

「やっぱしかよッ」

予想通りの回答に項垂れる。自分だけおいてけぼりを喰らった気分で、何処と無く悔しい気持ちになる。そんな彼を無視するかの如く、渉は渉で戦闘へと向かっていた。

そんな事も気付かず、ただ海斗は願う。なりたい。俺も解放形態になりたい。

「爪雷、俺にも解放形態へなれるようにしてくれ！」

『無理だ』

「即答!?　つか、なんで!?」

『解放形態は、普通のソレよりエネルギー放出してんだ。海斗のよーな中途半端な奴には使いこなせないし、何より俺の意思で渡せないからな』

「んだとコノヤロォ!?」

爪雷の言葉にキレる海斗だったが、ふと彼は、爪雷の説明に引っ掛かるような違和感を感じた。

「……ちょっと待て。爪雷が出来ないって事は、誰の意思でやってんだよ？」

『なんだ、言わなかったか？』

「聞いてねーよ」

海斗の反応に呆れた表情を見せる爪雷。そんな反応で海斗の抑えた筈の怒りがまたもや噴き出しそうになるが、爪雷の次のセリフで、文字通り固まった。

『ソウルチップの意思だ』

「……うえ？」

ソウルチップ。その単語を聞いても、一つしか思い浮かばない。確か記憶が正しければ、変身に用いる一枚のちっぽけな部品のような物だった気が。

彼の脳裏に「雷」の文字が刻まれた一枚の黄色いＩＣチップのような物が浮かび上がる。変身時にホルダーから取り出して直ぐ様バックルに装填するような、変身プロセスでしか見ないアレが“意思”を持ってる？

『……お前さ、俺等精霊はソウルチップの何を読み込んでるのか知ってるのか？』

「え、つか何か読み込んでたのか？」

『お前電子音声聞いてねーのか！？　ローディングっつってるだろ！？』

「あ、いや、変身の時の格好良い演出かと思って」

『……ここまでダメだとは思わなかった』

「何をぅ！」

海斗の抗議にも深い溜め息で返す爪雷。そんなに頭悪かないと海斗は言い張るが、彼を知る者がもう一人いれば更なるツッコミを繰り出していたかもしれない。

もうコイツ何言っても無駄だと開き直った爪雷は、やれやれといった感じで語り始めた。

『――歴代適合者達の記録だ』

ハリケーンダンス。

烈風・嵐舞形態によって新たに使用可能となったアタックチップの一つで、正に解放形態の名をそのまま表したような物だった。

烈風の周囲を旋風が包み込む事で彼女の身体が軽く地面から浮き、さながらスケート選手のように滑らかに、そして素早い移動を可能にしている。しかしそれは、ただの移動手段ではない。

「はぁぁぁぁッ！！」

「……！」

まるで嵐の如く繰り出される絶え間の無い拳や蹴りが、ガルドの身体に降り注がれていく。ただ聞けば荒々しい攻撃を連想するだろうが、実際は、まるでその場で踊っているかのようだった。身体を回転させながら攻撃している様子から、踊っているというイメージを強くしているのかもしれない。

烈風・嵐舞形態はその身を旋風に委ねる事で、まるで無重力空間にいるかの如く宙に浮く事が出来る。その攻撃は、烈風の背中から現出した牙のようなエネルギー体が、彼女の代わりにバランスを取っている事で可能にしているのだった。

ガルドは、左腕に付いていた亀の甲羅を模したような漆黒の盾で辛うじて耐えてはいるが、押されているのは一目瞭然だ。じりじりとその場から、少しずつ後退している。

烈風……舞は、回転したままホルダーからまたもやチップを取り出し、バックルの上部に押し入れた。

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｓｔｏｒｍ　Ｆａｎｇ』

刹那、ガルドの身体が何かに斬り付けられたかのように裂ける。その傷は一つでは無い。舞が回転する度にその数は増えている。

ガルドはよく目を凝らすと、烈風の身体を包む旋風の所々に、通常の視覚では判断出来ないが、ガルドの異常な視力を通して見てみると、風で構成された刃……否、牙が旋風を通じて高速回転していた。旋風だけではなく、攻撃を続けている烈風の腕や踵にも、ソレを生み出しているらしき翠色の牙のような武器が確認出来た。

ストームファングは、その名の通り“風で構成された鋭利な牙”。さながら竜が敵を喰らうかの如く、敵の身体を抉り削る。

烈風の力の源である風を操り、鋭利な形態へと変質させている。嵐

舞形態の力でその威力を上乗せしている為、その効果は絶大とも言える。

舞の回転しながらの怒涛の攻撃は未だ止まらない。むしろ、その勢いを段々と強めている。それに呼応しているのか、ストームファングの勢いも上がり、鎌鼬（かまいたち）のようにガルドの身体を斬り裂き抉っていく。

――このまま、押し通す！

舞は攻撃を与え続けている最中、右足爪先にストームファングの効果で風の牙を作り出す。唯一他のソレと違うのは、かなりのエネルギーを込めているのか翠色に輝いている点か。
風による回転の勢いも上乗せして、その右足に作り出した翠色の牙を。

「せいやぁッ！！」

ガルドの首に、蹴りの要領で突き刺した。
突き刺した部位からまるで血のように、紫色の濁った、恐らくガルドの体液が噴き出す。虎のような獰猛な顔も、表情が苦痛によって歪んでいた。

少なくとも、ダメージは与えた。舞は心中でガッツポーズを取りながら、右足をガルドの首から離し敵の出方を窺うが。

「……ッ！？」

突如、ガルドから熱風が放たれる。その熱により、舞の身体を包んでいた旋風が霧散した。

自身の身体を預けていたソレが消えた為に、一瞬だけ無防備となる。
舞は訳の解らぬまま素早くそこから飛び退き、ガルドを見据える。
ガルドの背中から生えていた猛禽のような黒く大きな翼を炎が包み込んでいた。自身の身体に取り込んだ朱雀族の精霊の遺伝子情報から、炎の力を読み込んだのだろうか。その炎に呼応するかの如く、ガルドの右腕に握られた漆黒の長剣が熱を発し始めた。

ガルドからは離れている筈だというのに、それでも直で当たっているような熱さ。舞の背筋に、その熱とは対照的な寒気が走った。

『舞。コレは……少しマズイぞ。遠距離から牽制しろ』

「うん、解った。さっき使ったチップの効果は消えちゃうけど……大丈夫かな」

風牙の配慮にも軽く受け答え、その場からゆっくりと後退する。その最中、舞はホルダーから二枚のチップを摘まみ取り、内一枚を右腕の装甲のリーダーに装填する。

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｃｙｃｌｏｎｅ　Ｓｈｏｔ』

両腕両踵に付いていたストームファングが風となって散り、代わりに右手に小さな旋風（つむじかぜ）が巻き起こり、ソレは段々と形を成していく。やがて翠色の銃・サイクロンショットへと変質したソレを手に取り、銃口をガルドへと向けた。

「……ォォォオオオオオッ！！」

「うわっ！？」

その時ガルドは、舞達四人が相対してから初めて声を上げ、まるで苦しみや怒りを放出するかのような雄叫びを発声した。耳をつんざくその叫びに、舞は思わず耳……に当たる仮面の部分を両手で塞ぐが、その赤い双眼は真っ直ぐガルドの姿を捉えていた。

ガルドは雄叫びを続けながら長剣を真上に突き上げており、その切っ先から、何やら炎で出来たバスケットボールサイズの球体が揺らめいている。烈風の弱点である炎属性を全力でぶつけるつもりらしい。

ガルドはその場で長剣を振る。と同時に、火球は真っ直ぐ、そして高速で舞へと向かっていった。まさかそんな攻撃を行うとは思わず、まだハリケーンダンスを発動しておけば良かったと後悔しながらも、もう一枚のアタックチップをサイクロンショットのグリップに装填する。

『Ｃｈａｒｇｅ　Ｓｈｏｔ』

電子音声が響くや否や、その場から飛び退く。先程まで舞が立っていた場所に火球が着弾し、破裂して火花を散らす。降りかかってくる火の粉を身に浴びながら、翠色に輝いている銃口を構える。

サイクロンショット専用のアタックチップ・チャージショットの効果により、風のエネルギーを蓄積させていき、やおらガルドの頭目掛けてソレを放つ。翠色の巨大な光弾となったエネルギーが、空気を切りながら向かって行く。

しかし、ガルドの剣先から再び放たれた火球が光弾に襲い掛かる。炎は風を飲み込み、更に威力を上げて舞へと向かっていった。

「ヤバッ……！」

流石にあの攻撃は、嵐舞形態でも大きなダメージを受けてしまう。
風を操り回避を試みるが、間に合わない。

――ぶつかるッ！

舞は仮面の下で思いきり目を瞑るが。

『Ｉｃｅ　Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

電子音声が響き渡り、彼女の前方の虚空が急激に冷え始める。やがて空気は凍り付き、またソレは段々と広がっていき、まるで舞を守るかのような大きな壁となった。

「……え？」

火球は舞には届かず、氷の壁に激突する。しかし氷の壁はびくともせず、そこに立ち尽くしたまま。あまりにも一瞬の出来事に、舞は頭の整理が出来ない。何が起こったのか、理解出来ない。

「良かった、なんとか間に合ったね」

「え……秋元くん！？」

火球が掻き消え、氷の壁も散って消える中、背後から声が届く。振り返るとそこには、秋元渉が変身したライダー・烈氷……解放形態である零結形態が、悠然とこちらに歩み寄っていた。

「ちょ、その姿……まさか？」

『解放形態か……まさか渉まで使えたとはな』

「……小野川君も言ってたけど、そういえば僕、この姿見せてなかったっけ」

仮面越しに頭を掻きながら、渉はガルドの姿を見据える。ガルドはまたも、長剣の切っ先から火球を生み出し、今にも攻撃しようとしていた。

ホルダーから一枚のチップを取り出しつつ、渉は舞に耳打ちする。

「僕が囮になるから、隙が出来たら舞さんはデカイのを奴にぶつけて。僕の今の姿は、結構頑丈だからさ」

「わ、解ったのだよ」

返事を聞き届けたと同時に、渉は駆け出す。ソレを待ち構えていたように、ガルドは長剣を振るい火球を渉に向けて放った。

渉もまた、ソレが来るのを待っていたのか、先程取り出した“盾の描かれたアタックチップ”を左腕の装甲のリーダーに装填する。

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｉｃｅ　Ｓｈｉｅｌｄ』

左腕が急激に冷え、空気中の水分が凝固し始める。氷の塊となって左腕にへばり付いたソレはやがて砕け散り、その下から脱皮したかのように水色の巨大な盾が現れた。

氷の盾・アイスシールドを身体を守るように突き出す。襲い掛かる火球はアイスシールドに阻まれ、火花となって散る。アイスシールドの表面は熱によって軽く溶けたが、やがて再び凍り付き始め元の形状に戻った。

ガルドが再び長剣の切っ先に火球を作り出す中、渉は右手でホルダ

ーからアタックチップを取り出し、上手く左手に持ち変える。そのまま左手で右腕の装甲のリーダーにアタックチップを装填した。

『Ｂｌｉｚｚａｒｄ　Ｋｎｕｃｋｌｅ』

ブリザードナックルの効力で、右腕が冷気を発していく。長剣を構えたまま無防備なガルドの腹を、冷気を纏った拳で叩き込んだ。

「せいッ！！」

「ゥオッ！？」

渾身の一撃に身体をもたつかせ、尻餅をつくガルド。直ぐ様体勢を立て直そうと立ち上がるが、先程殴られた部分から身体が凍り付いている事に気がついた。氷は上半身と右腕まで回り、ガルドは思うように剣を振るう事が出来ない。

渉はそのまま追撃を加えず後退する。代わりに待機していた舞が、充分にエネルギーを蓄えた状態のサイクロンショットを携えて入れ替わるように前へ出た。
ゆっくりと、翠色に輝いた銃口を向け。

「行っけぇ！」

銃身からチャージショットを放つ。
風属性は、氷属性に強い。放たれた翠色の光弾は、凍り付いたガルドの身体を砕きながら、そのまま貫通していった。

「……ッ！？」

翼から噴き出していた炎の勢いも弱まり、その場で膝を付くガルド。辛うじて長剣を持つ手はしっかり握られたままで、切っ先には少しずつ火球が大きくなっていく。

渉はソレを見逃さず、妨害すべくホルダーから新たに取り出したチップを右腕に装填した。

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｆｒｅｅｚｅ　Ｗｈｉｐ』

アイスシールドにヒビが入り、バラバラに砕け散る。同時に、右手から細い縄状の氷が垂れるように生成され、やがて弾ける。氷の中から現れたのは、まるで蛇を模したような水色の鞭だった。

「鞭なんて……使った事無いけど！」

渉は直ぐ様、頭に流れ込む情報を頼りに鞭・フリーズウィップを大きく振るう。フリーズウィップの先端は蛇の頭となっていて、ソレは舌を出しながらガルドの持つ長剣に、さながら縄のように巻き付いた。

ガルドはソレを引き剥がそうと長剣を引っ張るものの、身体を貫かれた影響で体力を多く削られているが為に引き剥がせない。更に、渉がフリーズウィップを思いきり手繰り寄せた勢いで長剣はガルドの手から離れてしまう。

長剣は渉の傍らに転がる。手元に戻ったフリーズウィップは、まるで意思を持っているかのように渉の身体でとぐろを巻き、ガルドを威嚇するように舌を出している。

「……亀なのに、何で蛇？」

「亀じゃなくて、玄武。玄武はただの亀じゃなくて、亀とソレに巻

き付いてる蛇だとか、亀とその尾から生えた蛇だとかって言われてるんだよ」

「へぇー。流石秋元くん、博識だねー」

軽口を叩き合いながらも、その視線は油断無くガルドへと向けられている。まるで数週間前の状況とは真逆。たかが数週間でこんなに状況が変わるとは思わず、嬉しい誤算であった。相手も以前よりは動いていられるようだが、解放形態を相手には太刀打ち出来ない。自分達が異世界に行って、多少の実力を伸ばしたというのもあるかもしれないが。

同時に少なからず、渉は拍子抜けしていた。以前あのガルドには、精霊が捕らえられた時に大量のエネルギーを取り込んだ筈だというのに、それほど以前よりパワーが上がったようには思えないのだ。

今倒せれば、考えても無駄か。渉は苦笑いしながら思考を中断し、止めを刺さんとホルダーからファイナルアタックチップを取り出すが。

「……げっ」

「お出まし、か」

ガルドの目の前に突如灰色の幕が現れ、そしてすぐに消える。そこから現れたのは、ガルドを造り出したという、白衣を着た長髪の男だった。何処と無く科学者然とした格好をしていて、眼鏡の奥の眼には狂気を宿している。明らかにあちらが劣勢だというのに、不気味な笑みは浮かべたままだった。

クククと笑いながら、男は芝居掛かった口調で言う。

「ごきげんよう諸君。いやはや、そこまで強くなっているとは誤算だった」

「にしては、全然悔しそうな顔してないよね……何しに来た訳？」

「ご挨拶だな、玄武の適合者。なんてことは無い、ちょっとした実験さ」

男……確か精霊達の話だと、ハイドと言ったか。ガルドに視線を移しながら、さも面白そうに話し出す。

「この実験体は、造り出した中でも最高だ。この前も君達精霊のエネルギーを取り込んで、パワーアップを果たした」

「……にしちゃあ、私達に負けてる様だけど？」

「そう、そこだよ青龍の適合者！」

いきなり大声を出すハイドに、思わず身体をビクリと震わせる二人。そんな事にも構わず、ハイドはその口から流れ出すように一方的に話し続ける。

「確かに大量のエネルギーを取り込んだ。私もこの実験体は強くなったと確信した！　……が、どうやらあのエネルギーも、精霊にとってはほんの一部にしか過ぎないようだ」

「え……？」

「そして推理した。適合者の力量によって力を解放される有無があるのは、最初から大量のエネルギーを与えると適合者自身の身が持

たないから、なのだろうと。なんとも素晴らしい、精霊とは一体どれほどのエネルギーを秘めているのか、それをこの実験体に詰め込むとどれほどの力を引き出すのか、私は知りたい！」

狂気の塊。

渉は初めてハイドと出会った時から、彼をそう形容する他無かった。

自分の欲を満たす為だけに、様々なものを犠牲にする狂乱科学者（マッドサイエンティスト）。

あの男の欲の深さは、計り知れない。

「仮面ライダーに復讐を！　……の筈だったが、まさか精霊があそこまで魅力的な存在だったとは。今では後悔しているよ、危険因子として精霊達を処分したのは。今は復讐より……精霊を調べ上げ、我が物にしたい」

『戯れ言を……！』

「この状況……私達が優勢なのだよ。貴方にはもう勝ち目は無い！」

風牙と舞が声を張り上げて宣言する。確かに、この状況ではハイドに逃げ場はあっても、勝ち目は皆無に等しい。ガルドは傷口を塞ぎつつあるが、そろそろ限界なのだろう、立ち上がるのもままならなかった。そう、明らかにこちらが優勢だ。

故に、渉は警戒していた。

未だハイドは、不気味な笑みを浮かべ続けているのだから。

「確かに、精霊に関する実験は今は難しそうだ。勝ち目も薄い……が、誰が精霊に関する実験をしにきた、と言った？」

言いながら、ハイドは白衣のポケットから黒いスティック状の何か

を取り出す。一見するとＵＳＢメモリを大きくしたようにも見えたが、ハイドが所持している辺り、ただのＵＳＢメモリでない事は容易に想像出来た。
思い返すと確か、彼の研究施設らしき場所で対面した時に似たような物を持っていた気がする。

「……なんだい、ソレは？」

「ガイアメモリ。生物や人工物、感情、現象、概念等の“地球の記憶”を内包しているという、面白いモノさ。ある世界で作り出された物だが、興味深かったので自分で作ってみた」

掌でガイアメモリなるソレを弄びながら、ハイドはガルドの背中を見詰める。

「しかし見様見真似で作ったからか、中々上手い具合に出来なくてね。どれもこれも粗悪な物ばかり。一番出来が良いのを一つ持って来て、最高傑作に実験しようと思ったのさ」

『Ｊｏｋｅｒ！』

ハイドはガイアメモリに設けられていたであろうスイッチを押すと、烈火達のものとはまた別の電子音声が響き渡る。それを聞き届けた後に、ハイドはガイアメモリをガルドの背中に放った。
ガイアメモリの黒い端子が、ガルドの背中に刺さる。やがてガイアメモリは何をしたのか、ズズズと音を立てながらガルドの背中に入り込んでいった。
ガルドの両目が紫色に妖しく光る。ガルド特有の漆黒の身体に紫色のラインが幾つも現れ始めた。

『何をした、貴様！？』

「ガイアメモリを人体に挿入する事で、その身体は地球の記憶を体現した姿へと変貌する。ドーパント、と呼ばれる姿にな。実験なんだ、実際に起動しないと意味が無いだろう？」

ガイアメモリを取り込んだガルドは、耳障りな絶叫を放ちながら唐突に襲い掛かる。警戒していた渉は直ぐ様フリーズウィップを振るうが、逆にソレを掴まれ手繰り寄せられる。その勢いは凄まじく、渉の身体は宙に投げ出された。

「うわっ！？」

ガルドは渉の頭を掴んだ後、彼の腹に鋭い突きを繰り出す。肺から酸素が無理矢理吐き出され、思うように呼吸が出来ず、渉は苦しみながら膝を付く。そんな隙を逃す筈も無く、ガルドは無慈悲にも渉の背中を思いきり踏む。装甲にはヒビが入り、そのまま地面に押し付けられた。

「うぁ……あぁぁッ……」

「秋元くん！」

『Ｈｏｍｉｎｇ　Ｓｈｏｔ』

渉を救うべく、舞はサイクロンショットにアタックチップを装填する。ホーミングショットの効果で自動追尾機能を付加した風の弾丸をがむしゃらに放つ。それらは不規則な動きをしながら全てガルドに当り、ダメージを与えるまでとはいかないが、こちらに注意を引く事は出来た。ガルドは鬱陶しそうに頭をこちらに向けながら、先

程落とした長剣を拾う。

「ダメージは……あまり無いか。解放形態だから、少しは怯ませたと思ったけど……」

『恐らく、あのガイアメモリという物がガルドの力を上げているのだろう。気を付けろ舞、さっきとは別物だぞ』

風牙の警戒を促す言葉に答える暇も与えず、ガルドは漆黒の長剣を構えて跳び掛かる。舞はソレと同時に後退しながらホーミングショットを放つも、長剣の刀身でそれらを防いでいた。何発か当たっていたようにも見えたが、ガルドには無意味のようだ。

「接近戦に切り替えないと……」

舞はあちこちに駆け回りながらホルダーから一枚のウェポンチップを取り出す。翠色の短刀・サイクロンダガーが描かれたソレを装填しようとするが。

『舞！　前だ！！』

「えっ？」

気が付けば、既にガルドは舞の目の前で、長剣を腰辺りで構えながら先回りをしていた。

リアクションを取る暇さえも与えず、ガルドは長剣を振るう。その切っ先は、舞の持っていたチップを素早く払い落としていた。

一瞬の早業に、舞は動くことも出来ない。指先からウェポンチップが離れ、風となって消えたと理解した時には、いつの間にやら炎を纏っていた長剣で腹を斬り裂かれていた。

「オァァァアアァァ！！」

「ーーーーッッ！？」

悲鳴さえ上げる事が出来ない。耳に入る音も、ガルドの気分を不快にさせるような発狂だけ。

舞の身体を包んだ装甲が限界を迎えたか。淡く翠色に輝いた後、風となってそれらは散っていった。その中から現れた舞は、そのまま俯せになって力無く倒れる。

そんな様子を見ながら、ハイドは一人ブツブツ呟いていた。

「ジョーカーメモリ……切り札の記憶。切り札だなんて所詮自身の手の内で最強であって、ソレが相手に通用するかも解らんような、効果も微妙な眉唾物だったが……まあ、最高傑作には中々相性が良いようだな。起動時間無視のあの行動に、通常以上の状況判断分析、属性変更時間までも短縮、というより一瞬か。

やはりガイアメモリは中々に面白い実験材料だな。問題はジョーカーメモリがどこまで起動し続けるか、だが」

そんな彼の呟きを聞く者は、誰一人としていない。そんなハイドは、鋭い瞳を倒れている舞の傍らにいる風牙へと向けた。

「そして、精霊の回収……ククク、興味をそそる」

『舞！？　おい、無事か！？』

風牙は倒れたまま動かない舞へ必死に呼び掛ける。何回か声を掛けた後、やがてゆっくりと眼を開けた舞は消え入りそうな声で言う。

「ふう、が……逃げて……」

『ッ！！』

舞の警告と同時に、近付く気配に風牙は視線を移す。唸り声を上げながら近付いて来るガルドは、長剣を持っていない左手を伸ばし、風牙の首を掴もうとしている。

その行動を見ても、風牙は金縛りに合ったかのように動けない。否、正しくは動かないというべきか。ここで逃げると、確実に舞は殺される。風牙はソレを理解していた。

「風牙……！」

舞の気遣う声と、ガルドの腕が風牙に触れたのが同時だったか。

『Ｗｅａｐｏｎ……Ｒａｐｔｏｒ　Ｂｌａｚｅ』

唐突に電子音声が響き渡り。

「でやぁあぁぁぁぁあ！！」

炎の鉤爪を足に装着した赤い何かが、ガルドに攻撃を仕掛けていた。ガルドは咄嗟の事には流石に対応出来ず、その場から素早く距離を取って離れる。同時に紫色の眼を、その何かに向けた。

黒いスーツの上から包むように装着された赤く軽快な装甲。猛禽の彷彿させる鉤爪のような部位が現れた足。背中からはガルドに負けないような、赤く大きな炎が翼のように吹きだしているその姿。

「悠樹、くん……？」

朧気な意識の中、舞の視界に入ったのは、彼等の仲間の一人。

「……悪ィ、遅れた」

波賀悠樹……仮面ライダー烈火・飛翔形態だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5237i/

仮面ライダー烈火

2011年11月16日22時47分発行